



岳 山

年六十二第

號 三 第

山岳

第二十六年
第三號

目次 (第二十六年第三號 昭和六年十二月)

表紙

口繪 木曾路驛野尻伊奈川橋遠景 溪齋英泉畫

カット

茨木猪之吉
小島烏水氏所藏
坂本直行

本欄

新高南山と南玉山の登攀

黒薙川柳又谷

登山者のための地質學

鹿野忠雄 一頁

塚本繁松 二四

佐々保雄 六七

雑録

北海道の峠

雄冬峠考

谷川岳東面の岩登攀

穂高岳屏風岩

穂高岳屏風岩の登路に就て

伊藤秀五郎 一六一

伊藤秀五郎 一六八

小川登喜男 一七七

小川登喜男 二〇三

桑田英次 二〇九

西穂高岳天狗岩の東壁

大山及烏ク山略圖に就いて

「山岳」第二十五年第二號雜錄「飯豊山の登路について」に對する參考二、三

木曾街道の錦繪

遭難顛末概報

圖 版

八通關附近より見たる新高主山(右)及び東山(左端)

(新高主山絶頂より新高南山(左)及び南玉山(右)を望む)

カシナギ深層谷落口上流

オウレン谷落口下流の鮎留瀧

水谷附近より雪倉岳を望む

市ノ倉澤正面の岩壁

市ノ倉澤(左)及び幽ノ澤(右)の岩壁

屏風岩のルンゼ(II)

桑田英次 二一三

小出博 二一六

鈴木岩雄 二二二

小島鳥水 二二五

二三一

對頁
八

一六

塚本繁松 三六

塚本繁松 四四

塚本繁松 四八

桑田英次 一八〇

柑田定司 一八八

桑田英次 二一〇

双六谷(二四八) 日本アルプス大観(二四九) 後立山連峯(二五〇) 南アルプスと奥秩父(二五二) JOUCH(二五三) R・C
C・報告(二五四) 立教大學の山岳部部報3(二五六) 尾根つたひ(二五七) 案内人手帳に就て(二五八) 五萬分一上高地
圖幅(二六二) 峠と高原(二六二)

會 報

二六七

會務報告(二六七) 第五十二回小集會記事(二六九) 在演會員有志晚餐會(二七〇) 第二回會員有志晚餐會(二七一) 第二
回關西小集會(二七二) 登山關係官廳團體招待會(二七四) 故岡部、波多野兩氏記念書架(二七五) 新入會員紹介(二七五)
退會者(二七六) 會員訃報(二七六) 圖書基金申込會員氏名(二七六) 新着圖書目錄(二七七) 山岳投稿規定(二八〇) 日
本山岳會々則(二八一) 前號補正(二八四)

挿 圖

(括弧内の數字は頁を示す)

新高山稜概念圖(鹿野忠雄)(五) 阿里山登路西山附近より南玉山を望む(熊澤熊太郎)(一九) 柳又附近圖(塚
本繁松)(二六) 柳又北又合流點(冠松次郎)(三〇) カシナギ深層谷落口(塚本繁松)(三五) カシナギ深層谷落
口上流(塚本繁松)(三八) カシナギ谷落日下流(塚本繁松)(四〇) 六兵衛谷(塚本繁松)(五一) 猫又平の夕色
(塚本繁松)(五四) 柳又谷水源附近(塚本繁松)(六〇) 蓮華谷落日(塚本繁松)(六一)

「登山者のための地質學」(佐々保雄)挿入圖

第一圖蘆科山頂の岩海(七二) 岩石の匍行(七二) 第三圖構造土(七二) 第四圖惡地(七四) 第五圖カルスト地形模式圖(七
五) 第六圖地下水と湧水點(七六) 第七圖上流より下流へ(七六) 第八圖紀伊山地北山川上流の穿入曲流(七七) 第九圖華
平原(七七) 第十圖デーヴィスの概念による地形發達(七八) 第十一圖ベンクの概念による斜面の發達(七九) 第十二圖河

の平衡曲線(七九) 第十三圖流の成因例三つ(八〇) 第十四圖A地勢と流向の關係(八〇) 第十四圖B地質構造と河川との關係(八一) 第十五圖峡谷の成因(八二) 第十六圖河岸及び合流點に於ける河段丘と屈曲部に於ける堆積地河岸の圖(八二) 第十七圖歐穴(八二) 第十八圖山體各部の呼稱(八三) 第十九圖山の三つの型(八四) 第二十圖水蝕地形の一例(八八) 第二十一圖日高山脈エサオマントツタベツ岳のカルル(八九) 第二十二圖日本に於ける水蝕地形分布略圖(九〇) 第二十三圖雪蓮(九一) 第二十四圖飛驒山地東邊に於ける扇狀地と斷層地形の一例(九四) 第二十五圖不整合の形式三例(九六) 第二十六圖地殻均衡による地殻の構成(九八) 第二十七圖岩漿の移動による地膨及び上層の滑動(九八) 第二十八圖世界の若き造山帶(一〇〇) 第二十九圖斷層の種々なる型の模式圖(一〇一) 第三十圖斷層露頭の一例(一〇二) 第三十一圖褶曲の種々なる型(一〇二) 第三十二圖マッターホーン附近のナッペ構造(一〇二) 第三十三圖西部アルプスの成生(一〇三) 第三十四圖西南日本の造構運動の發達(一〇四) 第三十五圖火山現象概念圖(一〇五) 第三十六圖火山の基本型(一〇六) 第三十七圖支笏湖カルデラ附近(一一〇) 第三十八圖複重火山の一例(一一一) 第三十九圖火山の生滅(一一二) 第四十圖岩石分布上より見たる日本の火山帶(一一三) 第四十一圖日本に於ける火山型分布圖(一一四) 第四十二圖アルプスの構造(一一五) 第四十三圖標準化石の例(一一六) 第一表世界及び日本に於ける地質時代の區分(一一八) 第四十四圖日本本州の地帶構造的區分(一一九) 第四十五圖日本に於ける複雑なる褶曲構造の三例(一二〇) 第四十六圖日本弧狀列島成因説の諸例(一二一、一二二) 第四十七圖中部地方地質概念圖(一二四) 第四十八圖赤石山系の構造(一二五) 第四十九圖飛驒木曾山地の地質斷面圖(一二六) 第二表日本に多き火成岩の種類(一二三〇) 第五十圖A兩雲母花崗岩、B石英斑岩(一二三二) 第五十一圖A輝石安山岩、B石英粗面岩(一二三三) 第五十二圖玄武岩の柱狀節理(一二三四) 第五十三圖石英斑岩に於ける方狀節理(一二三四) 第五十四圖花崗岩の板狀又は桌狀節理(一二三五) 第五十五圖花崗岩の方狀節理(一二三五) 第五十六圖玄武岩の球狀節理(一二三六) 第五十七圖花崗岩質山體に於けるエグイユの一例(一二三七) 第三表岩山をなす火成岩の性狀(一二三八) 第五十八圖水成岩の層理(一二三九) 第五十九圖A礫岩、B集塊岩(一二四〇) 第四表堆積岩の種類(一二四一) 第六十圖斜面と地層の向き(一二四二) 第六十一圖硬砂岩又は均質の火成岩に見らるゝ方狀節理(一二四二) 第六十二圖A硬軟岩層の交層によるオーヴァハンク、B傾ける水成層の山、C硬軟岩層の交層による山稜の形(一二四二) 第六十三圖水成岩の岩質相違による段階狀岩壁(一二四

三) 第六十四圖水平なる石灰岩層に於ける垂直の裂罅(一四三) 第六十五圖白雲岩に發達せる垂直裂罅によるツインネ型山形(一四四) 第六十六圖水成岩の垂直なる節理、裂罅によるエグアイユ狀山形(一四四) 第六十七圖水成岩に於ける胸壁(一四四) 第六十八圖直立した水成岩の層理に沿ふ裂目とその侵蝕により擴がれるもの(一四五) 第六十九圖カミン及びその侵されて擴がれるルンセと層理に沿ふ風化破面にて生ぜるレッチ(一四五) 第七十圖水成岩の層理に沿ふ逆層のスラブ(一四五) 第七十一圖角閃片麻岩(一四八) 第七十二圖黒雲母片岩(一四八) 第七十三圖結晶片岩の山容(一五〇) 第七十四圖地質調査用品(一五二) 第七十五圖断崖の數種(一五三) 第七十六圖地層の走向及び傾斜(一五三) 第七十七圖地質圖(一五五)

谷川岳東面概念圖(小川登喜男)(一八四) 幽ノ澤二俣より(田名部繁)(一八六) 幽ノ澤二俣より望める右俣の岩壁(小川登喜男)(一九四) 芝倉澤出合より望める堅炭岩(小川登喜男)(一九六) 谷川岳北の耳の南壁(栢田定司)(一九九) 屏風岩概念圖(小川登喜男)(二〇四) 岳川谷より天狗岩(桑田英次)(二一四) 大山及烏山略圖(池田滋)(二一七) 南大生遭難現場略圖(二四



木曾路驛野尻伊奈川橋遠景

溪聲英泉畫

新高南山と南玉山の登攀

鹿野忠雄

一九三一年夏期七十日の山旅中、八月下旬の一句を新高山各峰と南玉山の登頂に費した。本篇はその中新高山南山（二二七六八尺）と南玉山（一一一九一尺）のみの紀行である。

一

八月も半ばを過ぎては、新高山界隈は流石に森閑としたものだつた。一時は潮の様に押し寄せた新高山登山者の群も、恰も臺灣の豪雨後の出水の様に引いて、是非とも日本一の高山の上に立ちたいと云ふ登山者の二、三が、咲き遅れた秋の朝顔の様に、二、三日をおいては、ポツリ／＼訪れて来る許りであつたが、今ではそれさへも見られなくなつた。

事實新高山近邊に限らず、この頃からは臺灣の山は暫時暴風雨季節に入るのである。低氣壓は諸處に湧き、雲は山の面を覆ひ隠し、又低く茅戸の丘やトドマツの梢にからみついて、一向に離れようとしなない。而して前記の登山者は、唯雲のむせぶ岩頭に立つ事に仍つてのみ、日本最高峯との知己に就て満足しなければならぬのである。それ許りか風を伴つた豪雨が幾日も幾日も、荒れまはるのである。トドマツの太い幹をゆるがし、又森林の

悲鳴とも覺える突風の警笛を鳴らし乍ら。蕃地警備の心臓である電話線が切斷せられ、又大仰な山崩れが苦心して作り上げた警邏道路を、一朝にして破壊し去るのもこの時である。

今年の山暴れは例年に比して、遙かに軽いものであつた。それでも、八月十日以後と云ふものは、雨氣のない日は一日もなかつた。来る日も来る日も、中央山脈の暗い山波は、恰も無盡藏であるかの様に、黒い亂雲を吹き流して来るのであつた。雨雲を見上げ乍ら、之等の日を僕は眞に我慢強く、郡大溪に點在するブヌン族の蕃社に、二週間を過した。永い山旅である。何處かでやられるのは當然だと、覺悟は極めて好い方であつたが、二週間の悪天候には、全く厭氣がさして来るのであつた。

八月廿三日になつて、斯くも永引いた暗雲の大幕は、初めてほころび初めた。コバルトの微笑を迎へて樹々の緑葉が歡喜すると同じく、僕も亦勇躍して、新高へと志した。圖らずも今夏の山行の根據地となつた無双駐在所を出發し、森の木下道を通ずる四里の山坂を登つて、正午には觀高駐在所に着いた。すると其處には、かねて電話で人夫として頼んで置いた、東埔社トウポの蕃人二人が、駐在所の柵にもたれて僕を待つて居た。共に二十五、六歳の壯漢、一人はマキリ、他はハイスルと云つた。

觀高からの路しばらくの森林を眺めては、左程でもなかつたが、九千三百尺の八通關に来て見ると、長雨を境として、四邊の自然はすっかり變つて居た。八月も終りになつた今では、それは眞に森閑としたものだつた。眞夏の盛宴は已でに終り、自然は何時しか年老いて、秋が忍び足に寄つて來て居る事は、あらゆるものの上感じられた。鞍部一帯を被ふ茅戸のスロープは、色あせて秋の色を呈して居たし、ニヒタカアザミやニヒタカフウロは、祝宴の殘骸の様に、見すばらしい花をして居た。そして又ニヒタカナ、カマドの葉は？ いや一言にして云へば

八通關は本來の人氣ない森閑さに立還つて居た。

駐在所を訪れて茶菓の饗應にあづかつた。濠をめぐらし、土堤砦にとりまかれたこの駐在所は、眞に山の中の様に淋しかつた。山間の放浪にあくまでの靜寂を希ひ、攪されざる空氣に絶對の恍惚を望む僕ではあるが、登山期に下界から賄が来て、臨時宿泊所まで出来るこの場所が、全くヒソソリして居るのを見ては、如何しても淋しい氣分を禁ずる事が出来なかつた。

然し乍ら空は鮮かに晴れて居た。ウルトラマリンの空には、絹綿の様な雲が飛んで居た。紫づんだタカネス、キの穂は波を打つて居た。タイワンツガの純林は、同じ黒緑を枝に湛えて何時もと少しも變らない様であつた。そして草原や灌木の間には、残りものとは云へ、未だ色々の花の種類が算へられるのであつた。

八通關を出でて、老瀟溪の源頭に沿うて行くと、間もなく新高の峰は華やかにも神々しく、我々の頭上に仰がれた。此處から頂上までは略三千尺の距りであらう。胸元まで近寄つた我々には、眼近く新高の勇姿をツクツク眺める事が出来た。老瀟溪の壯大な谷を埋める黒木の壯觀さ、下から次第に上方に眼を轉ずれば、タイワンツガの純林が次第に、ニヒタカトドマツを混淆し、遂にはトドマツの純林に遷り、さてはニヒタカビヤクシンの地帯を樹木の最後の限界として、その上に新高主山のマッシュナな岩塊が、その面を午後の陽に美しく紅潮させ乍ら、而して東山は又別な威容を以て、その左手近く、群青の天近く迫つて居るのが仰がれた。僕は今度の山行に於ても、郡大山、マボラス山、秀姑巒山、大水窟山、さては尖山の頂から、已でに久淵を敘し、新高山の健在を祝したのであつたが、親しく五年振りに新高山を訪れる事を考へると、唯わけもなく心が躍り、五年前の月日が懐かしまれるのであつた。

八通關から二十數町にして、間もなく新高駐在所が見えて來た。溪の左岸、新高北山から落ちた山裾にそれはあつた。八通關に比べては、之は又實にさゝやかな駐在所、之は郡大蕃脫出事件後に出來た警戒所であるさうであるが、粗野な小さな建物は、反つて山小屋の感じとして嬉しいものであつた。新高連峯の登攀に僕は今後しばらく、此處を根據として過ごすのだ。まはりには男性的なタイワンツガが枝差し交はす森林で、十數間の足元に老瀼溪が聲高く鳴つて居る。そして新高主山と東山の最後の岩壁を居ながらにして仰ぎ見る事が出来るのであつた。

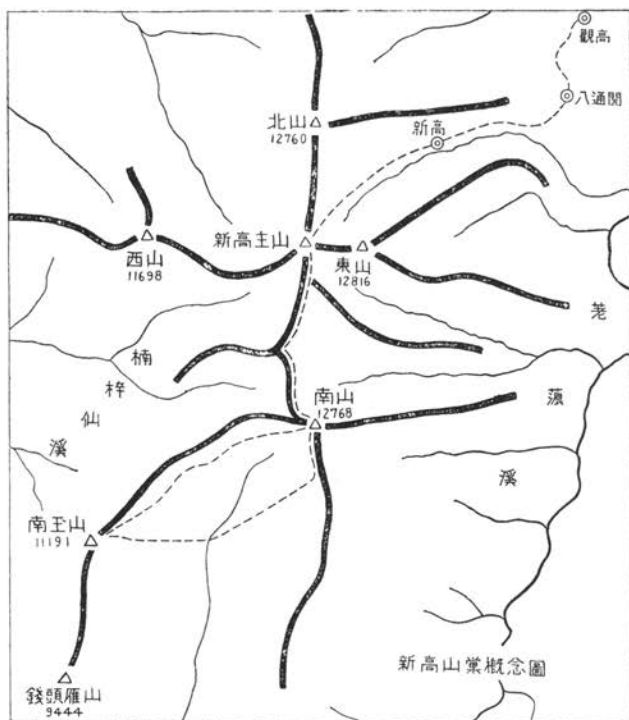
一一

風が強いのを少しく氣にしては居たが、昨夕の空は暮れるまで晴れて居たし、その上淡い夕焼けまで輝いたので、天氣に關しては僕は全く安心し切つて居た。それで初めての床にも、グッスリ休んで終つたわけであるが、夜半に及んで風の音が次第に高まり、果ては暴風の絶叫を聞く様になつては、僕は心配でオチ／＼睡れなかつた。明日は久しぶりの新高山をボンヤリ歩けるなど、楽しみにして床に入つたのであつたが、この雨戸を揺がす雨混りの強風では、その輝かしい歡びを幾日後かに延ばさなければならぬ事は分つて居た。

明けて見ると、果して天候は最悪であつた。灰色の色調に一樣に塗りつぶされた荒天の下に、風は思ひ切り荒れまはつて居た。この新高駐在所は、谷間にある爲、風當りは少い方であるが、高所に吹きつけた風は旋回してこの谷間の奥深くまでも、その狂暴な猛威を逞しうした。疾驅する暴風の怒號が身に滲みる。タイワンツガの大木が、強雨にあふられて、髪をおどろに振り亂す。

雨戸は固く閉ざされて居なければならなかつた。そして危い處は、心張棒をかはなければならなかつた。そし

て更に雨漏りする下には、鍋や金盞を受けなければならなかつた。こんな具合では、新高山處の騒ぎではない事は明白である。人間は唯、蛙の様に蟄居して天氣の恢復するを待つ許りである。断崖の中途を通ずる道が崩れな



ければ好いが！電話線が切れなければ好いが！蕃地警戒員の心配は、又僕の心配でもあつた。午後になつて郡役所から、ルズンより颱風の北西に進むを報じて來た。之に仍つて電話線は切れ居ない事が分つた。風は強いが、雨量が左程でもない事が、せめてもの取柄である。

颱風だから長いことはあるまいと、高をくゞる一方には、流石に心配でならなかつたが、二十五日の午後になつて、空こそ晴れないが、風は略おさまつた。而して今では、老蕨溪の谷に下

りて、山椒魚を探したり、附近を歩きまはつて、木苺の實を摘んだりする事が出来る様になつた。天候が好調に向ふ事は、鳥の動きまはる事に仍つても、知る事が出來た。ニヒタカヤダケの間に構へた良には、キンパネホイ

ビイ、タカサゴマシコ、ニヒタカハシブトチメドリ、アリサンヒタキ等が、かゝるのであつた。

晩の食事を愉快に終へて、恐らくは明日から出掛けられるであらう、新高山各峰のプランを考へ初めた。主山の附近を、二、三日彷徨ふ。又東山（一二八一六尺）や北山（一二七六〇尺）にも登る。そして未だ行つた事のない南山（一二七六八尺）にも行つて見よう。而してあはよくば、その南に遠く隔る南玉山（一一一九一尺）をもやつて見よう。

僕は此處に、今回の山行に於て圖らずも、好いパートナーとなつた眞瀬垣丑丙氏を紹介して置かなければならぬ。氏は新高駐在所を守る忠實なる警察官であり、又最近新高主山までの道路を改修した功勞者であり、又、その勇猛と強力に於ては、郡下第一と評せられ、自分の管轄上、新高主山には、二百回以上の登行記録を持つ人物である。氏は僕の東山と南山への登攀を耳にし、直ちに同行を申出でられた。僕はカサックを思はせる慄悍さと、正しく大膽な眼を具へた氏を見ては、それは願つてもない幸に思つた。氏は信州の産、幼少より山登りを好み、新高に到つては、新高の南山と東山に、何時かは登る日に就て限らない情熱を感じて居た人であつた。葦山奥深くある警察官諸氏は、何れも山好きの人とは限らない。この様な人物をパートナーとして得る事は、極めて有難い事であつた。

十時近くなつて、東山から八通關に延びた尾根の眞黒い絶壁の上に、十二夜の月が朧ろに浮び出た。これは明かに天候の恢復を約束するものに、違ひないと思はれた。

新高山各峰の中でも、最も遠く且つ事情の分らない南山行の決行を、今日にするとはい初めから思ひ懸けぬ事であつた。然し昨日(二十六日)口ねもす主山を逍遙しようと、絶頂に登つて見ると、中天高く昇つた日輪には、笠がかゝつて居た。之は決して有難い前兆ではない。切角の天気も當には出来ない。なまじっか自重して、大物を逃すより、一つ之は思ひ切つて、最難のものから初めて見ようと、その足で直様北山を極め、而して南山行を今日に決めたのであつた。

八月二十七日午前五時四十五分。眞瀬垣氏に僕、それに蕃人夫マキリタケシタホアン。出来る限り輕装して新高駐在所(一萬二百尺)を出た。南山以南は少くとも蕃人以外には未踏の地であり、又凶蕃ラホアレの跳梁範圍である。困難な岩場に具へて、百呎のロープを用意した。又、萬一の場合を慮つて、眞瀬垣氏は長銃身の拳銃を腰にした。僕のはさゝやかな兼光の鐵刺し一本である。マキリの担へる銃も、鹿や羚羊を撃つ以外に、別な用務を帯びて居た。

普通の山行とは異つた、そして今日一日の行程としては、明かに慾張つたプランに、我々の足は自から早まつた。天気は晴れるのか晴れないのか、我々の兩側には、早朝の冷氣にこごえたニヒタカトドマツの純林と、露にぬれたニヒタカヤダケの藪が、暫時續いた。チメドリが森の茂みに、淋しくも葉をゆする。

やがて我々は森の間に、せゝらぎの音高く流れて居る溪流をはなれ、長命水(六時三十分)で最後の水を大き

な水筒に一パイ詰め込んで、尙も進んだ。トドマツの森を出外れると、之から後は、主山の直下から落ちて来る大斜面で、其處には低く地を匍ふニヒタカビクションが、斜面を埋め、その上は磊々たる岩石の礫、そして又その上には今や動搖する雲に取り巻かれた主山の魁偉な岩塊が、我々を見下して居る。

初めの中は緊張する山行の氣分に、足は知らず知らず拂つたが、漸く破れかけた灰色の雲間から、和かな日光がこぼれ落ち、斜面を今日の平和を思はず鮮かな色彩で包み初めると、我々の氣分も和かに、足も亦物憂くなるのであつた。足元にはニヒタカフウロヤニヒタカシャジンが未だ花を付けて、我々の袖を引き、タカサゴマンコは紅色の翼を、ビクションの茂みにひらめかす。然し否まれない秋の訪れに、花の数は少かつた。ニヒタカヘビノボラズがもう楕圓形の青い果を結んで居る。

斜面に刻まれた電光形の立派な道路。我々は唯足を伸ばせばよかつた。朝陽の暖かい空氣に、吞氣な會話が交はされる。眞瀬垣氏は、苦心して作り上げた、この登山道路を威張つた。僕は計畫して居る探險に就て、しゃべつた。そして未開地方探險の稽古場として、如何に臺灣の蕃地が、好いものであるかを話したりした。

新高主山の頂上に着いたのは、七時二十五分であつた。高山大岳は潮の様に、四望する眼界に迫つては居るが、白い雲はその間の大空に飛んで、我々の展望を遮ぎつた。昨日登つた時も完全な眺望は望まなかつたが、今日も亦同様である。五年前の快晴に仍つて、又他の山よりの展望に仍つて、主山から南山に到る尾根筋の概念は略得て居るのではあつたが、尙も細かい路筋を研めんものと、主山の南隅に立つて、雲の時間を待つた。その路に就ては、眞瀬垣氏も僕も共に初踏の地であり、マキリも亦、他蕃社の狩獵區域とて、案内に就ては全く用を爲さない。



八通關附近より見たる新高主山(右)及び東山(左端)

山頂の祠新高神社の鍵は、眞瀬垣氏が保管して居る。後學の爲にと、石の扉を開けて、御神體を見せて貰つた。それは一個の鏡であつた。傍に一升罎に清水が一パイ詰つて安置してある。聞けば眞瀬垣氏が老瀨溪の水を汲んで、山神に捧げたものであると云ふ。

暫時待つては見たが、南方の空は結局晴れなかつた。而して一陣の東風は、颯と許りに雲の斷片を主山に運んで、山頂は全くの雲霧の巻と化して終つた。三人は出發と各自の心に叫んで、腰をもたげ、暗い雲の最中へと歩を運ぶ。ガラ／＼の粘板岩の碎片を踏んで、暫時主山から南山へと走る尾根につけられた、阿里山からの新高登山道路を傳つた。誰が立てたのかわからないが、次高山（一二九七二尺）、秀姑巒山（一二二六五〇尺）、マボラス山（一二二五六〇尺）と、白いペンキ塗りの標木を、その途々に見た。やがてそれも見えなくなつて、我々三人は阿里山よりの登山道路を離れたのである。今迄那人三回の行しか経て居ない。之からの原始な尾根筋、その淨い香に我々は何時しか緊張してゐた。緒っぽい粘板岩と砂岩の碎片は磊々として、足元に連り、尾根は南に走つて雲の中に、その行手を没して居る。濃い雲の幕である。南山附近に辿りついた所で、山荒れにでも出逢つたら如何すればよいか？一日分の糧食しか持つて來ては居ない。我々の氣分は雲と同様に、又暗かつた。然しこの様に、足元まで雲の立ちこめた天氣と云ふものは、時にカラリと晴れる事がよくあるものである。

我々には一つの心配があつた。それは、斯う雲が深くては方向を誤る事であつた。磁石は正確に南を示すが、而して尾根は南に連るのではあるが、南山への取り付きは、稍左（東）に沿うて、一度低下する事である。而して先きの尾根筋は楠梓仙溪側へと側尾根となつて落ちる事であつた。僕の頭の何處かには、この様な五年前に見た快晴の印象が、こびりついて居る事であつた。

余りに唯猛進しても、取り付きの地點を通り過ぎ、横の谷に陥る惧れがあるので、行進を止めて、右(西)側の岩陰に強い東風を避けて、暫時山の氣配をうかがつた(時正に八時)。雲は終始動いては居るが、未だ山稜の具合を察する事は出来なかつた。我々の前途には永い行程がある。あはよくば南山のみならず、南玉山をも試みたいと云ふ野望は、心急いだ我々を又、元の雲の中に運び出した。

展望は全く判らないので、全くの感である。暫時岩渡りを續けた後、もう好い時分だらうと、尾根より左にガレの斜面を下り出した。嬉しい事には、而して幸な事には、この頃から、雲は潮の様に引いて、昏迷の國から突然見知らぬ國に放たれた様に、周圍には突几と迫る山の姿が展開した。足元を見れば、それは丁度南山に續く低下した取り付きに當つて居た。ホット胸撫で下したのは、僕許りではなかつた事疑ひない。

南山は意外に近かつた。或ひは我々の足は、獸の様に早かつたのかも知れない。眼前には突几たる南山が、のしかゝる様に聳えて居る。そしてその前面の崩れかゝる様な、物凄い斷崖の面には、明らかな褶曲による地層の皺が、マザ／＼と見えるのであつた。

新高主山の尾根と、南山より南玉山に連る尾根とは、極めて狭い低下した分水嶺に仍つて、連絡せられて居た。東に老邊溪、西に楠梓仙溪の水を分ける尾根は、正しく此處であつた。

其處には、見事なニヒタカビヤクシンの樹海が擴つて居た。そしてその下陰に、ニヒタカフウロ、ニヒタカリンドウ、コダマギク、ニヒタカコケリンドウが、花咲いて、この高山の一角を飾つて居た。其處には、又高山の珍奇な鳥が戯れて居た。タカサゴマシコやキンバネホイビイが、自由な翼を揮ひ、ニヒタカキクイタダキヤタカサゴミソサマイが、細い聲で鳴いて居た。それは確かに繪の様に美しく、足を引き止める平和な情景ではあつ

た。然し南山の岩壁を見て胸高鳴つた僕を、止める事は出来なかつた。弓矢は携へては來たが、この劇しい山行の前には、少しの時間さへ惜しまれるのであつた。

我々は唯足早に南山に迫つた。戦場の兵士の様な勢で、ビュクシンの藪を分け、岩を飛んで猛進した。

南山から南玉山へ至る尾根は、間近であつた。今や眼前には朝陽に、その岩の巒までも照らし出された岩山が、稍富士形をして聳えて居る。それは明かに一峰となる價值あるものであつた。少くとも一万二千尺以上を算へる無名の高峰、南山から続く岩尾根は、見るからに我々の血潮を湧き立たした。南山には登頂する事が出来るであらうが、若し南玉山を止むを得ず放棄する様な事があれば、今日の課題として、この岩峯丈はやつて見ようと、高らかに心に叫んだ。

南山はいよ／＼近づいた。登路を撰擇すべく、南山の様子を注意すると、南山の最高點は左(東)にあつた。而して頂上から西に低下した尾根は一つの鞍部を隔て、その前山と見るべき岩山をその前哨として居る。南山の頂上直下は茗瀟溪に崩落する灰色の大斷崖である。而してその右手前山に至る間は相當に急斜ではあるが、その一部にビュクシンがからんで居る事は、その斑點によつても判ぜられた。我々の直前は、前山の岩壁に當つて居た。岩壁の間をズレ落ちた急なガレは、取りつけない事もない様に思はれたが、若しも時間をつぶす様な事があつてはと、大事をとつて、直ぐ様斜めに、前方の鞍部を眼指して、まつしぐらに進んだ。細かいコースの取り様で時間の損失を免れる事が出来るので、僕が先頭になつて進んだ。いざその場所にかゝつて見ると、ビュクシンの藪は意外に深く、曲りくねつた枝は、頑強に抵抗した。碎岩の交るガレは登るのに相當骨が折れた。時折折上る彼方には、南山の凄壯な姿が、刻一刻と迫つて來るのであつた。

可なりの力闘の後、我々三人は、前方の鞍部即ち南山の肩に、辿り着く事が出来た。南山登頂の歡びは今や眼前にある。

急いで時計を見た。すると未だ九時にしかなつてない。時刻は未だ早いのだ。我々の獸の様な足は、主山から此處までの距離を短縮した。直ちに南玉山如何にと西南の空を顧みた。すると南山から續いて、彎曲した尾根は西に延びて、滑かな茅戸の山が、はるか彼方に南に走るのが眺められた。その中少しの隆起を示した齒ある山頂は、確かに南玉山に違ひなかつた。その特徴ある鋸齒は曾て、阿里山から、又ラホアレの兎蕃の巢窟から、僕の曾て望見し、鮮かに見覚えあるものであつた。南玉山は兎蕃ラホアレ味の跳梁範圍である。日本人と見れば必ず、首狩りを挑むこの危険區域の踏査を、正式に官廳に願ひ出でたのでは、許可されない事必定である。而して若し許るされるとしても、恐らく大人數の護衛を必要とされるであらう。阿里山側からは、巨大な斷崖にさへぎられて近づけない。さすれば現在の所新高山側から行くより他にはない。然しそれも山中の露營を試みるとなると、事極めて面倒となり、いやしくも郡に聞えては、大事をとる御役所の常として許可の下りやうわけもない。それにはコッソリと、一日の中に往復するより他ないのである。雲はあるが略晴れ上つた空模様だ。而してこの肩に於て未だ九時と云ふ早い時刻である。人數は手頃の三人、足は揃つて居る。氣合も合つて居る。而して南玉山は、我々に戦を挑む様に、その脊をノビ／＼と陽にぬくませ乍ら、はるか彼方に、然し努力に仍つては、人間の達し得る距離に蟠つて居る。千載一遇の機會である。この機會を逸しては、我々は又とこの幸運をつかむ事は出来な

いであらう。僕は即座に決心した。而して眞瀬垣氏を顧みて、やつて見ますかと云ふと、氏は莞爾として同感の意を示すのであつた。あはよくばと云ふ南玉山の願は此處に於て、その成否はともあれ、實行の緒につく事にな

つた。

四

急に雲の湧くを恐れて、南玉山に至る行路を素早くも見定めた。そして直ちに南山の最後の登攀にとりかゝつた。岩壁は流石に可成の急峻さであつた。然しロープを使ふ程の事もなく、我々三人は、どうやら之を攀ち上つて、十五分の後には、南山の頂に立つ事が出来た。時正に九時十五分。

南山の頂は東西二峯に分れ、東峯は稍々高く、廣さ略四坪位、何れも岩石、礫々たる岩山で、少量のビヤクシ
ンとシヤクナゲが、緑の色彩を點する。東北に向つて急な岩稜が、岩骨露はに、老濃溪に崩れ落ちて居る他は、
南北共に全く攀ぢる事も出来ない、危い急崖が我々の周圍に迫つて居る。

動搖常ない雲の合間から開けた山の情景は、期待に反かず素張らしいものであつた。先づ最初に我々の注意を
喚ぶものは、今越えて來た北の空であつた。其處には眼近く新高主山が日本最高峯の王座を誇り顔に空に嘯き、
之に對峙して東山の魁偉な姿は、想像以上に長いナイフリッジを隔て、主山の王位をねらふものの如く思はれ
た。東山は東に長い尾根を落して居た。主山は南山の西に又それより長い尾根を延して、その陰からは西山キヤザの森
に被はれた鈍頭が、こちらをのぞいて居る。東山と我々の立つ南山の間には、老濃溪の一支流が廣く開けて居た。
そしてその谷音は、此處に居ても、あくまで靜かな空氣の中に、聞き分けられた。それは南に遠く隔つて眺めた、
見なれない新高山彙のプロファイルであつた。

東の空には、尙數多くの群峯が、亂雲の上に頭を抜いて居る。それには、マボラス山(一二五六〇尺)、秀姑巒

山（二二六五〇尺）、大水窟山（二二〇二八尺）、カシバナ山（二〇八六九尺）、又遠くにはシンカン山（二一一五七尺）の相連らなる姿が算へられた。先日危険を冒して單獨行を試みた尖山（二〇六三二尺）の尖頭が、直ぐ其處に指呼出来る。

南の空に紛糾する、容易に近づけない山波は、僕には眼新らしいものであつた。其處には、群聳する峯頭の中に、僅かに雲峯（一一七七八尺）、南双頭山（二二〇〇〇尺）、關山（二二一〇〇尺）、ウワノシン山（二〇三三四尺）の四峯を辨別する事が出来る許りで、他は何れも無名の峯であつた。兎蕃ラホアレ一味の勢力に保護せられた廣大な未知の領域は、全くの果てしない密林が山と谷を埋め切つて居た。何十年かの後、臺灣の諸高峯が何れも征頂せられ、數回の登攀に山の原始が、次第に失はれる時が來ても、この領域丈は、最後まで聖なるものとして残るであらう。僕は今更の様に登る可き峯と探る可き谷の多いのに、感じ入つたのであつた。

密林を伐り開いた斑點は耕作地であらう。山肌の緒く剝けた斜面に認められる條痕は、狩獵路であらう。而して青い煙の立ち昇る谷間の一角は蕃社であらう。之等は何れもラホアレ一味と、郡大社の脱出蕃の、この廣大な天地に生を營む象徴である。我が官憲の處置を潔しとせずして、この奥山に立て籠つた彼等は、見方に依つては、痛快なる風雲兒である。どうせ短い人の一生かも知れない。朝に鹿を追ひ、夕に羚羊を尋ねて過す、彼等の自由な生活は、若し機會到つて殲滅させられる時が來るとも、人里近く誘き出されて、文明の害毒にあえぐより、遙に優つたものかも知れない。マキリが盛んに、彼方此方を指して、眞潮垣氏とラホアレを語つて居る。マキリは果して何を考へて居るか？。マキリ自身も曾ては首狩をやつた事がある者であり、又彼の血はラホアレに、遠い乍ら縁を引いて居るのである。

何時も山頂には、ゆつたりした時間をつぶす僕の習慣も、永い前途を控えて居るこの場合には改めねばならなかつた。我々は心ゆく許り山を眺める暇もなく、早々にして立ち上つた。而して元來た岩を傳ひ、再び肩の所に來て見ると、未だ南玉山は、巨大な獣の様にねそべつて、その廣い脊を陽にぬくませて居る事、前と同様であつた。我々はこの魔物の眼を覺さない間に、そして雲を呼ばない間に、是非とも登頂を濟ませて終はなければならなかつた。僕は心急ぐ前に、もう一度此處から續く尾根の具合を、仔細に見た。そして今日の中に努力に依つては、再び此處まで歸れる事を見て取つた。何分千載一遇とも云ふべき機會である。やり損じてはならない。その爲めには偶然に頼らず、遅くとも確實なコースを選ばなければならない。此處から南玉山の取り付きまでには、前の富士形の岩峯を加へて、數多くの岩峯が續いて居る。岩場の状態が良ければ、尾根傳ひの方が早いであらうが、此處から眺めたのではその様子は全く分からない。快い尾根傳ひに一時は足が拂つても、キレットでもあつた場合には、非常な時間を食ふか、又引き返すかして、この行を斷念しなければならぬであらう。僕はあくまでまわり道かも知れないが、而して努力は多いかも知れないが、大した間違ひのないコースを、選ぶ事に定めた。それには、この肩から南玉山に續く岩尾根の八合目をへつるより他になかつた。此處から見られる岩尾根の八合目は、相當の急斜ではあつた。然し岩の節理は手懸りを與へたし、又ビクションがからみついて居た。而して、いよ／＼危ない所は、下に下りて周れば、へつれない事はない様に思はれた。

斯く決心がつくと、唯猛進する一途あるのみである。眞瀬垣氏は、早くも勇み立つて、先登に立つた。僕とマ

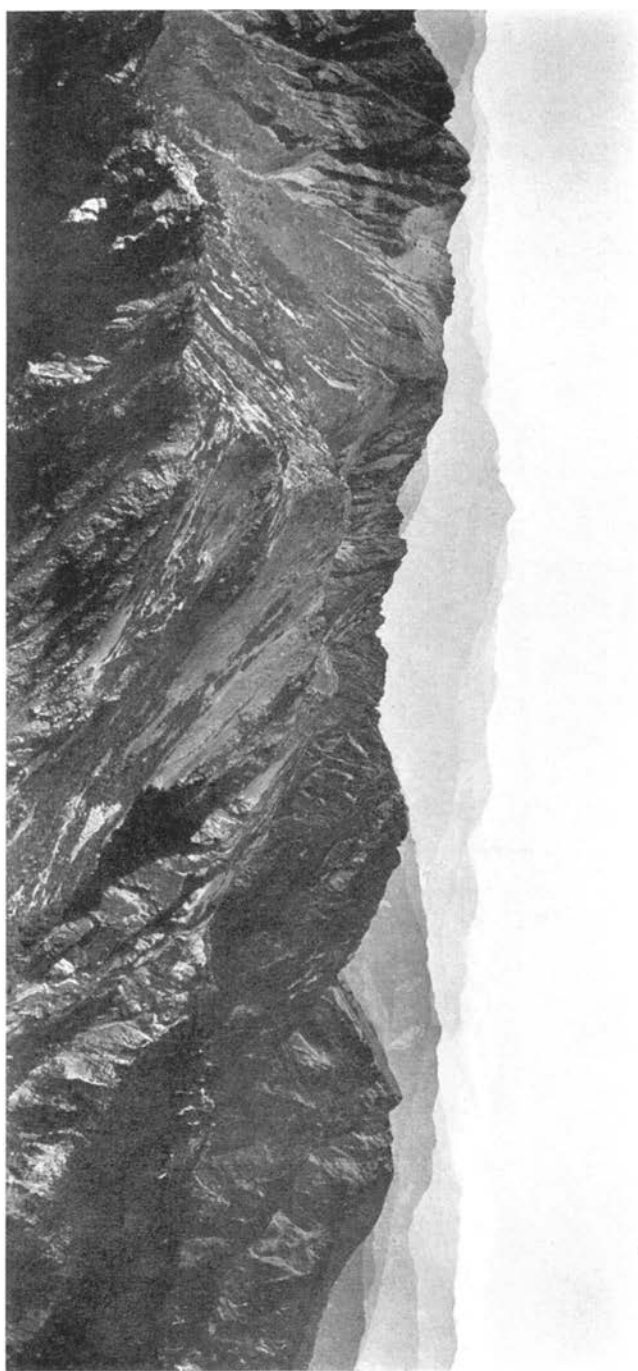
キリは、それに續いた。肩の所から砂の斜面を氣持よく滑走して、少しく低く下つた。そしてビュクシンの杖を分けて八合目に行く。初めはビュクシンの藪が、砂の斜面に縦縞を引いて居るので、ビュクシンの藪と砂場を交互に横ぎつた。その中次第に急斜は増して、我々は前方の岩尾根から落ちる岩壁をへつらなければならなくなつた。然しこの邊には、羚羊が澤山居ると見えて、無数の圓い糞は堆く岩角に積り、足跡は多數に亂れて居た。そして羚羊のものと思はれる獣道が、岩壁に沿うて横にからんで行くので、これ幸と我々はその道を傳つた。然し羚羊と人間とは、その道の撰擇が違つて居たので、一時はこれと分れ、又出遭つた他の道を取つて比較的容易に進んだ。それでも可なりの悪場も途中にはあつて、ほんの指先きで辛うじて過ぎる様な事もあつた。然し一體に岩層は垂直に向いて居る箇所が多いので、手懸りは概してある方であつた。小さなガリーは、思ひの外この高所まで、岩間を刳つて居るので、其處を通過するのは、比較的困難な仕事であつた。

南玉山頂上の鋸齒は、次第に近づいた。而して少しでも、その距離が近づけば近づく程、それは登頂の確信に我々を導き、油然と湧き上る勇氣に、我れと我が身を緊張させるのであつた。岩間に吹き出る僅かな水に、喉をうるほして小憩を取り、後を願れば、南山は今や遠く隔つて、岩壁の上に聳え立ち、流動する雲にその頭が見え隠れする。

今や、さしも長い岩場も、その三分の二を済ます事が出来た。而して、その後には、尙いくらかの岩場の向ふに、茅戸が擴つて居る。其處に辿り着けば、足は一層捗るのである。而して、その草原の彼方に、南玉山は、深い切れ目を隔て、あの奇怪な頭をもたげて居るのであつた。

大丈夫やれると云ふ成功の豫感に、勇氣百倍し、ビュクシンの藪を分け、岩を傳ふ力闘は、我々を何時しか、忘

新高主山絶頂より新高南山(左)及び南玉山(右)を望む



我の境に引き入れた。それは丁度、ゴール間近くに迫つた遠泳の瞬間にも似て居た。

やうやく、氣の疲れる岩傳ひを終へて、茅戸にとりついたのは、十一時少し前であつた。短いタカネス、キの下生へは、我々の足の運びを容易にした。暫時にして、我々は之を最後の休息として、一気に南玉山の山頂に立たうと、草山の上に腰を下して、ゆっくりと紫煙を吐いた。其處からは、足元に續く斜面を隔て、南玉山を觸れ得るものゝ様に、眺める事が出来た。

南玉山の地質構造は、珍らしい單斜構造であつた。それはケスタの地形を思はせる。その東面は、平均見かけ三十五度の傾斜で、廣いその斜面を、滑かな茅戸が之を被ひ、南山直下の溪谷にまで、裾を落して居るのであつた。而してその反對の西面は、裸岩の露出する切り立つた斷崖であつた。而してその面には、略東面の傾斜に並行する地層の横縞が、判然と認められるのであつた。山頂の三つの鋸齒は、この奇妙な山體の情感に、更に怪奇的な或るものを與へた。それは鱔か何か巨大な動物が、巨口を開いて居る様であつた。南山から續く一連の山連から、南玉山は、一つの明かな切れ目に仍つて、完全に絶縁せられて居た。而してその切れ目の西面に落ちる斷崖から、濛々と湧き上る白雲は、ともすれば、南玉山を包まうとあせつた。

數分の後、我々はその鞍部に駆け下りた。而して休む暇もなく、いよ／＼歩きいゝ茅戸の上に足を早めて、最初の頭の上に立つた。すると更に南には、高い頭がある。我々は更に勇を鼓して、斷崖の縁を傳ひ、雲の中を進んだ。

結局、南玉山の最高點は、三番目の頭であつた。其處には静かな草の上に、灰色の雲が舞つて居た。それは永劫な天地を思はせるものであつた。其處には一抹の人の香も感ぜられなかつた。

南玉山は、今迄未登攀の山だと聞いては居たが、正直の處、僕は何人かに仍つて登頂せられては居ないかと、心中甚だ穩かでなかつた（之に對して醜しと僕を責めるものあれば、僕は黙つて叩頭する許りである）。然し事實は、何人もこの聖なる頂に辿り着いた者は、無かつたらしい。親しき山より遠く隔つて居る事と、兎蕃の脅威は、この山頂を、一九三一年の今日まで、全く原始のまゝに置いたのであつた。

現今臺灣の中には、未踏の高峯は、尙少からずあるであらう。然し地圖上に名稱の與へられて居る、四十五座の万尺を抜く高峯は、その殆んど全部が登り盡されて、未踏のものはほんの僅かである。その中にこの南玉山はあつた。然し今日の行によつて、この南玉山はその未踏峯の名を抹殺された。それが好い事であるか、悪い事であるかは、神のみ知り給ふものであらう。然し野望に満ちた動物は、この初登攀を、殊の外喜んだのであつた。

時計は十一時三十五分を指して居た。而して、秒針は、遠慮なく忘れ難い時を刻むのであつた。我々は非常な困難を忍ぶ事によつて、而して貴い協力に依つて、辛うじてかち得たこの登攀に感激して居た。一脈の哀愁を覺えさせる、はるかなる感じ。それは初登攀せる者のみの知る境地であらう。

山頂の岩を運んで、我々は敬虔な氣持で、その一ツツを積み重ねた。僕は今迄臺灣の高峯の幾つかに、初登攀のケールンを、幾度か積んだ。然しこの時の氣持は、他に求められない深刻なものであつた。山神の試練以外に、跳梁する兎蕃の眼を掠めて積んだこのケールンは、實に忘れ難いものであつた。

ケールンを積み終ると、草の上に腰を下ろして、ゆつくり辨當を使った。初めて見た南玉山は、阿里山から眺めた斷崖を前にした物凄い鋸齒であつたが、我々は正しくその頂にあるのであつた。

雲は斷崖に渦巻いて、西方の廣大な風景を奪ひ去つた。而して南に低下した錢頭雁山(九四四尺)の圓い頭をも、その中に没しようとする。我々は思ひ出した様に、今來た方を振返つた。すると、南山の頭は已でに雲に隠



阿里山登山路西山附近より南玉山を望む

れ、先刻へつて來た岩壁も、次第に幽暗の色に閉され初めた。東の空は暗雲が漲り渡り、その一部は夕立さへ降つて居る様に見えた。我々は之を見て、退路が絶たれた様な心細さを感じないわけに行かなかつた。處女峯を踏んだ事を山神の怒つてか、又、より以上の試練を加へんとしてか、天は少くとも、我々に無情の様に思はれた。

我々は最早初登攀の歡びに酔ひしれて居るわけには行かなかつた。山頂の記念すべき時間を僅か一時間に短縮して、立ち上つたのは丁度十二時半であつた。

雲はいよ／＼前方の岩壁に色濃くなつた。そして、この雲霧の蔓る巷に、見通しを必要とする岩傳ひを試みる以上、その歸路に就ては完全な望みをかける事は出来なかつた。我々の足元に擴る谷は、ラホアレの巢窟なので、其處に下りる事は、我と我が身を危険に曝らす様なものであつた。然し考へて見ると、その行路に就

ては、時間はかゝるかも知れないが、迷ふ恐れは遙かに少いものであつた。どうせラホアレの繩張りを侵して、南玉山に登頂したからは、谷に下りるも、上を周るのも、五十歩百歩の相違である。えい、やつて終へと、三人は、この谷に下りる事に決めたのであつた。

六

固い決心と深い緊張の下に、我々は前方の切れ目から、急ぎ足に下り出した。又しても眞瀬垣氏が先登に立つた。僕は次に續いて進むべき道筋を指示した。斜面の下には、ニヒタカトドマツの森林が、黒い斑らをなして居た。森林にまぎれ込んで、深い下草になやむ経験を曾て嘗めた事があるので、出来る丈茅戸が溪谷まで伸びて居る所を下つた。草原には、我々の氣持を知らない様に、ナガサハジャノメが暢氣に飛んで居た。初めは草が短かゝつたが、次第に低くなるに連れて丈を増して、終ひには胸の高さまでになつた。それでも、我々三人は、遮二無二下つた。深い茅の中から、眞瀬垣氏が竹の尖つた棒を引き抜いて、「之はラホアレの奴めがかけたのだ」と、豪傑笑ひをした。僕も釣り込まれて、笑つて終つた。今の竹の棒は、俗に竹釘ツチカシと稱するもので、ブソンの蕃人が、よく獸を獲るに使ふ一種の原始的な良であつた。獸の道を探し出して、その急斜面に竹棒を立て、鋭利な尖端を構へて置くと、上から素張らしい勢で馳け下りる獸は、ブソリとその切尖に貫かれると云ふ仕掛であつた。之で見ると、ラホアレ一味の蕃人は、この邊をうろついて居る事は事實であつた。竹釘は何本も見付かつた。我々は不注意に進む事は出来なかつた。

我々は三千尺に近い斜面を駆け下りて、溪の近い事を示す溪音に元氣付いた。溪への下り口は急な岩壁であつ

た。血眼になつて徑を求め、ニヒタカヤダケの藪にブラ下つて、やうやく溪底に着いた。時計は一時四十五分を指して居た。清い水、急斜を流れる小瀑の階段、青い淵、兩側に茂る樹々の美しさ、岩の清淨さ、それは蒼溟溪の未知な一源頭の姿であつた（約八五〇〇尺）。

溪の對岸の岩は又急なものであつた。然し深いヤダケの藪が、岩壁にからまつて居るので、三人は腕力に訴へて、この悪場を乗り越した。又しても眞瀬垣氏は、勞多い先頭を受け持つた。之から南山の肩まで、四千尺を登らなければならぬのであつた。果ても知らず、頭上に續く急阪を、我々はひたすら登つた。深い草叢にラホアレが、鉢を構へて居る様に思はれた。今にも蕃刀を振りかざした蕃人が、躍りかゝつて來る様に感ぜられた。然し時間の余裕のない過激な登攀は、こんな事に氣を配つて居られないのであつた。

我々三人は、無心に進んだ。唯疾馳する野獸の様に猛進した。人間の努力は、我々の努力は、次第にその成果を積んで行つた。而して南山は、次第に近づき、最後の努力を、微笑して我々に要求して居るかの様であつた。低くなつた茅戸も已でに去り、今では磊々たる高山の岩の上に、ビクシンと優しいコダマギクの花を見た。我々は南山の右手の岩壁にとり着き、疲勞した肉體に鞭打つて、左にからみ、やうやくの思ひで、南山の肩に着いた。時正に三時半。

此處まで來れば、兎蕃の危険は殆んどなくなつた。我々は砂の斜面に腰を下ろして、残つた少量の食料を平げ、水筒を空にし、ゆつくりパイプをふかした。今にも降りさうに見えた雨雲は、遠くに去つて、まばゆい殘陽が南玉山を照らして居た。我々はどつと南玉山を見つめて居た。思ひ出せば、此處を出たのは、今朝の九時であつたが、僅か六時間の間に、我々は前とは違つた歡びと自信を以て、此處にある。黙々として想ふ無我の瞬間に、僕

は人間の努力の侮るべからざる事を、感じやうとして居た。激闘の後のこの休息は一生忘れ難いものであつた（この時幸か不幸か、野帳を置き忘れて終つた。その御蔭で翌日、ゆつくり二回目の南山の登頂をした）。

雲が來たので、我々は早々にして立上つた（四時）。そして、尙氣の許せない岩場を傳ひ、ガレを下り、ビュクシンを分けて歸路を辿つた。薄暮は次第に、我々の周圍に迫つた。そして溶け入る様な夕霧の中に、キンバネホイビーが、夕暮れの悲歌を奏するのであつた。今日一日の力闘に、我々は何れも疲れ切つて居た。そして空腹と渴は、遠慮なく迫つて、我々の足の運びを尙苦しいものにした。主山の稜線の取りつきの所で、若しもの場合にと忍ばして置いたウキスキーの瓶も、空になつた。革帯を強く緊きしめて、唯食料と水とを思ひつめて、重い足を引きずつた。それは今日の輝かしい登攀者の慾望として、まことに情ないものであつた。今朝見付けた新高神社の一升壘を思ひ出して、眞瀬垣氏を勵ました。そして自分もそれに仍つて、辛うじて元氣を揮ひ起した。夕闇に寒い霧は一層深くなつた。薄暮の高山の色彩は、荒涼たるものであつた。

新高主山の一寸手前まで來た時には、眞瀬垣氏は耐へられなくなつて、寒い霧の中に冷たい岩の上に、大の字なりに寝ころんで終つた。そして僕の未だ少しく余裕あるを見て、「井の中の蛙大海を知らず」と唸るのであつた。氏は今迄にこの様な辛い貴い経験はなかつたと語つた。

やうやく眞瀬垣氏を、山頂の一升壘に仍つて勵まして、主山の頂上に來た時は、丁度六時であつた。それは前にも増して、夕雲の盛んに渦巻く荒涼たる情景であつた。直ぐにくだんの一升壘にかぶりついた。僕は眞瀬垣氏の腹中に、高らかに流れ込んで行つた冷たい水の響を忘れる事が出來ない。新高神社の御利益は立ち處に現れて、我々はあくまで元氣付いた。雲を排して、西の空に夕陽が、東の空に圓い月が現れた。さうだ今日は十四夜に當

つて居たのだつた。日本最高峯の絶頂より拜した、日月同じ水平線に相對ふ崇高な風景は、我々の永久に忘れ得ないものに違ひない。暫時、不可思議な神の示顯に、襟を正して居たが、雲が再び之を覆ひ隠したので、新高駐在所へと、下りを急いだ。

我々は又立ち止らなければならなかつた。何故ならば、一旦雲に隠れた夕陽は、再び現れて、眞に神秘的な夕焼けを、雲の上に輝かしたから。黄金色の亂雲は、眼下に立ち並んだ。そして五彩の光は、それを更に美しいものにした。僕は今迄これ程神秘的な美しさを具へた夕焼けを見た事がない。又、今後に於ても、恐らくないであらう。人間の筆は、いつはり多きものである。僕は此處に、潔く、それを叙景する慾望を、捨てたいと思ふ。

主山からの道は、眞瀬垣氏が作つたものである。何處の曲り角には、何んな石があるかまで、氏には明瞭である。トッピー暮れた闇の中を、我々は大腿に進んだ。

新高駐在所に着いたのは、七時三十分であつた。餘りに遅いのに歸らないので郡では心配して、搜索隊を出さなければならぬと、大騒ぎだつたと聞いて、我々は、如何にも恐縮した様な顔をしなければならぬのであつた。

挿入の圖版二枚は臺中の臼井氏の撮影にかゝるものである。

黒薙川柳又谷

塚 本 繁 松

昭和六年八月六日——八月十四日

黒薙温泉——北又柳又合流點——カシナギ深層谷落口——オウレン谷——ゼンマイ谷——ナル谷乗越——ナル
 谷落口——猫の躍り場——清水平——蓮華谷落口——蓮華東谷——白馬岳——柳又——ナル谷落口——長池
 参照地形圖 二十万分一、富山。五万分一、白馬嶽、黒部、泊。

人夫 黒部保勝會案内人此川新作、瀧林耕平

合 流 點 へ

私は白馬岳以北の山と溪谷に異常な興味を持つてゐるので、十數年前から幾度となく朝日岳を中心とした漂泊の旅をして來たが、多年の宿望であつた北又谷キナギタニの溯行はいつも失敗に終つてゐた。それが昭和三年八月になつて、漸く水源迄溯行する事が出來て、多年の念願を一先づ果す事が出來た。そこで翌年の八月末今度は柳又谷ヤナギタニを水源白馬岳から下降せんとして先づ朝日岳に登つたが、同行者に故障が起つたのと天候不良のため一先づ下山して天候の回復を待つ中に時期を失してしまつた。昨年は遂に機會を得なかつたし、今年こそと思つて七月の長雨の時

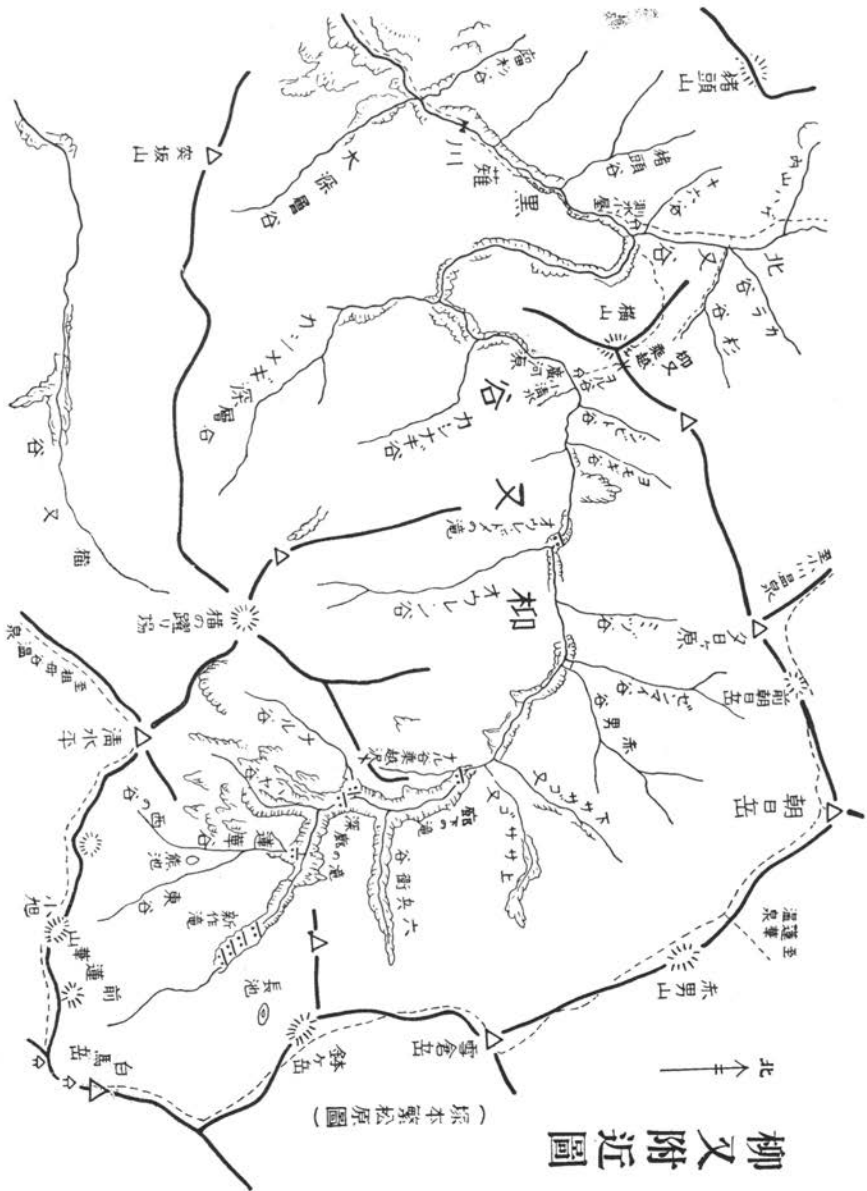
れるのを待つてゐた。七月下旬に家族連れで白馬岳に登つて、頂上の下から柳又の谷へ長い果て知れぬゆるやかな雪溪の下つてゐるのを眺め下すと、心は遠く幽谷の彼方に走つて、もうぢつとしては居れなくなり、歸京早々にして旅囊を改めて出發した。

八月六日の朝宇奈月に着いて見ると餘りよい天氣ではなかつたが次第に晴れて来る模様が見えた。七月の長雨が晴れてから已で二週間足らずになり、その間に小さい夕立が一二回あつただけと聞いて先づ水量の心配も大した事はなからうと思はれた。下立から来る人夫が二人共電車に乗り遅れたので七時發の日電のトロには間に合はなくなつた。宇奈月驛で會員吉澤庄作氏に會つて今度の旅の話などをしてゐる中に人夫の準備も出來上つたので十時一寸前トロで宇奈月を出發した。黒薙驛へ下りて邊りを見廻して見ると、變り果てた黒薙川の姿に今更乍ら傷ましい思ひをせずには居られなかつた。多量の水流を持つて悠々として本流と合流して居た頃の壯觀！ 黒薙川のあの盛んな有様は今は過去の空しい夢となつてしまつたのである。音もなく岩壁を摩して流れてゐた跡引の清流の跡は無殘にも白い河身を天日に曝してゐた。私は長く見るに忍びない氣持で早々にトンネルの中へ逃げこんだ。トンネルを通つてゐると何時しか黒薙温泉を通り越してしまつたので、後戻りして温泉へ下つた。水流のなくなつた黒薙の温泉場もまるで魂のぬけたやうに活氣がなくなつてゐた。昔は物靜かな落付のあるよい温泉場であつたのだが今では一泊したい氣も起らなくなつた。帳場で少しばかり買物をしてお茶を飲んで休んでゐると、古い會員であつた依託經營者佐々木君（經營は黒部鐵道）が出て来て色々山の昔語りをした。私達は柳又を溯るのだと言ふと、「今夜測水所でお泊りになれば明晩は白馬へ行かせよう」と言つて私を苦笑させた。

二見温泉場を越え、大深層谷の手前の日電の取入口を過ぎると、此處に初めて昔乍らの黒薙川の姿を見る事が

柳又附近圖

(塚本繁松原圖)



出來た。八月のまぶしい太陽が花崗岩の巨岩の磊々とした河原一杯にふりそゞいで、溪流はごう／＼と轟く音をこだまして落走し、清風は滴るやうな兩岸の若葉をゆり動かし冷々と過ぎ去るのを浴びては、これだ／＼と手を打つて喜ばずには居れなかつた。私共は荷を下して晝食を取り、思ふ儘に涼風を浴びて休んだ。道は右岸の河岸に沿つてついてゐる。涼しい木立の中へ入つたり、河原近く迄下つたりして行くと、道の左側に倒れて荒廢した小屋の跡を見る。これは音神鑛山オトガミの事務所の跡である。猪頭谷ヘトガヤの一つ手前の澤の附近は岩壁が少し悪いので、澤の手前で初めて道は左岸へ移る。併しずつと昔はその儘右岸許り通つてゐたさうである。此處の釣橋をよく眺めて見ると十數年前その儘のやうな氣がする。低い所に架つてゐるが余程強い橋と見えて、この七月の洪水にも何ともなかつたらしい。左岸へ移つてからは西日を受けるので非常な暑さのために三人共可なり弱らされた。やがて今は廢坑となつた音神鑛山坑道の下の平を横切り河原へ下つた。この下り口の棧道が破損してゐて少し許り惡場らしい感じがした。この附近は石英斑岩の露出を見る。此處の對岸は猪頭谷の落口である。

十年許り前迄は此處から一本の鐵線によつて右岸へ移り、道は可成り高く迄山を登つてそれから十六谷へ下つてゐたが、富山縣電氣局の測水所が柳又北又の合流點に出來てからはこの道を通る者は殆んどなくなつて、今の道はその儘左岸を通つて居る。私は十年程前に友達と二人で小川温泉から北又谷に入つて黒蘆温泉へ出やうとした事がある。猪頭谷まで來て、其處から對岸へ架けてあつた筈の鐵線を尋ねて見たが見當らなかつた。それは數ヶ月前の猪頭谷の出しの爲に、花崗岩の大岩へ打ち込んであつた鐵のボルト（鐵棒）が外へ出てゐる處だけ綺麗にぶち切られて、鐵線と共に流れ去つた爲で、岩へはまつてゐる部分だけ赤錆を流して残つてゐるのが發見された。當時の物凄かつたであらう有様は、堆高く本流迄押し出した山のやうな押し出しで想像せられたのであつた。

その爲にその時は行先を遮ぎられ、川を涉らうとしたが出水の後で水嵩が多くてどうしても涉れず、その中に日が暮れたので河原で野宿を余儀なくされた。その晩は無数の藪蚊に攻め立てられて殆んど眠る事が出来ず、次の日腹をへらして這々の態で小川温泉へ逃げ歸つた。その翌年春黒羅温泉から此處迄溯つて見たが矢張對岸へ渡る方法がなかつた。さういふ思ひがけぬ苦しみを嘗めた事があるので、この附近は私に取つては思ひ出の深い地である。私は今何故こんな古い事を持ち出すのかといふと、この道は誠に變遷激しくあてにならない危険な道である事を後で詳しく書かねばならぬからである。

猪頭谷から上流は河身が急に廣まつて廣々とした河原を持ち水流は悠々として流れて行く。この附近は黒羅川唯一の廣河原である。この川の沿岸には天然の杉がかなり多いが、この附近は特に目立つて多く見受けられる。道は河原から數間高い所を森林の中についてゐて、測水所の二町程手前で河原へ下り釣橋を渡つて右岸へ移つてゐる。橋は二間程も高い岩壁の上に架つて居り、橋の下の岩壁はすべ／＼とした花崗岩で下からは直接取りつきやうがない。見ると右側の岩壁の上から五六間のロープが下つて居り、それにつかまつて壁を上り、壁の上の立木につかまつて釣橋迄下つて漸く橋を渡るのである。重い荷を擔いでゐては越す事が出来ない。これには全く面喰つてしまつた。昨年迄はこの釣橋の下の壁に棧道がかゝつてゐたさうで難なく越す事が出来たさうである。人の此川が昨年ツカの夏、露を十貫程も擔いで通つたさうだが、一ヶ所も危い思ひをする所がなかつたと言つてゐた。それがこの冬の雪崩でか、或ひは七月の洪水でか、きれいに流されて跡方もなくなつてゐる。ロープは鱗釣でも掛けて行つたのだらうが、これがなかつたら此處を空身で通行するだけでも容易ではない。私共も此處を通り終るのに一時間も掛つたのと、可なり骨が折れたので、今日の豫定がすっかり狂つてしまつた。私の考へでは測水所

を越えて一寸でも柳又の谷へ入つてから泊る積りであつたが、之では人夫に氣の毒で測水所より先へ行つて呉れ
とは言へなくなつたので、少し早かつたが測水小屋泊りとした。冠氏もこの釣橋を越える時、上から石が落ちて
來て、思はぬ所で手に怪我をしたと言つて居られた。私は十數年この方この道（小川温泉から越道峠を越え北又を
通つて黒雜温泉に至る道）の變遷の甚だしいのに今更乍ら驚いたのである。この道は營林署の林道であつて黒雜
温泉から猪頭谷迄は舟見の擔當區（舟見擔當區は今は廢止せられたらしい）受持であり、猪頭谷から先は山崎擔
當區（今は泊擔當區）受持であつたのだが、近年は兩方共に毎年定まつて修繕をする事がなくなつたらしいのであ
る。その爲にこの道で思ひがけぬ苦しみをした話や、行けなくて引返したといふ話を毎年のやうに聞いてゐた。
私だけでさへも今度のを合せて三回も思はぬ苦しみに會つてゐるのだから。處が數年前から測水所が出來て人が
住むやうになつてからは通れないといふ事が先づなかつた。それが今年から又測水が中止となつたので又もや、
北又のサカサマ谷と日電取入口との間は廢道同様となるであらうと私は思ふのである。だから今後入谷の方は十
分の用意をして入つて頂きたいと思ふ。然るに陸地測量部では今年發行の白馬岳及立山近傍圖にこの道を堂々と
赤線を引いて立派な登山道らしく記入したのは何としても輕率であつた。一般登山者のために實に危懼の念にた
へない。陸地測量部で何故この道を登山道としたかといふと、それは朝日岳登山道としてその登山口を宇奈月と
したからである。朝日岳登山道は小川の左岸の山崎村で昭和三年に開鑿したもので、サカサマ谷合流點から朝日
岳へ、そして白馬岳へと道を造つたのである（この道も今の所上の方はまだ不完全で分り難い所が多いが、その
事は又別の機會に述べる事とする）。

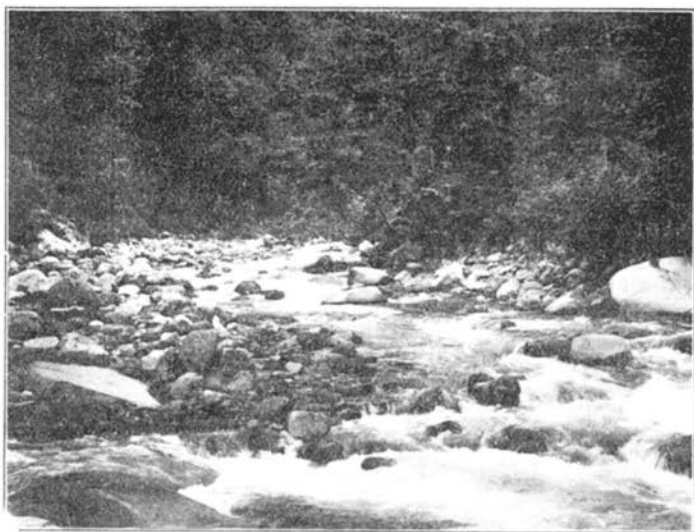
柳又北又の合流點は海拔五〇五米で、本流に比べて著しく落差の大きい事が知られる。測水所は合流點下手の

右岸に建てられた堂々とした太柱の建築であり部屋が三つあつて縁側付の中々洒落れた建物である。今年は測水が中止で無人であるが、この儘うちやつてあつても此處數年は倒れまいと思はれるので、この方面への登山者に

取つては誠に得難い根據地である。

柳 又 北 又 合 流 點

私は測水所に荷を下してから合流點へ下り、すゞ裸となつて清い水に一日の汗を洗ひ流して、すが／＼しい氣分でこの二つの神秘的な流れの落ち合ふ様を眺め入つた。柳又は眞正面の谷蔭から勢烈しく流れ來り、北又は小瀧のやうになつて落ち合つてゐる。二つの流れが落ち合ふと河身が急に廣まつて水流の幅が七八間位に廣まり洋々とした清流となつて靜かに流れて行く。周圍の山は茂り合つた翠緑の潤葉樹林の中に杉、ねずこ、栂などの針葉樹を交り合せて、言ひ知れぬ靜寂境を形造つてゐる。此處迄來ただけでもこれだけ幽玄な深山の氣を味ふ事が出来るのかと私はせい一杯山の氣を吸ひ邊りの風光を味つた。私はいつも二つの大きな流れが合流する狀景を眺める毎に何かしら深いものを暗示



させられるやうな氣がして深い瞑想に耽らせられるのである。そしてこれから先にあるであらう憧れの未知のもの

のを心に描いて何となくわく／＼とした氣持に心を躍らせられる。北又の奥は知りつくしてゐるので、心眼に映る奥深き幾つもの秘景を幻のやうに心に送り迎へ乍ら數日の後には再びそれ等の秘境を訪れるであらう事を山靈に約した。柳又こそはすぐ其處の谷蔭にさへどのやうな驚異すべき絶景が秘されてゐるのか見當もつき兼ねるので、たゞ遠い白馬岳の水源に迄思ひを馳せて戦き慄へるやうな憧れの念に胸をどきつかせてゐた。そして明日こそはそれ等の只中に没入する事が出来るのだと思つた。谷には夕暗が迫り、隙間なく晴れた空を見上げると一つ二つ星がまばたきしてゐるのが仰がれた。

私は此處の二つの流れの落ち合ふ様を見て、柳又の水量が北又のそれより遙かに多いといふ事に驚いたのであつた。以前に見た時には北又の方がずつと多かつたと憶えてゐるので、何時もさうとはかり信じてゐた處、今度見ると確かに柳又の方は北又の倍はある様に見受けられた。して見れば以前に見た時は夕立の後か何かで一時的の現象であつたのであらう。併し乍ら奥行の深い點でも又水を集める面積も何としても北又の方が大きいと思はれる。けれども七八月の候には柳又は多量の殘雪を持つてゐるに反して北又は水源近くにも殆んど殘雪を持たないので、その爲に七八月の候は柳又の水が遙かに多いのであらう。それが九月頃になつて山の殘雪のなくなる頃になると、反つて北又の水が多くなるのではなからうかと私は思つてゐるが果してどうであらうか。

私が水の流れをみつめて考へに耽つてゐる間に二人の人夫は鱒釣りに忙しかつた。然し日が暮れて歸つて來たのを見ると一匹も下げてゐない。どうしたと聞くと、七月の洪水ですつかり流されたと見えて一匹も見えなかつたと言つてゐた。柳又へ行けば思ふ存分、鱒を食へると思つてゐた楽しみもこれでどうやら夢に終るらしい。日が暮れても空一杯の星空なので、明日の天氣は大丈夫と、心も軽く楽しい山の第一夜を過した。

カシナギ深層谷まで

八月七日。目を覺して見れば見事な青空なので心を躍らせ乍ら飛び起きた。川面には朝靄が煙のやうに棚引いて居り、川瀬の絶え間絶え間には、早くも駒鳥が来て囀つてゐるのが聞えて、爽かなリズムは私共の出發をせき立てた。午前七時過ぎ出發したが小屋の前の長い釣橋が破損してゐる爲に、直ちに本流を涉らねばならなかつた。朝の水は冷かつたが割合に淺くて膝の上迄しか濡れなかつた。先に涉つた入夫は何時の間にか鱈を一匹釣り上げて頻りに喜んでゐた。直ちに柳又に入る。落口から間もなく谷は右へ廻つて、その背後に釣橋が架つてゐる。併し最早破損してしまつて渡る事すら出来なくなつてゐた。其處で一寸、先の様子を見ると、矢張り右岸へ移らねばならぬらしい。しかし釣橋の上の徒渉點は淺いので難なく渡る事が出来たが、僅か數十間溯つて忽ち行手を封ぜられてしまつた。釣鐘狀の岩壁は左程に高くはないけれども、激流が岩脚を洗つてゐて全く手懸りが無い。左岸ならば暫く行けるが間もなく行手が塞がる様子、しかも釣橋の所迄戻つて徒渉するより外なく、涉つても直ぐ悪い所が一ヶ所ある。さて如何にすべきかと出發早々にして協議を初めねばならなかつた。入夫の此川は、この奥は餘程悪いので測水所の人達も行けないと言つてゐたと言ふ。何ならば尾根の道を行つて廣河原へ下る事にしてはどうかと言ふ。出掛けた許りで飛んでもない事を言ひ出したので聞いた口が塞らなかつた。その尾根道といふのは縣の電氣局が作った道で、釣橋を渡るとすぐ山へかゝり横山ヨコヤマの尾根へ出て柳又乗越と合してヲル谷を下り、廣河原へ出るもので、廣河原迄三時間程で達せられるさうだが、その代り柳又の秘景の大半は見逃してしまふ氣がして谷狂ひの到底満足出来る道ではない。そこで空身でへつりの様子を見に行く。穴した大廻りではな

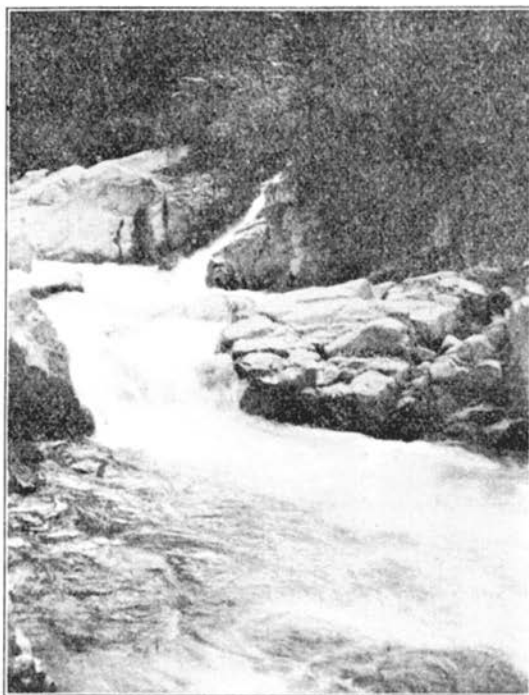
いらしいので早速荷を背負つて草付きを登り初めた。三十間程登つてから次第に右へ廻つて尾根を越し、明るみへ出て見ると、右岸は可成り河原が廣くて相當先迄行けるらしいので、木につかまつて河原へ下つた。鱒釣りのらしい足跡がある。一町餘り河原を行くと一旦岩壁が岸へ迫り又その先で河原が廣くなつてゐる。見ると大きな岩の上に一本の細い流木を架けて對岸へ渡してある。鱒釣りの架けた橋らしいがまだ先へ行ける様子なので、その儘うつかり右岸を溯つた。分流してゐる流れを渡るのに簡単に架橋して、それからどん／＼二町程も河原を行くと俄然行手が塞り、いよ／＼本物の壁にぶつかつた。百數十尺の立壁が一町餘りも續いて先は見えなくなつて居り、水の上四五十尺は草一本ない程にむき出しの壁である。この壁の下を水は盛んな勢で落走してゐる。初めて柳又らしい壯觀に接して歡呼の聲を擧げて喜んだ。併しそのすぐ後で、先程の流木を渡してあつた處に架橋して對岸に移るべきであつた事に氣がついたが今更戻る氣がしない。休憩の後此川はロープを巻いて對岸に渡り先の様子を見に行く。左岸は狭い河原が續いてゐて當分行けさうである事が分つたので、早速架橋作業に取りかゝつた。四五十間下つた處に架橋出來さうな處があつたので、其處と定めて、大きな流木を拾ひ架橋して見た。一旦は巧く架つたが、その上を此川が對岸から縛つて來る間に先の端を水中に落してしまつた。その際此川は危く激流に落ちる處であつたが突嗟にロープにつかまつて事なきを得た。お互に笑つてはゐたが、山のアクシデントは一瞬にして來り一瞬にして去る事を思へば餘りいゝ氣持がしなかつた。

そこで此處の架橋を中止して先刻の架橋點迄下る事にした。荷が重いので確かりした橋を作らねば通れないので二本の木をロープにしばりつけて安全な橋を作り上げた。渡橋を了へて左岸を二町程も溯るともう十一時を過ぎてゐた。架橋點をうつかり通り過ごした爲に三時間程無駄をしまつたのである。この附近で谷は思ひ切つ

て右へ迂回してゐる筈なのだが目にはさう見えなかつた。圖面を見ると、私共の今朝から歩いた距離はまだ七八町にしかなつてゐないので、その足の抄らなさに三人で大笑ひし乍ら晝食を食べる事にした。陽は眞上から照りつけて奔流にまぶしく反射し、全谷は期らかな明るさに満ちてゐる。對岸の岩壁や緑林に見惚れ乍ら、今朝釣つた鱒を焼いて素晴らしく美味しい晝食を濟まし、早くも谷の氣分を満喫した。

對岸の壁は斷續してゐたが絶えず行き詰りがあるし、徒歩點もないので午後は左岸許りを行つた。左岸は壁續きであるが草付きが多いので、骨は折れても通れない事はなかつた。二十間程河原を行つては一町も草をへづり、下れば又登るといふ具合で、汗にまみれて草につかまつて行つたが、苦しくても時間が掛つても通れないよりは有難い。途中河原で休んでゐると、空罐にみゝずを入れてあるのが見當り、みゝずはまだ生きてゐた。鱒釣りは此處迄來て引き返したらしくその先には足跡がなかつた。余程慣れた鱒釣りでなければこんな處迄入り込む筈はないので、誰だらうかと人夫達は訝つてゐた。午後三時頃草付から降りて見ると、行く先の壁は高くなつて直立し木も生えてゐないやうな惡場となつた。溪流は逆光を受けて金龍の躍るやうな盛んな景觀をなしてゐた。そこで右岸はと見遣ると、壁はなく廣々とした河原で、何本かの川楊が煙のやうな柔かい姿で立つてゐた。そして行き詰りから十數歩戻るとどうにか徒歩出來るらしい所があつた。此川は勇敢に眞先に涉つて行つた。流れは中々激しくて、私の右の腋腹迄打ち上げ、幾度か足の不安定を感じた。一度は危ふく體勢が崩れやうとしたので瞬間に冷汗が出た。しかしこの邊でも八月下旬頃になれば易々と涉れるに違ひないと思つた。この徒歩點は、地形圖で見ると、大體左岸の壁の記號の終りの邊りであるやうに思はれた。併し左岸の壁は實際はもつと先迄續いてゐた。右岸の方は之に反して大體河原續きで行き先を遮られる所もなく、足は大いに涉つて十町餘りの間は忽ちに

進む事が出来た。陽は山影に隠れ始めて、漸く涼しくなつた頃再び前面に兩岸共岸壁が迫つて来た。時計は四時を指してゐる。それでも今朝合流點出發以來どうにか一里餘りを來た譯である。



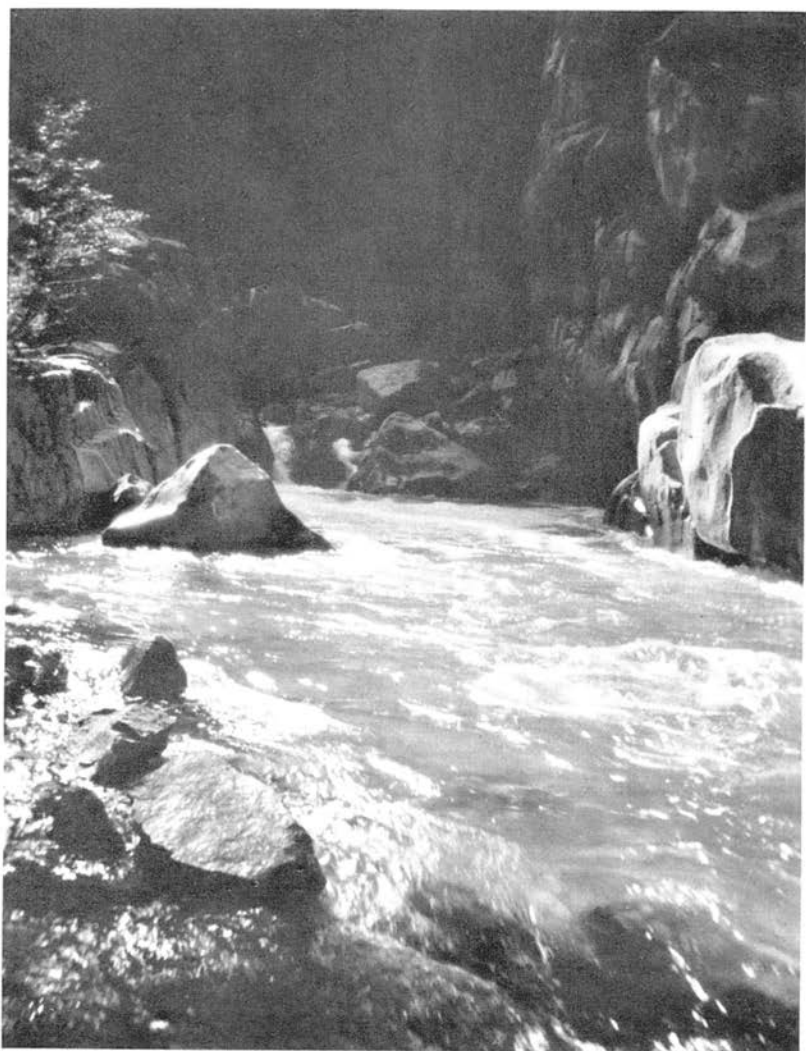
カシナギ深層谷落口

てその先には、左岸の岩影から大きな流れが一枚岩の上を滑り落ち乍ら瀑布となつて本流にかゝつてゐる。之はカシナギ深層谷の落口であつた。流石にこの附近は谷に活氣が満ちて全谷はち切れさうな勢が漲つてゐるやうに思はれた。柳又谷はこの落口に到つて最も豪壯な景觀を展開し始めるらしい。私共は感歎の聲を上げて磨き上げたやうな麗岩を眺め、華々しい溪流の狂亂に見入つてゐた。カシナギ深層谷は暗い壁の間から落走して來てゐるが、數十間にして岩壁の影に曲り、その先はどのやうになつてゐるのか知る由もなく、只左側の奥に高いガレの下つてゐるのが見上られた。如何にも物凄さうな谷で水量は可なり多い。ふと足許の淵を見ると、渦巻く激しい流れの中に大きな鯉の群が浮き上つては沈み、沈んでは浮き上つて居た。三人は顔を見合せてにつこり笑ひ、

早速糸を取り出して釣りにかゝつた。十分許りにして忽ち一尺足らずのを一匹釣り上げたのでそれに勢を得て熱心に糸を流してゐると、一尺二三寸もあるやうな大きな奴が悠々と水上に浮んで、殆んど動かないで鰭を動かしてゐる。此奴を引き掛けやうとして針を流してゐる中にとろ／＼此川の針に食ひついた。慎重に淺瀬に流して来て、さて引き上げやうとしてぐいと竿を上げると水上一尺程迄上つたと思つた瞬間、びちりと一跳ね跳ねて糸を切り忽ち流れの中へ潜つて行つた。此川は竿を振り上げた儘、大きな目をむき口を開けて、水を睨んだ儘で一分間程も物さへ言はなかつたのは余程口惜しかつたのであらう。鰻に氣を取られて時間の經つのを忘れてゐるうちに六時になつた。ともかくも泊り場を探さねばならぬので慌てゝ出發した。柳又には鰻が少ないのか、それ共鰻が利巧なのか、昨年大井川の東俣で七十何匹も釣り上げたのに比べて今夏は、全く不漁も甚だしいと思つた。一寸行くと、兩側を巨岩に取り巻かれた砂場があり、絶好のキャンプ場なので此處を今宵の宿と決めて天幕を張つた。夕方は相當に雲も出たが夜が更けるとすつかり晴れ上つて、狭い谷から見上げた空は星で一杯であつた。此處で雨に降られたら實際閉口せねばならぬので、有難い事だと思ひながら、鞆鞆と響く瀧津瀬の音を聞いてゐるとその中に何時しか夢路に入つて居た。

オウレン谷に至る

八月八日、晴。此川が昨日大きな鰻に針を取られたのが口惜しいので夕暮に一回、今朝又一回行つて、何としても物にしようとして一生懸命になつてゐたが結局針を三本取られ損で歸つて来て、あの鰻もさぞ口が痛い事だらうと負惜しみを言つてゐた。出發の用意をしてゐる時私は誤つて味噌を砂の上へ引つくり返したので、これにはす



カシナギ深層谷落口上流

探本繁松

つかりへこたれてしまつた。仕方がないので洗つて食べる事にして砂だらけの味噌を持つて出掛けねばならなかつた。河原は直ちに盡きて壁となつたので藪へ入り、段丘状の壁の上へ出て先の様子を見る。この附近は兩岸共數百尺の高壁となつて、全く通過不能のやうに見えるが、不思議にも我等の立つてゐる段丘は、壁の中頃にあつてずつと先迄續いてゐるらしい。荷を下してへつゝいて行つて見ると木に鈍が入つてゐた。これは電氣局が測量した時通過したものに違ひないと思つて、尙少し上り進むと急斜面の草付となり、その草付にも十分な足場があつて一町程の割れ谷へ出られさうである。割れ谷の先の壁は一枚岩が高く立つて、それを廻るとすれば余程廻りをせねばならぬらしいが、一先づ割れ谷を下つて見て谷の様子を見る事にして、先づその割れ谷迄行けるかどうかを瀧林が見に行つた。

暫くして下の方からオーイといふ聲が聞えて、もう彼は流の傍に立つてゐる。「どうだい」と聞くと「大丈夫行けさうだ」と言ふので引返して荷を取りに行く。荷を置いた處から少し下つて下を眺めると、カシナギ深層谷の上でぐんと左へ曲つた流れは一町足らず先で又急角度で右へ廻つてゐる。兩岸の壁の間は四五間位、流れは濤となるかと思へば又急になき落ちて、誠に變化が劇しい。

荷を脊負つて草付をへつり割れ谷へと下つて行く。割れ谷から本流へ下つて見ると、行く先も亦仰げば高い、壁又壁の連続で、暗い岩影から奔落した水は谷一杯に擴がつて深い濤をなし、今しも森影からさしこんで來た朝日を水面に受けてきら／＼と輝き乍ら流れて來る。それが私共の前で急に左折し數尺の瀑布となつて急落し、真正面の眞白に磨かれた花崗岩の大壁に殆んど直角にぶつかると、猛烈な勢で白泡を飛ばして沸き返り、左へ迂回して盛んな泡哮を續けて落ちて行く。何とも言ひやうのない壯觀である。見上げれば對岸の岩壁の上高く、ね

すこの大木が亭々と立つて空を被つてゐるさまは黒部なればこそといふ深翠な趣きである。少し落ちつきのある斜面には栴や澤ぐるみの大木が森閑として静まり返つて密生してゐる。これを上から見下した景觀と言ひ今又谷底にあつて見上げる風光と言ひ、それは全く想像を超へ因襲を絶して、魂に迫る風景で、谷を愛し谷を禮讃する我等に取つては眞に歡喜の極致である。今

こそ私は久しき憧れに夢に迄見た柳又の深谷の只中にあるのだ。私は驚異の眼を打ち開き時の經つのも忘れて、谷の氣分に思ふ儘に酔つてゐた。

さて私共は如何にして前進すべきであらうか。出来るならば上を廻りたくないと思つたので何とかして瀧の左端を涉り越す事を考へた。そこで人夫達はどんどん瀧の中へ石を投げ込んで、その上へ大石を一つ轉がし落したので大分浅くなつ



カシナギ深層谷落口上流

たらしい。瀧林が入つて見ると股迄しか水に浸らない。そこで向ふの岩に登り先の様子を見に行つたがすぐ引き返して「とても面白い所ばかりだ」と言つた。早速先へ行つて見ると、洞穴のやうになつた岩の間から躍り出て來た水は白龍の踊り狂ふが如くに奔躍し、鳴り響いて、私等の見てゐた瀧へ落ちてゐるのであつた。その上は又

「く」の字形に谷が曲つてもう先の模様が知れない。草付から木立へ入つて七八十尺ばかり登ると、先に行つた此川がほうと感歎の聲を放つてゐるので慌てゝ行つて見ると、此處にも亦絶妙な天工を見せて柳又谷絶景のクライマックスを思はせた。此處は極度に谷幅が迫つて僅かに二間許りとなり、兩岸の直立した高い岩壁の上には枝振りシヅメのよい柳の木が立ち並んで流れの上を被つてゐる。左から折れ曲つて出て來た溪流は先づその曲り目で一條の小瀧となつて落ち、それが直ちに二段三段四段と繼續して落ちて來る。木立を洩れて來る日の光が銀鱗のやうに水面に落ちて輝く様は誠に言葉絶した美しさである。私は此處に腰を下して又もゆつくり眺め入つた。人夫達はここに名を付けねばならぬと騒いでゐたので思ひ付く儘に飛龍溪ヒリウシキと名付けて置いた。

後で分つた事であるが、カシナギ深層谷からカシナギ谷迄の間は、柳又中での最も高潮した景觀の集りであつた。そしてこの附近は柳又谷の下廊下と呼ばれるべき所であらう。廊下としては壁の続き方にいささか不足があるかも知れないが、それなればこそ何時も水邊近くで豪壯な流を賞し得るのである。僅か半里餘りの間であるが森林と壁と流れと三つ揃つて味はへる完全な溪谷として申分がないと思ふ。

飛龍溪の先には小さな割れ谷があつて、此處は思ひ掛けない氣味の悪い惡場であつた。短かい間だがロープを頼つて恐る恐る通過した。此處を通り過ぎると先はもう大した惡場がないらしいので、大きなしなの木の下に荷を下して休んだ。そしてまだ少し早いが晝食を食べた。カシナギ谷近くで河原へ下り、芽の生へた斜面の中を行くとカシナギ谷落口の下に出た。カシナギ谷は押し出しの谷で、幅が廣く、流れは急な斜面をどん／＼落ちて來てゐるが谷が開けてゐるので見通しがよく、悪い澤のやうには思はれない。水量はカシナギ深層谷に較べると遙かに少ないのも當然であらう。落口の上の本流は、急に水量の少なくなつた氣持で、流れも緩かになり、川幅は

左程廣くはないが岸には川楊が立つて稍々のんびりした感じを味ふ事が出来る。もう本當の豪壯な所は通り越したやうな氣がしてならなかつた。併し先はまだ五六町の間岩壁が続いてゐた。壁の高さが低いので上を廻つても大した苦勞はないらしいが、此處の花崗岩の岩壁は不思議に相當な手懸りも足懸りもあつて岩壁ばかり傳つて行



カシナギ谷落口下流

く事が出来た。この位の壁だと岩傳ひといふものは如何にも面白いものだといふ氣がする。岩壁を通り抜けてほつとした時は十一時半であつた。もう廣河原の一端に出たらしい。

川は二つに分れて右の流れは大きく、左の方は僅かな水が流れてゐて中央は川中島になつて川楊が立つてゐる。私達は歩き易い儘に左の小流を傳つて溯つた。

やがて前面が豁然として開けて廣河原へ出た。小流には斷層のやうになつた花崗

岩の小斷落があつて、水が美しい幅廣い小瀧を造つてゐる。そして氣をつけて見ると此處は花崗岩の露出の終端であるらしい。この上には御影石の片鱗だに落ちてゐなくて、片麻岩、石英斑岩、蛇紋岩等の散らばつてゐる河原である。赤石斑岩のやうな紅色の石も發見された。この廣河原は柳又及び北又のみならず黒雅川での最も廣い

河原で、廣い所は七八町もあらうかと思はれる位廣大に開けてゐて、長さは十數町に及んでゐる。晴れた日には夕日^{ユツヒ}ヶ原^{ハラ}(朝日岳の支尾根二〇九八米)の頂上位は見えはしないかと思はれる程見通しもきくらしいが、生憎く山頂は何處も雲が深い。四方の山々はどちらを見ても鬱蒼とした潤葉樹が茂つてゐるので、その木の大きさから見て、紅葉の頃の晴れた日には素晴らしい眺めであらうと思はれる。生憎くと今日の光線では左程美はしい眺めと思へなかつたのは河原が廣過ぎるからであらうか。或は又森林の濃密さが足りないからであらうか。流れは左岸の山際を流れてゐるので廣河原の廣さは右岸だけの廣さである。右岸の山麓は濕地の草原で丈高い草が茂り、ヲル谷の流れがその間を流れ廻つてゐて、水邊には見事に大きな蕨が生へ茂つてゐる。そして澤くるみ操等の巨幹がちらほらと立つてゐて、その枝葉が暗く空を被うてゐる。

ヲル谷の下の小屋を探したところ大きな枯木の傍に發見された。電氣局で造つた小屋は已でに倒壊してその残骸を横たへてゐた。この小屋場は随分古いもので、昔から山麓山崎村邊の獵師の根據地であつた。長年の間に獵師、ぜんまい取り、藥草取り等の數多い人々が此處に泊り明かしたであらう事が憶はれた。そして中には生きて歸らなかつた人もあつたらしく、ヲル谷の右にはシビト谷といふ名の谷もあつて、何かしら傷ましい物語がありさうである。今の小屋は極めて粗末な堀立小屋であるが、この小屋は倒れても又獵師等が立てるであらうから、先づなくなる時はあるまいと思はれるが、保證の限りではない。

この小屋を柳又小屋といふと、小杉復堂先生の大蓮華山遊記には書いてある。復堂先生は越中の人で、明治二十八年八月此處を通過して白馬岳に登られた。恐らく越中側から白馬岳に登つた最初の登山家であらうと思ふ。その後も明治の末年頃迄に此處を通つて白馬岳に登つた人が數名あるらしいが、二十數年この方最早誰一人登山

者の此處を通つて登つた者はないやうである。大正六年八月初めに會員鈴木益三氏が逆に白馬岳からこの廣河原へ清水、猫又の尾根を経て、廣河原の下へ下つたのが唯一の下降記録であるがその際は已でに道の跡方もなかつたやうである。小杉先生を初め古い登山者は此處で柳又を横切り、猫又山の尾根へかゝり清水岳シヨウスイを迂回して白馬岳へ登つたのであつた。今日では越中側から白馬へ登ると言へば、祖母谷ハバヤ温泉ニから登る事にきまつてゐるやうなものだが、昔は山崎村から此處を経て登つた外に、黒部側の登路はなかつたらしい。祖母谷からの登攀は無論小林區署の林道開墾後の事で、早くても日露戦争前後の事であらう。そして山崎村からどうしてこゝの經路を経て白馬岳へ登つたかを考へて見ると、初めて人間がこの深山へ入つた頃の事が偲ばれて如何にも面白い氣がする。近い點では朝日岳を経て行く方が遙かに近いに決つてゐるが、併し越道峠に立つて南方の空を見上げると先づ天空を突く壯嚴な高峰は清水岳の連峰である。朝日岳や雪倉岳は、イブリの山の影になつて全然見えない。誰であるか知らないが、その昔越道峠から清水の連峰を仰いだ人が、その崇高な姿に憧れてその山を目掛け、北又を越え柳又を涉つて猪又の尾根へ掛つたのであらうと思はれる。そしてそれが何時の間にか白馬への登山道となつた事も極めて自然の事と思はれるのである。此處は黒部の流れであり乍らその下流の内山ウチヤマや音澤オトザの人々が入らず、却つて小川の谷の人々が先に開拓してゐるのはどういふ譯であるか、これも昔は容易に通過する事が出来なかつたであらう黒雅川の險惡を思へば成程と合點のゆく事である。かういふ原始的の登路も、登山の盛んになつた今日かへつて顧る者のないといふ事は何となく怪しい氣がしてならない。今は全く藪が深くなつてしまつて恐らく鉦の跡も分らない位であらう。

然しそれはこの廣河原から先の尾根の事で、越道峠からこの廣河原迄は何しにか折々人が入るやうである。そ

これは無論登山者ではなく獵師とか山物取りとかであらう。登山者として二十數年來久し振りでこの道へ入つた人は、大正六年夏の鈴木氏一行の下降は別として、今年の八月下旬私の通過した後から柳又に入つた冠氏一人位のものであらうと私は思つてゐる。それ程にこの附近は登山界に於ては人跡稀な靜寂境である。

私共が小屋へ入つて見ると、確かに最近人の居た氣配があつて、河原にも足跡が印せられてゐた。何者だらうかと私共は訝かつた。山物を取る時季としては季節外れであり、獵師としては禁獵期であるからである。この地は海拔約七六〇米で、北又との合流點から二里餘りも距離があり、高さは二百五六十米も高い。電氣局が將來發電するとすれば此處で水を取り入れるさうで、合流點で落して約千尺の落差がつくと言つてゐるさうである。その時は水路は谷には沿はず横山の眞下を掘り抜かれて行く事と思ふ。柳又の流れは合流點から此處迄、半島を巡る海岸線のやうに大迂回して來てゐるので、圖面で見ると實長よりは著るしく短かく見誤り易いのであるが、此處から上流は可なり長い間川の方向は眞東から眞西へ向つて流れてゐる。縣電發電の曉には柳又の下廊下の秘境も消滅する譯で、未だ一般には未知の境であるだけに一層残り惜しい事である。

柳又の名はこの河原に楊の木が多い事から付けられたのであらう。この廣河原に居ると全く安易な氣持で、人里にゐるやうな氣分である。私共は此處でゆつくり手足を伸ばして休み晝飯を炊いて食つた。そしてもうこの先にはさう悪い所はなからうと思はれてならなかつた。何しろ水が少くなるからと私は考へたが然しそれは私の考へ違ひであつた。これから先の谷は岩質は脆くなるし、決して歩きよい所ばかりではなかつた。此處でゆつくり休み過ぎたので出掛けたのは三時に近かつた。廣河原の行き詰りで谷は急に右折して、左岸から下つてゐる尾根は谷の曲り目へ長い出鼻となつて伸びてゐる。眞正面には水の落ちてゐる處などもあつて、一寸見た處谷は何方へ

曲つてゐるのか見分け兼ねる位であつた。左から相當大きな澤が落ちてゐる。この澤はヨモギ谷といふ澤に當らしい。併し或ひはこの谷はシビト谷であるかも知れない。どうした譯かこの附近で私はぼんやりしてゐて、二つの谷をはつきり見別ける事が出来なかつた。この澤この谷に沿つて古い道が一本上つてゐるので、多分柳又右岸にあつた舊道だと思ひそれについて登つた。道は可成り登つてから右へ廻り、本流へ突き出してゐる尾根を越えてゐた。尾根を越えると私共はすぐ道と別れて河原へ下つた。下りた處の河原は可なり廣かつたが間もなく岩壁にぶつかつてしまつた。見た處何となく氣味の悪い岩壁であつたし、折柄盛んに夕立が來たので、三人共誰言ふとなくも一度道へ上らうといふ事になつた。この岩壁では鈴木氏一行も冠氏一行も難儀せられたやうであつた。道へ登つて見ると可なり高い所迄どん／＼上りが續いてゐる。人夫は此處を登り乍ら初めて山登りらしい氣分がすると言つて笑つてゐた。この上りは途中一休憩を要した位の登りで、やがて立木の少い峠のやうな所迄登つてそれから先は又下りであつた。此處は水面から二百尺以上も高い處なので、かなり壁は高いものである事が知れた。

道は除々に下つて大崩れを横切つた。その先は再び河岸を行つた。別に大した悪い所もなかつたが絶えず岩を上つたり下つたりして行かねばならない。その上夕立が再び來て今度はどしや降りなので、莫産を被つて雨の止むのを待つたが中々はれなかつた。續いて降れば水が増えて來さうだ！ 日が暮れかゝつてゐるが一向泊り場らしい所も見當らないので、やゝ黯然とした氣持に襲はれた。人夫の一人は「泊り場所を探さねばならぬから雨がはれんでも行かう」と言ひ出したので、雨中を構はず岩を傳つて行つた。やがて大きな瀧の下へ出た。これは今迄にない本格的な瀧で、瀧の中から岩が突き出てゐて瀧が二つに別れて落ちてゐるが、水量が多いので甚だ勢がさか



オウレン谷落口下流の鱒留瀧

塚本繁松

んで、邊りの空氣を鳴り響かせ乍ら落ちてゐる。雨は霽れたが夕暗が迫つてゐるので遺憾乍らゆつくり見てゐる隙がない。明朝再び見に来る事にして瀧を越え泊り場を探した。瀧を越えて間もなくオウレン谷が落ち込んで居た。落合の眞正面に砂利の平があつた。止むを得なければ其處で泊る事にして尙先きへ行くと、谷は左へ大迂回して壁が迫り夕暗の中を物凄しい流が咆哮してゐた。そこですぐ引き返し天幕を張つた。今日の夕方の數時間は實に慌たゞしいものだつたが、夕食の済む頃には空がすつきりと晴れ上つて、星が満天に輝き始めた。漸く氣分も落ちついてこの夜も深い谷間に平和の一夜を過す事が出来た。深夜目をさますと、天幕に月影が映つてゐた。

ナル谷乗越澤迄

八月九日、晴。オウレン谷は小瀧の連続となつて本流に落ちてゐるが思つたより水が少なく、懸谷として立派な瀧のある事を想像してゐたのに、見た所瀧はなささうである。今迄あつた左岸の三つの谷は柳又の支流としては最大のものであるが、何れも豫想外に水の少いのは、長さの割に水を集める面積が少ないからであらう。かくして本流の水は何處迄行つても容易に少くならない。オウレン谷は地形圖にはオレントメン谷となつてゐるが、そんな外國語のやうな變な名前にどうして間違へられたものであらうか。この谷は藥草わうれんが多いためにオウレン谷といふ名がついたのださうである。落口の下の瀧は柳又の鱗留の瀧ださうで、この瀧の事をオウレンドメの瀧と言ふらしい。それを誤り聞いてこの谷をオレントメン谷と記したらしい。朝食後カメラを携へて再び瀧を見に出掛ける。この瀧は瀧壺も大きくて、それに水の勢が激しいので中々立派で、力強い感じが谷一杯に漲つてゐる。併しこれを北又の魚止瀧に較べては神々しい氣品が大いに不足してゐるのは惜しいものである。その

上、瀧の縁を自由に上り下り出来るのも、この瀧の尊嚴を傷つけてゐるやうである。この瀧と北又谷魚止の瀧との氣品の相違は、やがて兩方の谷全體の氣品の相違を彷彿してゐるのでないかと思はれた。何とか不足を言つて見たものの瀧の落ちる壯んな有様を眺めてゐると時間の經つのも忘れて仕舞ふ。瀧の前に美しい虹がかゝつてゐるのは、瀧のしぶきが絶えず空中に發散して造つてゐるのである。

瀧から歸りがけに瀧林が慌てて馳け出したので何事かと思つて見ると、焚火の傍に乾してあつた彼の背負ひ子に火がついてゐたのであつた。今日は出發が後れて出掛けたのは九時近くであつた。寫真を取る都合などもあつて谷歩きは多く朝の出發が後れ勝ちになる。そしていつも泊り場へ着く時間が晚いのだから人夫としては有難くないわけである。谷の曲り目へ行つて見ると、昨夕は物凄しい廊下に見えた所も大した壁續きではなく案外樂に越す事が出来た。この附近の溪流は美しい。岩傳ひをしたり、一寸ばかり藪へ入つたりして絶えず美しい流れを眺め乍ら行くと、やがて前面に草付が現れ、岩場はなくなつて谷が開け、河原ばかりを行けるやうになつた。オウレン谷附近は柳又の中流では景觀の整つた處であり、一つの景勝を形造つてゐると言へるであらう。廊下といふには谷が廣く壁の續きはないが、それでも中廊下と言へば言へない事もなからう。地形圖には岩場の記號だけあつて壁の記號がないので、うっかりするとこの附近は大變歩き易い所のやうに思ひ違ひするが、決してそれ程歩き易い所ではなかつた。

河原にはいはよもぎが咲いてゐる。前面を見上げると、廣河原以來初めて大きく眼界が開け、大きな高い山が見えてゐる。それは雪倉岳であつた。初めて氣高い高山の姿に接して言ひやうのない嬉しさが湧いて来る。左からミヅ谷の落ち合ふ邊りは谷は開けてゐるが流れは急勾配でどん／＼流れるのと、河原に轉つてゐる岩石が大きい

いので中々豪壯な眺めであつた。高山の崇高な姿と水態の美とを共に味はへるこの附近は愉快な晴々した處である。岩場を出てからゼンマイ谷迄は、今迄にない歩き易い所だったので非常に足が捗つた。ゼンマイ谷へ着いたのは十一時頃であつた。地形圖にはゼンマイ谷と赤男谷アカトコグニと合流してから本流に落ちてゐるやうに書いてあるので、どの邊りで落ち合つてゐるか見たいと思つて少し登つて見たが、一向それらしい様子が見えないので不思議に思つて引き返した。それに二つの谷が合流した水としては、餘りに水量が少なすぎるのがをかしいと思はれてならなかつた。ゼンマイ谷の落口の上の所は少し悪いので山を廻らねばならない。そこで先づ腹を詰める事にした。先程から河原に二人の人の足跡を認めたが此處で山を廻つた跡も見える。廣河原の小屋の所にあつた足跡と同一人に相違ないが、何者だらうといよゝ不審の念が湧いて来る。大汗をかいて山を廻つて河原へ下りて見ると、其處には思ひがけぬ大きな流れが右岸から落ちてゐる。水量はゼンマイ谷より反つて多い。ゼンマイ谷から先一里足らずの間にササゴ又迄大きな谷はない筈なのに、これは一體どうした譯か、して見れば先程の谷はゼンマイ谷ではなかつたのかと、何が何だか分らなくなつてしまつた。これは大變な事になつたものだとよく地形圖を調べて見ると、要するにゼンマイ谷と赤男谷とは落口が別々なのに、地形圖には合流してから落ちるやうに誤り記してあるのだと解釋してやつと安心した。この附近からは朝日岳が頗る間近く仰がれるので、そのすぐ下を私達が通つてゐた事に氣がついて喫驚した。

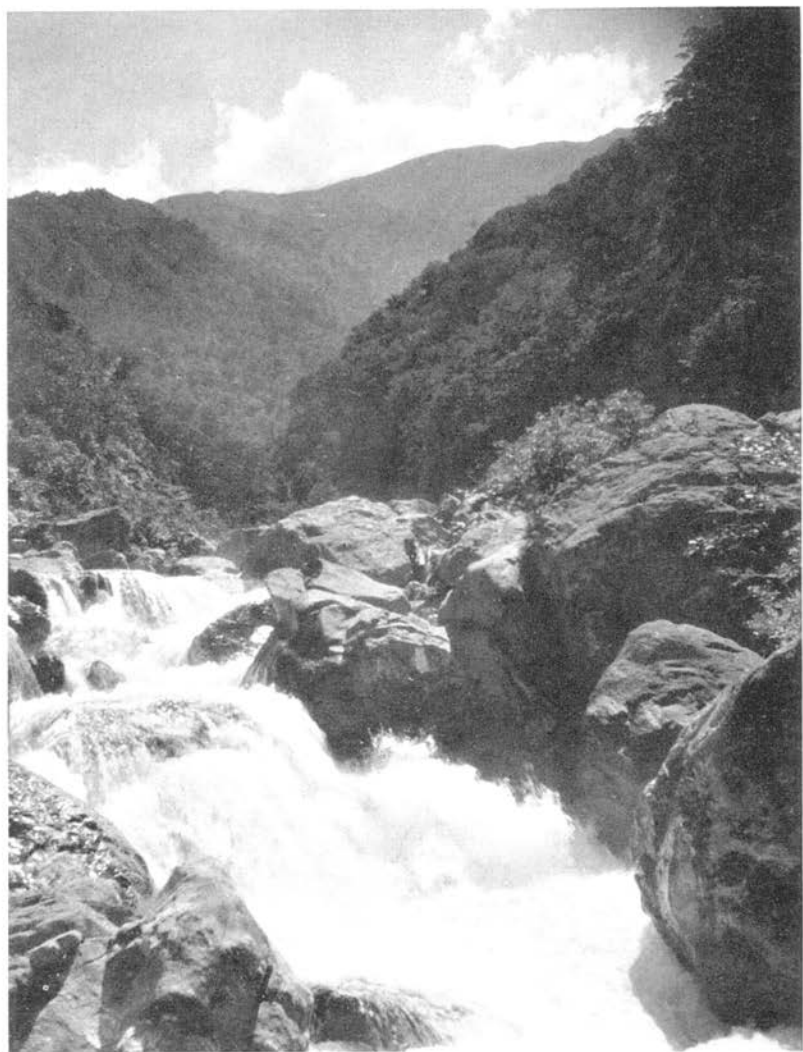
赤男谷から先は蛇紋岩の崩壊したものが多く、岩質は脆弱で谷全體何となく荒れた感じである。大した大廻りもないけれども河原ばかりも行けず、二時間足らず上つたり下つたりして行くと下ササゴシモ又の落口に出た。この間左岸は岩壁が高く、相當立派な急斜面が見られ、ねずこの枝振のいゝのが流れに臨んでゐたり、赤や黄の花が岩

壁高い所に咲いてゐるのなどがあつて風景に變化はあつたが、何しろ最早水も少なく、それに右岸一帯に崩れが続き、平同様の緩斜面で、空が透いて見え、ちぐはぐの調和の取れない風景であつた。それでゐて水が少くなつたとはいへ、徒渉出来さうな處はあまり多くなかつた。上ササゴ又は緩斜面の灌木の中から流れ出てゐて一つの纏つた谷といふ感じのしない谷である。途中上流を見上げると鉢ヶ岳の一角が仰がれ、そこから右へ下る尾根は柳又の上へ来て、急角度で谷へなぎ落ちてゐるのが見えたので、柳又谷の上廊下の近付いた事が分つた。

上ササゴ又の落口から上流の方を見やると、山容は只ならぬ様子を見せてゐる。兩岸の壁は急角度に立つて非常に高く、ねずこらしい立木が黒く濃く茂つて居つて、その脅かすやうな岩壁の様子では到底廊下の中は行けさうに見えず、さうかと言つて上を廻る事も不可能のやうである。いよ／＼地形圖にある大壁のある所へ來たのだと思つた。そして豫想してゐたよりは遙かに物凄いな山容に、行き先に何となく暗い不安が纏はり始めた。

ともかくも廊下の入口の様子を見やうと思つて、山を廻り乍ら廊下へ近付いて行つた。廊下の手前の崩れの上へ出た時、對岸の崩れの上に二人の男の歩いてゐるのを見て、私は驚いて立ち止まつた。先方でも氣がついたらしく、立ち止つたので、こちらから合圖をすると先方でも應へた。そして双眼鏡で頻りにこちらを見てゐる。人夫は廊下の様子を探り旁々對岸の人の何者であるかを見に行つた。人夫の川岸へ下るのを見て先方の人は崖の端へ馳せて来て「其處からは行けませんよ」と注意してくれた。そのうちに人夫達は徒渉して左岸へ移り、上へ登つて一人の男と話をしてゐる。今一人の男は素早く二挺の鐵砲を持つて何處かへ姿を隠してしまつた。密獵者だなあと氣がついた。同時に私達の見た足跡はこの人達のものに違ひないのを知つた。

時計は五時過ぎた。人夫は對岸から廊下の様子を見に行つたらしく中々歸つて來ない。その中に廊下の端の急



水谷附近より雪倉岳を望む

塚本繁松

斜面の崩れの上に姿を現はし、それを藪地に下つて歸つて來た。人夫の話では水際はとても行けさうな模様が見えないが、ともかく今夜この附近で泊つて明朝、方法を考へやうと言ふ。そこで左岸へ移る事にした。此處でもまだ水量は可なり多くて、流れの緩い所でも徒渉の出來る見込みもない。廊下の入口は物凄く兩岸が迫つて已でにうす暗くなつてゐる。此處の徒渉をどうして人夫達が易々へ行つたのかと思つて行つて見ると、對岸に大きな檜の木があつてそれが流れを被うてゐて、その枝に流木が一本引つかゝつてゐるのを利用してうまく涉つてゐたのであつた。左岸の崩れの上へ出て見ると、其處は薄氣味悪い程に地面がぶく／＼してゐて、一雨來れば抜けさうな處なので到底泊る氣がしなかつたので、その上の緩斜面の藪の中の、小流れの畔りに泊り場所を求めた。餘りいゝ所ではなかつたが木を伐り拂つて一夜の宿とした。夕暮が迫る頃は朝日岳方面は次第に霧がはれ上り、夕日ヶ原、前朝日岳、朝日岳が手に取るやうに間近く老大に見えて、今更乍らその重厚な大山容に崇高の念を覺えた。今日通つて來た道筋の谷々は、各々その山懐に深く喰込んで溪谷を形造つてゐる状態も、よく觀察する事が出來た。到着が晚かつたのと、藪の中の焚木は生木ばかりで火のつきが悪かつたので、夕飯を食べたのは九時過ぎてゐた。それでも今日は夕立もなく夜もよく晴れてゐたので、天幕は張らずにすっぽり頭から被つて寝込んだ。この夜は時鳥が頻りに樹間に啼いて夢を破られ勝ちであつた。深更になつて出た下弦の月は木の葉の間を洩れ來つて、靜寂な夜を一層寂しいものにしてゐた。

私共の泊つた小溪流のある緩斜面を、假に便宜上「ナル谷乗越澤」と呼んで置く。

猫の躍り場

八月十日。今朝もよく晴れて、柳又谷右岸の山々はその全容を現はし、柳又に向ふ斜面の立木が一本々々數へられる程に空が澄んでゐる。だが行手に難關を控へてゐるので眺望も、そこ／＼にして廊下の入口に下つた。見ると壁は直立して流れは深い瀧をなし、口元から四五十間奥には立派な瀧が落ちてゐてその先で谷は右へ曲り、そして雪溪となつてゐる。廊下の中はまだ朝日の光も射しこまず、幽暗な氣に心も壓せられさうである。右岸を見上げて見ると壁はとても高く、壁の上を廻る事さへ不可能のやうである。左岸は右岸程に壁は高くないけれども二三百尺はあつて、當分は谷を行けさうな見込が全然無ささうである。少し上へ登つて奥の方を窺ふと一旦雪溪となつた流れは、その先で又雪溪が落ちてゐるので、どうか水面へ下るにしても先へ進む事が出来ない。仕方がないので壁の上を、下り口を探ね乍ら行く事にした。私はこの廊下の入口の瀧を廊下の瀧と命名した。

そこで一旦露營地へ引き返して荷を纏め八時半頃出發した。壁の上の藪は深く荷が引つかゝり、歩行は容易でなかつた。水面を見失はないやうに、あちこちから覗き込み乍ら行くと六兵衛谷落口の眞正面へ出た。六兵衛谷にも本流にも陽の光が十分當つてゐるので、廊下の中も今度は非常に明るい感じである。六兵衛谷は兩岸が開けてゐるので(雪崩が激しく木が生へぬらしい)、日が當つてゐなくても暗い谷ではないらしいが、殆んど瀑の連続で到底上り下りの出来さうにない谷である。落口は低い瀑となつて奔落してゐるのが見えたが、この附近の本流を十分見通す事は出来なかつた。そしてまだ／＼容易に下り口がありさうには見えないので、尾根の上を藪を分ち乍ら行つた。この尾根の最高點へ着いたのは十一時半であつた。僅か半里餘りの處を三時間費した譯であ

る。此處は地形圖の一六六〇米の標高を記してある所に當る譯だが、六兵衛谷からは可なり離れて居り、ナル谷落口の上僅か五六十米位しか高い場所に過ぎないので、地形圖に間違ひがあるやうに思はれた。この頭には鉞が入つてゐた。此處は獵師の重要な展望臺であるらしい。昨夜の露營地から緩斜面を上つて此處の先の鞍部を越すナ



六 兵 衛 谷

ル谷乗越の道筋は、この附近には珍らしいよい平で、廊下の入口から乗越迄十分餘りで通過出来やうと思ふ位である。

従つて特に六兵衛谷の落口や廊下の様子を見たくなかつたら、何も苦しんで私等のやうに藪の中を歩く必要はない譯である。この乗越附近を地形圖には草地にしてあるが、實際は可なり灌木様のものが茂つてゐる。霧のはれ間に此處から仰いだ前蓮華山（白馬旭岳）は素晴しく立派アイレグサでそして近かつたが、こう思ひがけぬ程

谷が悪く、足が捗らなくては尙幾日かゝつて水源迄行けるのか見當がつかかなかつた。晝飯を済して急斜面の崩れを下り、ナル谷へ下つて見た。最早水源に近い所だからこの谷の落口は瀧ではあるまいとは私の豫想であつたが、下つて見ると落口は二段の大瀧となつてゐて本流の雪溪の下へ落ちこんでゐる。兩岸は削つたやうに立つて

ゐるので到底下りやうはなく、その上、落口のすぐ上の本流には二つの大瀧があつて、それを越える方法もないやうである。これには全くがっかりしたが、人夫の顔にもあり／＼と不安の色が讀まれた。ナル谷右岸の草地を熊の踏み倒した跡について登つて、本流の様子を探つて見ると、瀧の上は雪溪が続いてゐるが二町程で谷が二つに分れ、本流は左折して物凄く高壁の間に隠れてゐるので、その先の様子は全然分らない。右から下つてゐる支流は岩壁の中を急峻な雪溪を垂れ下げて、上の方は霧の中に隠れてゐる。この附近の柳又は言ひやうのない凄惨の氣に満ちてゐた。人夫達はこんな悪い谷は見た事がないと言つて、流石黒部育ちの山男達も度膽を抜かれて顔を見合してゐるばかりだつた。

ともかくも雪溪へ下る所を探して草付をへつらうと私は主張したが、人夫は中々應と答へて呉れない。どうしても一度空身で様子を見て來なくては、危険で荷を脊負つては行けないと言ふ。そして何處迄行けば下り場所があるかこの壁の様子では見當がつかない、恐らく二町程先の高い壁の上を大廻りして越さねば下り口がないのではなからうか、それにしても今何時だと瀧林が言ふ。時計はもう三時に近い。それでは今日中に雪溪へ下れるかどうか疑問だ。一先づこの附近で泊る事にして、泊り場を定めた上で、夕方迄に壁の様子を十分調べやう。これが瀧林の意見である。私も賛成せざるを得なかつた。そして何處に泊らうかと邊りを見たが一向よい泊場所がなかつた。そのうちに先程から一人で考へ込でゐた此川は、ナル谷の雪溪を登つて清水の平へ行き、其處から下つて見る方が安全でそして早道ではあるまいかと言ひ出した。それは困ると私は思つたが、此川はすぐに、「どうか一べん自分の意見を通さしてくれ。先日からあなたの意見通りに、無理をしても通つて來たのだから」と言つた。彼はこの悪場の草付が不安でならないらしいのである。私も困つた。人夫の不安がる處を無理に行けとは中々言

ひ難い。それに考へて見れば、先程尾根から眺めたナル谷の雪溪は如何にもなだらかな美しい雪溪に見えた事を思ひ出した。そして猫又の平は又どんなに美しい所だらうか、思ひがけず其處へ行けるとすれば、今度の旅は思はぬ拾ひ物となる譯だなどと思つたのでいよ／＼ナル谷登りと決定した。

落口から三町程で雪溪となつた。所がこの谷は附近の急峻な谷計りの間にあつて、何と伸び／＼したなだらかな谷であつたらうか。美しい雪溪が何處迄も續いて、兩岸は今崩え出た計りの目も覺めるやうな新緑の草地である。草地には衣笠草が清楚な姿で點々と咲いてゐた。緊張した谷歩きの後ではあるし、私達はのんびりした氣持で邊りの風光を味ひ乍ら登つて行つた。この附近は余程熊の多い所と見えて草地は縦横に草が踏み倒されてゐるし、雪溪の上には熊の糞を何回となく見受けた。これは熊の谷といふのだらうと言つて笑つたが、後で山麓の古老に聞いて見ると、實際熊の多い谷であるが名前はナルダンと言ふのだと知つた。なるい谷（傾斜のゆるい谷）だからナルダンなんださうである。だから鳴谷なんかと書いても當らないわけである。昔獵師や藥草取りは柳又の悪場を避けて、ササゴ又から左岸へ移り、ナル谷の乗越を越えてこの谷を登つたものださうである。ササゴ又迄は道をつけてあつたし、そんな風にして通れば、柳又は通りにくいどころか實に面白い所に違ひない。昨日會つた密獵者もそれをやつて、この谷で熊か猿かを狙らつてゐたものに相違ないと思つた。

私達は非常に愉快な氣持で夕方猫又山へ着いた。この谷の上りに二時間餘りを費やした。猫又の平は素敵にいい所に違ひないと三人共思つてゐたので、愈々頂迄登ると、先を争ふやうに急いで裏側へ出て見た。案の通り此處は言ふに言はれぬ美しい仙境であつた。幾つも幾つも廣々とした平があつて、その平のお花畠は今満開である。中でも夕日を受けた白山小櫻の群落の美しさには三人共聲を揃へて感嘆の聲をあげた。彼等山男の喜びを見

よ。彼等は決して金を儲ける爲ばかりに山を歩くのではない。それよりも驚いた事は、劍岳が、非常に間近く、そして雲海の上に空高く突き立つてゐるのを仰いだ時だった。思はず頭の下るやうな壯嚴な姿で、それはどう見



ても高い高いものであつた。日本海上には眞紅な太い一線が爛々として流れてゐた。今しも陽が落ちやうとしてゐるのである。美しい夕焼のさした平を、私は寒さも忘れて神秘を尋ね美はしきものに酔つてさまざまひ歩いた。

色の夕の平又猫
割合に風が強いので、風當りの少ない處に天幕を張つた。夜は越中の平野に電灯の明滅するさまが美しかったが、空模様が少し變つたらしく星数は至つて少ない。私は天幕の中に横たはり乍ら、今日思ひがけず此處へ登つて來た運命を考へた。私はこの樂園を發見した事を無上に喜びこそすれ、少しも廻り道をした事を悔いる氣などはしなかつた。そして近頃は全く登山者から忘れられてしまつたこの平の運命を、人の世の盛衰の姿と比べて考へて見たりした。この平は猫の躍

り場といふ怪奇な名をもつてゐる。併しその躍り場の名さへ今は他に取られてしまつたのだ。近頃では、猫の躍

り場は祖母谷の夜澤（硫黄澤）の出合であつたり、清水の新道の不歸岳の上方であつたりしてゐる。猫の躍り場の傳説については遂に今日迄詳しく聞かして呉れる人はなかつたが、小杉先生の文中には次のやうな意味に書いてある。

或る時金色の毛をした大化け猫があらはれて、盛んに人を捕へて食つたので、藩では獵師に命じて殺さうとした。獵師が八方搜索して此處へ登つて來て見ると、それとも知らず化け猫はこの平で怪奇な踊を躍つて一人楽しんでゐた。（流石の化け猫もこの仙境ではすつかり氣を許してゐたものか。）狙ひ誤らず鐵砲で打つと、化け猫は凄い大きな目で恨めしさうに瞰みつけた。（それがぞつと腸にしみこんでその獵人が……といふ後日物語がつくのであらう。）そばへよつて見るとその化け猫の大きさは一丈餘りもあつたといふ。

八月十一日。朝、目を覺して見ると相當激しい風雨が天幕を叩きつけてゐた。併し此處でいくら大雨に降られなくても先づ心配はないので、むしろ一日の骨休めにいい位に考へて雨の音を聞いてゐた。そして昨日その儘柳又の奥へ進んでゐたら今頃はどんな處にどんな不安な思ひをしてゐたらうかと、此處へ登つた偶然を喜んだ。雨は一日中降つたり止んだりしてゐたので、すつかり御輿を据ゑてこの平の高山植物研究と洒落れた。特に珍らしいものも見當らなかつたが（又見當るわけもないが）既知未知のものを合せて五六十種類を數へる事が出來た。

八月十二日、雨後曇。朝は未だ雨が盛んに降つてゐたので、今日も亦滞在かと思つてゐると九時頃になつてやんだ。先づ黒部川の下流が見え初め、續いて毛勝連山が悠然として雲を抜いて現はれたので、時間の遅れた序に平一帯を又一巡して見た。カシナギ深層谷は幽深な深さを見せて靜まり返つて居り、左方の尾根は幾つも突起を起して出しの突坂山に終つてゐる。思ひついて見れば柳又左岸の大部分の谷はこの山から水源を發してゐるので、

柳又の旅をしてこの山を訪れて見る事は相當意義の深いものである事を知つた。猫又谷の霧のはれて行くのを見てみると、次から次と現れて来る山膚は如何にも廣大な範圍にわたつてゐるので、これは何といふ大きな谷かと驚いたが、霧がはれてよく見ると只それだけの谷で、別に支流といふ程のものも持たない單純な谷で、それが反つてこの谷を大きく見せてゐるのであつた。

白馬岳迄

午前十一時半頃になつて漸く猫又山を出發した。尾根に出てナル谷を見下して見ると、十町程下の雪溪の上に五六匹の動物が盛んに走り廻つてゐた。それは熊ではなく猿であるらしかつたが、此處は熊の歩き廻るのを見るのには屈竟な場所だと思つた。清水平迄の三〇〇米程の上りは可なり急峻で偃松も深く豫想よりはすいぶん時間がかかつた。途中ナル谷側の斜面に素晴らしい高嶺きんげうげの大群落を數ヶ所見た。清水の平へ着いたのは三時近くであつた。猫の躍り場からは急いで登つても三時間足らずかゝると思ふが、そのためにあの平が孤立してゐるのだと思ふと床しい氣がする。農商務省の三角點の所へ行つて、何處から下るか谷の様子を見やうと思つたが霧が深くても見えない。やがて霧がはれてハヤ谷を見下して見ると、身の毛のよだつやうな凄慘急峻な谷で、雪溪續きだが、下の方の様子がさつぱり分らない。ナル谷の優美に比べてこれは何といふ凄い谷だらうかとその對照の妙に驚いた。この谷を下つて見たい氣もしたが、人夫は、カンヂキを落してしまつたから、この谷は下る見込がないといふので斷念せねばならなかつた。さうなるとハヤ谷の右の谷を下るより外はないが、これはすぐ左折してゐるので先の様子を探る由もない。併しこの谷とやがて合流する前蓮華の手前を下つてゐる谷は、ナル

谷乗越からよく見えて、よい谷である事が分つてゐたので、こちらの谷も先づ大した事はないやうに思つた。私はこの谷の名を知る事が出来なかつたので假りに蓮華谷と呼んで置く。そして便宜上私共の下らうとする谷を西の谷、前蓮華山から来る谷を東の谷として置かう。

さて下らうとして時計を見るともう四時を過ぎてゐる。谷へ下るのには時間が遅過ぎるので今日は清水平泊りとした。ナル谷迄來てからの足の捗らなさは甚だしいが止むを得ない。陸地測量部の三角點へ登つて見ると祖母谷の西の谷がよく見えて、かつて助七と二人で夜澤の出合附近で非常な困難をした事などが思ひ出された。祖母谷温泉の湯煙の上つてゐるのもすぐ其處のやうに見下された。夕方平一帯を散歩して見ると、この平は實にいい平である事をしみじみ感じた。今は原の中を道が横切つてゐるので何となく中途半端に思はれるが、道のなかつた時代はどんなによい所だつたかと昔が思ひ返された。この美しい高原にも、露營の跡などは一つも見當らない。登山者の多くはこの平の美しさを十分に賞する暇もなく慌しく通つてしまふのであらう。この平で美しいものは高嶺うすゆき草の高雅な姿である。この平附近程この花の大群落を見た事はない。可憐な駒草もこの平の誇りであるが、道傍には可なり少くなつたやうに見受けられた。夕方になつて南方の空が晴れて遠く槍ヶ岳の尖峰がちらりと見えたが間もなく邊り一帯は霧に隠れてしまつた。今日はまだ十分に天氣は恢復しないやうである。

八月十三日、晴。愈々蓮華谷の西の谷を下り始めた。空がよく晴れてゐるので氣持がよい。どうかしてうまく本流へ下り今日こそは柳又谷上廊下の秘密を探りたいものだと思つて下りて行つた。雪溪は非常に急で、私はかんちきを穿いてゐてさへやつとの思ひで下つたが、人夫達がかんちきなしで下り終はせたのにはすつかり感心させられた。東谷と合流する上部に相當大きな池が見えた。合流點迄は中々遠かつたが、そこへ來て先を見ると本

流迄はどう見ても二三町しかないやうに見える。地形圖で見ると十四五町以上もあるやうに思はれるので、一體この先はどうなつてゐるのだらうかと不審に思つて雪溪を下つて行つた。所が二町程下つてから俄然雪溪が急下し、忽ちにして五六十尺の瀧が落ちて下は又雪溪となつて落合迄は間もないらしい。けれどもこの瀧は又もや下降不可能の瀧であつたので又か又大いに失望した。荷物を下して三人でロープを身體に縛りつけて、左岸の急斜面の草付をへつて落口迄行つて見た。本流の兩岸は實に高い壁で、壁はオーヴァーハングして對岸に迫り、谷筋は見通せないが、兩岸は極度に迫つて廊下の中は眞暗であり、そして水面迄は非常に深い氣がする。立木の間から雪溪らしいものは見えるが續いてゐるのかどうか見定める事が出来なかつた。そしてどう探しても荷物をもつてはおろか空身でも下れさうな處は見當らなかつた。此處の榎の林の中でおにくを數株發見した。ともかくも引返すより外はない。蓮華谷を相當に上つてから山を左にまき、そして下り口を探して見やうといふ事にして心進まぬ乍ら引返した。併しこの分ではどうやら上廊下の神秘を窺ふ事は不可能なのではないかといふ念が湧き始めた。引き返して登り始めると間もなく右手から長い急峻な雪溪が下つてゐるのが見え、それは中々堂々として立派である。合流點下の川中島の草の上で重い氣分で晝飯を食べた。此處で私共は愈々不審に思つたのはこの附近の地形と地形圖との相違である。目測では合流點から下は約二町、歩いて見て三町よりは長くない。それが地形圖では半里以上あるやうに記されてゐる。所が合流點から上、東の谷の長さは大體地形圖位しかないと思はれるので、要するに蓮華谷の長さは地形圖の方が十數町長過ぎる事になる。地形圖ではこの附近の柳又を少し北へ寄せ過ぎて書きはしなかつたかといふ疑念が起つた。そんな事はあり得ないとしても、東の谷と西の谷の合流點から下は實際の五倍以上の長さに書いてある點だけは間違ひない事實であつて、この谷を探る人の再調査を待つも

のである。

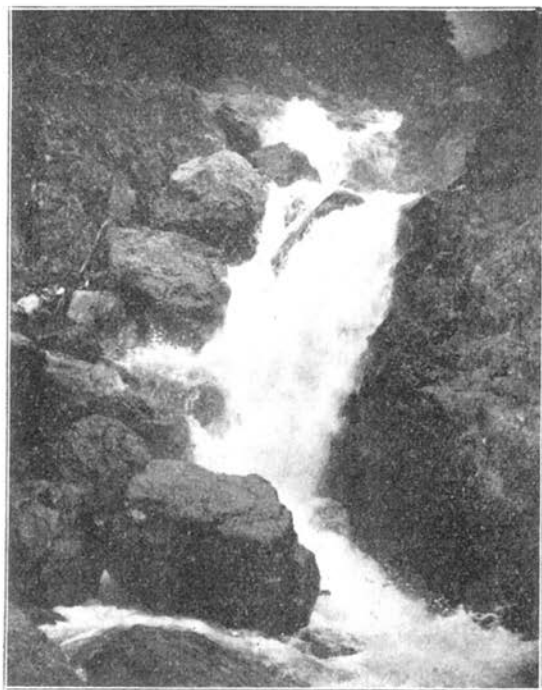
さて私共は晝食を食べ乍らどの邊から山へ入るかについて考へてゐる中に、米は已でに明朝限りしかない事に氣がついた。其で今日の柳又入りは斷念するより外はなかつた。止むを得ず東の谷を溯つて白馬へ行く事にした。合流點の數町上には二ヶ所に池があつて附近は可なり廣い平である。小杉先生の文中に熊池なる名稱の池のある事を書いてあるが、この附近には此處以外には池がない筈だから、これが熊池だらうといふ事にして置く。併しこの池は尾根から見えるかどうかは私は知らない。ともかくこの池附近にベースキャンプを張つて、附近の雪溪、岩山、柳又の岩壁などを遊び廻る事は非常に面白いと思はれた。

合流點から約三四町上を道が横切つてゐるのを發見した。この道は長池から柳又を横切つて來てゐるもので、清水の尾根を越え祖母谷の清水谷の方面へ下つてゐる古い鑛山道である事は以前から聞いてゐた。私達は道を上らず、その儘東谷を登つた。雪溪になつてからも中々尾根迄は遠かつたが、四時頃この谷を登りつめて清水道へ出た。東谷の登りには二時間餘を費した。今日は午後もよく晴れてゐたので何處でも誠に氣持がよく、序にと思つて初めて前蓮華山の頂上へ登つて見た。夕方白馬の頂上小屋へ着いて見ると登山客が五六十人もあつた。晚餐の食堂は奇妙にも酒を呑む人揃ひで、各地の歌が盛んに唄はれて賑やかであつた。

柳又から長池迄

八月十四日、快晴。御來光の雲は高かつたが間もなく空が澄んで來たので、客の去つた後の閑散な小屋の前で餘念なく眺望に耽り、思はず時間を費してしまつた。私は白馬に登る事は九回目だが、今日程富士山の長く裾を

引いてゐるのを嘗て見た事がなかつた。そして白馬から見る富士の姿も満更捨てた眺めでない事を初めて知つた。九時過ぎてから漸く出發、柳又へ向つて下り始めた。柳又水源の雪溪は極めて緩斜面で、爽快な氣持でどん／＼馳け下る事が出来た。半里以上にも及ぶ長い雪溪の終端迄頂上から三十分餘りで走り下ると、谷は急に迫つて殆



附近水源水谷又柳

んど眞逆様に下つてゐる。それに反して雪溪の終端附近は如何にも廣々とした平で、言ふに言はれぬ氣持のよい美しい草原である。白馬岳の裏側にこんな優美な平があらうとは今迄知らなかつた。何處迄下られるか分らないが、とにかく荷物はこの平に置いて、ロープと辨當とカメラ丈を持つて下つて見る事にした。これから先は殆んど瀑又瀑の連続でどん／＼下つて行き、殆んど逆落しの感があつた。私共は岩につかまり通して下つて行つた

が二三ヶ所の他はさして悪場がなかつたので、絶えず不安に襲はれ乍らも、非常に爽快な氣持で下つて行つた。雪溪に到る迄の間には四つの美しい瀧があつた。この中の下から二番目に當るもので、最も幅の廣い瀧らしい瀧を此川新作の名を取つて私は新作瀧と命名した。この瀧の上數十間の所を例の鑛山道が横切つてゐた。この下に長

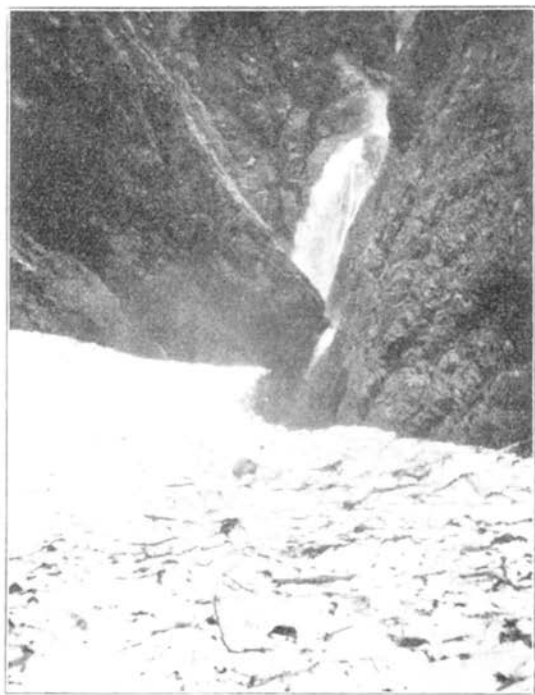
池方面から入る溪流が二つあつて、何れも水量の非常に多いのを不思議に思つた。

愈々溪流の瀧の連続も盡きて雪溪となつた。雪溪は地形圖に、前蓮華から下る尾根に二〇〇〇米の記號のあるすぐ右の谷の落口のすぐ下から始まつてゐた。雪溪に入ると急に廊下が高くなつて、谷の状態が凄慘の狀を現して來た。雪溪の真中程に何ヶ所も穴があいてゐるので誠に氣味が悪く、三人でロープで結び合つて、なるだけ雪溪の縁の方を下る事にした。何時何處で雪溪が切れて前進不可能になるかも知れないので、不安な心持に驅られ乍ら下つて行つた。それでも蓮華谷の落口に到る迄は雪溪の切れ間がなく、無事に下る事が出來たのは意外であつた。

蓮華谷落口附近は昨日上から見下したと同じく、柳又全谷中で最も壁の高い所であつた。殊に右岸の壁は高く、最も高い所は一千尺を越えて居ようかと思はれた。蓮華谷落口附近に行くと、それでなくてさへ暗い谷間に、深い霧が掛つて闇のやうに暗くなり、人夫達の顔には不安の色が漂つて引返したさうに見えた。そして雨が降りさうだ、先へ行つても大丈夫か知らんと盛んに私に歸る事を間接に促してゐるやうに思はれた。

併し私は此處で歸つては連日の骨折りも空に歸るので、何喰はぬ顔してどん／＼先へ進んだ。蓮華谷の落口の瀧は約四十間程合流點から上にあり、瀧の下迄雪溪が続いてゐたので、その上を瀧の下迄行く事が出來た。昨日上から見下した當時は到底此處へ行けるなどとは思へなかつた處である。瀧は水量は少ない乍ら、この深谷の只中に秀麗な姿で堂々と落ちてゐた。瀧下から左岸の壁を見上げると上り下り出來さうな斜めの岩の割れ目があつた。之も昨日上から見下した時はどうしてもこんなよい所があらうとは思はれなかつたのだつた（柳又谷上廊下の壁は片麻岩であつたと私は記憶してゐるが或ひは思ひ違ひかも知れない）。

見上げる豪壯な壁の高さは、霧が深いだけに一層脅かされるやうな感じであつた。蓮華谷落口から本流を四五十間も下ると俄然雪溪が落ちてみて前進不能となつた、これで愈々お仕舞ひかと思つたが、今少しの處で如何にも残念なので、右岸の壁に足場を求めて上つて見た。壁の裏へ廻つて見ると幸ひ草付が少しあつたので、それに



口 落 谷 華 蓮

頼りながら一町足らず下つて再び雪溪の上へ下ると、間もなく左からハヤ谷の雪溪の下つてゐるのに出會つた。見上げる急峻な大雪溪は如何にも堂々として、劍岳の平藏の雪溪によく似て居た。私は今日まさか此處迄下れるとは思つてゐなかつたので、この雪溪の下に立つた時には本望を遂げたと思つた。

後三町餘りでナル谷の落口である。その上手の瀧の上迄行ける事はもう見極めがついた。やがてごう／＼といふ瀧の音が死のやうに静寂であつた廊下に鳴り響いて來てやがて瀧の上に出た。ナル谷落口の瀧は三十間程先に落ちてゐる。そして先日下つたナル谷乗越の手前の崩れが非常に急斜面に見えるのに驚いて、どうしてあんな處を下れたらうと今更喫驚した。此處からナル谷へ越す、左岸のへつりは大した事がない事が、今、下から山の様子を見て初め

て分つた。先日あれだけ大げさに豫想する迄もなかつたのだが、上からはこの附近が非常に悪く見えたのだから止むを得ない。壁は急であるが壁の間に割れ谷があつて、これに足場があるのである。それでナル谷からこの瀧の上へ越すには餘り遠廻りせず、瀧のすぐ上へ下る氣で足場を求め、割れ谷に下れば大丈夫下れると私は思ふ。私はこの瀧を深廊シコウの瀧と命名した。

これでとにかく私の柳又縦斷の旅は終つた譯である。私達は此處で記念撮影をして引き返す事にした。時計は午後三時を廻つてゐた。上の雪溪の終端から四時間餘かかつて下れた譯である。廊下の雪溪の上には羚羊の毛や皮が數ヶ所に落ちてゐたが屍骸は一つも見當らなかつた。恐らくまだ雪の下に埋まつてゐるのであらう。春、雪崩の猛烈な頃には流石岩場の練達の士羚羊も逃げる隙もなく、無残にも廊下の中へたたきつけられるのだらうと思つた。歸りになると人夫達は流石に喜んではいやぎ、始め、ハヤ谷でも何處でも登つて見せると威張つてゐた。

柳又の上廊下約一里程の間は只凄慘な氣に滿ちた處で、到底その壁の美しさなどを讚歎する程の餘裕のある所ではなかつた。只私共はどうにか目的の柳又を通り了へられた事に満足したのみであつた。この廊下では雪溪の落下といふ事が最も危険であるやうに思はれる。そして九月頃にこの深廊の雪溪も到る所落ちるやうになつたらこの廊下の通行は全く不可能となるであらう。ハヤ谷を上下する事はこの谷では最も痛快な事と思はれるが、とにかくそれは將來の問題である。

私達は新作瀧の上の、道の横斷點迄引き返し、そこから鑛山道の跡を登つて長池の下附近へ出て、それから右へ緩斜面を横切り、荷物の置場所迄戻つた。そして重荷を下した思ひでこの附近の美しい高原狀の廣場の快感を思ふ儘に味はつて見た。地獄の責め苦のやうな凄慘な廊下の上に、之は又何とした美しい樂園が朗らかに廣がつ

てゐた事だらうか。自然の配合の不可思議、山岳の持つ魅力の複雑微妙なる事に、只管驚歎しないでは居られなかつた。恐らく白馬附近ではこの平程お花畠の美しい所はなからうと思はれた。數町の間續いてゐる南京小櫻の大群落など夢ではないかと思はれる程美しかつた。何時かはこの附近でゆつくりと高原的氣分に酔つて見たいものだ、早くも再遊の氣を誘はれた。全くこの平を發見した事は思ひ設けぬ大收穫だと思つた。夏はあのやうに雜沓する白馬岳のすぐ裏にこのやうな神秘に満ちた美しい平があらうとは誰が知つてゐたらうか。

繰り返して言ふが、私の過去十數年の經驗に徴して、白馬附近では此處程廣大なお花畠のある所を見た事はない。大池附近などは此處に比べると遺憾乍ら數段の見劣りがする。そして白馬岳のお花畠は美しいなどとよく聞くが、それは一體何處を指して言つてゐるのであらうか。葱平のお花畠などは、美しいお花畠と言ふには餘りにも失望の大きい所だが、今度この平を發見して今こそは誇るに足るお花畠の、白馬岳にもある事を知つた。この平から約四五町長池迄の間も、うまく樞松を避けて行けば、誠に氣持のよい平続きである事も分つた。私共は夕暮迫る頃長池池畔に着き、高嶺きんぼうげの一面に咲き揃つた池畔に天幕を張つた。そして今日の道筋から考へて、朝日岳から白馬岳へ行くには單調な尾根ばかり行くよりは、鉢ヶ岳から長池に下り、そしてこの美しい平を抜けて、一里にも近い長大な柳又水源の大雪溪を登つて白馬へ登る方が、時間に於ても大差なく、氣分の上では尾根の上に行くより數倍した愉快なものである事を知つた。そして大山岳としての白馬岳の本領はこの邊り迄探ぐる事によつて初めてその眞價を發揮する事を感じたのである。

私共は翌日此處から朝日岳へ向ひ、イブリ谷を下つて北又谷への旅を續けた。

後記

柳又の入口から水源迄溯るのに、私共は結局一週間以上費してしまつた。然しこれは三人共柳又入りは初めてで、そして何等参考にすべき先行者の文獻がなかつたからで、私も再度行くとすれば決してこんな時間の掛る事はな
いと思ふ。先づ第二日は入口から廣河原迄、これは少し無理と思ふが、朝餘程早く測水所を出發すれば不可能の
事もあるまい。又第一日目の泊りを五六町程柳又へ入つてからにすれば尙好都合と思ふ。第三日目はナル谷乗越
迄は行けるであらう。四日目はナル谷を下つて本流の深廊の瀧の上に出で、その先の雪溪さへひどく落ちてゐな
かつたら、その日の中に白馬岳まで樂に行けると思ふので、柳又の溯行は大急ぎで四日間、ゆつくりで六日間位
かゝれば充分と思ふ。しかし結局一週間分の食糧を用意して行くのが必要な行程である。何にしてもこの谷は豫
想外に悪い谷であつた。しかも柳又谷の上廊下の六兵衛谷落口附近は、私の力では到底通過不可能である。この
邊は五月の下旬か、六月上旬頃なら雪溪が續いてゐて難なく通過する事が出来やう。その代り水量の最も多い時
季だから下流の困難さが思ひやられる。

私はこの谷を通過し終つてから考へて見るに、柳又の中流は何となく纏りがなく、風景がばら／＼に散在して
ゐる谷のやうに思はれてならない。これに較べて、北又谷は終始整然として一糸亂れず風景が統一され、瀟瀟、
壁、森林が見事に調和されて、優美極らない神秘の谷である事を一層深く感じるやうになつた。柳又谷のこのち
ぐはぐの感じは、花崗岩の露出が餘りに早くなくなつて、蛇紋岩等崩壊しやうい岩質が谷を構成する爲ではない
かと私は素人考へに考へるのである。もしも花崗岩が北又谷の最終露出と同高度に當るゼンマイ谷附近迄あつた

ら、この谷は餘程引き締つた美しい谷であつたらうと思ふのである。このやうに花崗岩の露出の少いのは、この附近の花崗岩の盛り上りが特に低いのか、或ひはこの谷の年齢が若くて浸蝕がまだ足りないのか、私には固より分らないが、之を示して下さる方があつたら有難いと思ふ。この谷の中流が北又谷に比べて大いに風景が劣るとは言へ、その下廊下の豪壯な溪流と壁、その上廊下の凄惨なる景觀は決して谷好きの人に不満を與へるものではない。木暮氏は、イブリ谷の溯行は小規模乍ら冒険心を満足させる事が出来ると云つて居られるが、成程イブリ谷も可なり悪い谷ではあるが、斯る點では、柳又の險惡さに比べてイブリ谷などは物の數ではない。



登山者のための地質學

佐々保雄

一、登山者と地質學

二、地質現象

1. 地質的作力と其推移

2. 侵蝕作用

A. 風化

B. 水蝕

C. 氷蝕及び雪蝕

3. 建造作用

A. 岩石成生

a. 火成活動—火成岩

b. 堆積作用—堆積岩

c. 變質作用—變質岩

B. 地殻變動特に造山運動

登山者のための地質學 佐々

卷

C. 火成活動特に火山

a. 火成活動

b. 火山の形態

c. 火山の衰滅

三、地史と地質構造（第一表）

四、岩石の種類と性狀

A. 火成岩（第二—三表）

B. 堆積岩（第四—五表）

C. 變質岩（第六表）

五、地質調査法

A. 野外作業

B. 室内作業

六、參考文書

一、登山者と地質學

黒部の谷の深きにも拘らず「比ひなく光に満ちた明るさ」と悦ばれるものがその岸壁を造る花崗岩に由るを知るとき、又重厚、幽遠と言はれる赤石山地が主として暗色の古生層岩石よりなると聞く時は、如何に地質が風物に、

そしてそれに依る登山者の感銘に及ぼす所あるかを覺ることが出來やう。富士の裾野のおほらかさも、劍、穗高のこゞしさもすべてこれ地質的作力のなす所に外ならぬ。

こゝに地質學とは地球の表層、即ち所謂地殼の現實を探索することによつて、其處に於ける諸現象の原因、推移を探り地球發達の歴史を編まんとする科學であるが、既に地表の現實、即ち自然を研究の對照とする以上、自然の尤たる「山岳」はまた好箇の研究室たるを失はないのである。而して地質學専攻家ならざる登山者の「山と地質學」への關心には大凡次の二つのゆき方があるやうに思はれる。一つは豫め目的とする山の地質的知識を得て、之を登高に際し利用し、又は博物館的興味を増さしむるもので、これを消極的と觀れば他の一つは積極的に自ら地質調査を行つて登路の撰擇に資し且つ自らの探索癖を満足せしめ山行の快に副ふことこれである。此處には先づ便宜上前者を主として述ぶることにしよう。

地質學は一般に之を分つて二つとする。一つは地表各所よりの事實を蒐集し綜合することに依つて各種の現象を系統化する歸納的のもので地質學概論これである。他の一つは地表に於ける現在迄の變移の歴史を編纂する *General History of Historical Geol.* 地史では是には前者よりの演釋がその説明を助ける。而してこの小編を以てしては其等詳細に亘つて述ぶることは到底不可能の事に屬する。従つてこゝでは地質學へのほんの手引を記すに止めた。只斯くの如きものの多少なりとも登山者の地質への關心を増し、何等かの参考に資する所あらば筆者は以て満足としたい。詳細は章末の文献によつて御了解ありたいと希ふ次第である。

二、地質現象

1. 地質的作力と其推移

現在吾々が接する地表の岩石であれ、山岳であれ、谷であれ、それらは吾々の目視し得る範圍で生成されしものは甚だ少い。例へば甲斐駒ヶ岳連峯をなす花崗岩の如きは地下深きに於いて岩漿の噴入、凝固せるものであるから、その地表に現れる迄には甚だしき地殻の變位と、測り知れぬ長年月の侵蝕を想像せねばならぬ。又今日天を衝いて群り立つドロミテの牙峯も、曾ては、海底深きに沈積せる岩石より成るを知れば、驚くべき地殻の錯亂を示す廢趾と考へざるを得ぬ。斯く觀する時は今日の山岳、溪谷、丘陵、平原何れとして地質現象の表現たらざるはないのである。

地殻を構成する主なるものは火成岩であつて、之は地殻下の岩漿の移動及び、それに續く凝固によつて、或ひは地下に深成岩塊を造り又熔岩其他を地表に放出する。之は地表では、隆起、撓曲、褶曲、斷層等の地殻變動を伴ひ地震を起し火山を築き上げる。かくて岩石の新しき地表を生むや否や、其處は風、雨、水、氷、有機物等の活躍の舞臺となり、直ちに其等に胃され、刻まれるに至る。爲に削られたる物質は更に、氷水の力を借りて運ばれ水中に堆積し、やがて固結して水成岩になる。之が再び水上に現れる爲には又必ず地殻變動を伴ふを免れぬ。かくて幾多の地變を受けたる岩石は變質して變成岩となる。かく生じかく滅びての所産こそ今日見る所の地表なのである。以上の如き止むなき輪廻（Cyclical Process）を生ぜしむる力を地質的作力（Geological Force）と云ひ、その經過し推移する結果は地質構造（Geological Structure）となつて現れる。故に今日の地殻の具現する所のものはその波亂を極めし過去の偽りなき告白であつて、吾々はかかる建設と破壊の飽くなき闘争の隙を、僅かに覗き窺ふにすぎないのである。曾て、故大島亮吉氏が「大きな岩

壁、われ／＼の考へられぬ程の多くの年月を瞬間にして見せてくれる壁畫」と記されたのは實にこの謂である。

以下には簡單乍ら其等地質的作力とその推移について述べやう。作力はその誘因により外力的なるものと内力的なものに分たれるが、前者は地殻外部より作用する營力、後者は地殻内部よりのそれに當る。こゝには其等作力の互ひの關聯と推移とを結びつけて大體、侵蝕作用と建造作用とに分けて考へて見やうと思ふ。

2. 侵蝕作用

山Mountainの山らしさはその高距Altitudeと共に起伏、巒、傾斜Palce, Features, Dip-slopesに支配される。高距を齎すものは建造作用

である。これに依つて新たに生じた原形Initial Formは言はば彫塑の素材である。素材はそれ自身既に鑑賞の對稱ともなるが之に巨匠の手の加はつて一層見るべきものとなるであらう。侵蝕作用は言はば、その巨匠の鑿であると言へる。その役割をなすものは、主として太陽のエネルギーによる氣象的營力で、陽熱、氣溫、濕度、風、雨、水、霜、雪、氷、など之である。そのうち前四者によつて行はれるものは風化Weatheringと言ひ、後のものに依るを水蝕Fluvial erosionと言ふ。雪や氷によるものは水の特別な場合に外ならない。勿論是等が山形を支配する所大なるものがあるのであるが。

A. 風化

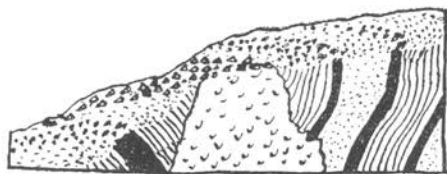
岩石は陽熱、氣溫等により、多少ではあるがその表面が膨脹收縮するために内外に歪を孕み破面を生ずる。霜や雨、水、雪などは之を助けて剝離せしめて岩片をつくり、更に續いて機械的に、化學的に分解して細片になり地を被ふに至る。之は風化を受ける場所に依つても、又岩石の組織によつてもその程度が異なるが、高山では氣溫の變化特に激しく又風力も大であるからこの力は相當削蝕に於いて役割を持つ。

かくて山嶺に聳立を誇る峯々もかゝる激甚な風化の斧には堪えかねて先づ縦横に裂隙が生じ、次にこの割目に沿うて更に壞敗を續け轉落して岩塊重疊たる城趾の如くなる。ゴウト若しくはゴウロと呼ばれる地形や岩海Felsennmeerと言

はれる状態(第一圖)はこれである。かゝるものに更に風化が進めば岩塊は細片して岩屑となり、重力や雨水等依つて匍行し極めて徐々であるが山腹に落ち擴がつてはザクとなる(第二圖)。ザクの領域が次等に山嶺に及び



第一圖 蓼科山頂の岩海 (本間氏)



第二圖 岩石の匍行



第三圖 構造土—シュビッツベルゲンに於ける例(Meinerdus)

遂に岩屑の山頂を蔽ふに至ればマサゴ山と化す。更に分裂が進むか又極めて分解し易い花崗岩のやうなものであれば燕岳附近の様な白砂珉々たる風景を呈するに至る。かゝる順序は風化による岩石分解の過程と同時に岩石の

風化に屈伏して平滑な緩斜面に移りゆく経緯を示してゐる。即ち風化は地形の傾斜を緩かにし表面を鈍くする匏である。従つてこの作力を多く受けた山嶺には最早岩山の様な豪壯の感じは得られない。立山の眞砂峯や白峯北岳其他日本アルプスの山頂の多くを占める地形がこれでそのスカイラインは悠々とした平たい双曲線狀をなし雄大に峰から峰に打ち續くのである。

註、この匏行の作用は時に地表に奇異なる現象を生ぜしむる。極地や高山に於いて見らるる構造土はその一つである(第三圖)。これは日本では乗鞍岳鶴ヶ池附近にて最初に知られた。筆者も曾て北海道大雪山凌雲岳下にて之に類するを見たことがある。その成因的説明は諸説が行はれるが此處には略す。

B. 水 蝕 水は地表には雨水、地下水、河水、海水、氷雪の形で供給され、機械的にも化學的にもこれ

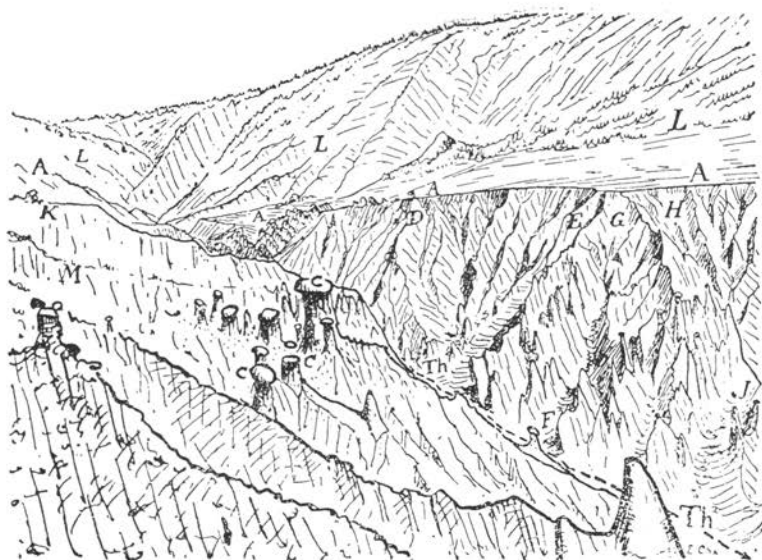
を削磨し擦蝕する。早い例が植物の繁茂が少く、降雨のために激烈に土砂を削られる所では著しい凸凹を造り所謂惡地をなす(第四圖)。これは新しく生じた火山や高山の谷の源頭、花崗岩、石灰岩の地域に往々見られ、殊に石灰岩地では水に炭酸を含む所から溶解されて特種の所謂カルスト地形を形造くる(第五圖)。何れも水の侵蝕力を端的に示すものである。

註 石灰岩地特有の地形は日本では長門の秋吉臺を始め各地の鐘乳洞、凹穴などで示される。

Meteoric water Ground water
雨 水や地下水の地に浸み込めるものが再び地表に湧き出て泉をなすものは不透水性岩石を下盤とするが常

で、岩質や地質構造に支配されるものである。(註)
例へば火山地方では多孔質な火山礫や火山灰の堆積せる火山碎屑物中からは湧水すること稀と言つてよく、下盤の熔岩流の露出せる附近にて始めて之を見たり、又砂礫岩層の下

の頁岩や粘板岩から流れ出で、又斷層の露出せる所から溢れ出たりする等これである(第六圖)。この湧水のある



第四圖 惡地一崩壊し、侵蝕され易き土地に於ける多量の流水はかゝる惡地を造り出す。前景には土柱も見える。(Kilian)

地點を知ることの山の旅に極めて大切なことは言を俟たない。地下水は岩石の透水度と保水度によつてその地下水面を昇降せしめ、これは大凡その岩石の有孔率に比例する。即ち

緻密な岩石ほど水を含まぬかはりそれを透さぬもので、礫、砂、礫岩、砂岩、石灰岩、凝灰等は大いに透水性で粘土、頁岩、粘板岩、花崗岩、結晶片岩、片麻岩等是不透水性と言ひ得る。花崗岩の山で地下水面の案外高いのはその保水度によるものであらう。(註二)

註一 地下水には、この外に地表下に熔融して居る岩漿に源を發する岩漿水や水成岩が堆積する際に封じ込んだ化石水等があるが雨水に依つて生ずる循環水に比しては其量甚だしく小である。

註二 山頂平坦なる地方に往々見る「御田」なる状態は多く其處の岩盤の水はけ如何に依るものであらうと思はれる。恐らくは摩緻な熔岩流とか花崗岩等の上に適當な平坦さと給水のある所に生ずるものであらう。例へば

前者では苗場山、平ヶ岳、後者では東北朝日岳に於けるが如くに。

かくて湧き出た水が集り、又雨水が直接地表を傳つて下に流れるところ、河が生ずる。河水は奔下と共に下盤を削つて谷をつくるが之は下流より次第に上流に深く刻んでゆき地下水の露出を擴げて水量を増し、愈々成長する。従つて一般には上流程侵蝕の初期の形が見らるのである。川の源頭の多くはガリイGalleyをなし、風化や水の浸

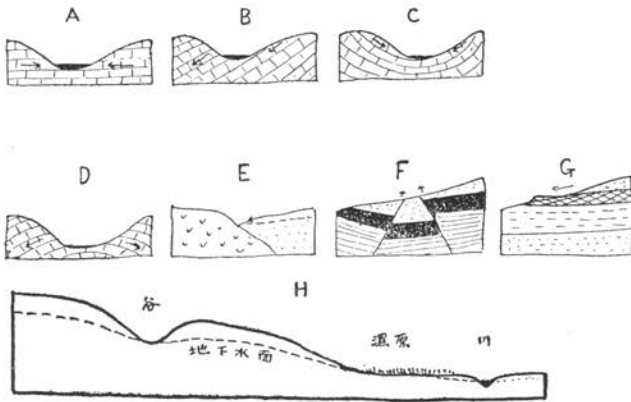


第五圖 カルスト地形模式圖

出などによつてゆるぎくづれた岩塊の累々と散亂しその間を水はかぼそく流れる。次第に水に沿ひ下に降れば水量を増すと共に河床の岩塊は小になり丸味を帯びて来て、谷壁は深くなる。之は水の侵蝕力は速力の平方に比例し、水の速度は水量の立方に比例するからである。即ち、下流に降るに従つて水量は増しそれ自身侵蝕力が大になると共に碎屑した碎片を運搬し、それらを繋に用ゐて擦蝕するのである。これ等のことは澤歩き等に際して増水に遭ひ、水石相搏つの際」を聽ける者は直ちにその有様が了解出來やう。斯くして見らるゝ所の景觀は、谷中に比して谷壁の高いの

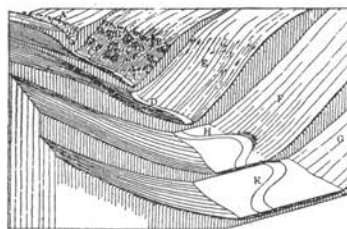
が一般で盛んなる下刻によつて生ぜしを知るのである。これ吾々が山地で最も多く見る所のもので山らしさをつくる起伏、山巒、急斜面はかゝる推移に於いて成される。この状態が長く続けば河壁は風化の影響によつてその傾斜が緩かにされる。而して河自身は上流に延長する一方、河底は充分に下刻されるため、水流は緩かになり、

そこに働く侵蝕力は岸を擴ぐる側刻のみになる。かくて河中は河壁に比し大になり、河は愈々緩かに流れるに至る。かゝる景觀は多くの下流に於いて見る所である(第七圖)。然しこの區域では侵蝕のみがそれを齎す要素ではな



第六圖 地下水と湧水點

- A — 水平層に於ける
- B — 單斜層に於ける
- C — 向斜層に於ける
- D — 背斜層に於ける
- E — 火成岩と水成岩との間
- F — 斷層と附近の不透水層(黑色)との間
- G — 熔岩流の末端
- H — 地形と地下水面との關係



第七圖 上流より下流へ (Davis)

後述に述べる河水運搬物の堆積が大きな役割をなす。河水は愈々緩かにうねりくねれば今日石狩川下流に見る如き曲流の状態になり側刻のみが働いて地をかきならす(第八圖)。若し多くの河によつて侵蝕され、かゝる推移が適

當に長く続けば河は上流區域まで一帯に下流と同じ平坦な地形に近くなる。この状態に達したるものは準平原と
 呼ばれるが、その高さは侵蝕の基準面、即ち海面近くに迄持ち來され、その廣がり及び起伏は内部の構造により
 Proterian



第八圖 紀伊山地北山川上流の穿入曲流
 前輪廻に於ける平坦面上の曲流が隆起して
 始まつた次輪廻に於ても先行的に以前の流
 路を占め、更に深刻せる例



A. 天山ブラルバスタウの隆起準平原 (Davis)

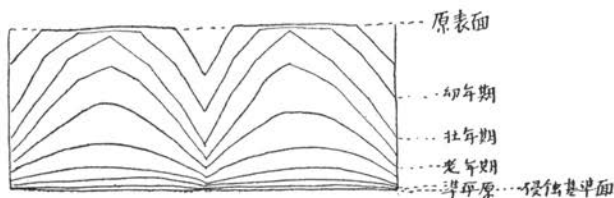


B. 北上山地の北部の北部の山麓平坦面(一戸東方より)

第九圖 準 平 原

侵蝕の繼續する長さに比例する。現在の中國地方や北上山地の低い山波はこれの隆起したものであると言はれる。

然し準幸原は同一に平均されて生ずることは少く、平坦化に遅れた部分は丘となつて残る。北上山地の早池峰山は古生層中に噴出せる橄欖岩の残丘である(第九圖)。かく侵蝕作用が障害を受けず一定の方向に進む期間を輪



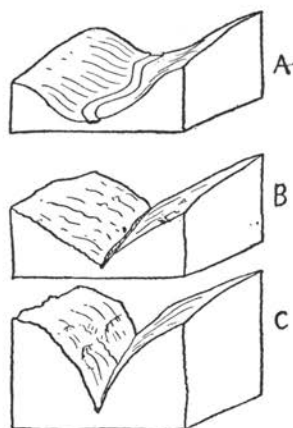
第十圖 デーヴィスの概念による地形發達

廻と言ひ、輪廻の初まる時の地形を原地形、侵蝕されて尙最初の面影を傳へたるものは次地形、かくて輪廻の終末に近づけるは終地形と言はれる。理想的な場合は輪廻の出發點は即ち最後の地形たる準平原であるが、一般にはそこまで至らぬうちに事變即ち地殼變動等が起り新しい輪廻の開始されることが多い。これを地形の若返りと言ふ。若返りと言ふのは侵蝕の原地形に於ける初期を幼年期、盛んに行はれつゝあるを壯年期、準平原に近づけるを老年期と言はれしより起つたものである。實際の地形は地殼運動と侵蝕作用との強さの比に支配されるのであるからかゝる幼・壯・老の如き規則的な考へ方は余りに概念的であると云はねばならない(第十圖)。

實際斜面の發達は地殼運動と侵蝕作用の調和の程度で原地形よりの時間の經過長短を問はず種々の形態を生じ得るがワルター、ペンクは之を大別して次の三つの型を設けてゐる。即ち山腹の上方に膨んだ凸面を向けるものを上昇的發達の地形と呼ぶ、即ち地盤の隆起する傾向のある地域では、谷底の勾配の増加する割合が著しく

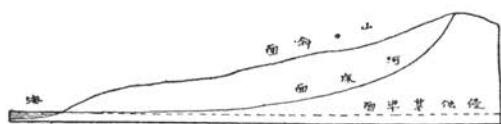
侵蝕によつて起伏は増加する一方であつて斜面を緩漫にする風化の影響は認められぬ。故にこの地形は常に地形が若く止まり峽谷性の凸面の傾斜を持つと言ふ。之と反對に地盤は極めて徐々か、或ひは長い間静止してゐるか、又は下降しつゝある地域では侵蝕力に比し風化作用の影響が大きく、谷底の勾配は微弱で侵蝕力が極めて小さく

時としては反對に谷底の堆積が起る。この場合には所謂老年山地の地形に似て上方に凹面を向けた斜面形が生ずる。之をベンクは下降的發達^{Archevalence}の地形と呼んだ。若し谷底の勾配が適當に調節されてゐて、侵蝕力の速度が谷底の風化作用と平均してゐる様な時には斜面は上方に凹でも凸でもない直線的な形を保ち所謂ベンクの平衡的發達^{Chromolence}の地貌を示すに至る(第十一圖)。



第十一圖 ベンクの概念による斜面の發達

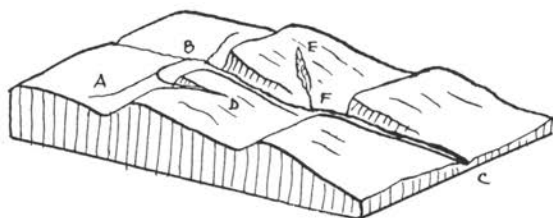
- A. 上降的發達の斜面
- B. 平衡的發達の斜面
- C. 下昇的發達の斜面



第十二圖 河の平衡曲線

か否かを示すもので平衡曲線と呼ばれてゐる(第十二圖)。この曲線は一般に連続的な上流に急立し上方に凹なるものであるが詳しく之を調ぶる時は多少不連続なる點を示すことが多い。これはその局部に於ける地殻運動とか地質構造、岩質などに支配されて生ずる。新しく地殻變動を受けた部分はその地點で新たに侵蝕が開始され従つ

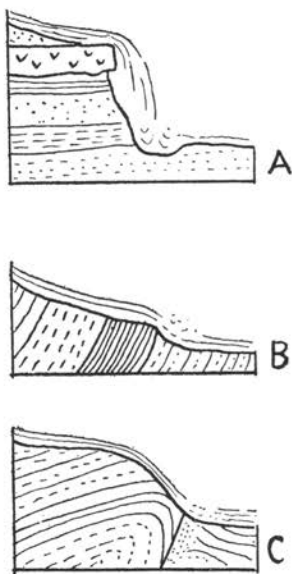
吾々が今日高山に見る水蝕の形は前に述べた上流及び中流の状態を以て現され、一般に落差は大で河の傾斜は急である。この河床の高さを縦軸に、全長を横軸にとつて河床面を畫けば一つの拋物線に似た曲線が生ずる。これは河の平衡状態即ち、侵蝕も堆積も行はれぬ様に物質の量、水量、傾斜等が釣合つて居る



- AB — サブセクエント河
 BC — コンセクエント河
 BD — オブセクエント河
 EF — インセクエント河

第十四圖A. 地勢と流向の關係

てそこには初地形を生じ多くは急傾斜になる。又火成岩と水成岩の境、抵抗度の違ふ水成岩の境、熔岩流の末端や火成岩脈等に瀧や奔端、早瀬が多いのは侵蝕力の差によつて生じた不連続である。又河岸の高さも地質構造や山地の高さ、勾配に支配される

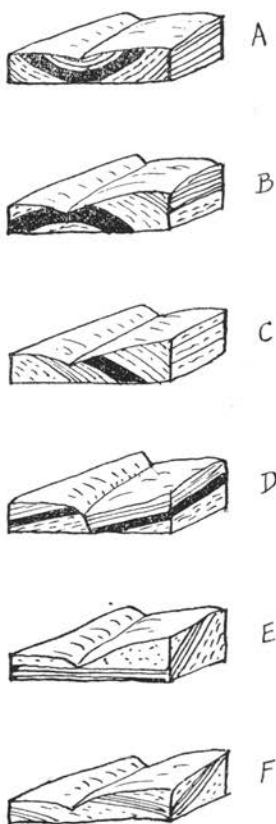


第十三圖 瀧の成因例三つ
 A. 熔岩流末端に於ける
 B. 岩石硬軟差による
 C. 斷層による

ことは勿論である。後者は河の流向と山地全體としての勾配から、その傾斜の方向に流れるもの、斜に流れるもの、反對の方向に流れるもの、又組織に應じ直交するものなどにより各種の地形が區別される(第十四圖A)。最初のを除く外は不自然な状態では現輪廻開始前の状態に支配されて生ずることが多い。先行河と言はれるのが之れで例へば赤石山地の西部を切つて峡谷をなす天龍川はその好例である。又岩石の硬軟が河壁を支配する例は古生層の山などで珩岩地帯の峡谷を出でて急に谷中開くと見れば粘板岩の地帯であるなどはよく經驗する所である。又次第に隆起して絶えず下刻の行はるる傾向の所に峡谷の生ずるは當然で黒部川や前に述べた天龍川中流などに見る所である(第十五圖)。これ等の事は豫めその地方の

地形圖、地質圖を読むことによつて大凡乍ら豫測のつくものである。更に考へねばならぬのは河の屈曲點である。そこに於ける地形は常に屈曲點の外側に側削が盛んでその結果、河壁は急立し、流れは深く且急である。

それに反し内側に於いてはすべてがその反對で時に河原の生じて居ることすらある。又谷が或程度に開かれて後若返れば多く前輪廻の侵蝕や堆積等による河床を段丘として残す。又合流する河にあつては本流の下刻力が支流に遙かまさるとその合流點附近に瀧や奔端を生ずる。黒部川の支谷が多く瀧をかけて本流に注ぐはこの好例である。かゝる段丘、懸谷の所在を知ることや、岩質によつて生ずる岩棚、崩落堆積物の有無を探ること等も、澤



第十四圖B. 地質構造と河川との關係

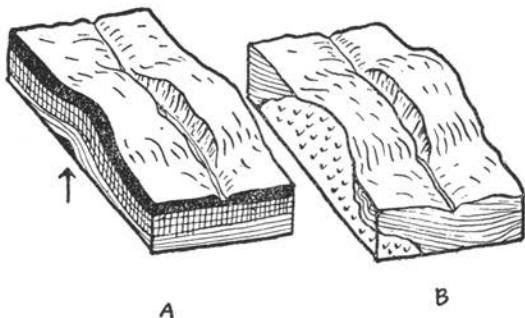
- | | | | |
|----|-----|-----|-----|
| 縱谷 | 向斜谷 | — a | |
| | | 背斜谷 | — b |
| | | 單斜谷 | — c |
| | | 斷層谷 | — d |
| 橫谷 | — e | | |
| 斜谷 | — f | | |

を歩くものにとつては必要なことで、地質學的な知識を多少有することによつて可成の便宜が得られるのである。(第十六圖)。

註一 河床の岩盤露出せる箇所に往々斷穴なる圓い窪みの見らるゝは多くかゝる瀧瀨の名残りである。それは奔下せる流水が岩片を旋回せしめて瀧壺をえぐり、錐の様にのみ下げて、斯る凹穴をつつたのである(第十七圖)。

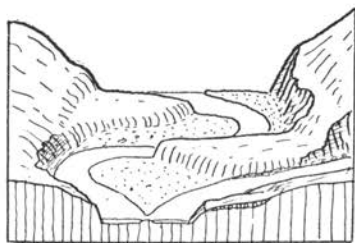
註二 此處には河谷の成因として侵蝕によるものを主として述べたが尙此の外に次の數種の成因的分類が出来る。
 1. 構造谷 — 風成、水成、氷河、火山噴出等にて生ぜる不平均な堆積物の低き方を流れるもの。

2. 破壊谷——水河、風力、水力、人力等で地形を急激に破壊せし時生ずるもの。
 Destructional V., Structural V., Longitudinal V., Syncline V., Anticline V., Monocline V., Fault V.
3. 構造谷——之は地質構造に支配され關係するもので大別して縦谷(向斜谷・背斜谷・單斜谷・單斜谷、斷層谷を含む) Transversal V., Diagonal V., 横谷、斜谷の三種とする(第十四圖B)。
4. 侵蝕谷



第十五圖 峡谷の成因

- A. 隆起による先行河
- B. 岩石の硬軟侵蝕の差による



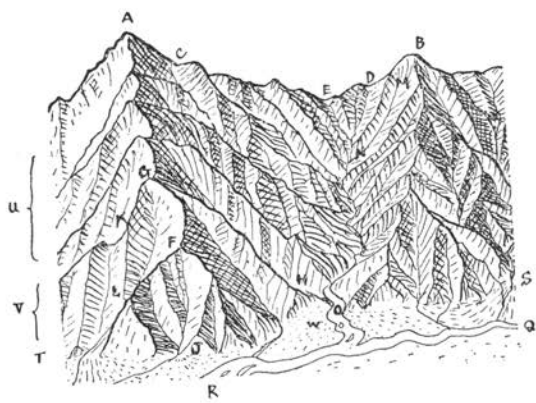
第十六圖 河岸及び合流點に於ける河段丘と屈曲部に於ける堆積地(氾濫原)と河崖の圖



第十七圖 甌穴 (Döring)

かくて河が次第に成長すれば多數の支流を併合し愈々山地を深く刻みこんでくる。二つ以上の河川系にかこまれた山地はために分水嶺を生じ、時と共に瘦せた尾根になる。若し相對する澤の頭が互ひに切り合つて尾根を低くすれば其處に鞍部が生じ、殘されて一際高きは峰と聳える。峰よりは多くの小澤を輻射し尾根を派生する。分

水嶺近くでは数間の近きにある澤の源流が下ると共に甚だしく隔るのはこれで、これが又充分下流では遂に合流するの面白い現象である。山脚の末端は多く河壁に削られて山嘴をなす(第十八圖)。かくして河流系に刻み込まれた山地は次第に起伏を増して巒を入りくましめる。起伏には山體の基部と峰との比高度と規模に依つて大



第十八圖 山體各部の呼稱

- | | | |
|-----|-----|---------------|
| A | 頂上 | Peak |
| B | 瘤 | Knob |
| A-B | 主山稜 | Main ridge |
| C-D | 山背 | Crest |
| E | 鞍部 | Saddle |
| A-F | 大尾根 | Main-spur |
| G-H | 脇尾根 | Side-spur |
| J | 山嘴 | Basal spurlet |
| K-L | 小尾根 | Spurlet |
| M | 源流 | Riverhead |
| M-N | 小澤 | Ravine |
| N-O | 支流 | Tributary |
| Q-R | 本流 | River |
| S-T | 山麓線 | |
| U | 山腹 | |
| V | 山脚 | |
| W | 扇狀地 | Fan |

硬ければ起伏は小でも斜面は直立する之に反して岩石が軟弱なれば高山でも斜面は緩である。槍ヶ岳の様には高さの割合に見事な岩山の景色を示すのも、霞澤岳や六百山の聳立も又アルプスに於けるドロミテの奇峰も皆その岩の硬さによるものなのである。特に山を構成する岩石が部分によつて硬軟の差が激しいと巒岩が聳立するやうに

登山者のための地質學 佐々

なる。或種の岩石にはこの現象が特に顯著で左程高くない山にも斷崖を生じ岩峰崛起し意外の奇景をつくる。日本では火山集塊岩にこの癖が甚しく現れ、その好例を妙義山に見ることが出来る。その外珪岩や石灰岩がこの傾向を多分に有し、前述べた花崗岩も時としてこの性の著しいことは、岩殿山や甲斐の昇仙峽の岩峰などに現れて居る。地形圖に於ける露岩もかくして生じたものが多い。然し斜面の緩急は必ずしも岩石の硬軟にのみ支配され

ない。初地形の成生と侵蝕の調和に於

いて後者がその優越を占むれば或時期迄岩石を問はず急峻なる山腹をつくる筈である。

兎も角斯くして山岳の凹凸の度、即ち起伏が大になり傾斜が急になり、山高く谷深き峻嶺になつて來ると急な山腹に於ける岩片の匍行が速に行は



丘陵



中山型



高山型

第十九圖 山の三つの型

れ、従つて地被の厚さも薄くなると愈々露岩の現れる機會が増してくる。傾斜が余り大きくなつて安定の限界を越えると岩石はその位置に堪えずして自ら崩壊する。山崩れの中のあるものはかくして起り、又多少永久的に常に崩壊をする様な所は地圖上には崩土、頽岩等で示されてゐる所謂ナギ、ビヤク、ガレ等を生ずる。森林の紺青色に茂り合ふ山腹に、或ひは白く或ひは赤い傷跡を見せて山岳に荒怪な景觀を呈せしむるのは往々見る所であつて、遠望して直ちにかゝる山岳の峻急なことや、或ひは崩れ易きことを知ることが出来るのである。金峰の北面

や甲斐駒ヶ岳の東面のクラなどはその代表的なものでその地名に名付けられたものには赤嶺山、大枯山などがあ
り、この種の崩壊が頂迄及ぶと全山草木のない岩山になつて白兀とか赤兀とか言はれるものになる。地藏岳や木
曾駒ヶ岳では花崗岩の眞白な崩れが雪と見紛ふ程で、甲斐駒では白崩山と呼ばれる程にその破壊の状は激しい。

若し以上述べたやうに傾斜が急峻で、起伏が大で、且つ、露岩の磊々として聳え、且つ高さが充分高ければ山は
自ら高山の風貌を具へてくる。而して更に草木の限界を超越して高度を増すに従つて萬年雪を堆積しやがて氷河
をも現出するやうになると、侵蝕は水のみならずその變態である雪氷の力を借りその一層鋭利な斧を振り山を
彫刻するに至る。こゝに至れば既に純粹のホッポアルペンの景觀で、高山形の極點を示すものである。然しこれ等
は侵蝕力と高度の關係よりも寧ろ氣候との關係に支配されるもので、このことは例へば内地では高山岳にて見ら
るゝ樞松や残雪が、北千島に至れば盛夏尙ほ海邊近くに見られ、又アルペンと何れと思はるゝ尖峯の諾威北部や
シュピッツベルゲンあたりに見らるゝことで了解されやう。

侵蝕の彫刻が更に進めば最早、總ての峯は尖り尾根は狭い馬の背形となり、谷々は枝の様に分れて山嶺の間を
縫ひ、起伏は最大に達してくる。かくて峯高く聳え、谷深く刻み削剝作用は最大速度に行はれるに至ると山の輪廓
は所謂山形の波狀をなし連山波濤の形容に近づく。流水の彫刻はこゝに於いて完成したものと見ることが出来
やう。吾々の最も多く接し、且つ親しみある山々はかくして成り、かくして吾々の前に聳えたのである。通常起
伏のあまり大でない限りはその地方々々に特有な森林はこの彫刻を彩色したやうに鬱蒼として山谷に茂るのであ
る。秩父、丹澤、御坂、紀伊山系又は四國山系、越後山系など主な群山はこの形式にまで達した山岳で、飛驒や赤
石等の高山でも上部は起伏の著しく大きいのみで裾の方は漸次に中山形になつて所謂壯年山岳の特色を發揮して

ゐる。この状態に達した際の岩石の影響は、山腹の岩層が殆んど完全に被はれ土壤さへ生じてくると極めて微かなものになつて山相を見て岩石を察することは困難になつてくるが、猶ほ組織の如何は何か隠然たる力を持つてゐるらしく谷の分布の密度即ち山巒の細大などに關係することと思はれる。山の巒は勿論谷のくひ込みによる侵蝕の結果で之を支配する最大のものはその地域に於ける降水量である。日本の山々の山巒の甚だ細かく、歐洲アルプスの谷の分布の粗なのもこの降水量に起因する。巒は山の起伏の大小、従つて傾斜の緩急に關係し、ために愈々雨水の流下が敏活になり山脚は一層細かに刻まれて吾々に興多き幾多の登路を提供する。高山は起伏が大であるから巒は當然細い。そこに踏み入ると實に多くの澤があつて大澤に統一されてゐるのを知る。これを展望すれば大小の山脚は急峻に直線的に谷底目がけて落込んでゐて細かい谷や澤はあまり目立たずすべてが大規模に雄大に見える。つまり巒が粗大のやうに見えるが、例へば晩秋、初雪の候や、いやはての斜陽にこれを望んだ者は意外に目まぐるしい迄にその山肌に精緻な彫刻の施されてゐるのに氣が付かう。山岳の複雑美はこの侵蝕過程にあるを以て最とする。而して一連の山嶺が凡そ同一の高度に近く保たれてゐるのはよく見る處であるが、これは最初の高度の分布も關係するけれども寧ろ侵蝕による山頂部の削剝が激しく、爲に高峯は急速に削磨され、その度は高い程大であるから同一地質癖地質癖を有する山群では最初は可成の高低の差があつても、やがて平均した高度を保つやうになるらしい。山岳の定高性定高性と言はれるものはこれである。

かくて彫刻の完成し、起伏、山巒、傾斜の最大に達したものはやがて減びる運命を負うてゐる。風化の鉋は愈々働いてこれを削りあげ、侵蝕の鑿は増々これを縦横に刻んで切りさいなむ。従つて若しその地域に若返りがないならば起伏は次第に低く、峰は岩屑の衣を蔽うて丸味を帯び、傾斜は愈々緩かになり、谷は打ち開けて、概して溫和

な山形に移りゆく。従順山形と稱せられるものがこれである。本邦の山地には充分にこれと認められるものはないやうであるが火山性の熔岩丘以外の森、丸と呼ばれるものは多少これに近づいたものと見做される。前に述べた岩石硬軟の差による地形はこの時に特に著しく、例へば火成岩脈や珪岩等が山頂山腹に奇岩として突出する。更に輪廻が進展すると所謂老年期に入つたもので、谷は全く開け山稜は平凡なる波状を呈し、削剝作用は不活潑になり準平原に近づく。表面は厚く土壌に蔽れるがその下には塊状の火成岩や褶曲した岩層が藏せられ、過去の高峯の存在を暗示してゐる。かくて山岳はもはやその遺骸を僅かに地上に横へるのみで、既に山岳の籍から除かれるのである。

C. 氷蝕及び雪蝕

水の變態として氷雪の侵蝕力は水以上に山相に特色ある影響を與へる。岩石の空隙に含まれた水は氷結と共に著るしく膨脹して岩石を押し割り崩壊させ、又氷雪との接觸によつて更に著しい破壊蝕磨を行ふ。一地方に於ける氣温が適當に低く、一年中に降る雪量が充分に多いと積雪は夏を経て融け切らずに残雪となり、これは年を逐うて蓄積凝固して所謂萬年雪となる。水蝕作用と風化剝行と歩調を保ちつゝ徐々に彫刻されゆく山岳が斯くして氷雪に蔽はれる時は俄かに迅速に破碎されて行く。かゝる残雪は特に谷の源頭にあたるタワリの下に溜り雪田Snow Fieldをなし、谷底も雪溪によつて滿される。かゝる残雪の更に再結晶し凝結した萬年雪Perpetual Snow Fieldは或る厚さに達すれば傾斜に應じて徐々に動くもののやうで、雪の下には結氷點附近に於ける温度の變化から劇しい岩石の分裂が行はれ岩片は萬年雪に運搬される。この作用によつて説明される山相は劍や蓮華連峯東西の岩峯で、そこには萬年雪に埋つた急峻な谷があり、谷の上のタワリは所謂窓が凹字狀に裂けて峻絶な相貌を呈する。殊に

其處では槍、穂高に見る如き岩屑の堆積の餘り無く、赤裸々な況態にあるのはその附近の積雪量を考へるときに今尙雪蝕作用Neivationの盛んなるを想はせるのである。

かゝる萬年雪が、適當の氣候の下では更に堆積し厚くなると壓力のために變質して粗い顆粒狀の、透明な青藍

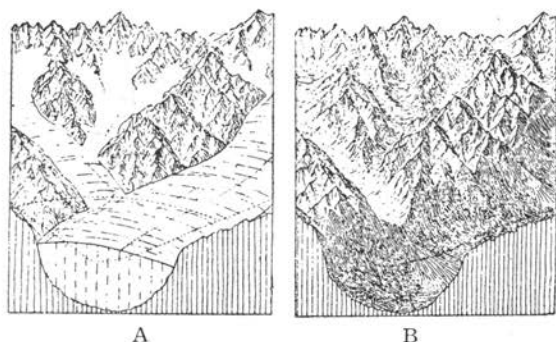
色のものになり、氣泡に富む白色部との互層で帶狀組織を呈する氷河氷氷河となる。こゝに至れば氷塊は可塑性を有し重力に屈從して低きに流動する。その際の下底の岩石に及ぼす壓力は甚大で、自身の重量

と間に挟む岩屑等によつて岩石面を鏡の如く削り研く研磨磨光の力を増し、岩石を破碎し持ち去る捕攫捕攫の作用も著しくなる。若しかゝる作用

が峯近くに行はれ、ば山體はその氷塊なりの雪田なりの周圍に甚だしく掘鑿され碗狀の斷崖を生ずるに至る。圈谷圈谷と言はれるのがこれ

で勿論萬年雪だけでは不完全な浅いものしか出來ず眞の氷河とよつて立派な碗狀のものになる。若し氷河が流動し長く続けば氷蝕氷蝕はそ

れと共に行はれて長くU字形の谷を刻む。破壊され切り出された岩屑はかゝる地形の末端にまで運ばれて堆積し堆石堆石をなし、又深く刻



第二十圖 氷蝕地形の一例(Davis)

A-氷期

B-氷期後

れて凹地は後に湖ともなる。

かくて刻まれた圈谷壁はサククリと割つたやうな巖壁で岩石の種類などには餘り關係しない。侵蝕の進むにつれて擴大し、遂には相隣るものが切り合ふやうになると斷崖と斷崖と挟む双の如き薄い巖の山稜則ちグラートGratと

かアレート^{A. ete}など言はれるギザ／＼した録尾根になる。若しかくて三つかそれ以上の圈谷にて挟まれたならばそこに生ずるものは鋭い尖峯であつて、アルプスで見らるゝやうな何々^{ニヒツツエ}とか、何々ホルンとか、ダン何々とか、エグイユ何々とか言はれるものになる(第二十圖)。

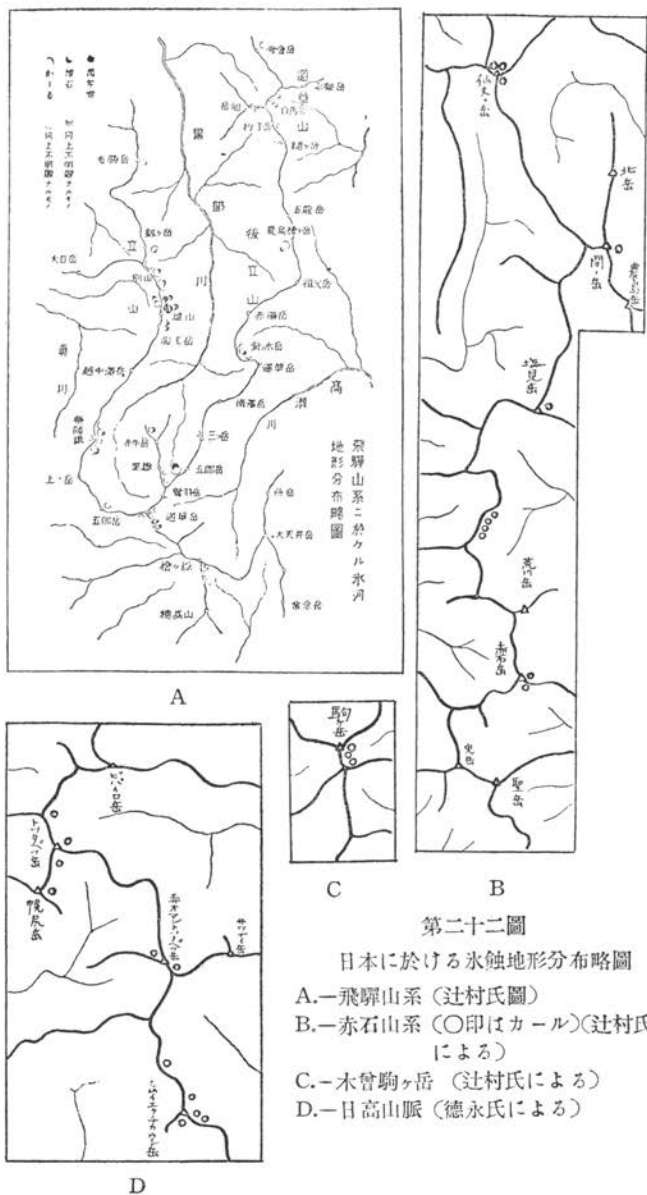
飛驒山地の最高峯、槍ヶ岳のオベリスクは真にかく氷河に圍まれて生じた尖峰でないにしても、少くとも他の



第二十一圖 日高山脈エサオマントツタベツ岳の
カール(山縣氏)

諸峯に見らるゝ圈谷地形から考へると曾ては雪線上^{Arctic line}に聳え氷雪の激しく襲ふた舞臺であつたことを想像出来る。穂高の峻嶺もそれまでに刻みこんだ跡は潤澤の大きなカールの殘片にこれを見ることが出来る。然も其處を埋める氷雪は既に奥穂高、北穂高の嶺上から不斷に落す岩片を運び切れず、淡雪のやうなザクが山層を飾つてゐる。本邦のカールは多くこの程度若しくはもつと不能力になつたものが多く、既にその役割を果して今は日々崩壊してゆくのみである。かゝるものは立山、薬師岳、黒岳、野口五郎岳等にも見られ、別山、眞砂、大汝、雄山などの峰頭はカールとカールの間に波頭のやうに秀でてゐる。南の方では赤石、魚無河内、仙丈及び木曾駒等にも知られ、他の地方では北海道の日高山脈に近年見出された(第二十一圖)。それは幌尻岳、エサオマントツタベツ岳、カムイエクチカウシ等に見られるものでカールの下底の約千六百米にあることは本州のそれが二千五百五十米を平均とするのに比較するとそこに千米近い開きのあるのも興味深いことと思ふ。而してそれら氷河遺跡の高度より高く

辨える所の御岳、乗鞍岳や、北海道では大雪山や千島の阿頼度山、千倉岳の諸火山に何等かゝる地形の見出されないのは、畧々カール成生の時期を暗示するもの様で面白いことである。即ちそれ等新しい火山の成生以前に



第二十二圖
日本に於ける氷蝕地形分布略圖

- A. 一飛騨山系 (辻村氏圖)
- B. 一赤石山系 (○印はカール) (辻村氏による)
- C. 一木曾駒ヶ岳 (辻村氏による)
- D. 一日高山脈 (徳永氏による)

既にカールは存在したと見做してよく、恐らく洪積期初期であらうと言はれる(第二十二圖)。

尚こゝに注目すべきはこれ等カールの總てが山稜の東乃至東北側にのみ發達してゐる事で、その理由は現在で

もその側に特に残雪の多いことで理解出来やう。尙辻村先生は單にカールや残雪の分布に斯かる差があるばかりでなく岩の多寡、傾斜の大小までが東西兩山側でクッキリと分れてゐることに注目せられ、白馬岳や杓子岳、鐘岳等の信州側と越中側に急峻さに於いて著しい差違のあることを例にあげて居られる。かゝることは立山、雄山、黒岳、薬師岳、その他に於いても見られると言はれ、これは谷の侵蝕の差によるか、斷層によつて生じたか、積雪量と氷雪蝕の差によるかの何れかなるを考へられ、大部分は第三のもので説明出来ると考へて居られる。



第二十三圖 雪窟

若しかくの如くにして氷蝕が著しく進むならばその究極はやはりその氷蝕の規準面に從つてその高度に近く準平原とも言はるべきものが出来得るであらう。

以上述べた氷による侵蝕でなく、現在降る雪によつて生じてゐる地形に雪窟がある。

これは多く山稜に平行な冬季の卓越風の風下側に見らるゝ浅い窪みで、夏は残雪や渚水を以て、尾根の縦走者に快い宿り場を與へてゐる。飛驒山地の薬師岳、後立山、槍ヶ岳の北鎌や東北飯豊山や朝日岳等に於いてその好例を見ることが出来る(第二十三圖)。

かゝる氷雪の侵蝕様式の外に主要な破壊力を持つものとして雪崩avalancheをあげることが出来

る。この力に注目した學者は意外にも少いやうであるが、一度大きな底雪崩のデブリーヤ、年を重ねて落ちるラヴィンネットクの凄慘な跡を觀たる登山者は、その削磨の機械力の如何に大であるかを感じずには居られぬことと思ふ。本邦にも山上や、谿間にガレやザクをなしてゐるものの中には確かに雪崩によつて生じたものがある。

以上述べたものの外に著しい侵蝕力を有するものとしては海水や生物等を擧げることが出来るが、山を削りなすと言ふ事に重きを置く故に此處には述べぬことにする。

3. 建造作用 以上に於いては何れも破壊侵蝕する作力のみを述べた。山岳はそれによりて完成せられ、

且つ自ら滅びる。此處にはその山岳彫刻の素材を與へる地質的作力に就いて記さう。侵蝕の舞臺を造り上げるには先づその材料が擇ばねばならない。岩石が即ちこれで先づその成生が建造に先立ち或ひは伴ふ。堆積作用や岩漿凝固がこれである。而して舞臺を組立てるものは火山噴出や地殻變動による建造作用である。

A. 岩石成生 Talians rocks

地殻を構成する主たるものは岩石であつて、それは現在に於ける性質や地質的狀態によつ

て火成岩、堆積岩、變質岩に大別される。その中の火成岩こそは岩石の最も根本的なものであつて實に地殻岩石

圈の九十五パーセントを占めてゐるのである。既に述べた侵蝕作用により又後に記す種々の作用に依つて火成岩

や變質岩又は堆積岩よりその材料を仰ぎ堆積したものは堆積岩であつてこれは地質現象の二次的な産物に過ぎな

い。かくして生じた各種の岩石は更に附加的な地質現象により壓力や熱の異なる狀態に置かれてその性質を變じ

變質岩となるのである。

註 地球の平均密度は約5.5である。然るに地表に現出せる岩石の比重の平均は2.5より3.0の間にある。この事は地球

内部に何か更に重きもの存在を暗示してゐる。今日までの結果によれば、地球の中心部はニッケルと鐵とを主成分とする比

重75内外の物質がこれを占める。Nife帶と呼ばれる。その上には地下約100—300 軒迄は平均密度3.5程の流體狀の珪酸

鹽よりなるSima帶(珪酸とマグネシア)がある。吾人の住む地表、即ちSiE帶(珪酸とアルミナを主成分とする珪酸鹽を

以て構成す)は固結して下のSima帶上に浮遊するものと考へられてゐる。この大部分凝固した部分は地表の他の部分即ち氣圈、

水圈に對して岩石圈と呼ばれ又該圈下の部分は重圈と稱せられる。如上の帶狀組織の境は勿論確然たるものではないが地震波

の地下に於ける反射等の研究等に依つても地下に密度の急變する箇所の存在することは確かめられてゐる(第二十六圖)。

a. 火成活動——火成岩 その真相こそ未だ充分には知られてゐないが、地殻をなす岩石圈下乃至圈内

には岩石の熔融状態にある岩漿の存在が想定されて居る。火成岩はその岩漿の冷却凝固したもので、その経過及び環境に依つて幾多の岩種を生ずる。若し深い地表下に塊狀に進入して凝固すれば深成岩となり、地表に噴出して急激に冷却すれば今日熔岩として見るやうな火山岩即ち噴出岩となり、地殻中で脈狀に貫入すれば脈岩としての特徴を具へるに至る。即ち岩石はその原母岩漿の化學成分と凝固の物理的状況で種々の組合せの化學成分、礦物成分、構造、産狀を呈するものであるがそれ等の種類については後に述べる所があらうと思ふ。

b. 堆積作用——堆積岩 既に記した風化や侵蝕によつて幾多の岩屑が生ずるが之は匍行し落下して崖や山腹に堆積し崖堆talusをなす。登山者はその崖堆の模様でその上方の岩石の種類や風化の程度、片理、節理、落石の多少を知る手がかりを得ることが出来る。

註 ハイムに依れば崖堆の傾斜の岩石による差は次の如くである。凝灰岩の如き脆く小砂片になり易きは 25° — 30° 。(砂岩も恐らくこの程度ならん—筆者) 粘板岩では 25° — 30° 。石灰岩では 30° — 35° 。片麻岩では 35° 。又花崗岩の如き多角片に割れるものは 35° — 40° 。細屑物の堆積するに當つては各々それ自身の性質によつて安定な角度に迄崩れて後、靜止するのが普通なるは砂遊び等の際に明かに見られる。若しそれが水を含んで居れば吸着度を増して急な錐をつくるが燥くと共に割れて安定角安息角まで崩れる。安定角以上の傾斜に堪えて急立するのは根のある岩山のみであるから若し普通以上の斜面を持つ崖堆があればそれは未だ不安定な尙崩れかゝる餘地のある——例へば崩れて程経たず充分セトルしてゐない——危険な状態にあると見てよいのである。

又崖崩れ、地沁り、雪崩や火山の岩片の押し出し等の堆積に依り生じた崩堆等はその土地の地質狀況を暗示する事大で、足場の崩れや轉石にさへ注意すれば意外の近路を登山者に與へる事もあるが多くはその上方に惡場の

あることを警告してゐるのである。若し斯かるものが長い地質的年代と共に固結すれば著しく角礫を含んだ堆積岩即ち角礫岩となる。しかしかゝるもののその儘の位置で凝固することは寧ろ稀で、多くの岩屑は泥土、雨水と共に下方に移削し谷に入り河水、氷雪に運搬されるに至る。これ等の流され運ばれるに當つては、河壁、河床に衝突し



第二十四圖

飛驒山地東邊に於ける扇狀地と斷層地形の一例——唐澤山、兩引山間の凹所を南北に斷層走り、之に沿つて小斷層谷發達す。神戸原は標式的扇狀地形。

て水と共に侵蝕を助け鑪の作用をなし、且つ自らも磨蝕によつて丸味を帯び細片するに至る。かくして運ばれたるものは流水の運搬力は流速の六乗幕に比例するから若し水流緩かにして岩片の運搬力無き地點に至ればその一部を沈澱せしめ河原をなすに至るものでその例は屈曲點の内側や、合流點の中間、河巾廣がり緩かに流れた所等にこれを見る事が出来る。これ等の所在の豫測も平常地形の觀察に

Vertical plain, flood pt.

注意を怠らぬ者に或る程度迄可能な事である。かゝる堆積層が廣く河岸を埋れば沖積原とか氾濫原と呼ばれるものを作る(第十六圖)。若し河川が俄かに開けた平坦地に流出すれば多く上述の理由から其處に圓錐乃至扇狀の緩い堆積地帯をつくる。沖積扇狀地と言はれるものがこれで、その好例は松本、大町の西邊や木曾山脉の東側に見られる(第二十四圖)。同じ現象が湖沼や海洋に開く河口に於いて起れば、殊に後者に於いてはもつと大規模な堆積地

帯を成す。^{101st} 三角洲と言はれる三角形の頂點を河口に向け海の方に擴がる緩い平原がこれである。この地帯に至り始めて侵蝕によつて碎細された岩屑はその安住の地を得、その經歷や環境に依つて種々の状態に堆積する。未だ充分磨磨されないものは角礫として、充分磨蝕されたものは礫として、更に細分されては砂や粘土として、その大きさに依り、又流出の順序と自身の重量による沈澱の速さに従つて、順序正しく沈澱層を形成する。更に細粉されて浮游力を保ち沖遠くに流出されたものもやがては沈澱して海底に成層するに至る。^(註) 若しかゝるものが固結するに至らば岩石としてその沈澱の場所や構造や成分により種々のものを生ずる。沈澱に際し生物の遺骸を共に埋めればこれは岩石中では化石^{化石}として産するに至るのである。

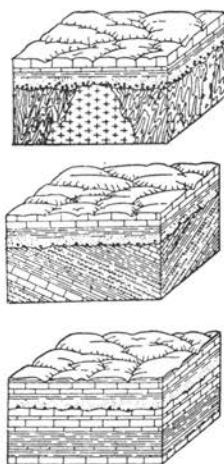
註 かく沈積の境遇を異にする事を相^相と云ふ。大別すれば海相、陸相で外に河口、入江等の相があり、海相中に瀕海性、淺海性、深海性等があり何れも各々特徴を有す。外に水成層、風成層等もある。堆積岩を研究してその相を明かにする事は古地理、即ち過去の海陸状況の變遷を知る上に大切なことである。

堆積岩はかゝる水侵の結果によるもの他に火山の放出物による火山灰や岩屑の成層せるもの、風にて飛來し堆積せるもの、又動植物の遺骸の著しく堆積せる有機的なもの、水中に溶解せる鹽類の晶出せる化學的なるもの等種々あるが、その最も主たるものは初めの水成のものであるから之を水成岩^{Aqueous rock}と呼ばれることが多い。然してこれ等堆積岩の特徴とすべきは今述べた沈積の新舊の順序に層をなすことで成層岩^{Stratified rock}とも呼ばれる所以である。かゝる沈澱層は沈積中に他力の影響を受けなければ一般に層と層の平行な整合の位置^{Correlation}にあるが、若し沈澱中に地盤に變動が起つて沈澱帯が傾いたり、海流が變化して沈積形式を變へたり、又甚だしきは一度陸化して侵蝕を受けた後に更めて堆積が行はれると、其處には今述の成層状態と異なつた堆積が開始され、多くは下盤と不平行であり又

下盤を切つて接してゐる不整合關係を生ずるに至る(第二十五圖)。

然してかゝる堆積物が大陸の縁邊に流出されて年を重ね非常な厚層をなせばその重量でその一帯は次第に沈下

A
B
C



第二十五圖

不整合の形式三例

- A. 無整合
- B. 傾斜不整合
- C. 平行不整合

し、それに依つて一層、より多くの沈積を可能ならしむる。これが永く繼續すれば海陸兩地帯には荷重の不均衡が生じ、その歪は蓄積されて遂に變動を起す起因の一つとなる。この現象は後に述べる造山運動の原因の一として考へられるもので、かゝる堆積帯を地傾斜と言ひ實に山

岳の胚種となるものなのである。

c. 變質作用——變質岩

變質岩の元來岩石として完成したものが二次的に變化を受けた産物なること

は既に述べた。この變質をあたへる作力を變質作用と言ひ新たな物理化學的狀態に置かれたるに依つて起る。

Metamorphism

その力の主たるものは熱と壓力で前者は地熱及び岩漿の高熱と接して起る接觸變質、後者は地下深所に於ける地

Contact metamorphism

壓及び地殻の變動に際して生ずる高壓による働力變質がその主たるものである。かゝる作力によつて原岩石はそ

Diatremic metamorphism

の構造を變じ礦物組成を變じ、或ひは岩漿の注入融解によつて新たに物質を加へられて化學成分すら變じて新たな性質のものに生れ代る。

B. 地殼變動特に造山運動

以上に於いては簡略乍ら岩石生成について記し、そのためには必ず地殼變

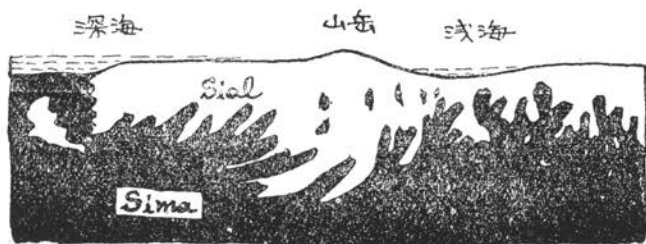
動が先立ち又は伴ふことに注意した。かゝる地殻變動の性状及び推移等はその現れである現在の地質の周到なる研究から相當知られてゐると言つてよいが、最も興味深く、且重大なるその原因特に發生に關する機作に至つては今の所、殆んど假説の範圍を出でないのである。其等諸説は各々其根本の立場に高低大小があり一概に之を見るは難いが凡そ次の三つの範疇に含まれやうと思ふ。(i)一つは變動の原因を地球外部に求むるもの、(ii)他は地球自身に想定するもの、及び(iii)其等の中間をゆく説である。前者(i)に屬する代表的ものは天文學的な立場で地球の極移動に其原因を求め、その結果は地球上の物質配置に變位を起さしめると考へる。有名なウエガナーの大陸漂移説などは之に根本を置くものであらう。他方、從來考へられた地球の冷却に原因を置き其結果は内部の收縮を來し上殼に歪を生じて變動を起すとする(ii)の説は、地球を天體の一つとして見る點では(i)に屬し、其の收縮を考へる點では(ii)に屬する。ジウス、ハイムによつて完成されたこの收縮説は新興の前説に對して未だ尙ほ根強い力を持つてゐて其亞流を汲む學者は今も決して少くない。(ii)は以上の如き他よりの影響を考へないで、單に地殻均衡の理よりのみ、又は地殻に於ける物質の移動から説明せんとする試みである。前者の例としては侵蝕堆積の結果、地向斜に過重を生じ地殻の均衡破れて地變の變動生ずるとする説、後者は岩石中に含まれる放射能性物質のエネルギーの蓄積により地殻内部を融解して流動し、その爲に地殻上部の變動を捲起すと考へるヂョリーの説、其他單に地殻下の岩漿の對流や移動によるとする説等區々ある。又かゝる地變に依つて現在の構造に迄變化する様式に至つては一層學說紛糾し、或ひは水平の横壓を主力とし或ひは上下運動に由つて起る上層の滑動を、或ひは單なる上向運動を、又其等による曳裂を等と枚擧に追なき程ある。かゝる地殻運動の、從つて造山力の根本問題については山を思ふもの誰しも知求する所であらうが、此處にはそれを詳しく述べる餘裕無きを遺憾とする。

註一 既に早くテイラーもこの思想を抱いてゐた様である。餘りに有名な此説は既に新聞雜誌に於いて充分にも説かれてゐるから此處には述べぬ。この流れを汲む有名な説にアルガン、シユクタウプ等のものがある。デヨリー、テイラーも之をとり入れてゐる。シアルの移動の可能及び實在については之を承認する學者も少くないが、ウエーゲナーの言ふが如き意味に於いてかどうかは疑ひが未だ多く殘されてゐる。

註二 我々の小學校にて教はつた説である。

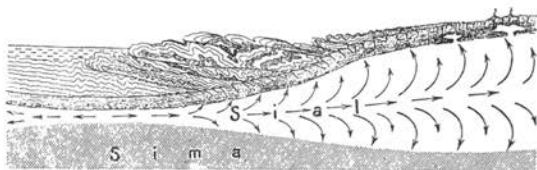
註三 チャンパーレンは地殻の收縮によつて、頂點を地内に有する楔状の地塊生じ更に壓迫されて上昇、山地を造ると言ふ所謂楔状説を説いた。コーパーは固結し變形し難き堅固地塊(クラトローゲン)を考へ地向斜はその間に在る可塑的な地帯即ち造山帯(オロゲン)であると假説する。そして收縮によるクラトローゲンの壓迫でオロゲンは褶曲、隆起すると言ふのであるがその運動は従來の説の如く一方向なものでなく兩側地塊に衝動する二面的なものであるとして各地の山脈の構造を巧みに説明した。この衝動により乗り上げた部分には縁邊山脈で最も隆起せるも

の、その間には中間山地なる凹地帯があるものとし、チャベットとヒマーラヤ、コンロンの關係などを例にあげてゐる。彼によれば日本は沈水せるオロゲンなりと言ふ(第四十六圖C)。



移動方向 →

第二十六圖 地殻均衡による地殻の構成 (Wegener による)



第二十七圖

岩漿の移動による地膨及び上層の滑動 (Haarmann)

註四 ヒマラーヤに於ける印度調査所の測量調査は地殻下の構造觀に革命を齎した。即ち大山脈の麓に測量錘を垂すと山地の引力で僅か垂直より山地に傾くがこの偏差は地方全體の密度均一分布を假定した計算の結果より常に小さい。この説明は山の下ではシアルがシマ中に深く入り且平原下では山地より更に地表近く迄シマが來てゐるとする。即ち液體上に浮ぶ固體と同じ様に高低互ひに釣合ひを保つてゐることが判つた。地殻均衡説がこれである(第二十六圖)。

註五

レイアーは大陸縁邊の勾配状態により其斜面上の堆積層が地的運動をなし變動を生ずると云ふ地誌説を説いてゐる。Amphibere, Tanunani, Merana, Dierna, Yariid は地向斜帯に於ける温度上昇による地層膨脹を地變の原因に擧げてゐる。Amphibere, Tanunani, Merana等は岩漿溜内の物理的變化、岩漿凝固等によつて生ずる深層流動を地變の起因としてゐる。Hailmannの垂直動説は地下岩漿の移動と言ふ點でAmphibereの後を承け、之によつて地膨が生じ上部に乗る岩層はこの垂直動による高度差のために不安定になり傾斜の方向に滑り出し褶曲を生ずると言ふのであるが、このシマの移動の根本原因は矢張り極移動に求めてゐる様である(第二十七圖)。この説は他説の水平的側壓による褶曲を主とするに對し、垂直動を重く見た點で注目されてゐる。Deiryは地殻の移動や滑動や熱による膨脹の各説をとり入れた一説を提出してゐる。之は先づ大陸の移動による分離を考へる。分離せる陸塊は各々ドーム狀の膨脹をつくりその間に地向斜を胚胎する。地向斜は其後陸塊間の壓迫にて褶曲し、下端にて衝突破碎せる陸塊の破片はシマ中に落ちて熔解し膨脹する。この膨脹によつてその上部の地向斜は高きに迄持ち上げられ山脈をつくりと言ふのである。Sutcliffeは近年説を成して、大陸漂移の原動力は地球自轉の影響による陸塊の遠極運動である。流動によつてその前面に生じた造山帶下にはかゝる運動後、極に向けての岩漿の移動が起り、これに伴はれて大陸塊は近極的に移動しその一部は分裂して地向斜區を生ずるに至ると巧みに述べてゐる。

註六

地變の起因、推移に關しての説は斯く全く渾沌としてその歸する處を知らざる現状である。將來發達し充分可能性のあるのは其等の中の放射能地殻變動説と地殻漂移説とのよき調和によつて生るべき思想であらうと言はれる。

斯くして生ぜる地殻變動の中、隆起建造に關係し陸地を崛起せしむるものは火山現象と造陸運動であるが後者はその中でも特にその規模、即ち巾や、廣がり、高さ及び變動度等の關係により造山運動と看做されるものに依

るのである。この後者こそ高山岳を造る主力であつて、今日見る世界の高山連脈、ピレネー、アルプス、ヒマラー

ヤ・ロッキー、アンデス等は何れも第三紀に於ける造山運動によりてその骨格を崛起せるものに外ならぬ(第二十八圖)。

註 斯る造山帯の地層を見るに何れも甚しく厚き地層よりなる。この事實を説明するために地向斜なる概念が考へられたのである。之は地殻中の可塑的な部分に於ける特殊な堆積帯で多くは堅固なる地殻(コーバーのクラーターゲン)の縁邊にあり、大陸よりの堆積物の供給につれ水深を回復し更に堆積をつゞける。かゝる地帯は將來の造山運動の爲に備へられた様な地帯(オロゲン)で之は大陸の壓縮によつて隆起し山脈をなすとコーバーは説明した。例へば北歐とアフリカ間の地向斜テチス海が兩地塊に壓迫され紛糾してアルプスになつたと言ふのである。

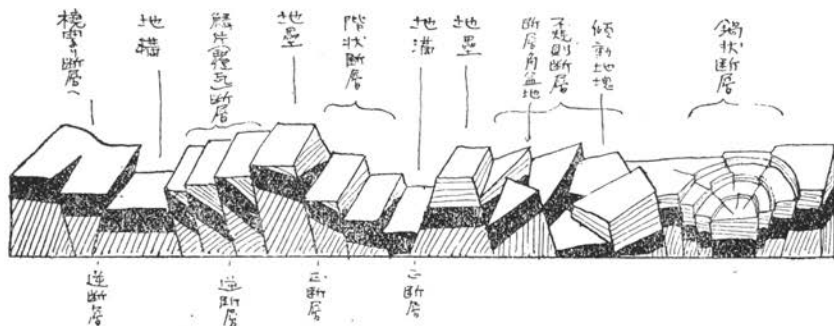
かかる造山運動を受けたる結果はその形式により多様の結果を生ずる。地表の斷裂によつて地塊に分れその個々の隆起、傾動せるものは所謂斷層山地又は地疊山脈で、本邦の木曾、赤石、飛驒の諸山塊は何れもこの種のものに當る。又他の地方では關西の六甲、比良、奥羽の飯豊、朝日、北海道の日高山脈等にその例を見ることが出来る



第二十八圖 世界の若き造山帯 (Staub)

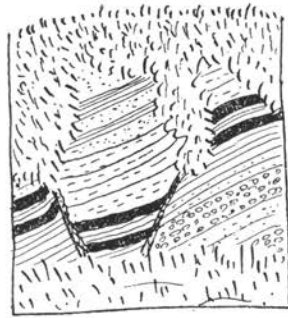
(第二十九圖)。こゝに興深きは斷層の現象で、多く破壊が建設の初まりであるやうに是も地殻を斷裂せしむること

によつて新しい建設に與かる事である。斷層の形式は種々あつて之を究めることは次の褶曲を研べることゝ共に

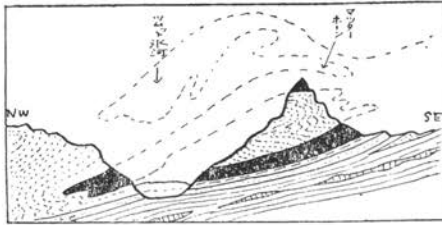


第二十九圖 断層の種々なる型の模式圖（主として Sieberg による）

地質構造を知る大切な手懸りである。かゝる断層に圍まれて陥没した地形は現在の諏訪湖附近に見られる様な地溝で、若し其等に圍まれて隆起すれば木曾駒の如き地壘として聳える。かゝる地殻の大きな喰ひ違ひが地表に現れたものは断層崖で甲斐駒の東面や石槌山脈の北面、アンペツ山脈東面等はその好例を示す。勿論大きな断層崖の急斜面は、長い間繰り返された多くの断層崖の總和として徐々に高くなつて成長したもので、その間には侵蝕作用が働いて急峻な澤や谷が之を刻んで居る。一番新しく生じた断層崖のみが山脚を切つてその先端に三角形の平面を持つ山嘴則ち末端切面をなして直線的に列んでゐる。又かゝる断層崖下には小さな扇状地を築いてる事が多い。飛驒山脈東面に見る地形は凡そかくして生れたものである(第二十四圖)。若しかゝる断層群の配列が地表に於いて階段状に現れれば階段断層と呼ばれる地形を生ずる。之等地形に現れるが如き断層の大部分は比較的新しい出来事であつて、大抵は地殻に蔽はれその所在を明かにせぬのが多い。此等の岩石の露出する個所に現れたのを見れば、地層の断裂によつて、異種の岩石が一條の裂線を以て接したり、同種の岩石や一続きの地層が喰ひ違つて居たりしてゐる。又かゝる断層線に沿ひ岩石が破碎して断層角礫岩を伴ひ断層面には甚だ



第三十圖 斷層露頭の一例



第三十二圖

マッターホーン附近のナッペ構造 (Argand)



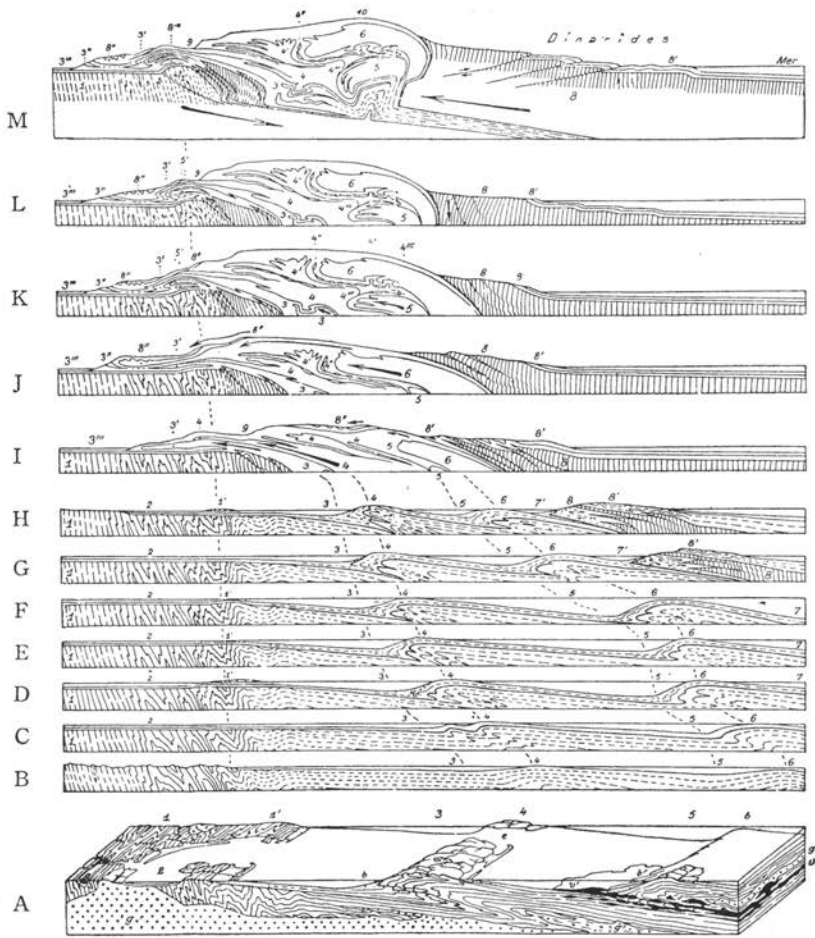
第三十一圖 褶曲の種々なる型

1011
frictional
磨かれた鏡肌を生じ、間に粉
碎された岩粉ネバ或ひは埴土を挟んでゐる。之
等は何れも斷層の存在を確かめる鍵となるもの
である(第三十圖)。

かゝる斷層を主因とせず甚だしく地殻を崛起
せしむると考へられるものにはその膨起による
撓曲がある。之が強度になれば壓縮による褶曲
Overthrust, Decken
推被せや、尙一層組合ひ、食ひ入りして更に複雑
な構造を生ずる(第三十一圖)。ナッペやクリッペン
(註)
と言はれるものはかくして生ずるものである。

註 第三十二圖、第三十三圖及び四十五圖A参照。

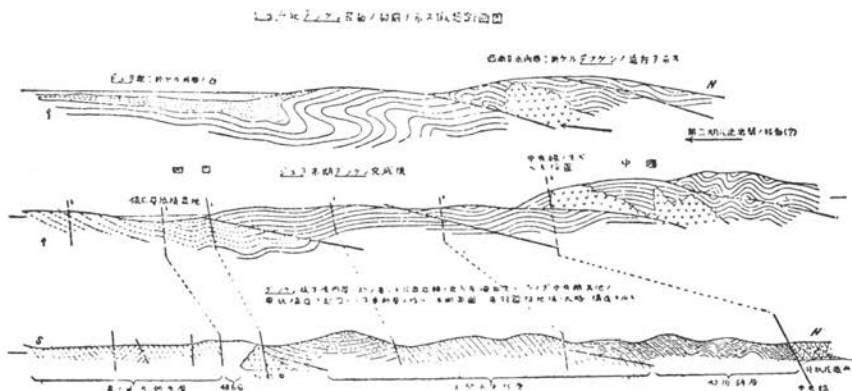
ロッキー、アンデスの如きは比較的簡單な運動
にてその位置に迄隆起せることは、其等の特徴
づける水平な縞状の岩壁によつて知られる。地
殻の擾亂の最も甚だしき種々の表現は今日のアル
ペンに種々の典型を見ることが出来、かゝる



第三十三圖 西部アルプスの成生 (Argand)

- A. に於ける基本構造
 1. 前方陸塊 2. 陸海 3. 前方海淵 4. 前方山脈 6. 第二山脈
 成生状態
- | | | |
|----------------|-------------------|-------------|
| A. アルプス山脈胚期の状態 | B. 中部石炭紀 | C. 中部三疊紀 |
| D. ライアス紀 | E. 中部侏羅紀 | F. 上部侏羅紀 |
| G. 中、上部白堊紀 | H. 中部ヌムリテイク及下部漸新紀 | |
| I. セント、パナナド相 | J. ダン、フランジュ相 | |
| K. モンテローザ相 | L. アドリア沈降相 | M. インスブリアン相 |

構造の研究は實に其地を研究室として得られたのである(第三十二圖、三十三圖)。しかし現在見らるゝ複雑な



第三十四圖 西南日本の造構運動の發達 (小澤氏)

構造はその成生と同時に今の高度を齎したとは考へ難く、多くは地下深所に於いて高温高壓の下に相當の可塑性を以て造構せるに相違なく、それが更に大なる隆起を受けて今日の位置に達したとするが妥當であると言はれる。アルプスやヒマラーヤなどの長大な褶曲山脈では花崗岩であれ石灰岩であれ、あらゆる堅岩は恰も鉛の如く揉み潰され、引き延されて恐ろしい程烈しい褶曲を造つてゐるを見れば、かゝる造構造山力の如何に強烈至大なるかを察することが出来やう。

然し斯くの如き造山運動はその直接の表現として之を山に見る事は殆んど不可能で、その原形と稱せられるものも成生と同時に働きかける侵蝕力によつて刻まれ、成長終つて後は更に彫刻されて谷と峯と頂きと山腹とを具へ、始めて山と感得されるのである。

C. 火成活動特に火山

a. 火成活動 地殻變動の素因として岩漿が相當の役割を勤

めると考へられて居ることは既に述べた。かく岩漿の活動例へば

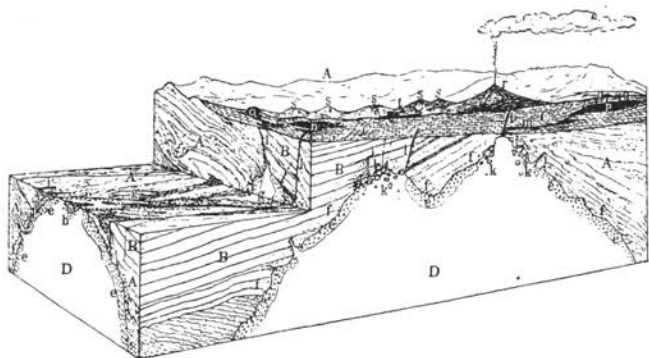
Intrusion

貫入によつて地表に影響を與へ、隆起陥没等の轉移を齎し、又地

表に噴出して火山を建設する如き現象を火成活動と言ふ。地震の

Extinction Volcano
Tectonic activity Earthquake

多くはかゝる活漿の活動に依るものとも言はれる(第三十五圖)。この作力のうち特に火山の噴火は吾々に山を作
るものとして注意を惹く。吾國に於いて古來名山とされしものの多くはこの火山であるが、これは平野の上にも、



第三十五圖 火山現象概念圖 (Neumayr-Suess)

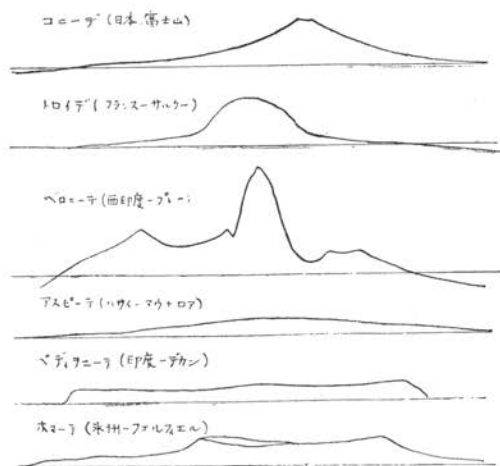
- | | |
|------------------|---------------|
| A. — 古褶曲山地 | e, m. — 岩脈狀噴入 |
| B. — 稍變動を受けし沈下地塊 | r. — 活火山 |
| C. — 海浸にて堆積せる地層 | s. — 休火山 |
| D. — 深成岩塊 | t. — 噴出せる熔岩 |

海濱の近くにも、又群山中にあれば一きは高く孤聳し
てみて街道筋や都會などより眺めて特に秀麗な感じを
起させ又火煙を吐きなどして人に畏敬の念を起させた
るに依るのであらう。かゝる火山の成因につきても未
だ満足すべき程の説はないが要するに地殻變動の一つ
の表現なることは特に變動の激しい地帯に沿ふものが
多いことで判らう。

火山活動に依つて火山を築く主なるものは火山岩屑
Lava flow, Ash flow, Bomb, Tephra, Pyroclastic
flow, Zeolite, Volcanic sand, Volcanic ash, Volcanic
sand, 火山砂、火山灰、火山塵等で、何れも噴火の際の熔岩
の或ひは山體の爆裂碎片物である。その中火山灰等の
固結せるものは之を凝灰岩と言ひ、水中等で堆積し層
状をなせば層灰岩と呼ばれてゐる。熔岩は岩漿の急激
Lava

に活動の中心より噴出せるものが、空氣に接觸し瓦斯が發散する結果粗鬆多孔質になつたもので、その性質は含
有成分によつて著しく變異を示す。主成分は Al, Fe, Mg, Ca, Na, K 等の硅酸物であるが、その SiO_2

Al_2O_3 , Na_2O , K_2O を主とするものは**酸性質** Acidic と言ひ粘着性で色は白色乃至灰色である。又 CaO , Fe_2O_3 (若くは FeO), MgO を主とするものは**玄武岩質** Basaltic と言ひ流動性強く色は黒色に近い。熔岩が火山灰、礫、塵等と共に雜然混じて膠結したるものは**集塊岩** Agglomerate と呼ばれる。かゝる熔岩の壞片物たる火山滓は、火山體の碎片と共に山體を蔽ふ



第三十六圖 火山の基本型 (Schneider)

所の大部を占めてゐる。

火山の活動の形式はその原因によつて、或ひは**爆裂** Explosion、或ひは熔岩流出など種々のものが見られる。かゝる活動はその構造岩漿其他に支配されて長短、盛枯の運命を持ち、聽ては休止し、衰滅するを常とする。硫氣孔、蒸氣孔、泥火山、溫泉等は多くかくして失はれゆく火山力の挽歌である。殊に硫氣孔は噴氣に依つて盛んに岩石を分解して粘土とする爲にあたりを藥研のやうな形に深く崩壊し自ら侵蝕して凄愴な觀を呈することは登山者のよく見る所で、各地に於いて何々地獄と言はれるのは多くかゝ

る状態を言ふのである。(註)

註 例へば立山の地獄谷の如きである。

之等多種の構造物質、活動様式によつて造り上げられた火山は隨つて色々の形態を以て聳えるのは必然で、それは次の如き數種に大別されてゐる。

b. 火山の形態 (第三十六圖、第四十圖及び第四十一圖)

コニーデ。我々が火山と聞いてすぐ思ひ浮べるのは富士の如き圓錐狀の山である。その端正優美な斜面とおほらかな裾野とは古へより今に至るまで嘆賞者を失はない。かゝる山はその頂上等に於ける火口壁の赭色や黒色の氣味悪い縞をなす累層を見ても分るやうに、或ひは熔岩を流し、或ひは擲出物を飛ばして幾千百年の間に積上げられたものである。その爲に成層火山とも會つては呼ばれ近來はシ^rナイダー^r氏の分類に従つてコニーデ^{Koönide}と名付けてゐる。頂上の火口はその活動力により淺間山や霧島山のやうに今尙煙を噴くものや、富士やその他の様に既に埋れるもの、さては霧島の大浪池のやうに池水を湛へてゐる等ある。多くのコニーデは外見簡單の様でもそれに築き上げられる迄には活動區域やその力に幾多の變遷があり複雑な構造を持つてゐる。富士山の如きも多數の側火山を輻射狀の裂罅體上に噴き出して居り、又その多數を富士火山帶の方向即ち北微西から南微東の方向に密集させ、噴出物もこの兩方面に多い結果その裾野は多少階圓狀になつてゐる。寶永山も同じ方向の裂罅體に沿ふ三ヶの火口の珠數狀に繋つたものである。淺間山などは西から東に噴出の中心が移つて行つて二つの舊火口壁は牙山等の半月形の峭壁となつて残つてゐる。十勝の火山や木曾の御嶽等になると恰も山脈の様に見えるが實はコニーデの一方に連つたものなのである。乗鞍岳の如き大火山は更にいくつもの噴出點がより合つて生じたのである。

このコニーデは日本のみでなく世界を通じても甚だ多く日本に於けるその代表的のもののみでも千島の阿頼度、千倉、後鏃、松輪、チリップ、茶々の諸峯、北海道の知床火山列、阿寒、十勝、大雪山暈、利尻、樽前、有珠、蝦夷富士、ニセコアン、駒ヶ岳、東北地方の恐山、八甲田、岩木、岩手、鳥海、藏王、吾妻、安達太郎、磐梯、關東の淺草、守門、那須、高原、白根、男體、燧、赤城、榛名、淺間、黒姫、妙高、中部地方の白山、大日、乘

鞍、御嶽、八ヶ岳、富士、箱根、天城、九州の温泉岳、霧島、櫻島、開聞岳等枚舉に遑なき程である。

トロイデ。熔岩が硅酸質で流動性が小さい爲に、遠くへ流出せず一ヶ所に累積し盛れ上つて鐘狀の熔岩山をなしたり、その頂が後に扁平にひしゃげて鍋狀になつたものをトロイデと呼ぶ。この種のものには噴火口より一杯に溢れ出たもので頂上とて火口の様なものはなく以前には塊狀火山とか乳房山とか呼ばれてゐたもので、その成生の新しいものとして知られたものには樽前山火口内の圓頂丘がある。かゝる熔岩の溢出が度重なれば、やゝ複雑な急峻な鐘狀の火山體をつくり、火山力が一つ所に永續するか度々現れると火口も絶頂に生ずる場合がある。この種の火山も日本には相當あつて、例へば千島の根茂岳、黒石岳、北海道の蕙庭岳、風不死岳、中部の鷲羽、伯耆の大山、出雲の三瓶山、豊後の鶴見、由布、九重の諸火山などこれである。この種のものゝの活動して居る珍らしい例は神河内に臨んで聳える焼岳で、かゝるものゝ構造は現在の噴火口壁に窺はれる如く全體が厚い緻密な火山岩で構成されてゐるのである。

ペロニーテ。前者より一層粘性甚だしく舌狀若しくは針狀の熔岩塔をつくるものをペロニーテと言ひ、モンブレー等はその標式的のものであるが山岳をなす程のものはない。日本では有珠火口内の大有珠、小有珠、天城山の矢筈山等が之に當る。

アスピーテ。前二者と全然反對の性質を有するもの、即ち熔岩は極端に流動性に富み遠く流出しその結果扁平緩傾斜の山體になつたものをアスピーテと云ふ。爆發的な噴火は割合少いから火山灰砂の如き擲出物層は稀で熔岩層のみが層々相累つてゐる。その中心には前二種の火山が主として爆發で生じたものであるのにこの種の火口は陥没によつて生ずる。その好例はハワイのマウナロア等で日本ではこの例は余り多くなく、北海道の暑寒別、

クマネシリ、高根ヶ原、朝里岳、狩場山、奥羽の森吉山、八幡平、月山、上州の苗場山、信濃の霧ヶ峯、蓼科山、越中の立山、肥後の阿蘇山、朝鮮の白頭山、漢拏山等漸くこれに近いと言はれる。而もこれ等の多くは既に相當の侵蝕を受けてゐて僅かに山頂部に高原狀の臺地を残してゐる程度である。立山に見られるのはこの不完全に發達したもので彌陀ヶ原や五色ヶ原、雲の平等の熔岩臺地は已に侵蝕を受け、前の二つは濁川谷に臨む急坂に切斷され、彌陀ヶ原の西方を蠶食して稱名川の急崖に稱名瀧をかけてゐる。雲の平は元來黒部五郎岳や藥師岳の下まで擴がつてゐた熔岩臺地であつたものが黒部川上流によつて切斷されたと辻村先生は説かれて居られる。

ペディオニテ。前者程の傾斜は持たずに厚い廣い熔岩臺地を造るものをペディオニテと言ひ前者と同じく玄武岩質熔岩に往々見られる。流動性大であるためこれのみでは山地をなすこと少く本邦では僅かに耶馬溪、屋島、澎湖群島、紅頭嶼等がこれに屬すると言はれてゐる。

ホマーテ。以上のものと違つて熔岩層をさして交へずに火山灰、火山砂礫等の擲出物のみが堆積して圓錐形をなしたものはホマーテと言ひ、瓦斯爆發力の強大なのがその主因であるから従つて火口は高さに比して著しく大きい。故に大火山をなすものは少く火山發育の初期として僅かに見得るに過ぎぬ。神津島はその一例である。

マール。前者より一層簡單な爆發によつて火口の周圍に僅かの碎屑物を堆積せしめた、火山の胚種と見るべきはこのマールで、山をなすことはない。日本に於ける例は僅か男鹿半島の目瀉と陸前の瀉沼に知られてゐるにすぎない。

カルデラ。かゝる各種の火山の、特にコニーデ型の上部が爆發で噴き飛されるか、他の火山型では、堆積物の重みに堪えずしてメリ込むか、噴出による内部物質の欠乏で陥没して仕舞ふかすると甚だしく大きい概して圓

形のカルデラと呼ばれる凹みになる。これに水が溜つたのが奥羽の十和田、田澤、北海道の支笏、洞爺の諸湖である（第三十七圖）。後者はその中央に再びトロイデの中島を噴出せしめてゐるが、かゝる例は千島温禰古丹島の緑湖や幽仙湖のカルデラに見られ、各々根茂、黒石のトロイデを聳えさせてゐる。かくカルデラは餘り大きな陥入であるから寧ろ山岳を亡ぼし



第三十七圖

支笏湖カルデラ附近一先づ古支笏火山を切り鍋狀に陥没して支笏カルデラを作つた。その以前の山體の一部は東北隅及南部に見られる。その縁邊則ち西北、及び東南隅に惠庭及びフツシの兩トロイデが噴出してカルデラの形を齒狀にした。樽前山のコニーデは更にその南方に噴出し火口内に小トロイデを築いてゐる。

から寧ろ山岳を亡ぼしめるものであるが、その山上にある例としては朝鮮白頭山の天池がある。かゝる湖水の一方が決潰して水が乾固して了へば現在の阿蘇の大火山の火口原に見るやうな地貌になる。

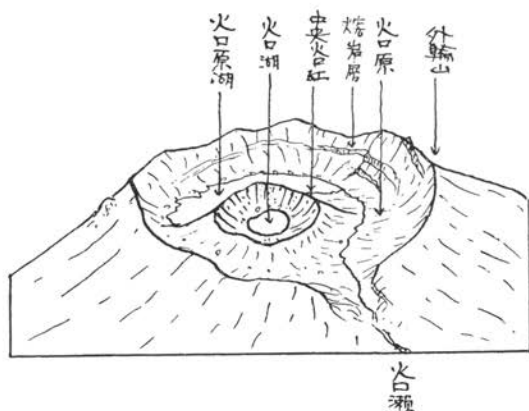
以上の如き各種の火

山型は個々獨立するよりもむしろ活動の時期によつて種々のものが重なり合ふことが多く、例へば樽前山に見るやうにコニーデ内にトロイデが載つたりする。又噴火期や噴火中心の違いで幾重にも重なつた複重火山を生ずる。若し斯くして先に生ぜるものが外側に之を取巻けば外輪山と言ひ中に生ぜる新火山を中央火口丘と呼ばれる。火

口内に生じた平坦地即ち火口原には往々湖水をたゝへて火口原湖をなし、湖水は河口瀨より山側に排出される（第

三十八圖)。これ等を有する好例は赤城山、榛名山等で、北千島の阿頼度山も亦これに屬する。

c. 火山の衰滅 吾々の今日見る火山はその比較的新しいと言はれるものすら建設された儘のもの無く何れも容赦ない自然の力によつて壞されて居る。その侵蝕の順序は一般山岳のそれと大同小異でこれをコニーデ

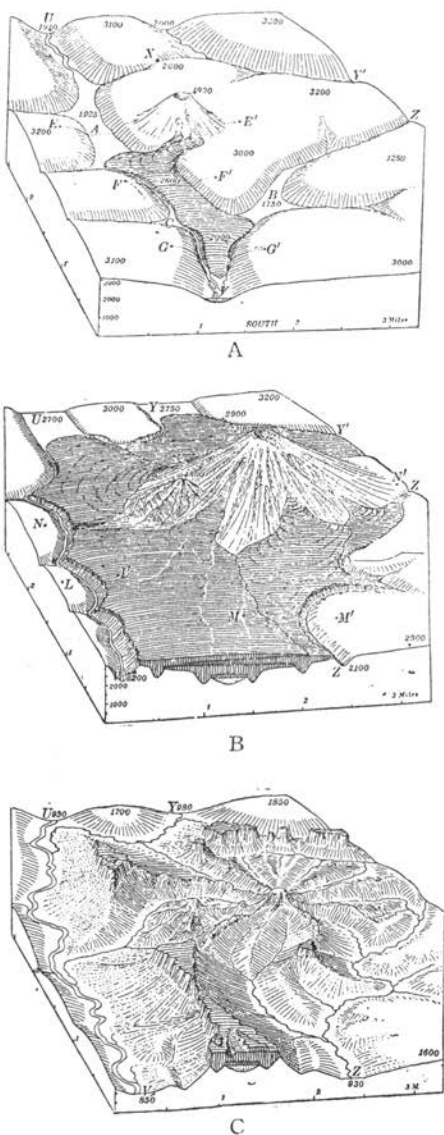


第三十八圖 複重火山の一例

テはこの程度に達したものであらう。一層侵蝕が働けば原形を全く失つて了ひウツカリしてゐると火山だつたかどうか氣がつかない。例へば信州の四阿山のやうな、通常の山地に似てくる。一層之が甚しくなれば熔岩層、擲出物層等は皆洗はれて單に放射狀の、基盤の岩石を貫く岩脈シユズが塀の様に山背をつくり、又噴火孔を充してゐた熔岩

に例をとれば多くの場合、急峻な頂上部が先づ破壊、侵蝕され裾野には若い谷が輻射狀に刻まれる。富士、淺間、霧島、樽前等の裾には地圖で雨裂の記號で示される深い溝があつて雨水を流す潤澤になつてゐるが更に侵蝕が進めば中腹以上をも切り込んで熔岩層等をも掘り出して其處に瀧をかけ更に這ひ上つて「薙ぎ」をかける。男體山や赤雉女貌火山等にはこの好例を見得る。曾つては富士にまさる大火山と想像されるハヶ岳もかくして次第に深く削割されてその山骨を現はし、赤岳等の峻崖を聳えさせたのである。この解析度の進めるものはコニーデはその裾野に、アスピーテはその頂上部に僅かに原表面を残すに至る。北海道の利尻、斜里のコニーデ、本州の月山、苗場山のアスピー

の部分^{Mount}が周圍より堅いために残り、火山岩頭として突起してゐるやうな場合になる。荒船、妙義の如きは纏てこゝに至らん迄に、原形を止めずに破壊されたもので、仙臺市南部の大白山はかくして生じた火山岩頭の残片であると言はれる(第三十九圖)。

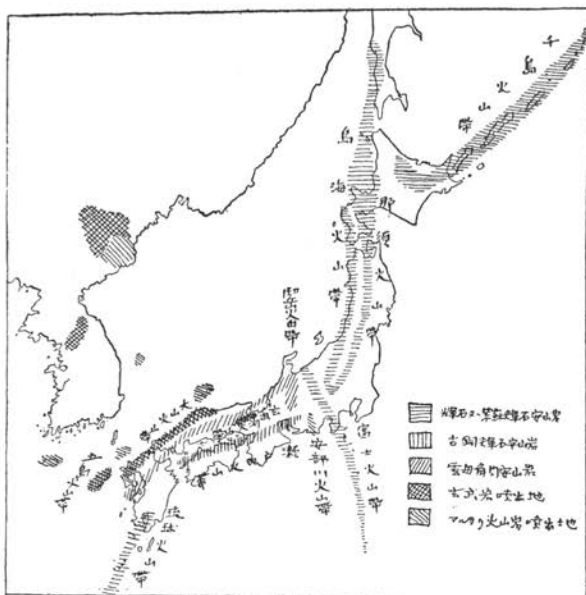


第三十九圖 火山の生滅 (Davis)

- A. コニーテ成生し、熔岩を流し河を堰止めて湖水を造る。
 B. 初期のコニーテは既に解析さる。大コニーテ發達の極度にあり。放斜谷既に發達す。熔岩臺地をつくる。甚しく解析さる。火山岩頭、熔岩臺地殘片等とその名残りを止む。
 C. 日本に於ける火山帶及びその形態上より見たる分布は左圖に示してある(第四十圖及び四十一圖)。

三、地史と地質構造

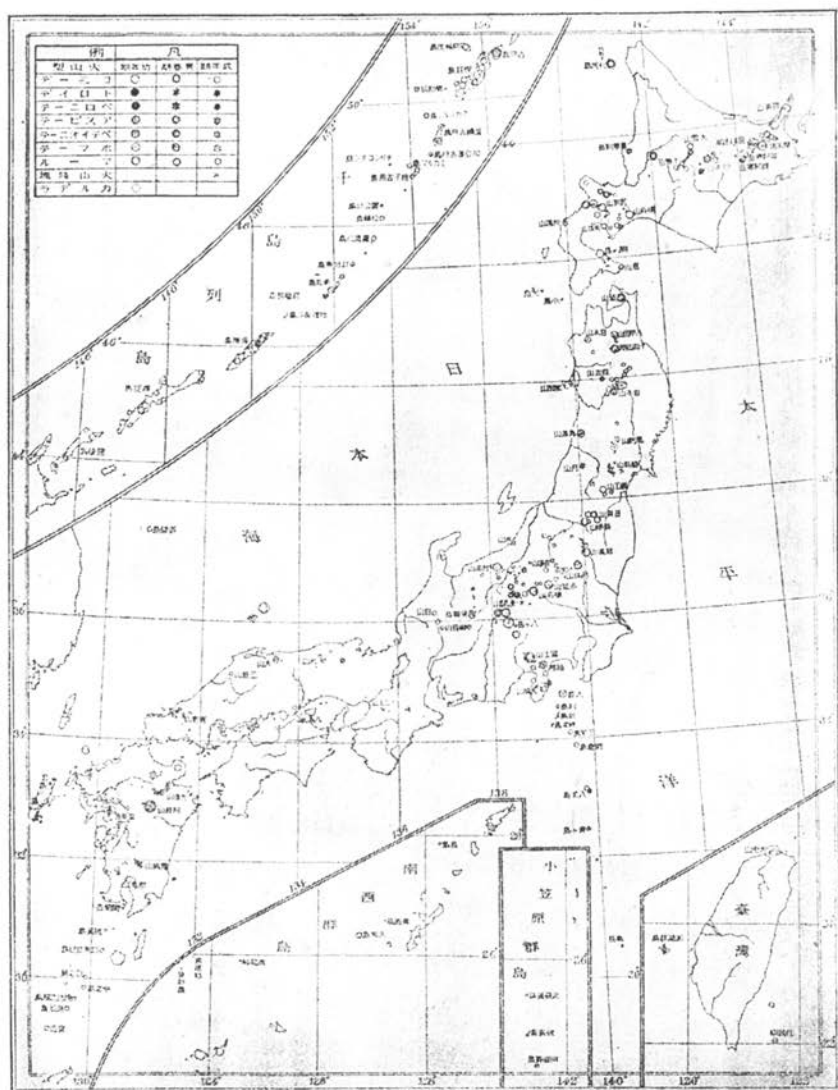
以上に於いて述べた地質現象は互ひに相重複して種々の経緯を持つが若しその推移を時間的に追ふ時には其處



第四十圖 岩石分布上より見たる日本の火山帯 (神津氏、渡邊氏)

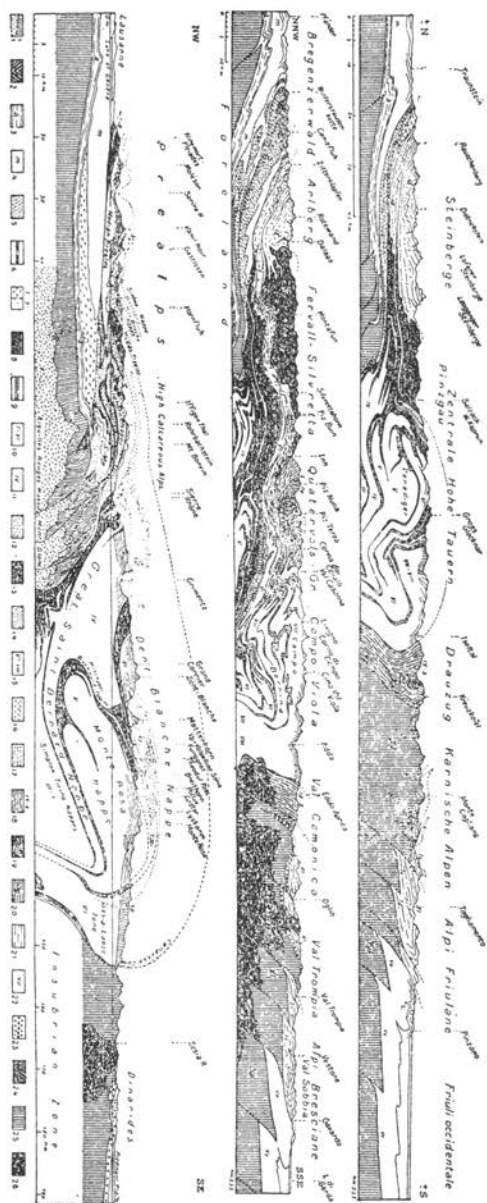
に一つの歴史を編み出すことが出来る。地史がこれである。之を知るにはその記録書である地殻を忠実に読みとらなくてはならず、それは錯雑紛糾せる波亂の果であれば、エジプトの象形文字を解くよりも遙かに數等難解の事に屬する(第四十二圖)。地殻はその變動の結果によつてかく複雑した構造を示すがこれを適當の方法にて調べると地層の下部より上部に保存される化石の種類を變じ劣等より高等に生物進化の跡を歴然と見ることが得る。然しこれは如何なる岩石や地層にも見得ると言ふのではなく、火成岩や多くの變成岩、又生物の不存在、保存の不適な

どにてこれを欠くことも少くない。かくて地球の生涯は先づ最初の無生時代と後の有生時代とに分ち得る。前者は恐らく太陽より分離に引續く星辰時代で幾年を経過したか或ひは如何なる状態にあつたかを直接知る方法はな



第四十一圖 日本に於ける火山型分布圖（渡邊氏、今泉氏）

いがこれに關しての解明は天文學に負ふべきである。然るに有生時代に於いては時代と共に變遷進化する生物遺跡が地層中に保存されて居る故地球の歴史的發展的過程が十分明白にされるのである。故に化石は單に進化系統の連鎖たるのみならず地史の索引をなすのである。地層が整然と成層せる處では直ちにその新舊が決定出来るが、



第四十二圖 アルプスの構造 (Argand)

轉倒、褶曲或ひは斷層により地層の錯亂した所では、地層の順序や構造を判斷することは岩相により研究することも時として可能であるが、先づ化石を利用するに優る方法はない。それは同時代の岩層には同種又は親種の化石が廣く分布すると言ふ假定に基くのである。故に時代の判斷に用ゐられる化石は種族の生命の短いもので且つ比

較的急速に世界中に發展したものを便利とする。かゝる化石を標準化石と言ふ(第四十三圖)。かくて互ひに離れた地域に於ける地層を比較し新舊、順序、構成物を判斷することを地層の對比と言ふ。更に又化石の性質を調べることによつて過去の地理的狀態の變化即ち古地理や古氣候をも知る根據となる。

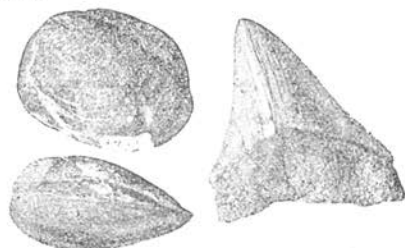
第四十三圖 標準化石の例(東北帝大原圖)



(A) 古生代石炭紀、最上部の有孔蟲化石の顯微鏡寫眞 *Fusulina kairimizuensis* Ozawa (×4)



(B) 中生代白堊紀セノニアン下部のアムモナイト化石 *Mesopachydiscus haradai* (Jimbo) ×1/3



(C) 新第三紀層中の化石 *Thyasira bisecta* Conrad (左)及び *Carcharodon megalodon* (Charlesworth) (右) (×1/2)

註

對比は主として化石法と構造法(地層の相互位置)に依つて判定する。火成岩の噴出時代はその周圍地層に對する層位的、變質的關係より推定する。無化石の地層が層位判定上價値少き化石を含む地層の層位も同様に既知の地層に對する層位、配列關係より判する。然し凡ての場合にその層位が決る譯ではない。本邦でも地層群の層位の未定ものが少くなく諸説區々として一定し難きものがある。對比の根據となるものは(1)地層の上下關係、(2)層位的繼續性、(3)岩石の性質及び堆積相、(4)含有古生物、(5)不整合及び非整合、(6)層の變化及び風化侵蝕の程度、(7)變動の狀態等々である。

かく構造、岩質、化石等によりて編まれた地史は、人類の歴史の如き數によつて示される絶對年度で現はすこ

とは資料の不足や時間経過の過大等に依つて殆んど不可能に近い。爲に一般には比較編年即ち一つの事件とその前後關係又はある代表者の盛衰等と照應して時間を區劃する方法に依つてゐる。これは明治維新と言ひ徳川時代と言ふ言葉で現すと同様で、地質學的事件即ち地殼變動や生物の繁榮期等を以て時代を劃するのであるが、その詳細をこゝに述ぶるは頁がこれを許さぬからその概略を第一表を以て示すに止める。

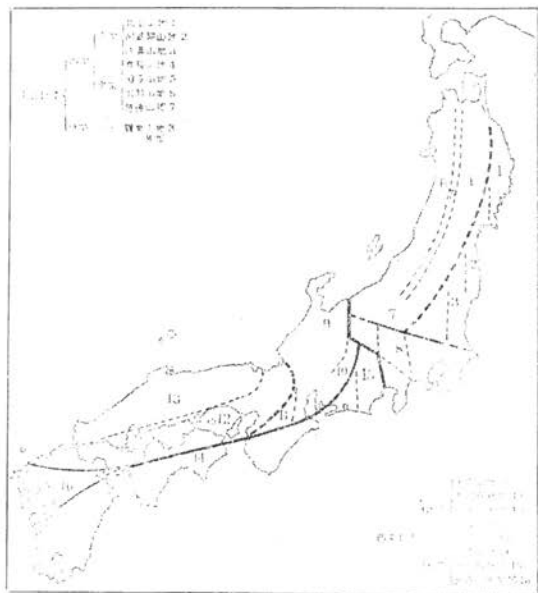
註 絶對年度で現さうと言ふ試みはかなり古くから、多く試みられたが層位的方法に比して今尙余りに粗雑過ぎる。それ等は地球の今日放散しつゝありとする熱量より最初の熔融狀態以來現在迄冷却する時間を計算し、又は海水中の鹽分と河水が陸上より運ぶ鹽分を比較し、又地層の厚さと海底に堆積する土砂との割合等から計算せんとしたものと等である。その中で稍見込のあり科學的なのは放射能性物質の研究に基くものでウラニウムの如き放射能性を有する物質は年と共に崩壊して鉛とヘリウムになる。岩漿中から晶出して未だ崩壊されぬ最初より、今日迄に崩壊して生じた鉛とウラニウムの量の比較から岩石の噴出凝固せる時間を決めることが出来ると言ふ。これによると古生代初期よりは約五億年を経過し人間の現れた第四紀に入つてから既に五十萬年であると言ふ。

以上の如き地質的作力が働いて建造と破壊の争闘を繰り返へせる地史を経る時は其處に甚だ複雑なる地質構造を形成するに至る。世界地圖を披いて何よりも先づ我々の目を引くのは日本列島であるが、それは只に我々の母國であると言ふだけでなく、その太平洋に相連なつて張り出された美しい弧の姿態に依るものと言へやう。それは舞踏夜會を飾る花綵はなづなにもなぞらへて花綵列島とさへ華やかに呼びなされた。而も一見簡單なその外形に似ず、内部は意外の錯雜を藏してゐるのである(第四十四圖)。即ち寄木細工の如き大小種々の地塊の接合よりなつてゐる。例へば日本本島をなす弓弧は糸魚川静岡間を縦斷する大地裂線、即ちナウマンの言ふフォッサ・マグナにて兩斷され南北二部に分たれ東北日本、西南日本の二大地構區となる。この弱線に沿つて東には富士火山脈が噴出し、所

世界に於ける地質時代の区分				日本に於ける地質時代の区分					
代 (群 Group)	Period (系 System)	Epoch 及 期 Age (統 Series) (期 Stage)	地質 地層	主要生物の遺跡	主要生物	地質 地層	地層及びその代表地層	岩層 岩類	地層 岩類
新 代 Cainozoic	第四紀 Quaternary	更新世 (更新統) / Holocene (更新統) / Aluvium (沖積層)	カステロリポ	人類の發達	人類時代	沖積層	平原層 (沖積層) / オーム層 (沖積層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		鮮新世 (鮮新統) / Pleistocene (鮮新統) / Diluvium (沖積層)	アウストラロピテクス	猿人種から人類へ	哺乳類及び	沖積層	下部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		漸新世 (漸新統) / Neogene (漸新統)	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
中生代 Mesozoic	白垩紀 Cretaceous	白垩紀 / Cretaceous	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		侏羅紀 / Jurassic	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		三疊紀 / Triassic	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
古 代 Paleozoic	石炭紀 Carboniferous	石炭紀 / Carboniferous	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		泥盆紀 / Devonian	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		シルル紀 / Silurian	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
前 代 Pre-Cambrian	奥成層 Archeozoic	奥成層 / Archeozoic	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		震旦紀 / Sinian	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)
		冥古紀 / Hadaean	アウストラロピテクス	哺乳類の發達	哺乳類及び	沖積層	中部武蔵野層 (礫層、礫層)	礫層 (礫層)	礫層 (礫層)

Cræse, Medianline

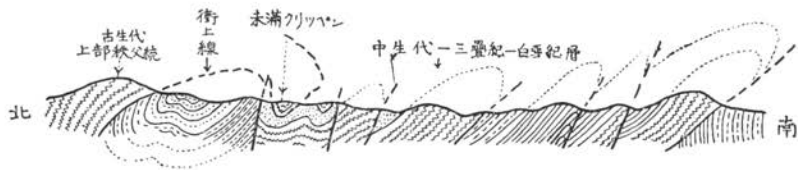
謂日本アルプスは西側に崛起して日本に於ける最も著しい地帯構造部に大きな役割を演じてゐる。西南日本には更に中央大裂線と呼ばれる縦断層線があり、九州中央部より四國の北部を兩断し紀伊半島の北邊を切つて三河豊川に入る頃より北曲、天龍川と合して諏訪湖に至りフオッサ・マグナと相接する。この線に沿うては北側の地塊は



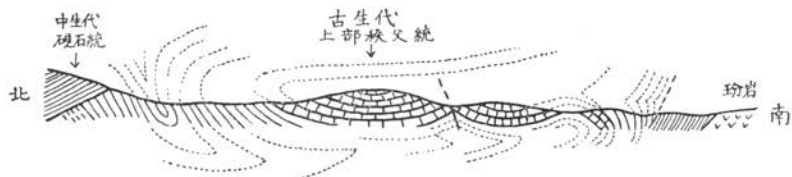
第四十四圖 日本本州の地帯構造的區分 (望月氏)

南側のそれに乗りに上げ氣味の衝上斷層をなしてゐると言はれる。この地質構造線にて南北は内部構造を全く異にする兩帯に分たれ北を内帯、南を外帯と呼ぶ。赤石山系はこの外帯の東端を劃し、飛驒、木曾兩山脈は共に内帯に入る。かかる構造は然らば如何にして成つたのであるか。今こゝに日本の地質圖を披けば其處には萬華鏡の如く紛糾せる地層の彩りが見られる。然しこれを大觀すれば古期岩層の褶曲分裂せる山塊とその周邊を占むる褶曲せる第三紀層よりなるを知るのである。古期岩層は東亞縁邊の古生代地

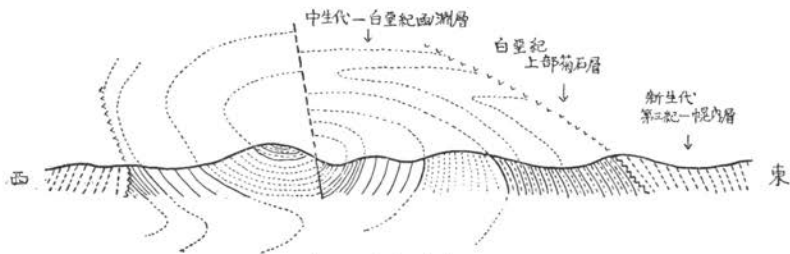
向斜に堆積し、その後の變質によつて種々の岩種を生じた。石炭二疊紀堆積後の變動(第四十五圖B)では日本海窪が生れ水成岩の下部を占めた岩漿の移動を促した結果、それ等地層の褶曲と共に花崗岩質岩漿の迸發を伴ひ、その深所高壓にありしものは片麻岩となり、より淺く壓力小なるは花崗岩となつた。その爲に弧狀の山脈として隆起し



A. 土佐、佐川附近 (小林氏)



B. 長門、秋吉台附近 (小沢氏)



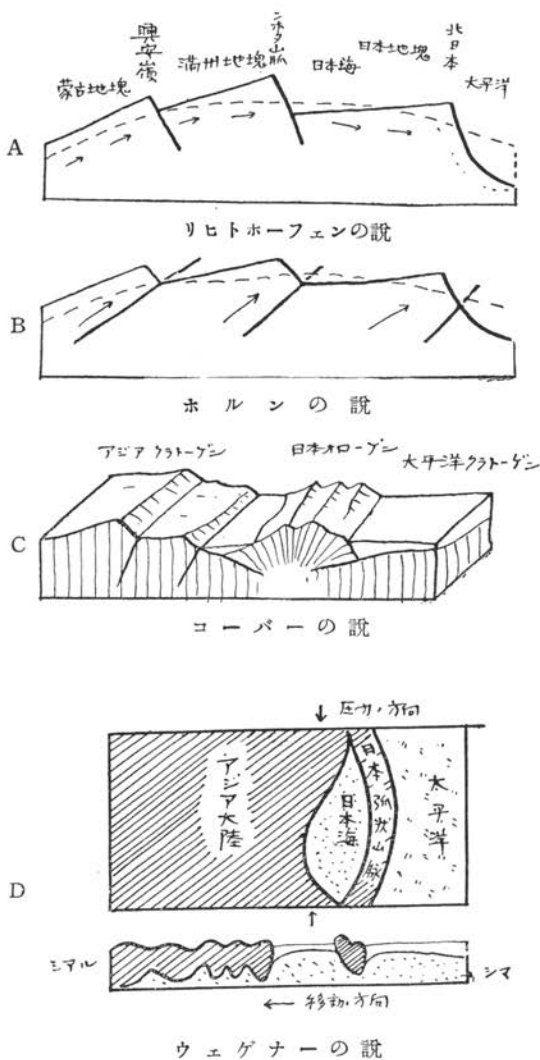
C. 日高、遠富内附近 (大立目氏)

第四十五圖 日本に於ける複雑なる褶曲構造の三例

- A. 推し被せ断層とクワッペン及び覆瓦構造——白堊紀後の變動?
- B. 推し被せ褶曲——古生代末の變動
- C. 同 ——白堊紀後内層以前の變動

たものが日本列島の骨格を造るに至つたが、その表面の凹入部には局部的に海成の三疊、侏羅紀の諸層を堆積せしめた。侏羅紀末には大衝動運動が行はれ中央線の胚的發達があつたと言はれる(第三十四圖)。更に白堊紀に至つて甚しい沈水期があり、各地にその地層

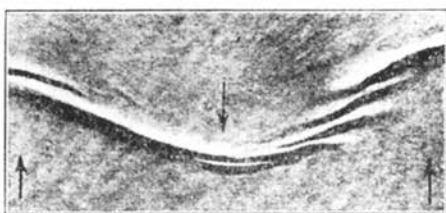
を残してゐる。この末期に又花崗岩漿の大噴入が行はれ尙第三紀に入るに先だつて現在の中央線を造つたり、各地に大褶曲を現す様な大變動が惹起した(第四十五圖A)。即ち夫々獨自在發達した褶曲系統の山脈が大斷層を以て相接するに至つたのである(第三十四圖)。これ等を切斷してフォッサ・マグナの生じたのはこの少し後である。



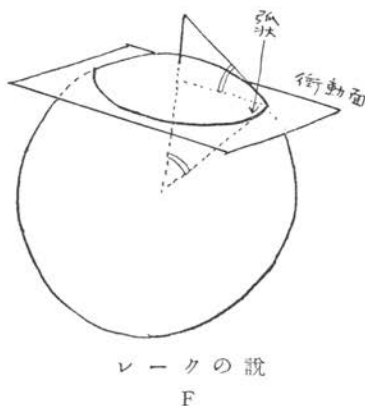
第四十六圖 日本弧狀列島成因説の諸例 (1)

外帯に屬する關東山地はこの時に引きちぎられた破片として東北日本の内に捲込まれた。その後は各所に於いて地方的な沈水や隆起があり各所に第三紀層を堆積せしめた(第四十五圖C)。中央線が東邊に於いて現在の如く彎曲せるはその後の壓迫に依るものらしい。第三紀後半には比較的、準平原をなす様な調和的靜穩期が繼續したに

は違ひないが火山活動や褶曲運動も又この末期に於いて甚しかつた。現在地形的に斷層崖等として現れたるが如き中央線及大裂隙も古創の再活動による比較的最近の活動の現れである。即ち現在の比較高度の大體は何れも第三紀末葉の變位に支配されたと言つてよい。世界を蔽へる洪積期氷期の或時期には本邦にも小規模乍ら谷氷河が發達し現在の氷蝕地形を残した。現在吾人の目に火山として映ずるものはその後の數回の活動期に生じたものである。沖積期に入るに當つて日本全體は大沈降を演じ大陸より島弧として分離するに至つた。かくて雪線は上昇し曾ての高山には徒らに風水の削磨のみ激しい。現在見る平原の多くはこの沈水にて生じた河谷、入江の埋積されたものである。



徳田博士の説
E



第四十六圖 日本弧狀列島成因説の諸例 (2)

に就いては諸説區々として未だに定説を見ない。

古くリートホーフ^{Reichthofen}ンは太平洋の大陥没に伴つた階狀段層的運動によつて生じたものと説いた(第四十六圖

A)。この階狀的構造を後にホルン^{Hörn}は衝上的のものと見做した(第四十六圖B)。コーバーは彼獨特のオロゲン説を以て兩側堅固地塊の壓迫に説明を求めてゐる(第四十六圖C)。太平洋岸の島弧の成因については多くの學者は

大陸側よりの壓迫に重きをおくがホツプス^{Hottel}はむしろ大太平洋側よりの衝下的壓迫を考へてゐるらしい。最近には漂移説を加味した異説が續々現れ來てゐるが、ウエゲナー自身はアジア大陸の一部が紙狀に後方に曳き殘された爲に分離して弧狀となり、そのさげ目は日本海の如き縁邊海となり後方には深海溝を生じたと説いてゐる(第四十六圖D)。徳田博士は独自の實驗的研究から島弧の成生を論ぜられたがそれは漂移的な考へを含められた大陸より海洋への地迂りの運動であるらしい(第四十六圖E)。シュタウプ^{Staup}は近年、太平洋岸の造山帯を論じて、それは地中海造山運動即ち、北方歐亞や北米大陸塊と南方阿弗利加、濠洲、南米大陸の間に行はれた地殼變動によつて惹き起された余沫の分岐運動によつて崛起せしものに過ぎぬと言つて居る(第二十八圖)。然しその弧狀をなすことについては説く所少い。レーク^{Leik}は最近、球面と平面の交截の弧をなすことより、現在の島弧下には多く大洋よりの衝き下げ斷層が見られるが、若しその斷層面が廣範圍のもので比較的平面に近いものならば、その平面と地球との交りは當然弧狀をなすと説明した。而してその島弧の曲率を知ることにより理論的に大凡その衝動面の傾きも計算出來それが實際に近いことも示してゐる。且つ千島弧、琉球弧、ヒリッピン弧、及びイラン弧、ヒマラーヤ弧、マレイ弧等の弧の中心が各々同一大圓上に乗るを注意し大圓より中心の外れたる日本弧は七島マリアンナ弧の干渉によるフォッサ・マグナの破綻があると述べてゐる。これ亦一つの説たるを失はない(第四十六圖F)。

日本島弧成生の問題は造山説と相關連して尙幾多の興味深い問題を提供してゐるが此處では只以上に止めて置く。

次には視野を狭めて日本の高山地帯の成長につき瞥見しやう(第四十七圖)。

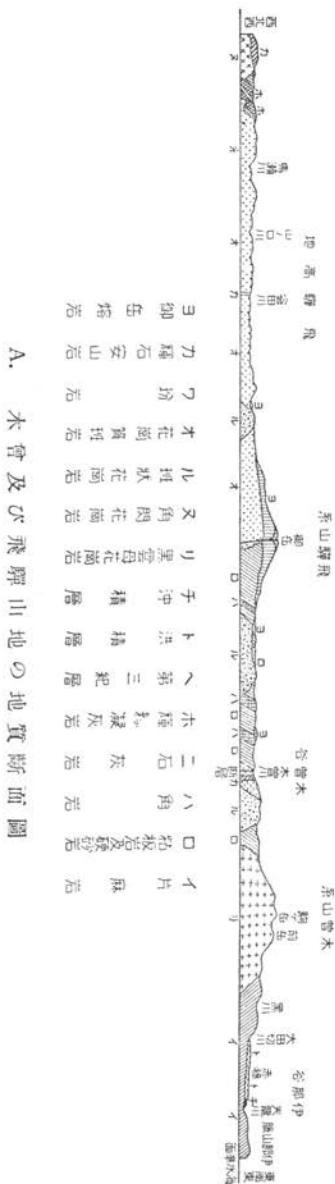
赤石山系(第四十八圖) 赤石山系の内部は横壓にて甚しい褶曲を受けてゐるが現在の高さに迄持ち來したものと

中部地方地質概念圖

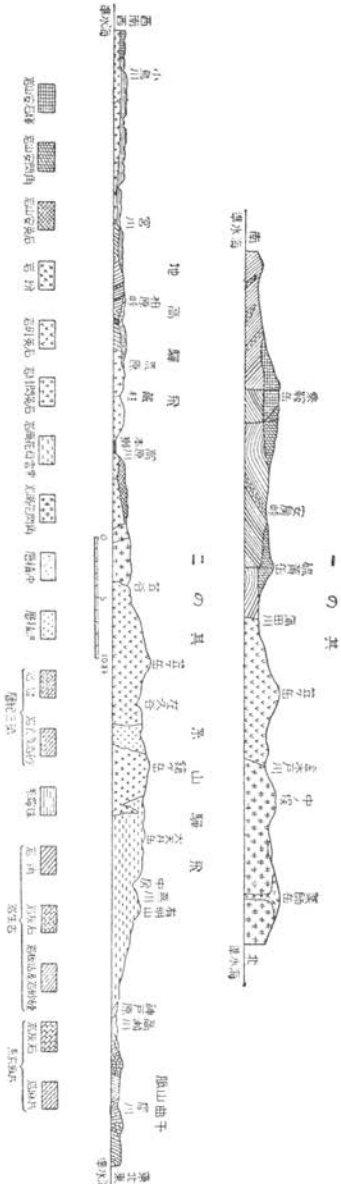


第四十七圖 中部地方地質概念圖

は西邊の天龍川に沿ふ中央線の一部、赤石裂線と、東側の釜無川に沿ふ釜無川斷層線等に依る斷層造山運動が主であつて其處に三角形の東に高い傾斜地塊所謂赤石楔狀地を形造つてゐる。この變動の形式は東方の三倉層（白



A. 水倉及び飛驒山地の地質断面圖



B. 飛驒山地の地質断面圖

第四十九圖 飛驒水倉山地の地質断面圖(野田氏)

石より構成される。以上の山脈が示す様にこの赤石山系は南北に走る片麻岩、結晶片岩、古生層と西から東に順次規則正しく配列し縞目をなして地質の褶曲状態を如實に示してゐる。而してこの山系は一般に奇山尖峯に乏しく大高原の風格があり各峯は比較的鈍い線を畫いて處々に平坦な山稜を交へてゐる。これは昔日の準平原面を暗示するもので、その谷の深きと共に最近の發達史を物語つてゐるのである。この山系を刻む谷には地質や斷層等の構造に支配されるものが多い。

飛驒山系（第四十九圖）内帯に屬する飛驒山系の東側は部分的には姫川斷層線と稱されるフォッサ・マグナで切り落され二千米に近い斷層崖をなして七百米の安曇平野に落ちてゐるが西側は鈍い傾斜で次第に飛驒高原に低下し主脈は東方に偏してゐるからその斷面は不等邊三角形をなす。即ちこれ又一種の傾斜地塊と看做し得る。この東邊の斷片は一回の運動が同一面で行はれたのでなくて、幾度も色々な場所で行はれたことがその階段狀斷層で示されてゐる。新しく切られた山脚の斷面に三角崖を現してゐるのは有明山下によく見られる。この大斷層崖下には青木、中綱、木崎等の湖水を湛へ、松本盆地の地溝をひかへてゐる。

この山系は初め二疊石炭紀に於いて海底に沈積した古生代の地層が中生代に入るに先だつて褶曲變動して先づ大體の基盤をつくり、同時に各種の深成岩類の侵入に遇つた。その後永い間の侵蝕でその上表の古生層の或る處は削がれ、基底の花崗岩類さへ露れた。中生代に於いては一部の海浸があり侏羅紀層の堆積する處となり、降つて第三紀には石英玢岩類の岩脈狀噴入が激しかつた。その後一時削剝作用が進み準平原近くにまで平坦化したらしいが最近の隆起運動で一方には斷層を起し一大傾動地塊を形造り更に小地塊に分れて各處の弱點より立山、燒、乗鞍、御岳等の諸火山の噴出を見、他方河は若返つて黒部谷の如く盛んな下刻を續けてゐる。現在の高山形地貌

を呈するにあづかつて力あつた氷蝕地形の成生が恐らくそれ等諸火山の成生以前と推測せらるゝのは既に述べた所である。

赤石山系の少し陰鬱な、一種の落付いた遠隔の感じのあるのに比しこの山系の尖峯を天空に聳やかし大地の雄躍を示してゐるのは準平原後の地變の甚しきを物語つてゐるのであらう。この山地を刻む河流も多くは斷層線に沿うて流れてゐる。島々谷、梓川上流、高瀬川上流、鹿島川、黒部川等がこれである。

山地を構成する岩石は古生層を貫いた各種の花崗岩質岩よりなりその他安山岩、玢岩等を交へてゐるが峻險なるは後者よりなるものである。これは氷蝕も與つて力あるが尙その後の甚だしい風化に依る削剝の爲である。

槍、穂高、六百、霞澤の諸山は何れも玢岩よりなり後立山山脈では針木岳、スバリ岳、白馬岳もこれである。この種の岩峰は遠望すれば、特有の灰紫色を呈し山形の突起に似ずその色彩は一種優雅の感を與へる。

基部の古生層は南部に廣く發達し、岩石は砂岩、粘板岩を主とし硅岩これに伴ふ。徳本峠、梓川上流、蝶ヶ岳に露れるものはこれである。その下部には輝綠凝灰岩があり、數種の動物化石を含む石灰岩を挾有してゐる。この石灰岩は硫黃岳附近に發達し又五郎岳、黒岳にも僅かに露れてゐる。ラヂヲラリヤ板岩は乗鞍岳附近に分布し、乗鞍火山はその向斜軸に噴出した。一般にこの山系の水成岩の走向は山脈の方向とは一致し、且つその構造はその褶曲運動を受けたことを物語つてゐる。これら古生層を貫いた花崗岩は槍ヶ岳附近より後立山一帯に擴がる。花崗岩の山相はその明快なる感じを特色とする。風化に弱いこの岩は早くも山頂を平坦にして灰白色に輝く巨岩の重疊は白砂によつて埋められる。駒草等の愛らしく點綴するのはかゝる所に於いてである。この様な風景はこの山地の燕岳附近のみならず至る處の花崗岩山地にも見らるゝ所のもので、隱巒と言はれる東北の山岳でも飯豊、朝日の山塊

などには尙この明るい景觀が見らるゝのである。一般に花崗岩石よりなる山肌の色は風化して浅い赤褐色を呈するが、その例は赤牛岳の赭色や槍ヶ岳の北西の赤岳の煉瓦色によく現れ片状花崗岩の劔岳では銅色がその胸壁を輝かす。これ等花崗岩類は上高地では角閃花崗岩で、古生層に接觸變質を與へてゐるし、有峰では中生層に蔽れてその噴入の時期を暗示してゐる。又五郎岳の南側、梓川の河畔等に現れる黒雲母花崗岩も古生層をホルンフェルスに變じ、又中生層の基底礫岩中にはその花崗岩礫が含まれてゐる。

中生層は有峯附近や白馬岳北方に發達し砂岩、礫岩よりなり、含有する植物化石等に依つて侏羅紀なる事が判つてゐる。

片磨岩及び片状花崗岩は主として立山山脈を構成し北方劔岳に至つてその岩石の強剛性の極度を示し、怪異の山相を呈するが自ら玢岩の如き鋭さは見られない。

安山岩は立山山脈では西側に帶狀に噴出し、立山に於いてその最大溢出を見る。彌陀ヶ原、五色ヶ原の御花嶺はこの熔岩臺地で、同じ様な状態は雲の平にも見られる。

この飛驒山地の南方を中央線に接して高聳するものに木曾山脈がある。これもフオッサ・マグナに對する赤石、飛驒の山地と同様な地形的には立派なホルストで、それを塊とする斷層崖の方向は中央線の方向と畧、一致する。即ち東南側の天龍斷層崖と西北方の木曾斷層崖である。この山地の北部及東部は主として古生層の岩石よりなりその中でも粘板岩を主とする。これ等はその南部に噴出した黒雲母花崗岩塊の迸入によつて變質し、駒ヶ岳の主體はこの花崗岩よりなり、寢覺の床の峽谷はその基部を洗つてゐる。更に南方の惠那山は石英斑岩よりなる。

四、岩石の種類とその性状

岩石がその成生様式によつて火成岩、堆積岩、變質岩に分たれることは既に記した。こゝにはそれ等の種類や一般の性質について簡単に述べよう。

A. 火成岩 火成岩は全體としては大小種々の鑛物結晶粒よりなり塊狀をなし、多くのものは堅緻である。他の岩石の如く層狀をなすことは餘りなく、又化石を含むことは全然無い。その噴入・流出の状態で色々の名稱で呼ばれるがその形式には規則がない。火成岩の種類は甚だ多いのでその分類には色々の方法が提唱されてゐるがこゝでは我々が日本の山を歩いて普通に見る代表者についてのみ極く簡単に述べる。

第二表 日本に多き火成岩の種類

主要鑛物	深成岩	噴出岩
石英 (長石)	花崗岩	流紋岩 Rhyolite
正長石 (曹長石)	花崗斑岩 Granite Porphyry	石英粗面岩 Liparite
斜長石 (長石)	閃綠玢岩 Dio.-porphyrite	安山岩 Andesite
角閃石	閃綠岩 Diorite	
黑雲母	斑岩 Gabbro	玄武岩 Basalt
鈉長石	斑岩 Gabbro	
輝石	G-porphyrite	
Pyroxene gr.	斑岩 G-porphyrite	
橄欖石	Melaphyre	
Olivine gr.		

第二表はその多種多様の火成岩中總ての例外的なもの又は特殊なものを除いた、しかも日本乃至汎太平洋式の代表岩石を選んでその鑛物成分、構造、凝固の形式によつて分類したものであるが、嚴密な意味で科學的のものではない。この表に於いて左側は右側に擧げた岩石の鑛物成分を表はしたもので一個の岩石の持つ鑛物成分はその岩石の書いてある範圍内で横に引き伸した時に通過する各鑛物の分野を讀め解る。然も深成岩ではその分量をもこれによつて示され、又逆に鑛物成分からその岩石名も決められる。又右側の各行は岩石の全體の化學成分の概略的な相違を示し、上方より下方に SiO_2 の減少、Fe、Mg、Ca の増加を現す。その結果は上方のものは色白く軽く、下になるに従つて黒味を増し重くなる。然し色の關係など噴出岩などでは例外が多くて一概にはかく決められぬ。更に同じ鑛物成分を有するものでもその凝固の形式により各行に分たれる。(註)

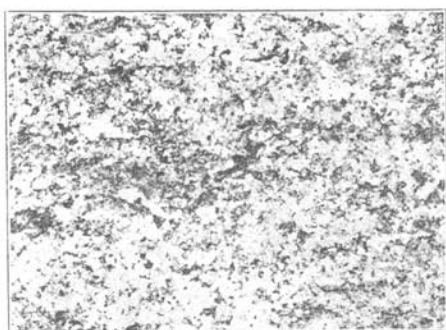
註 今日迄地球上に見出された元素の數は八十有余あるがこれ等は一つとして地殻を構成せる岩石の成分をなして居ぬものはない。その百分率は次の通りである。

O	46.71
S	27.69
Al	8.07
Fe	5.05
Ca	3.65
Na	2.75
K	2.58
Mg	2.08
Ti	0.62
H	0.14
P	0.13
C	0.093
Mn	0.091
S	0.052
Ba	0.050
其他	0.244
計	100.00

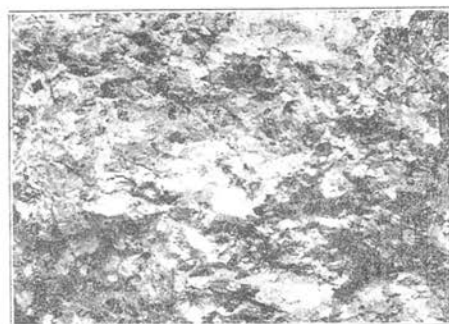
以上の中最初の八つが特に多量であるが實際岩石について考へるときはこれだけの元素が主なもので、これ等が互ひに色々な組合せて種々の化石物を生じ、その化合物が結合し合つて鑛物をなし、更にその鑛物が集つて種々の岩石を造つてゐるのである。その化合物の中特に多いのは酸素と他の七つが組合つた酸化物、シリカ (SiO_2)、アルミナ (Al_2O_3)、酸化鐵 (FeO 、 Fe_2O_3 、 Fe_3O_4)、マグネシア (MgO)、炭酸石灰 (CaO)、ソーダ (Na_2O)、加里 (K_2O) である。これ等の中最初のものは酸性、その他は四酸化鐵とアルミナを除いた外は皆鹽基性である。これ等の中、最も重要なものはシリカでこれが他の酸化物と化合して鑛物をつくることが多い。この結合に當つてその分量が違ふと種々の硅酸鹽類が出来る。その割合は極めて不規則で化合物の様に一定の法則に支配されてゐない。その混合物の主なものには硅酸と長石鑛、鐵マグネシア鑛、酸化鐵鑛で、硅酸の現れは石英である。長石鑛

はシリカとアルミナの化合物にソーダ、加里、炭酸石灰の二種又はそれ以上が結合してゐる。加里を含むは正長石、ナトリウムを含めるは曹長石、石灰を含めるは灰長石と言ひ、後者二つの中間物を總稱して斜長石と言ふ。鐵マグネシア類はシリカ、鐵マグネシア、石灰の結合で輝石、角閃石、雲母の類を含み、石英、長石類の白色又は灰色等の淡色なるに對しこれは暗色のものが多い。従つてそれ等を多く含む色は黒色を帯ぶるのが常である。多くの岩石は以上の如き硅酸鹽類の固融混合物よりなつてゐる。深成岩は地下深く地熱高い高壓の所に大きな塊狀に貫入し徐々に冷却凝固せるもので各成分鑛物は大抵肉眼で見別け得る程度に大きな粒狀の結晶質である(第五十圖A)噴出岩Effusive rockは地表や海底に噴出したり地下淺所で小さな形で貫入したりして急冷した爲、先に結晶した比較的大きな結晶質の鑛物は結晶する暇もなく急に凝固したガラスと同じ様な非晶質の石基にとり圍まれてゐる。脈岩Vein rockはその中間性のもので多少の非晶質の

第五十圖



A 兩雲母花崗岩



B 石英斑岩
石長正及英石斑晶は白き

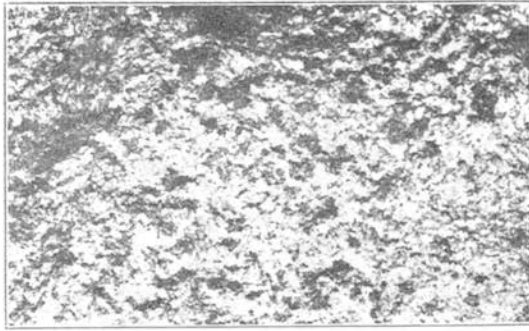
見別け得る程度に大きな粒狀の結晶質である(第五十圖A)噴出岩Effusive rockは地表や海底に噴出したり地下淺所で小さな形で貫入したりして急冷した爲、先に結晶した比較的大きな結晶質の鑛物は結晶する暇もなく急に凝固したガラスと同じ様な非晶質の石基にとり圍まれてゐる。脈岩Vein rockはその中間性のもので多少の非晶質の

部分と多くの結晶質鑛物粒とを持ちそれ等のあるものは特に發達して大きな斑晶となり又互ひに噛み合つた特殊の構造をしてゐる(第五十圖B、五十一圖)。

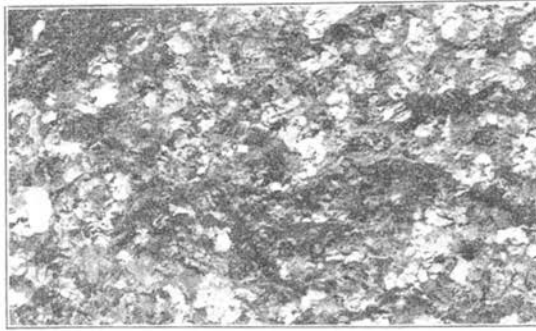
註 岩石の結晶組織の代表的なるをあげれば次の如くである。

一、結晶質 (Crystalline)

第五十一圖



A 輝石安山岩
黒きは輝石の斑晶



B 石英粗面岩
白き斑紋は石英の斑晶、灰色の部分は石英

A. 完晶質—前記深成岩に見られるもので花崗組織はその主たるものである。又晶出に當つて先に晶出せるが他の礦物の自形をなすを防げて假形を造らしむる時はオプティックやホイキリティック組織をなすに至る。深成岩乃至脈岩に見られる處のものである。

B. 潜晶質—普通肉眼で認め難い微小結晶の集合である。多くは早い冷却に依つて生ずる。これが即ち石基をなして先に晶出せる礦物即ち斑晶を圍む時には斑狀組織を呈する。噴出岩、特に斑岩類に多く見られる。又噴出岩の流動して凝固せる特徴を殘せるものに流狀組織がある。粗面岩類に多く、粗面狀組織とも言はれる。

二、非晶質—これは大部分玻璃質よりなり熔岩の急激なる冷却凝固の産物である。黑曜石はその一例である。

かく分たれた岩石は更にその性質を明かにするためにそれを特徴づける礦物名を接頭

語として付ける。これは表でも解るやうに同じ岩石でも礦物成分の違つたものを含んでゐるからである。こゝに兩雲母花崗岩と言へば白黒兩方の雲母を有する花崗岩でありその他閃雲花崗岩（角閃石、雲母を共有するもの）石英安山岩等はその例である。又岩種の間物は花崗閃綠岩等と呼ばれる。

以上述べた各岩石はその性質の異なるために、風化侵蝕に對して各種各様の状態を呈してゐる。次には吾々が岩場の登攀を試みるやうな場合に關係せる性状につき簡單乍ら記さう。

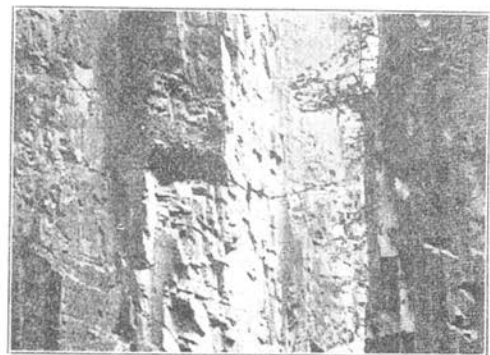
火成岩には層理がない。然しこれに類似した性質即ち貫入流出の型式や節理、裂罅等があつて登行の難易を支配してゐる。貫入の型式には種々あるが、小さいもので

は貫入の形自身が、又大きな貫入ではその岩體の縁邊の状態が種々なる形相を呈示する。劍の八峯や源次郎尾根が花崗



第五十二圖
玄武岩の柱狀節理 (Cross)

邊の状態が種々なる形相を呈示する。劍の八峯や源次郎尾根が花崗



第五十三圖 石英斑岩に於ける方狀節理 (Kugler)

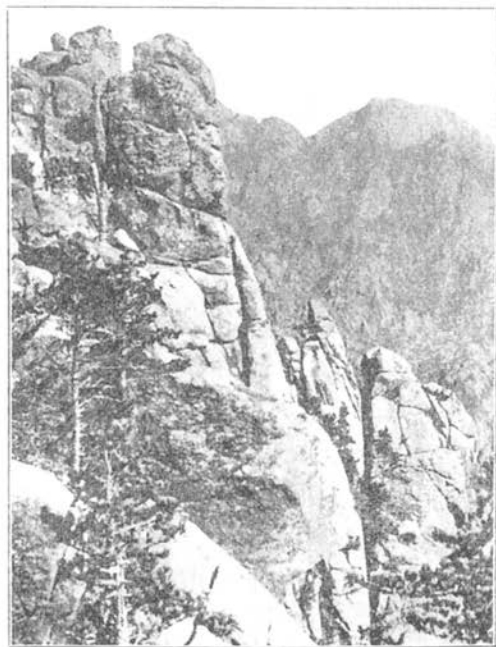
岩質の岩石で出來て居乍ら皆揃つて頭を三の窓の頭の方へ向けてゐるはこの脈岩の貫入の方向や傾斜を示してゐるのであらうし、又前穂高の北尾根から屏風岩へ錯綜した岩峯の分布や岩壁の存在にも彼の大きな槍穂高の玢岩體と霞澤岳から續いて來た花崗岩體の境界のあることを思へば、又更に横尾本谷から大キレットにかけて角礫岩が存在してゐてその崩壊が大きな横尾谷を形成するのを助けてゐるのを見れば、我々はもつとこの様な岩を選ぶ眼を貫らし、岩の性質の違ひによつて作られた峯や崖の形を見

極め乍ら登ることに興味を注いでよいことと思ふ。

節理とは岩漿が冷却凝固する時や、又後の造山運動等に際しての壓力等で生じた規則正しい割目である。これにはその形状により、柱狀、板狀、卓狀(厚板狀)方狀、球狀、不規則塊狀、曲面狀等の諸種があるがこれ等は共在



第五十四圖 花崗岩の板狀又は卓狀節理 (Kayser)



第五十五圖 花崗岩の方狀節理 (金剛山)

してゐることが多い。柱狀の節理はこれ等のうちで最も建築美的な景觀を山嶺に副へるもので若し從屬的な横の節理がなければ近寄り難い岩壁となる(第五十二圖)。然しその節理間が落脱すればその間隔によつては適當なチムニーをつくり、又節理間の割目が相當であればよい手懸りになるし、若し横の板狀と組み合へば大抵は格好の岩

登り場(第五十三圖)として立派な足場と支へと更に澤山の墜石や浮石を與へて呉れる。西穂高のチャンドルム等はこの好例であらう。この柱狀節理は概して安山岩や玄武岩に多く各地に材木岩等と呼ばれるのは大抵これである(海金剛、玄武洞等は玄武岩、岩手山千依石、國後島材木岩等は安山岩、尙石英粗面岩の例では宮城縣小原村、栃木縣鹽原のものがある)。



第五十六圖
玄武岩の球狀節理 (Kayser)

板狀や卓狀の節理は堆積岩の層理と同じ様に岩壁に所謂順層と逆層の關係を成立せしむる。板狀節理は安山岩や玄武岩及び花崗岩に特に多く、その性質を利用して石材として採取されるものに屋島の疊石、小豆島寒霞溪の畫帖石等がある。更に厚く割れる卓狀節理やそれが柱狀節理と交つて方狀をなすものは花崗岩の類によく發達してゐる。朝鮮の金剛山や木曾の寢覺の床に見られるのがそれである(第五十四圖、五十五圖)。又節理と言ふ程ではなくとも單に一つの方向に割れ易いと言ふだけでも同じ關係が生じてくる。かゝる横の方向の可削性は部分的脱落によつて格好の柵をあたへる

と共に、不可抗なオーヴ、ハンクをもつて登攀者を拒む。節理は通常はその割目の巾はあまり大きくなく、それ自身だけでは大きなチムニー等を作ることはいが、風蝕や侵蝕の形狀と結合すれば遂に、キレットやガリーを作ることすらある。

球狀節理は柱狀のものに横の節理が入り風化によつてその角稜がとられたもので玄武岩等によく見られる(第五十六圖)。又不規則な多面塊狀に割れるのは花崗岩等に多く見る所でその割れ方に依り甚しい難易を異にする種

々の岩場が出来る。

裂隙は節理より遙かに不規則な割目で所謂クラック、リス、クレフトを造り、更に廣ければチムニーやカミンをなし、甚しい侵蝕を伴へばルンゼ、クウロアール、リンネ、ガリイを造つて岩壁を刻む。かくの如く裂隙は節理より



第五十七圖 花崗岩質山體に於けるエグイユの一例 (Montblanc-Die Alpen より)

係するもので、その一例としては花崗岩質のもの如く小岩屑に碎けるよりも粉粒と化するものでは、劔岳附近に見るやうに、玢岩質の多角状の岩屑を澤山供給する穂高附近のものよりも、落石の危険の遙かに少いこと了解されやう。

第三表 岩山をなす火成岩の性状

岩種	外貌	風化面の 状態	節理乃至裂罅其他	日本に於いて山地をな す例及びその存在の多少	
花崗岩	白色に黒 の飛白状	荒い粗面 摩擦大な れ共、風 化甚しけ れば砂粒 状をなし クズグズ に崩れる	卓状方塊等の節理もあ るが、多くは不規則塊状 で歪んだ裂罅が發達す る。裂罅の立てるものは 「リンネ」より小は「ク ラック」を作り又獨特な エグイユ形をなす。風 化は甚しくも碎屑物は粒 状になるより浮石は割合 少し	木曾駒、甲斐前、地蔵 燕岳、霞澤、前穂の一 部、峯山、平ヶ岳、六 甲山、比良岳、飯豐 山、朝日岳、日高山脉	甚多
閃綠岩	同上、黒 斑點多し			谷川岳、丹澤山塊、 筑波山頂	多
斑礫岩	暗緑乃至 黒白の飛 白状			鉢岳頂上附近(この 岩の變種)	稀
橄欖岩 (蛇紋岩)	黒又は暗 灰色 (暗綠色)	同上(粗 面、風化 甚しけれ ば滑面)	同上(この變成岩たる 蛇紋岩は裂罅甚だしく 脆く崩れ又は崩土状を なすこと多し)	至佛、武尊、 芦別岳一部	稍稀 (屢存す)
巨晶花崗 岩	白色、黒 の斑點時 にあり 粒大	甚だ荒き 粗面	花崗岩と大體同じ、高 山にては小さな岩峯を なすこと多し	劍八峯、立山別山一 部	花崗岩質 山地附近 の岩脈と して存す
花崗斑岩 石英斑岩	灰色、帶 緑赤、黒 等に白黒 の斑點	稍々細か な粗面 多角状岩 層を生ず	板状節理及び不規則な 柱状節理が發達するこ と多し。又不規則なる 裂罅多く從つて浮石及 び落石多し	笠岳、拔戸岳、錫杖岳	多
閃綠玢岩 石英玢岩 安山玢岩	暗灰、帶 緑灰色等 に黒白の 斑點			槍ヶ岳、穂高岳の大部 明星ヶ岳、釋迦ヶ岳	多
斑礫玢岩 黒玢岩	綠黑色中 に黒白の 斑點		同 上	高山に稀なり	稀
流紋岩 石英粗面 岩	白色、灰 色、黄土 色等に白 色の斑點	細かな粗 面	柱状、板状、球面又は曲 面節理あり。裂罅も發 達、崩れ易し	岩峯稀、火山の基底 をなすこと多し、鬼 怒沼山、石狩川大函 等	あまり 多からず
安山岩	灰色、暗 灰色に白 黒の斑點	緻密な粗 面、岩層 多産	柱状、板状等の節理よ く發達、裂罅も多く崩 れ易し	日本の多くのコニー デをなす、立山、乗鞍 御岳、八ヶ岳、白山、 富士山、鳥海山、燧岳 大雪火山其他多數	甚多
玄武岩	黒色中に 帶緑乃至 黒色の斑 點	上より一 層緻密な 粗面、乃 至滑面	規則正しき柱状節理	熔岩臺地をなし高峯 をなすこと稀、陸中 駒ヶ岳頂上、阿頼度 富士や富士山等の熔 岩	あまり 多からず

登山者のための地質學 佐々

若しこの節理や裂罅が甚だしく、或ひは水蝕や水蝕或ひは斷層等によつて削られた時には板をたてかけたやうな一枚岩を生ずる。^(註)この場合には特にその僅かの小さい割目が登攀に大きな役割をする。それ故にかゝる節理、

裂目のよき觀察力

を持つことは登攀

者の缺くべからざる

資格だとさへ言

はれるのである。

註 又かゝるス

ラブに於いては風

化によつて更にそ

の面に平行に稍彎

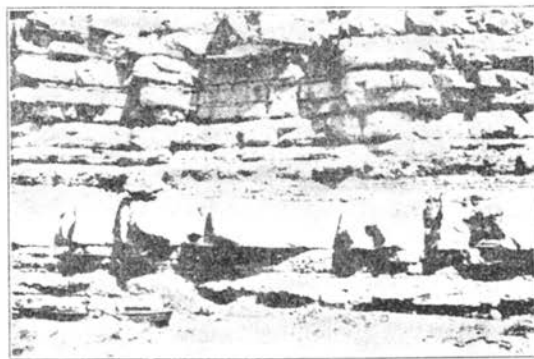
曲した破面を生ず

ることが多い。そ

れは多くの場合米

迄保つ。若し裸足ならば、位まで保ち得ると言ふ。第三表は未だ不十分な資料ではあるが日本に多い岩壁をなす岩石の若

干の性質を表にしたものである。



第五十八圖 水成岩の層理
厚きは砂岩層、薄く互層せるは頁岩層

※よきアンカレッジを與へるが、又望みなきオ
ーヴァハンクをも造る。こゝにスラブ等に於い
て問題になるのはその摩擦の度である。ハイム
によれば粗面の岩石は 20°より 30°の間にて平
板上を滑り多少凸凹ある岩石は 30°より 40°
に至つて落つるが、磨れた面を持つものは 10°
より 15°の間にて自ら滑り始めると云ふ。これ
は岩石自身の摩擦度を示すものであるが、登山
者の履物との關係を言ふならば滑らかな岩場に於
いて、普通の靴は 20°より 30°の間にて滑り、
粗面の岩盤上では 30°より 35°まで保ち得る。
鉄の打つてある靴では普通の所で 30°より 40°

B. 堆積岩 堆積岩はその成因によつて多種多様に分れるが極めて自由な化學成分と各種の物質を含み、

登山者のための地質學 佐々

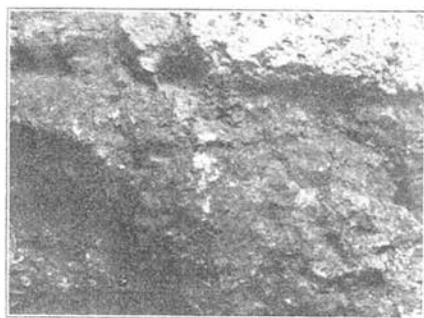
二六

それによつて様々の色や構造その他の物理的性質を有してゐる。これは大別して既存岩石の碎屑より由來せるもの、即ち碎屑性堆積物と、動植物の遺骸の堆積にかゝる有機堆積岩、水中に溶解せる鹽分の晶出せる化學沈澱岩とする。これ等のものの特徴は既に述べたやうに堆積に際して生じた層理を有することであつて（第五十八

第五十九圖



A 礫 岩



B 塊 集 岩

圖、この中には屢々化石を含有して居る。岩質はその經過によつて、硬軟種々あるが概して粒質の二次的に結合せるものであるから他の岩石よりも脆く弱い。それ等の分類を示せ

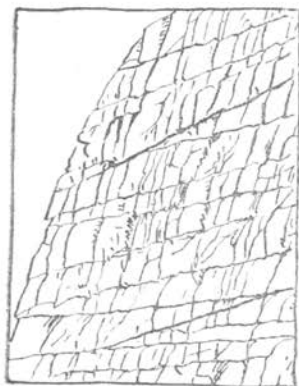
ば第四表の如くである。又その中日本の山地に見らるゝ岩種の性状は甚だ不完全ではあるが第五表に掲げた。

(第五十九圖A B)

堆積岩が岩壁をなす時に先づ注目すべきはその層理の山ツキ即ち順層か、前カブリ即ち逆層かの關係である（第六十圖）。又層理の外に一種の節理もある。これは板状のものや介殼狀斷面を示すものもあるが最も多いのは不規

第四表 堆積岩の種類

碎 層 性 堆 積 岩	火 山 碎 層 岩	Pyroclastic rock	火山岩屑 (Vol. detritus)	角礫凝灰岩 (Tuff breccia) 火成角礫岩 (Vol. breccia)
			集塊質 (Agglomeratic)	集塊岩 (Agglomerate) 集塊質凝灰質 (Aggl. tuff)
			凝灰質 (Tufaceous)	凝灰岩 (Tuff) 凝灰質砂岩 (Tuffite) 凝灰質砂岩 (Tufaceous s.s.)
	風 成 岩	Aeolian rock	砂質風成岩	風成砂岩 (Eolian s.s.)
			黄土質風成岩	塋 塋 (Loam) 黃 土 (Loess)
	水 成 岩	Aqueous rock	礫 質 Rudaceous	角 礫 岩 (Breccia) 礫 岩 (Conglomerate)
			砂 質 Arenaceous	細 礫 砂 岩 (Grit) 砂 岩 (Sandstone) 花崗質砂岩 (Arkose s.s.) 石英質砂岩、硅岩 (Quartzite) 硬 砂 岩 (Graywacke)
			粘土質 Argillaceous	粘 土 (Clay) 泥 灰 岩 (Mudstone) 泥 質 岩 (Marl) 頁 岩 (Shale) 粘 板 岩 (Slate)
	有 機 沈 澱 岩	Organic sed. rock	石灰質 Calcareous	石 灰 岩 (Limestone) 白 雲 岩 (Dolomite) 白 堊 (Chalk)
			硅 質 Silicious	角 礫 岩 (Chert, Hornstone) 燧 石 (Flint)
炭 質 Carbonaceous			石 炭 類 (Coal etc.) 油 頁 岩 (Oil shale) 土 瀝 青 (Asphalt)	
化 學 的 沈 澱 岩	Chemical sed. rock	鐵 質 Ferruginous		
		石 灰 質 Calcareous		
		硅 質 Silicious		
		鐵 質 Ferruginous		
			鹽 質 Saline	

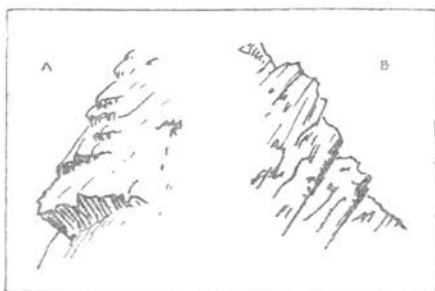


第六十一圖
硬い砂岩又は均質の火成岩
に見らるゝ方状節理

第六十二圖



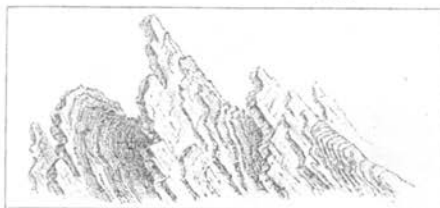
A 硬軟岩層の交層によるオ
ーヴァハング (Heim)



第六十圖 斜面と地層の向き
A. 前カブリ、所謂逆層
B. 山ツキ、所謂順層



B 傾ける水成岩層の山 (Heim) —
前カブリ及び山ツキの地層が出来る



C 硬軟岩層の交層による山稜の形 (Heim)

二二
則に層理に直角で又互
ひに垂直に交つてゐる
ものである(第六十一
圖)。これ等は角張つた
凸凹を作りその發達や
面稜の大小が手懸りや
足場、崖の形、傾斜に
影響する事甚だ大であ
る。又堆積岩は各種の
岩石が互層してゐるか
らその硬度や風化侵蝕
に對する度が違ひ、爲
にその層の続く限りオ
ーヴァハング(所謂
Wandgürtel)やその反
の棚を形成する(第六
十二圖、六十三圖)。又

裂隙も變動や風化によつて發達し時に著るしいクラックをつくり(第六十四圖)、更にこれに沿うて破壊崩落してはルンゼやギャップをつくり岩塔を聳えさせるに至り(第六十五圖)、甚しき時は尖塔をも形成するのである(第六十六圖)。又節理や裂隙に挟まれて突出しバットレスをなすことも少くない(第六十七圖)。尙硅岩や角岩、



第六十三圖 水成岩の岩質相違による段階狀岩壁、中央部弱き地層下には崖錐發達 (Kurfirsten-Die Alpen より)



第六十四圖
 水平なる石灰岩層に於ける垂直の裂罅 (Falkenstein-Alpen Kalender より)

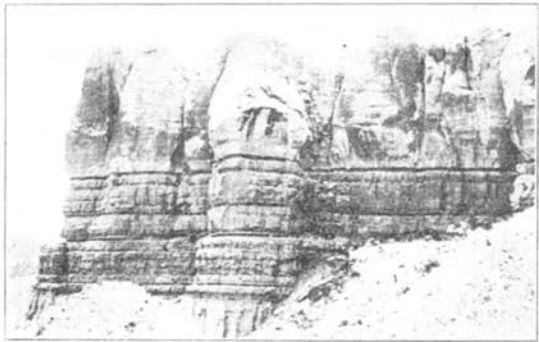
硬砂岩の如き岩石も抵抗力大なるため他岩より突出してバットレスをなす。又石灰岩や白雲岩は水蝕には侵され易いが風化に堪える事大であるから他岩より突出して奇峯をなす事が少くない(第六十五圖、第六十六圖)。以上は何れも層面とは直接關係のないもの(例へば Erosionskamme, Erosionsrunse 等)であつたが、又地層が急斜又



第六十五圖 白雲岩に發達せる垂直裂罅によるツインネ型山形。脚部に崖錘多し。
(Drei-Zinnen — Die Alpen 457)



第六十六圖 水成岩の垂直なる節理、裂罅によるエグイユ状山形
(Fernedastock — Die Alpen 457)



第六十七圖 水成岩に於ける胸壁（パットレス）
(Cross)

は直立せる場合にはシヒトカミン等をつくり層面に沿うての侵蝕、風化が特によく働き且裂罅は層理に平行に入り易くなり、岩石の強弱も又これを助けて種々の山肌をなすに至る(第六十八圖、六十九圖)。更にこの層面に沿うて生じたスラブに至つては手のつけ難いものがある(第七十圖)。

堆積岩は一般に火成岩より侵蝕に對し弱いとされてゐるがそのうちでも頁岩(泥岩)や、砂岩、礫岩の類は脆くそれ等が崩壊して長いザクを押し出し、悪場をなす例は決して乏しくない。但し礫岩等も



第六十八圖〔右上〕 直立した水成岩の層理に沿ふ裂目、Schichtkamine (右側) とその侵蝕により擴がれるもの Erosionsrunse (中央)

(Karwendel-Die Alpen より)

第六十九圖〔右下〕 カミン(右)及びその侵されて擴がれるルンセ(中央)と層理に沿ふ、風化破面にて生ぜるレッチ (左)(Kaiser gebirge-Die Alpenより)

第七十圖〔左〕 水成岩の層理に沿ふ、逆層のスラブ (Kaisergebirge-Die Alpen より)

膠結物の種類やその程度では岩山をなすこともあり、又集塊岩はその膠結物が凝灰質の時は脆いことが多いが熔岩質であれば火山岩と同様に堅固な且つ怪異な山容を呈するに至る。三峠山や妙義山、戸隠山などはその好例であらう。

日本で高山岳をなす堆積岩は主として古生層のもので西南日本外帯に連なる高山地の多くはこれに屬する。例へば四國の劍山、紀州の大臺原山、山上岳等や赤石山地の大部がこれである。又飛驒山脈の基盤をなすことは前に記したが、甲武信、三國、雲取、三峯等の所謂奥秩父の山々、北上の山地等もその骨格は古生層の岩石である。既に述べたことであるが概して古生層の山は質緻密で節理少く、比較的崩壊し難く、従つて山稜は鈍く厚く圓頂を呈し山崩も少い。中世層の岩石よりなる山岳は至つて少く、紀州の伯母子山、大菩薩嶺附近(所謂小佛古生層であるが眞の時代未詳。恐らく中生層ならんと言はる)などに止まる。飛驒高原には所謂手取層なる前記のジュラ紀の地層が廣く露出してゐるが山岳と言ふ程のものはない居らぬ。第三紀層の岩石に至つては高山をなすものは本州に殆んどなく高位置を占むるものとしては僅かに石樋山上の一部をなすのを見るにすぎぬ。日本で一番廣面積を占むるのはこの時代の岩石であるが何れも低山地をなす程度で新しい火山の基底を占めたり各山地間を埋めてゐるのである。只南方高砂の國臺灣に於いてはその中央山脈をなす新高その他の連峯は第三紀の粘板岩より成り日本に於ける異例をなす。各時代に産出する岩種は既に第一表に掲げた如くである。

C. 變質岩

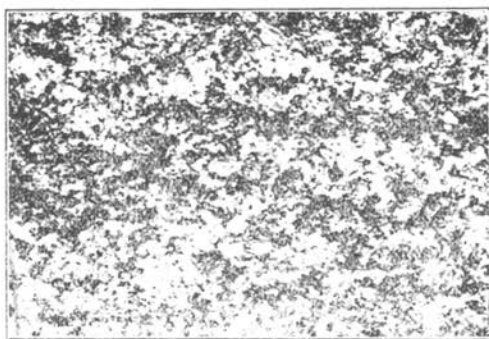
この岩石の成因については前に述べた通りであるが、その原岩石及び變質作用の如何によつて種々の岩種を生ずる。この變質を及ぼす作力は色々に考へられてゐるが、先づ大別して局部的と地方的とな

Metamorphism
Local Regional

第五表 日本の山地に於ける主なる堆積岩

岩種	成生物質	性	状	山地をなす例
礫岩	大小の礫砂質のものこれを埋む	崖をなすときは崩れ易し。礫による保持を充分與ふれど又脱落すること多し。圓礫なるときは案外手強し。黒褐、種々の色		山地をなす例少し (第三紀層中に多し)
砂岩 及び (硬砂岩)	砂粒よりなる	堅硬、軟弱種々あり。概して粗面。角形に割れるときは手懸りを與ふれども、風化等の結果なれば同時に落石、浮石の危険多し。暗黒色より白色まで種々の色		西南日本外帯内側の山々。即ち赤石、紀伊、四國等の脊稜山脈 飛驒山地の一部
珪岩 角岩	石英の砂粒又は細粒	概して堅緻。小角礫に剥げ易し。侵蝕に強く他岩より突起す。滑り易し。白き蘚苔を以て被はれること多し。黒色、褐色、赤色、黄色、白色のもの多し		秩父山地、北上山地。 (山地をなすは)
粘板岩 頁岩 泥岩	粘土及び泥質のものよりなる	堅軟種々あり、何れも小薄片に細かく剥げ崩れ易し。滑面を呈す。黒色、灰色、褐色時に黄白色		主として古生層のもの 臺灣中央山脈
石灰岩	炭酸石灰の凝固又は結晶	概して堅緻、濡れれば特に滑り易し。特殊の地形カルストを呈す。色は灰色乃至白色が普通なれど不純物によりて各種の色となる		同上。武甲山、大嶽山、勝峯山、妙法岳、 (古生層中に多し) 日高山脈西邊
凝灰岩	火山灰よりなる	柔弱、風化水蝕に脆く崩れ多し。大小種々に割る。色は黄褐色より白色へ。古生層等に出る變質せるものは大部分變質して片狀なす。脆弱なり。何れも粗面、手懸あれども惡し		山として著しきものなし。火山の山腹、澤等に現る。 (古生層(變質)及び第三紀層に多し)
角礫凝灰岩 (火成角礫岩)	火山噴出による角礫を火山灰等にて凝固す	角礫は足場を與ふれど脆く脱落し易し。崩壊により崖をなす事多し。		妙義山、三峠山、戸隠山、穂高横尾大キレット附近 (第三紀の噴出によるもの多し)

る。前者は火成岩の迸出によつて周囲の先在岩石の受ける接觸變質がその代表的なものでその結果は鑛物成分の *Recrystallization, rearrangement* *Action* 再結晶と再配列を促がし新成分の加入作用や熔解による成分の交換即ち交代作用を行つて新岩石を生ずる。後者の地方的變質作用は壓力に關係して生ずるものでこれを二大別する。一つは靜力變質作用でこれは造山變動によらず低温で地下循環水により變質する熱水作用、*Hydrothermal met* 地下深きに於いて重疊する壓力や地熱で變質したりするものが



第七十一圖 角閃片麻岩
多少横に縞狀の角閃石の配列が見られる。即ち片麻岩構造



第七十二圖 黑雲母片岩
黑雲母の微粒の細縞狀配列による片岩構造

これに屬する。他は *Pressure met.* 働力變質作用で地殼變動に伴うて起る。これに遭へば岩石は機械的にも鑛物成分の再配列を行ひ、高熱の爲の融解に依つて再結晶して粒狀になり時に斑晶すら生じ壓力に起因した方

向性即ち片麻岩狀や片理性等の平行組織をなすに至る(第七十一圖、七十二圖)。

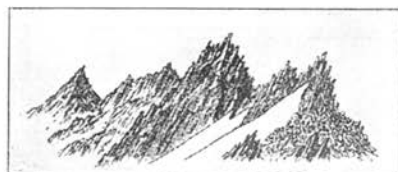
第六表は日本に多く見らるゝ變質岩の種類や性状を略示したものである。日本ではこの種の岩石は火成岩に比較すればその分布は甚だ狭いが、岩登りの對象として最も優れた所の一つである劔岳を持つてゐる。又西南日本

第六表 日本に於ける主なる變質岩

岩種	原岩質	外 貌	性 状	山地の例			
接觸變質岩 ホルンフェルス Hornfels	各種岩石	塊狀、無片理	黒色、堅緻小角片に割れる。面滑、時に崩れ易し。				
結晶片岩類	片麻岩類 Gneiss	正片麻岩 (花崗片麻岩) Orthogneiss	花崗岩	明かに各成分礦物の並行構造あれど片岩類程甚しからず	飯岳の一部		
		準片麻岩 Paragneiss	各種砂岩質	(片麻岩構造をなす)	大體同上。時に更に細粒片狀。比較的硬けれど脆し、火成岩式の節理はないが平行した裂目が出来る。	飯岳の一部 喜作新道附近一帯	
		注入(變)片麻岩 Injection (Meta)gneiss	各種層狀をなす岩石	塊狀、不純夾雜物ある時は片理を生ずることあり	白色より灰色。外各色、堅硬、滑面、性石灰岩に似たり。	西南日本 外帯の内	
	片岩類 Schist	片岩	大理石及び Marble 燻質石灰岩 Metam. l.s.	石灰質岩	塊狀、不純夾雜物ある時は片理を生ずることあり	白色より灰色。外各色、堅硬、滑面、性石灰岩に似たり。	西南日本 外帯の内
			變質粘板岩 Meta.Slate	泥岩、頁岩粘板岩	片理甚だ發達す	黒色、硬し。薄片に割れ。表面平滑、脆し。崖崩れ多し。	側に沿ふ 脊稜山脈
		千枚岩 Phyllite	粘板岩	片理甚だ發達す	殆んど同上。更に薄く割れ更に脆し。	に多く現る。即ち	
		石墨片岩 Graphite schist	炭質頁岩	(片岩構造をなす)	黒色、堅緻。厚板狀に割れ、風化にも脆し。	四國中部 紀伊半島	
		石英片岩 Quartz schist	珪岩	(片岩構造をなす)	白色、灰色、其他同上。	中部、赤石山脈西	
		紅糜片岩 Piedmontite s.	珪酸質水成岩	(片岩構造をなす)	紅紫色、其他同上。	邊等。外	
		藍閃片岩 Glaucophane s.	鹽基性火成岩	(片岩構造をなす)	青藍色、其他同上。	に臺灣中央山脈の一部、中國の一部、秩父山地、阿	
		雲母片岩 Mica schist (黑雲母片岩 Biotite s. 及び 綠雲母片岩) Sericite s.	酸性火成岩 及 珪質砂岩 頁岩	(片岩構造をなす)	灰黒色、綿狀、粒狀表面より平滑まで。薄く割れ且割れ易し。小裂罅多し。綠雲母片岩は特に脆し。	武隈山地、北海道中央山地の一部に現る。	
		綠色片岩 Green schist (綠泥片岩 Chlorite s. 綠糜片岩 Epidote s. 及び 角閃片岩) Amphibole s.	鹽基性火成岩 稀に有色 礦物多き 水成岩	(片岩構造をなす)	綠色。割れ易く脆し。表面滑らかなり。裂罅多し。風化に弱く崩れをつくることあり。時に鋭き尖峯をなす。	同上。飯ヶ岳の一部、御雷峰山附近	
		角閃片岩 Amphibolite 及び所謂輝岩 Pyroxinite	鹽基性火成岩	塊狀、多少片理することあり	暗綠色乃至黒色。堅緻。表面平滑ならず。節理あり。脆く崩れ易し。	同上。飯ヶ岳の一部、御雷峰山附近	

外帯の内側に連なる山脈にもこの種の岩石が發達して居り、秩父の北部低山地や阿武隈山地は山こそ高からね變質岩の研究地として有名である。御荷鉢山などこれである。

この岩石の中、正片麻岩や迷入片麻岩、角閃岩等は或ひは一種の深造火成岩と見做しても差支へなく、その登攀の見地から見た性狀は殊によく似てゐて、歐洲アルプスでは、前二者は多くのエギューを築いて優秀な岩場を提供してゐる。これ等の岩石の節理は火成岩の、殊に花崗岩等の場合の裂罅と似て、然もこれには層狀の片理に沿ふ割目もあるから、水成岩と同様に順、逆層の關係が登攀者に注意を要求する(第七十三圖)。



第七十三圖 結晶片岩の山容 (Heim)

片岩類は頁岩等に似た片理が好く發達してゐるから脆く、風化して崩れ易く、又その表面は案外滑かな甚だ抜ひ悪い岩石の一つである。若しこの種の色でフェイスやスラブを造られたら全く始末が悪い。又この種の岩の急立したリッジではその兩側には層面に沿うて一續きのガリイ等をつくり人を寄せ難い悪場をつくる。しかしその層の向きによつては相當の手懸りを與へてくれる。ヴァイスホルンやマッターホルンはこの種の岩石の尖峯をなす好い例である。

かく記し來てこれを願れば、岩登りと言ふ一つの見地からでさへも我々は餘りに岩石なるものを知らな過ぎると言ふ事に氣がつく。本職の岩石學者ですら細微な性質や成因の攻究は論じ得ても、實際の露出現象の説明には知る所甚だ少い。仍つて此處に地質乃至地形に興味を持つ登山者は勿論、多くの岩に親しむ人達が岩そのものに

對する態度を、も少しく組織立つた研究的なものにして、多くの事實を觀察し、その結果を持ち寄つて綜合したならば言はば *Faehlgründe* と言ふやうなものが出來上つて、お互ひに非常な助けになりはせぬかと思ふ。ウインバーがマッターホルンの初登頂に際して順層のヘルンリ、リッヂに目をつけたことは既に言ひ古された。近年ではチューリヒ大學のアムシュトゥツとフォン、シューマッヒエルがフィッシア、ヴァントの初登攀を試みた時、先頭に立つたアムシュトゥツはその紀行の中に、登路に行惱んだ彼がシューマッヒエルの助言によつてその難場をぬける事を得て「地質學者の眼は間違ひなかつた」と記してゐる。敢て *Faehlgründe* を提唱する所以である。

五、地質調査法

以上に於いては極めて不充分ではあるが地質學の入門的な事項に就いて述べた。次には自ら山行の途次、岩石や地質の調査を試みて登高の便に資し、若しくは博物學的興味を満足させやうと志す登山者の爲に簡単に調査研究の方法を記さう。その爲には先づ相當の豫備知識が必要である。これは一つは教科書的な文書を読んで基礎的知識を増し、實地に臨むに際してはその地方の地質に關する報告類を参照することによつて得られる。次に實地調査に際しては必要な品の準備を怠つてはならない。次のものは少くとも必ず持つべきものである。

Hammer *sample bag* *Tape*
ハンマー、採集袋、紙片（採集品の場所等を記入し同封するもの、矢立にて岩石に番號等記入して之に代ふることもある）
Clinometer *Fieldnote* *Knife*
クリノメーター、野帳、地圖、鉛筆（第七十四圖）。外にレンズ、鑿、麻紐、色鉛筆、寫眞器等があれば一層便利である。新しい地方の測量を兼ねたり、探險等の時の準備に就いては此處では述べない。

A. 野外調査。調査の方法には目的により種々あるが調査そのものを目標とせぬ通過旅行等で一般に行はれる

登山者のための地質學 佐々

のは通る路傍の露出や露頭を觀察し、地圖及び野帳に詳細に狀況を記録し、その場所に於ける岩石、化石の標本

Exposive Outcrop



第七十四圖 地質調査用品

傾斜儀、ハンマー、地圖、採集袋、野帳、鉛筆、フィールドラベル、採集用新聞紙、及び岩石標本等。

の採集等を逐次試みるものである。充分に調べる爲には觀察地點の密度の可及的大なるを必要とし、その爲には澤や谷中、切開き多き道、崖等が撰ばれる。露出の觀察には次の事項に注意する。

露出の大きさ、岩石の種類、色、風化の程度、前後の露出との關係（上下、連、不連続）、斷層、不整合の有無、剝理面の性狀

註 斷層とは地層が運動によつて切斷され、連絡せざる部分が相接したるものを呼ぶので、普通世間でよく言ふ様に單なる斷崖を指すのでは決してない（第三十圖）。この點は必ず區別せねばならぬ。因みに斷崖をなす主な場合は圖の様な數種である（第七十五圖）。

特に火成岩なるときには以上の外に

部分による岩質の相違、捕獲岩、接觸貫入作用の有無、節理の性狀等

變質岩なるときは尙ほ

變質度、變質帯の類別、片理面の走向傾斜、原岩石の吟味、接觸礦物の有無等

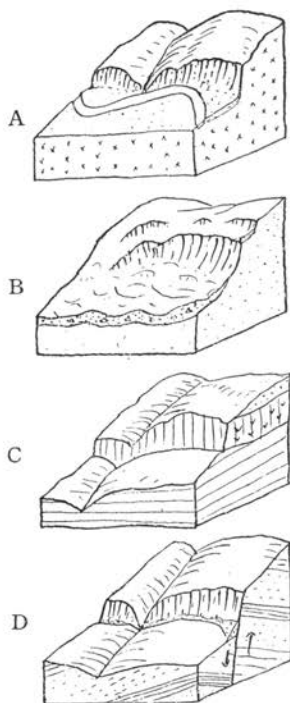
又堆積岩なるときは

成層面の走向傾斜、累層の順序、各層の厚さ及びその間の明、不明、偽層、波紋、團塊等の有無。

礫岩に於ける礫及び膠結物の性質。化石の有無。

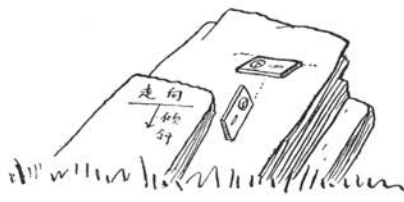
化石の出る時は、その化石名、産狀、母岩等を記し、化石は壞れぬやうに包む。化石はその産する地層との關係不明のものは價值がない。

こゝに注意すべきは岩石に於ける種々の發達面の測定で、之は一般に走向傾斜を以て表はす。殊に堆積岩はそ



第七十五圖 斷崖の數種

- A. 侵蝕崖
- B. 山崩れによる崖
- C. 熔岩流による崖
- D. 斷層崖



第七十六圖 地層の走向及び傾斜

の沈澱時に於ける位置は多く水平であるのが自然であるから、若しその成層面が傾いて居る時は、これが其後の

變動を蒙りしことを示す。故にこれを測定することはその變化の狀態を知る手がかりとなり地質調査上必要缺く

べからざることである。それにはどの方向に何度傾いてゐるかを知ることです。先づクリノメーターを成層面狀(他

岩石では片理、節理等の發達面上)に載せ器の長邊を水平に接しめた時の磁針と器の南北線との間の角を読む。

之を走向と言ふ。層の傾きはこの走向に直角に立たせ、長邊を成層面の傾きの方向に接せしめて其際の振れ針の示す角を讀む。傾斜と言ふのがこれで例へば走向 $N 30^{\circ} E$ 、傾斜 $SE 40^{\circ}$ 等と記載するのである(第七十六圖)。

以上の如き種々なる事項を觀察し、記載してゆく時には通過路の地質の構造や地形の發達史が次第に判明してくる。例へば對比によつて同一とされた岩石や地層が走向に直角な一方向に度々現はれてくれば、これは斷層か褶曲か何かの變動の存在がかく繰返されたるを知ることが出來、又走向に沿うて現れる岩石はその横の廣がりを知るなどその一例である。

又特に岩攀りの爲のフェルゼンクンデには次の様な點に注意をして資料を蒐集しては如何と思ふ。

岩壁、岩稜、岩峯の大きさ、方向及び傾斜

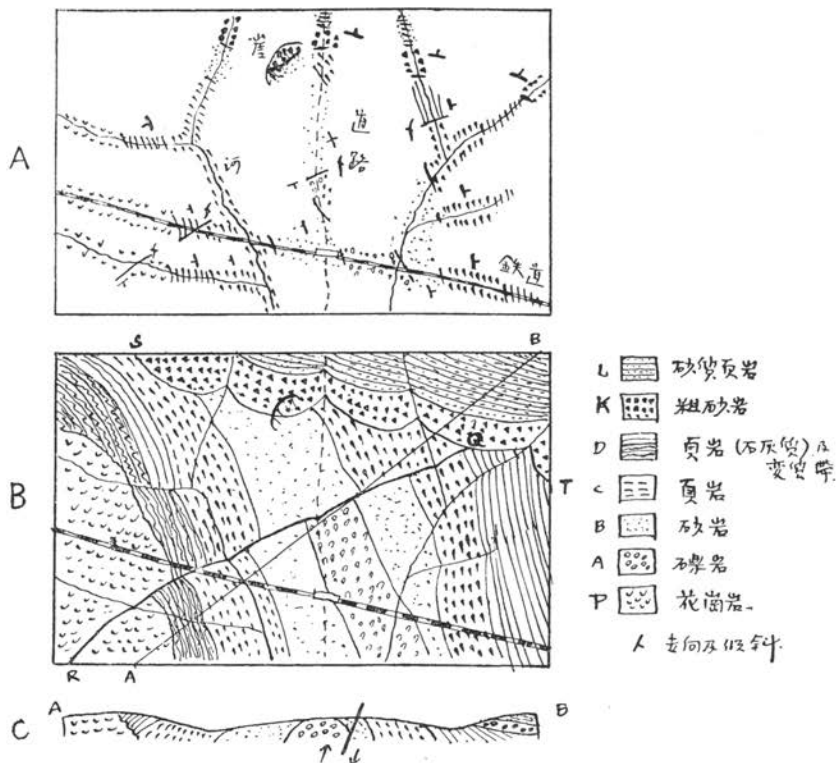
岩場をなす岩石の種類、表面の状態、例へば色、節理、片理、層理及び裂罅の性状、侵蝕風化による岩石表面の性状(割れ砕け方、滑面、粗面、小突起、汚れ方、苔のつき方等々)

これ等を記載することによつて我々は足場手懸の有無、難易、落石、浮石の有無等を知り以て登攀の對策を講ずることが出來やう。かゝる研究の今後盛んになることを望む次第である。

B. 室内作業

かくて野外にて蒐集した資料を整理し綜合することに依つて調査地への一つの纏まつた概

念を得ることが出来る。岩石は肉眼鑑定の外、化學分析を行ひ薄片を造つて顯微鏡にて詳細に檢し、野外の産狀と照合してその成因や産狀を知るに努める。又化石はその種名を決定し既知と同種のものならば、その地質時代よりその出土せる地層の時代を決定し得る。この種の決定には從來記載された文獻の總てを網羅して参照するこ



第七十七圖 地 質 圖

- A. 野景圖—鐵道、川、崖、路等に露れた岩層を記入する(地層の走向傾斜、境界、斷層等)
- B. 作圖により組立てた地質圖の讀み方
- (a) 地層の順序—下A層より上D層迄の層群は整合、STの不整合體を境にK,Lの層群が前層群に不整合に乗る。
- (b) 地層の傾斜—下層群はN25°Wの走向で東西に背斜をなす。上層群はN70°Wの走向で北東北に30°傾く。
- (c) 斷層—斷層QRは下層群を切り上層群は切らぬ。即ち上層群堆積前の變動。露出状態より見て逆斷層、分布より見て南方の乗り上げ。
- (d) 火成岩—火成岩は下層群に變質を與へ且つ斷層に切らる。即ち下層群堆積後斷層運動以後、上層群堆積以前の貫入。
- (e) 層厚及び落差—若し等高線がは入つて居れば之等が算出出来る。
- (f) 地史—A層を下底とする下層群の整合的堆積後、地變起り褶曲し背斜をなすと共に花崗岩噴入に西翼では變質が行はれた。後斷層運動にて南方地塊上昇す。これ等は一度陸化して剝蝕されし後再び沈降してKを基底礫岩とする上層群に蔽れるに至る。其後の變位は上層群の傾斜に現されてゐる。
- (C) 地質断面圖—B圖の特徴ある箇所A—B間を通じて畫いた横断面。

とを要し、尙も同定さるべきものの無い時には始めてその新種なることが認定される。これは甚だ面倒な仕事で充分の文献と基礎がなければなし難いからその鑑定は専門家に依頼するか、又は種名を訂正して貰ふのが便利である。幸ひに各大學や専門學校には化石學者も少くなくその多くの人はかゝる依頼に喜んで應ずるのである。

化石は幾千萬年の間、地に埋れて居たものが吾々に依つて始めて陽の光の下に掘り起されたと考へるだけでも興味深いものでその数は過去の遺物である以上決して無限ではないから大切に取扱はねばならない。又珍らしきものは只藏しておくだけでは骨董品としての外何等役に立たないが、これを研究記載し發表することに依つて大いに學術的價値を増し、學術の進歩に貢獻するのであるから、必ず適當の方法を講ぜられたいと思ふ。

かくして化石を決定しそれを含む地層の時代を決め、又その地層と火成岩、變質岩等との關係から後者等の地質時代をも察することを得る。又更に岩石の分布や上下關係、接觸關係を知ればその地域の地質構造や成立の順序即ち地史が解明されるに至る。

これ等の結果を地圖に記入すれば地質圖が出来上るが、これは調査経路の密度が大なるほど真相に近づき解釋の資料が増加する。地質圖は目的により種々表現法があるが、少くとも岩層の種類、分布、相互關係(新舊、順序)、構造等即ち地史が「讀める」ことが望ましい(第七十七圖)。

かくして自ら試みてハンマーを振り汗と共に集め得た材料が、渾然綜合され、一片の紙上にその成生を物語るに至つて調査の快はこれに盡きるのである。人はかくてその山岳の、如何なるものが如何に働きて如何なる時と共に今日に至れるかを知り、新たに山の存在を喜ばずには居られぬであらう。登山者の地質學に親しむの愉快はこゝに至つて極まると言ふべきである。

六、參考文書

登山者に直接役に立つ様な地質學書の無いのは遺憾であるが以下にはそれ／＼特色あるか、名著か、又は手に入り易い文献を掲げて見た。種類が余り澤山なので書名は主なものに止め、多くはヒントにもと、著者名を挙げる程度にした。

(A) 地學通論に關するもので新しく良いものと言はれるのは

W. Salomon : Grundzüge der Geologie. 1924.

G. Braun : Grundzüge der Physiogeographie. 1930.

Prisson, Schuchert, Longwell : Foundations of Geology. 1930.

外に良教科書として知られたのに Em. Kayser & Chamberlin & Schuchert のものがある。本邦には横山又次郎氏、佐藤傳藏氏、吉井正敏氏、森下正信氏、河村信一氏、田上政敏氏、高橋純一氏、淺井治平氏、小林房太郎氏、加藤武夫氏、望月勝海氏、三村信男氏、青山信雄氏、石川成章氏、(順序不同)等の著作がある。何れも大同小異であるが手引きとして手頃である。

(B) 地形に關しての著作も數多あるが

辻村太郎氏 山岳諸相 (山岳第14年、大、8)

同 氏 地形學 (大、12)

同 氏 日本地形誌 (昭、4)

等は必讀のものに屬し、その他工藤暢須氏、香川幹一氏等のがあり、又登山者の爲には田中薰氏(登山、大13)のがある。外國書では W. M. Davis, A. Supan, Penck 父子 W. Hobbs 等の良者があるが次のものは専門家ならずとも興深く讀めるものと思ふ。

C. A. Cotton : Geomorphology of New Zealand, Pt. 1.

E. de Martonne : Traité de Géographie Physique, Tom. II.

A. Geikie : Mountains, their Origin, Growth and Decay.

登山者のための地質學 佐々

(C) 地史に關して纏つたものは(A)に掲げた各教科書の地史の部の外、邦語では左の二書に詳しい。

早坂一郎氏 日本地史の研究 (昭、2)

横山又次郎氏 前世界史 (大、7)

(D) 岩石に關しては前記各教科書にも記載が多少あるが邦語の單行本としては

佐藤傳藏氏 岩石地質學 (大、14)

及び山崎直方氏の岩石學教科書(明32)があり外國書では F. Hatch, H. Milner, J. Lapparent, A. Harker, L. Daly, G. Tyrrel, R. Reinisch, Johannsen, Rosenbusch, Schand 等の諸著がある。何れも多くは顯微鏡的な岩石の見方を主に扱つてゐる。

尙ほ Felsenkunde に多少參考になる様なものは前記地質學や岩石學教科書の風化及び節理に關する項の外次のものがある。

C. T. Dent : Rockclimbing. (Mountaineering-The Badninton Library. 1914)

W. Paulke : Von den Felsen. (Die Gefahren der Alpen. 1922.)

A. Heim : Geologisches über das Bergsteigen. I. Gesteine. (Ratgeber für Bergsteiger.)

小山二郎氏 日本石材精義(昭、6)

(E) 化石に就いては邦語ので

横山又次郎氏 古生物學綱要 (大、9)

外國のものに Zittel, Eastman, Abaj, E. Newerson, H. Swinerton, Potonie, Seward 等の良著がある。

(F) 地質構造乃至地變の機巧に關しても實に多數の著作があるが、大要は前記教科書類で得られやう。邦語では前記辻村氏の著に詳しく又三村氏、小林氏、本間不二男氏にも著作がある。外語で記された世界構造論乃至造山論に關するものでは E. Suess の名著 Das Aulitz der Erde の外 A. Heim, L. Daly, L. Kober, J. Joly, O. Wilkens, B. Willis, A. Wegener, E. Argand, H. Stille, R. Staub, E. Harmann 等の著書があり、その多くはアルプスを研究室として各説を主張してゐる。特に

アルプスの構造に關しては次のものがよく纏めてあつて讀み易い。

Collet : Structure of the Alps.

亞細亞の構造に關しては E. Argand A. Grabay, W. Obrutschew, J. Gregory の近著があり、日本に關しては著書ではないが、E. Naumann, E. Suess, v. Richthofen, 原田氏、小川氏、矢部氏、小澤氏、徳田氏等の論文が諸雜誌に載つてゐる。全般に互り通俗に書かれたものでは改造社の日本地理大系 1——2 總論篇(昭、6)があり、特に日本アルプス附近に關しては改造社の日本地理大系 6 中部篇(昭、5)、新光社の日本地理風俗大系 6 上、日本アルプス(昭、5)本間不二男氏の信濃中部地質誌(昭、6)や前記田中薫氏のものなどにその大觀が視はれる。又バンフレットとしては、八木貞助氏の信飛山脈の地形地質、牛九周太郎氏の信州高遠地方の地質等があるがこれは今は手に入り難い。外に前掲辻村氏の著、小林氏、香川氏、工藤氏のもの等に構造地誌の記す所が多い。

(G) 地質圖に關しては

上治氏 地形圖と地質圖 (昭、5)

が手頃で外に A. Harker や G. Elles 及び Platt 等のものが良い。

(H) 實際に地質に當り、又これを調査するに於いての注意は

大築洋之助 實地地質學 (大、12)

E. Lahee : Field Geology (1923)

E. Greenly & H. Williams : Methods in Geological Surveying (1930)

B. Willis : Geologic Structure (1930)

等が調査法をよく説いて居り、且地質學の手引きにもなる。

又 K. Keilhack : Lehrbuch der praktischen Geologie, 1921.

F. v. Richthofen : Führer für Forschungsreisende, 1901.

H. Gregory : Military Geology and Topography, 1918.

登山者のための地質學 佐々

等は旅行者の地質學的觀察に多大の暗示を與へてある。

(本「山岳」誌上にも地質地形に關する文は可成あるが、それ等は既に本會會報(6)に藤島氏に依つて列舉せられて居る故、こゝには重複を避けて置く。)

以上舉げたものの多くは教科書的著作であるから一層詳細の點を知らんとするには矢張り原著論文等の載る雜誌報告類に依らねばならぬ。以下には特に登山者が日本の山地に就いて知らんとする場合に参照さるべきものを記す。全般に亘つては農商務省(商工省)地質調査所發行の百萬分之一、四十萬分之一、二十萬分之一、七萬五千分之一等の地質圖(説明書附)がある。又火山については震災豫防調査會の報告類によく發表された。外に山地に就いての地質記事の散見されるのは地質學雜誌、地學雜誌、地球、地理學評論、岩石礦物、礦藥學、地理教育、地震研究所彙報、各大學地質學教室出版物、地質調査所の報告類等である。

又近年發行された改造社及び新光社の地理に關する全集には各々地質地形の記載があり日本の最近の調査の結果が分る。尙現在刊行されつゝある岩波書店よりの地學に關する講座では本邦に於ける地質學の可なりの水準の知識が得られやう。

(本編はもとより匆忙の間に認めしものと云へ、筆者の不學よりして余りに貧しきものに終れるを遺憾とする。最初の豫定ではもつと地形に關する事項、特に地形圖の讀み方等について記して見たく、又造山論についても、もう少し詳しく述べたいと思つて居たのである。フェルセンクンテに關しては手許にある僅かな材料では到底満足のゆくものが出來やうはなかつた。殊に説明を日本の山の寫真ですることの出來なかつたのは残念である。今後は特に心掛けて何等かもつと役立つものを仕上げたいと思ふ。)

本小編を記すに當つては前記辻村先生の諸著作に蒙る所甚だ厚く、又岩石の項に關しては長友西脇理學士に多くその資料を仰いだ。此處に明記し以て謝意を表する次第である。)

(昭六、一〇、二〇、於札幌)



雜 錄

北海道の峠

伊藤秀五郎

今年度の「山日記」に依ると、臺灣朝鮮を除いて、全国にある高さ一千米以上の名のある峠が、三百ほど挙げられてゐる。そのうち二千米以上のものは二十を數へる。針ノ木峠は二五四一米、その他有名なものはザラ峠・澁峠・徳本峠・雁坂峠など、何れも二千米を越えてゐる。大菩薩峠は少し低く二千米に百米ほど足りない。

×

ところが一寸意外なのは、北海道に千米を越える峠の一つも無いことである。如何に山が低いとはいへ、僅か一千米である。一つや二つは有りさうな氣がする。それで地圖を調べてみると、無い。いくら探しても一つもない。しかし昔は一つあつた。増毛から濱益にぬける増毛山道マシケサンドリがそれである。雄冬山オウフユの中腹を巻く時も、いよくガゴ幌の方へ下らうとする濱益御殿ハママシメノミヤの頂でも、一干三十米程の高さがある。蝦夷地時代には、この山道は、雷電峠ライデン・濃畫山道ノキヤトなどにも増して、恐らくは本道隨一の難所であつた。いつたいに北海道の西海岸は斷崖に富んでゐて、時には數里の間も續いてゐる。雄冬から濱益・厚田・石狩に至る間の、雄冬山道・送毛山道オウリゲ・濃畫山道などは、何れもかうした斷崖を迂迴して、村落と村落とを繋ぐための道であつた。尤も、漁村の衰微とともに、現在では、それらはすでに全く淋しい山みちと變つてしまつてはゐるが、漁村の繁榮した頃には、おのづと活氣を漂はしてゐたであらう。そしてそうした山道の中では、この増毛山道は最も高く、距離も遙かに

長い山道であつた。今でこそ、僅か三千尺とはいふものの、とにかく石狩天鹽の國境をなす増毛山塊の一角を越して、八九里も續くこの山道が、そのむかしの旅人や村人達にとつて、如何に難所であつたかは、想像に難くない。しかし何時とはなしに人の往來がと絶えて、今では深い根曲笹の茂るままに、全く跡方もなくなつゐる。この山道のことには別に書くとして、とにかく北海道ではいちばん高い千米以上の唯一の峠をもつてゐたことが、今完全に廢道となつて了つたことに對する愛惜の念を、唯理由もなく、私たち旅を好む者に起させるのである。或る年の五月に、山はまだ大方残雪に被はれてゐたが、ただ一人で、武好の方からこの舊道をそのままに、濱益御殿を越して幌村へと下りて行つた時にも、やはり、そのむかしの旅人の姿や、未開の蝦夷地の有様などを、想ひ浮べない譯にはいかなかつた。

×

しかしこの路は既に廢路である。そしてこれを除いては、北海道に千米を越す峠は一つもない。これは何

といつても北海道の山が一體に低いからだ。あの廣漠たる十勝平原の展望を以て、日本新八景の一に數へられる狩勝峠も千米に満たない。恐らくは北海道で一ばん大きいとして有名な、北見と石狩の國を繋ぐ北見峠ですら八四七米である。喜茂別から定山溪へ抜ける中山峠、——昔は喜茂別峠と呼ばれ、今はスキー地として知られるその中山峠も、驛遞のある處は八三六米、峠の頂が八七六米しかない。また新見温泉から岩内へ越す峠も七五八米、馬場温泉からの徑も千米には余ほど足りない。

若し假りに日高山脈を横斷して、十勝と日高とを繋ぐ路があつたとしたら、勿論千五百米を越す峠が出来よう。しかし日高山脈を東西に横切る路は一つもない。あれだけの高さで深さをもつ山脈を越す必要がなかつたからだ。獵師や漁釣りさへも、この山波を越して向側の國にはいることはなかつたのだ。例へば北見側の獵師が、冬にでも北見峠を石狩側に越して來るとか、或は北見の漁釣りがイトムカ川から、石狩山脈のいちばん低いくぼみである無加越を越して、石狩川の上

流にまで足を入れるとかいふやうなこともなかつた。まつたく人はこの山脈を越える必要をもたなかつたのである。必要があれば、人はどんな高い険しい山をも越す。しかし、アイヌもその後の内地人も、この山脈を越すだけの必要に迫られなかつた。それがこんにち、あの南北數十里に亘る山脈の、何處にも、峠とか乗越とか、或はそれらに似通つた名の一つも残されてゐない理由である。何故といへば、アルプス史家クリッヂ教授のいふやうに、人は平原からきはだつて望める峰には、それを登らないずつと以前から名をつけてゐるが、しかし峠は、實際にそれを越えた時でなければ、決して名をつけることはしないからである。

X

このやうに、北海道に峠の名のつくもので、千米を越すものは一つもないが、しかし、路らしい路もない澤の乗越、——唯魚釣りや登山者のみに知られてゐるそういふ乗越をも、強いて數へるなら、一つ二つは無い譯ではない。前にも言つた無加越は千米あるか無しだが、石狩川の水源から、十勝側ヌブントムラウシ川

に越す謂はゆる石狩越は、千三百米程もある。この石狩越は、丈なす根曲笹が密生してゐて、眺望皆無のむしろ暗い乗越であるが、また莫迦に展望のきく明るい乗越もある。然別沼に注ぐヤンベツをヌカビラ川に越す乗越はこの例である。この乗越も千百米程であるが、しかしまだ名はつけられてゐない。最近ヌカビラ温泉の方から、然別沼まで道路が作られるといふ話だが、いづれ何か名がつけられることだらう。無加越なども將來は必ず登山路が通じるのではないかと思はれるが、そうすればやはり無加越とか無加峠とか、はつきりと地圖の上にも記されることになるであらう。

乗越といつても名のあるものはこれ位である。

X

内地であれば大抵峠の頂には掛茶屋がある。北海道では掛茶屋の代りに驛遞である。中山峠の驛遞は、いまはもうやつてゐないが、北見峠のは今でも四國人の老夫婦がやつてゐる。北見峠は、スキー地としてもかなり面白いが、ある秋も晩く友と二人でここを北見側に越した時に、新雪を頂いた天鹽岳の姿を、その峠路

の途中から眺めた印象は、その後、冬、天鹽岳に登る機会を私にもたせた程に深いものであつた。しかし北海道の峠では、北見峠のやうな大きな峠よりも、名もないやうな小さな峠に、更に深い印象を残してゐるものの方が多い。

「山にのぼる者の心を、最も強く惹きつけるものはなんといつても峯の頂だ。けれどもその頂と頂との間の低い凹みを言ふ峠といふものにも私たちの山にのぼる者の心を惹くに足るものが幾分はあるやうに思へる。ことに私たちがただ山にのぼるを愛するほかに、また山のなかをさまよひ歩くことや旅人のもつ心を多分にもつに於ては特に然るをおぼへる。」と、大島亮吉氏がその『峠』なる一文に於て述べてゐるやうに、山登りといふよりも寧ろ山歩きといふやうな態度に於ては、ただ峠越えそのものうちにも、また十分に楽しさのあるのはいふを俟たない。そして北海道に於ける山登りは、一般に山岳の高度が低く、その形態的な點からしても、多分に山歩きの味をもつた、漂泊的色彩の濃いものとならざるを得ないことが、尙更私をして小さな低い

淋しい峠に、興味と愛着とを感じしめたのであつた。

金山の奥の占冠シユムカヅツから右左府ウツサツフに通じる低い峠もその一つだつた。雲の切間を見せながら、時々ばらばらとくる夕立が止むと、頸を拂ふほどに丈なした路傍の雑草の葉先の露が、初秋の午後の陽を斜にうけて、美しく光る八月の終りの一日であつた。その時は、十日ほど日高の山を、ひとりで歩きまはらうとしてかなり重くなつた荷物は、右左府までを遞送馬車に托したので、私は手ぶらでとぼく／＼とその馬車の後からついて行つた。何時切り開かれたか、今はもう少しも人工の跡が見えないほどに古びた路に、明暗をかたどる闊葉樹が影を落して、雨後の土にもほどよい濕氣を含んだのが、情趣深く思はれた。すでに秋草は咲き亂れ、薄の穂は高く、さわぐるみも漸く熟しかけてゐた。峠を下る頃から曇り、雨となり、やがて、雨のためにひとしほ静けさを増した閑靜な山懐の村落右左府にとはいつて行つた。

廣尾ヒロツツから札樂古サツラツコに通ずる峠を越したのは、樂古岳に登つた九月の始めであつた。やはり馬車を通ずる程の道であつたが、樹木は無く、山火にでも遭つたのか、鳥の澤山止つた焼棒杭がまばらに立つた、全く淋しい草原であつた。情趣には乏しかつたが、行人稀に鳥聲徒に淋し、とでもいつたやうな、それだけにまた如何にも十勝の南の方の山奥の開墾地らしさを強く感じた。それにその札樂古といふ邑が、わづかに數軒の農家が散在する、谷間の淋しい、ほんとに淋しい部落であることが、寂しい峠の景色を更に印象づけたのであつたかもしれない。

濱益ハママスから瀧川タキカハに越える清水峠はすでに廢道なので、武好から雄冬山を越して泥川ドロカハの驛ドに泊つた翌日は、どこが峠の頂なのか、いつの間にか峠を越してしまつてゐるといふやうな、低い名も無い峠を通つて四番川の部落に出て、それからまた青山峠といふのを越して西徳富シトツブの町に出た。四番川といふのは、當別川トツブのいち

ばん奥の山くぼの部落であるが、そうした北海道の僻陬な村邑としては珍しく明るい感じのするところであつた。もちろん泥川からそこに越す路も、そこから西徳富への青山峠でも、一人の人にも遭ふことのない忘れられたやうな峠路であつたが、青山峠から村里に近づきつつあつた私は、ふと、花袋の「山水小記」の一節を想ひ浮べた。それは彼が羽前と羽後との間に横はる大きな峠を一日かかつて越したある秋の夕暮、越して來た山嶺の起伏が盡きて、夕日に明るくひろく展開された野の向うの連互した群山の上に、丁度月が半輪を空に現はしたやうな月山の姿を見出した時のことである。「——私は一日の疲勞を忘れたやうにしてその夕暮の色に彩られた遠い山の姿に見入つた。旅情は湧き上つた。私は驅けるやうにして峠を下りて行つた。」何といふ情熱と、そしてまた眞實であるか！疎々として帽廂を掠め落ちる落葉を踏んで、私もまた軽い旅情に驅られながら峠を下つた。

こんなやうな低い峠なら、地圖の上で到る處に求められるが、札幌から四五日の手輕な山歩きとしては、

私はこの邊の低い山や山道や峠や驛遞などに、いちばん面白さを感じ、そしていちばん愛着をもつてゐる。

附 記

驛遞に就いて。驛遞は、今でもなほ地方色の一つをなしてゐる北海道特有の舊い制度で、北海道の田舎を旅行するものは、これに依つてどれほどの便宜をうけてゐるか解らない。私はこの驛遞といふものに、自然な北海道らしさを感じるし、それだけにまたこれに多少の愛着をさへもつてゐるが、微臭くて汚ならしい驛遞なんか大嫌ひだといふ人もある。私の親しい友人にも幾人かゐる。私には、少くとも北海道の旅に於ては、かへつて好ましく思はれるやうな、地方色をやや濃厚に出した邊僻な片田舎の驛遞が、ある人達にとつてはむしろ不快な場合さへあることは、好尚の趣くところ實にそれでいい譯だが、讀者の中には、いつたい驛遞とはどんなものか想像もつきかねる方もあらうと思はれるから、そのあらましをここに書き添へることにした。驛遞のことは、北海道志(卷二十九・陸運の項)

及び開拓使事業報告第四編(大藏省版・明治十八年)に精しく、その他「道治一斑」「北海道小誌」「北海道交通要覽」等にもその大體は述べられてある。私のここに書くのも、勿論それらの文献によつてである。

驛遞といふのは、地域廣潤人煙稀薄で交通施設の備はらない北海道で、拓殖道路の開鑿に伴つて僻陬の地に驛舎及び馬匹を備へて、行旅の宿泊と貨物遞送のための利便に供する官設の交通補助機關とも謂ふべきものである。その歴史はかなり舊く、松前藩時代に始まるが、すでに村落を形成してゐた松前領内では村史がこれを兼掌し、領外の各場所はその場所を請負ふ商人の經營であつた。當時は東部では會所と稱し、西部では運上屋といひ、皆、勤番人を置き、其次を大番屋といつて、何れも宿泊の出来るものであつた。そして唯飲食を供するのみで途中の休憩所に當てる更に小なるものを通行屋といつた。大抵五里に一舎、十里に一屋を設けて旅客の便に供したものである。そしてその遞傳には、馬ある所は馬を使ひ、馬なき地は人を以てし、或は道案内を出した。この道案内には多く土人を使つ

たやうである。それからまた陸路の窮するところは舟で運び、これを搔送りといった。寛政年間には、會所に轎輿を備へて、行旅疫病等に供した。維新後開拓使の時代になつてからは、會所運上屋の稱を改めて本陣と稱し、又本陣を廢して旅籠屋となした。それが更に驛遞と改稱されたのは、明治五六年以後で、馬匹を貸與したり補助金を官給したりして、遞送の速達と旅客の便宜に供へたものである。その後驛遞の規則はしばしば改正を経たけれども、その大體の制度に變りなく今日まで續いてゐるものである。ただ新道路の開鑿や、地方開墾の發展に伴つて、驛遞の數は累年増加した。明治二十一年には、全道の驛遞數百十ヶ所、三十年には國道筋三十七、縣道筋百三十四、里道筋四十一、合計二百十二を數へた。それ以來毎年いくつかは新しく開設され、同時にまた廢されるものもあつて、その總計は現在でも殆んど變りない。昭和六年度の統計では二百二十となつてゐる。しかし現在市街地や村などにあるものは、多く普通の旅舎も同然で、また外の旅館も在るやうな處が多いから、實際私たち旅行者に利便

を與へてくれる峠や山道や極く邊僻な田舎にあるものは、數にしてそんなに多い譯ではない。以上が驛遞についての體であるが、この制度が果して何時まで續くか、今後それほど永い生命のあるものとも思はれない。

(一九三二・九・五稿)



雄冬峠考

伊藤秀五郎

この雄冬峠といふのは、石狩國濱益郡の幌といふ部落から、天鹽國増毛町續きの別刈といふ漁村に越える山道で、陸地測量部地形圖(五萬分一及び二十萬分一)に増毛山道と誌されてゐる舊道のことである。現在では、幌から雄冬村を通つて武好橋に出る海岸の道路のみ行はれて、雄冬山を越す舊道の方は、深い根曲笹に覆はれた全くの跡方もない廢道で、もちろん雄冬峠の名も残つてはゐない。けれども、後にも先にもこれが北海道唯一の一千米以上の峠であつたことと、謂はゆる北海道七險の一つに數へられて、東海岸の禮文華峠、西海岸では雷電峠・濃晝山道などにも増して往時の旅人達を行惱ましたことなどに、私は少からず興味を索かれた。北海道の峠のことを少しばかり書いたついでに、この山道の改廢變遷の有様を附加へることにする。

一六

いつたいこの山道は何時作られたのか。尤もこの山道の開かれる以前から、狩獵をなすアイヌ達はこの山脈を越して微ながらも踏分をつけてゐたであらうことは、松浦武四郎の紀行に、「ヨイ岬は、夷地第一の嶮岨にして、往昔より九里八丁の間波浪強き故、九月中旬より通船難く、是が爲に如何なる非常の事たりとも、其注進を遲滯する事有て、只山獵の土人のみ山脈を知て僅に通ず。」といふのをみても察しられるが、略らしい路の出來たのは安政年間のことである。

「寛政十年(昭和六年より百三十三年前)渡邊胤・近藤重藏・最上徳内等は幕命を受けて東蝦夷地を探討す。此の行擇捉よりの歸途十勝の廣尾に來りしに、風雨の爲め、十勝日高の國境なるピタタヌンケルベシベツ間の險岨地は、山脚海岸に削立し巉巖絶壁にして之を通過する能はず、空しく滯在數日に及べり。茲に於て、重藏慨然として道を開かんと欲し、十勝場所の通辭及アイヌと協議し、山後に二里余の徑路を開鑿せり。之れ實に蝦夷地道路開鑿の嚆矢にして、本道々路史は是れより始まると云ふも可なり。寛政

十一年東蝦夷地を幕府の直轄とし、様似に新道を開けり。是より道路に意を注ぐこと漸く急となり、享和元年（百三〇年前）には函館に榮國橋を架設し、

同年迄には函館より長萬部・室蘭・猿留・廣尾・大津・釧路・厚岸を経て根室に至る百八十三里間に於ける險難箇所三十二余を開鑿修築せり。又文化年間には木古内山道・千歳越・雨龍越・綱走越・斜里越等延長百二十里余、安政年間には黒松内越・雷電嶺・余市岩内間・小樽錢函間・阿冬山道・濃畫山道・關内太櫓間・潮柵島牧間・鶉山道・積丹美國間・余市古平間等延長七十四里の道路開鑿せらる。」

この阿冬山道（雄冬山道に同じ）が即ち増毛山道で、安政五年七月（七十三年前）に完成したものである。

雄冬山道ハ北海道第一ノ險岬ナリ。南ニ愛可布、濃畫二岬ノ險アリ。濱益中間ニ在テ九月以後海路通ゼズ。因テ幕府山道開鑿ノ命アリ。安政四年五月十八日支配人直右衛門等手ヲ下シ明年七月成ル。

この支配人といふのは勿論濱益（當時の濱益毛）の支配人黒澤屋直右衛門のことである。松浦竹四郎の紀

行にも、「早く此山道を可開との事にて、増毛場所（註、増毛は濱益毛の誤り）支配人黒澤屋直右衛門、志を起して功を立つ、安政丁巳なり。」とある。

そしてこの最初に開築された雄冬山道が、雄冬村を通る海岸道路ではなくして、雄冬山を越すところの陸測地形圖の増毛山道であることは、舊い地圖を檢べても、文献に於ても明かである。例へば、松浦竹四郎の「山川地理取調圖」をみても、雄冬山を越す山道のみであるし、林顯三の「北海紀行」にも、海岸道路のことは全く書かれてゐないのは、恐らく當時（明治六年）はまだそれが作られてゐなかつたからであらう。それからまた、かかる僻険な山間のことであるから、道路とはいへ刈分程度のものであつたであらうし、當時既に人の往來の稀で、従つて自然の荒廢に委せて道路の改修もなかつたであらうことは、次に引用する「北海紀行」の一文に依つて窺はれる。

七月十四日快晴稍風烈し

此日快晴と云へども、畏の風烈しくして、舟行は風に溯るが如く、午前十時に垂んとすれども、風

向き尙悪しく、直ちに道を山間に取りて發程す。濱

益より一里にして群別と云ふ地あり。(出稼家二) 群

別より半里余にして幌郡別と云ふあり。(出稼家十)

是より「ヲフイ」峠に係る。此處より峠迄三里、

道路峻險にして、荊棘道を遮り、蛛絲人面を蔽ひ、

雲霧足下より起りて、忽ち前後の山容を失ふは、

甚だ厭苦すべしと雖も、衆鳥囀り、奇草薫り、花實

各自奇を呈するは亦佳觀といふべし。この山徑常

に行客を斷つは、舟行の便利あるに由るなり。七

里の山路人跡を斷ち、幽雅最も愛すべし。梶群別

より山上一里にして、宇鞭名山といふ、これより増

毛高札場へ、六里二十六丁の榜示あり。尙登るこ

と一里にして、字登古丹トコケンといふ。増毛高札場へ、五

里二十六丁の榜示あり。この邊五葉松丈け七八尺

ばかりなるもの、往々繁殖し、背を反せば白雲は

山又山を覆ひ、濱益「ヲフイ」岬の海峽は朦朧と

して雲中にあり。眼下満面渺々として、物色を分

たず、孤身雲外に在り、恰も一箇の別世界を望む

といふ、一里ばかりにして濱益と増毛の疆界なり。これより増毛高札場へ四里二十五丁の榜示あり。尙僅にして絶嶺に至る。奇峯怪巒の間白雲斑然たるも、恰も虎豹の谷中に眠るが如し。路傍の白雪を採りて渴を醫す、亦美味なり。此時辰殆んど五時、前途尙四里餘の程あり。途を急くと云へども、道案内の雇夫、前途の險に疲勞して甚だ困却せり。此より以北は、客年既に道路の修繕あり。土工六十人にして六十日間を費せり。故に増毛領よりは路大に宜しく、且つ降り坂なり。領堺より一里二十五丁にして字「タツニタエウス」と云ふ。此邊蚊の衆多なる、噉々と群集し、刺螫に困疲せり。尙一里計りを過ぎ、斜陽全く没して十時に垂んとする頃、漸くにして麓なる「ボンナイ」と云ふ地に達す。速に飯を喫し、餓を醫す。爰より増毛に至る、此程一里なり。此間人家連接せずと云へども、僅の距離にして連絡せり。増毛入口に併流せる三條の河あり。角材を構して長さ九十八間の長橋を架せり、號けて「シウカンペツ」と云ふ。西地一

二の長橋なり。折柄舊曆二十日の月は皎々と増毛の山際に輝き、河風沍渡りて秋景凄然。夜十二時後増毛旅宿小野寺富三郎方に投宿。(小樽増毛間紀事の一節)

以上でこの舊道の方の事はほぼ解つたが、それならば雄冬村に通ずる海岸路、即ち陸測地形圖の雄冬山道は何時作られたか。左に帝國地名辭典の「雄冬山道」の項を引用する。

雄冬山道。石狩國に在る舊山路。もと濱益場所より天鹽國増毛場所に通ずる山道にして、一に増毛山道ともいひしが、其後大部分荒廢せるを以て、近年別に道路を開き、中間雄冬の海岸に出で、同所より北を増毛山道、南を雄冬山道と呼ぶ。

右の外には、私はまだこの新道開鑿に關する文献に接しないから、その正確な年月は解らないが、明治二十年發行改正北海道全國にも、明治二十七年發行北海道實測圖にも、新道の記入のないのを見れば、恐らくそれ以後のことであらう。明治十六年發行の北海道沿海圖に海岸道路の記入のあるのは、恐らく、村人達に

依て自然に形づくられてあつた小徑で、ここにいふ新道はその小徑をもとにして現在の如くに改修されたものであらう。そしてこの新道の雄冬村以南を新に雄冬山道と呼んだのは、雄冬村に通ずる山道といふ意味であつて、雄冬山とは何ら關係のない名稱である。これに反して舊道の場合では、雄冬山を越す山道の意味であつて、雄冬村とは直接には無關係なのであつた。元來、雄冬は元名を *Umu* ウファイといひ、焼けたる處の意であつて、此の附近一帯赤色沙石の絶壁で、かつて硫黄が見出されたといふことから、その名の偶然でないことが解る。後世ウファイがオフイに轉訛し、これに遠布伊(フイ)、小布伊等(フイ)を當てたものもあるが、雄冬の二字を以て村名と定めてからは、發音もオフユと變つて了つたものである。明治二十七年北海道實測圖・同年北海道地形圖・明治二十九年北海道廳統計綜覽・大日本地誌には何れもウファイヌブリとあり、大日本地名辭書・帝國地名辭典にもまたオフイと誌されてゐるが、今ではその土地の人達もはつきりオフユと發音してゐる。

次に、ウフイヌブリ(雄冬山)といふ山名は、恐らく、ウフイの東方に聳えてゐるためにこそ名付けられたものであつた。「ウフイヌブリ」といふ言葉そのものは「火山」の意であるけれども、この雄冬山の場合に於ては、川の名をとつて山名とする場合の如く、ウフイといふ地名から來たもので、最初から火山の意味に於て名付けられたものではなかつた。パチエラー氏の *Uhu-nupuri* が、若しここにいふ雄冬山を指してゐるなら、これを單に文字の上から「A volcano」と解してゐるのは當らない。^(十)それがいつの頃につけられた名稱であるかは知れないけれども、それが、この山が原始民族の眼にもはつきりと火山であると解る形態をしてゐたそれ程遠い時代であつたと考へられないからである。それはとにかく、舊山道を雄冬山道と呼んだのは、それが雄冬山を越すからで、従つてこれをまた遠^{フイ}布伊越(明治七年日本地名索引・明治八年皇國地名一覽)^(十九)といひ、ヲフイ峠(北海紀行)とも呼んだ。日本名勝地誌には雄冬嶺と記し、日本名所事彙にはをふゆ^(二十)たうげ(雄冬嶺)と誌してゐる。また稀に阿冬山道(前

出北海道交通要覽)の字を當てたものもある。それと同時にこの山道はまた増毛山道とも呼ばれてゐたことは、前に引用した帝國地名辭典に依つても明かであるし、北海道地質報文にも「マシケ山道」と誌されてゐる。陸測地形圖はこの増毛山道の名を採つてゐる。これは恐らく増毛町に通ずる山道といふ意味であつた。何故といへば、暑寒別岳を一名増毛山ともいつたけれども、(帝國地名辭典・北海道地質報文)これはこの山道とは餘程離れてゐるし、またこの山群一帯に増毛山地とか増毛山脈とかいふ名稱をつけるやうになつたのは、この山道がその名をつけられてから、すつと後のことであつたからだ。尤も、國を異にする天鹽側と石狩側とは、或はその呼稱も異つてゐたかもしれないといふことも考へられるが、それに關しては何ら殘された文献はない。

それからもう一つ、御殿峠といふ名が殘つてゐる。大日本地名辭書の「君別嶽」の項にそう載つてゐる。

御殿峠。——ホロクンベツの北東三里に、御殿峠在り、増毛郡に跨る。高距一〇三一米、雄冬岳の

南一里。海岸は、雄冬岬以南二里の間、山趾海に迫り、岩角鋸齒の如くして、道途全く通ぜず、開拓使草創の時、ポロより險阻を攀ぢて、増毛郡に通ずる山道を改修したり。これを濱益御殿と稱す。舊名ルベシベともいへり。

前掲「北海紀行」中にオテンとあるのは即ちこの御殿で、オテンといふのがもとのアイヌ名で、それに御殿の字を當てたものか、それとも何かの理由から和人がそこを御殿と呼んだのか不明である。オテンが原名であるとしても、いまその字義は明かでない。舊名ルベシベともいつたことは、松浦氏山川地理取調圖に、陸測地形圖の濱益御殿の位置に、山名としてルヘシへと記入されてゐるのに依つても知られるが、正しくは Ru pesh be ルベシベで、路の意味である。即ちポロトマリ（増毛町の舊名）へ越す路の意味であることは、例へば石狩國上川郡上川村の留邊志部がやはり路の義で、北見國「ユーベツ」へ下る路を意味してゐた（北海道蝦夷語地名解第二〇頁）のと同例である。ルベシベといふ地名は現在でも北海道の各地に見出される。

そしてこれによつても、前にも一寸書いたやうに、山道開通以前から、ここにかすかな徑のつけられてあつたことは察しられる。

それから、いま武好驛遞の在るところは、松浦氏地圖にはフィウシと記され、帝國地名辭典にはフユシと書かれてゐる。即ち、「増毛山道」の條に、「今の増毛山道は別列の海岸より山道に入り、三里にしてフユシに達す。此所に官設驛遞所一戸あり。フユシより約二里、右折して急坂を下り、海岸の岩雄に出づ。——」とある。陸測百万分一地形圖にはブヨシと記されてゐる。恐らくフィウシが原名かと思はれるが、武好の字を當てた爲に、今ではブヨシと發音されるやうになつた。それならば、こんなやうな變遷を辿つた舊山道の、かすかながらも徑の跡を残してゐたのは何時の頃までであつたらうか。それはさほど舊いことではないらしい。私が始めて大正十二年の春に、武好の驛遞に泊つた時には、その驛遞の主人の話では、この舊道はもう全く無くなつてゐるといふことであつたが、大正八年測圖の陸地測量部の五万分一地形圖には、増毛山道と

してちやんと小徑の記號がつけられてあるから、その頃まではまだあつたのであらう。もちろん道廳實測二十萬分一地形圖(明治二十七年出版・前出)には、立派にこの山道が載つてゐるし、大正二年發行の「大日本地誌」巻九にも「——増毛に至り、是より増毛山塊に阻れ、有名なる濱益御殿の山道となりて石狩の西北岸に及ぶ。」と誌されてある(五三九頁)。

以上で、この山道の歴史はほぼ書きつくした譯だが、終りにこの山道に直接關係のある地名について少しばかり書き添へる。

濱益(ハママス) 「北海道蝦夷語地名解」に依れば、

原名は「ヘロクカルン」Herok'kar'ushi で 鯡場と

譯す。鯡の群來おびだたしき故である。その鯡時

には鷗が海を埋める程群集するので、また一名マ

シケイ(鷗處の義)ともいつた。寶永三年「オタ

コツベツ」の兩岸に住んでゐたアイヌを、此地に

移し、益毛場所と稱した。謂はゆる中場所と奥場

所の交界にあたり、一時は盛大な漁場であつた。

元録島(二二三)帳に「マシケ」といふのは此地である。その後マシケ場所をポロトマリ(今の増毛町)に移

し、而も更に舊場所に新漁場を開き、砂濱があるので濱益毛と呼んだ。このマシケ場所改廢復興の

年代は不明であるが、大日本地名辭書に依れば、享保・元文の頃のことであらうといふ。蝦夷

行程記(二三四)には、濱間繁と書いてゐる。明治三年國郡

撰定の時、松浦竹四郎の意見が入れられて、濱益毛の毛の一字を省略して濱益の二字となしたが、

讀み方は舊來の通りハマシケといつて、ずっと後までそう呼ばれてゐたらしい。蝦夷語地名解、

大日本地名辭書を始め、多くの地理書にそう讀ましたものが多い。しかし現今では既にハママスと呼び習はしてゐる。

幌(ホロ) 原名ポロクンベツ(幌群別と當つ)の下

畧である。「ポロ」は「大」、「クンベツ」は「危川」

の意。近くにあるボンクンベツ(小危川の意)の方

は上のボンを畧してクンベツ(群別)と變つた。

明治七年北海道地誌要領^(二十六)に幌群別嶽^{ホロケンベツ}といふのは、今の群別岳のことである。

雄冬(ラフユ) 原名 Uhiip ウフイプ、焼けたる處の意。(本文参照)

別刈(ベツカリ) 原名 Pesh tulari ベシトカリ、岩壁の此方の意。或は岩壁の行き留りとも譯す。ベツカリといふのは轉訛である。(北海道蝦夷語地名解)

増毛(マシケ) 原名ポロモイ、大灣の意。一名ポロトマリともいつた。場所を置くとき「ポロモイ」を増毛^{マシケ}と改稱した。元録島郷帳に「ほろとかり」とあるのは即ち此地である。

暑寒別(シヨカンベツ) 原名 Sho kan pet ショウカシヨカンベツ、瀧川の意、川上に瀧ある故に名づく。

引用文献 (数字は本文註入の数字に當る)

- (一) 北海道交通要覽(第一編) 北海道廳土木部道路課編・大正十五年十月(第二頁)
- (二) 北海道志・卷九地理・道路之部 猪野中行編・北海道廳版・明治十七年二月(第三〇五頁) 原版は和本二十五冊、明治二十五年五月上下二卷に纏めて翻刻。
- (三) 大日本地名辭書(續編) 吉田東伍編・明治四十二年(第一六二頁)
- (四) 東西蝦夷山川地理取調圖(十) 松浦竹四郎著・安政六年
- (五) 北海紀行 林顯三著・明治七年
後年本書を増訂し「北海誌料」として上梓さる。本文引用は「北海誌料」第七〇二頁に據る。尙、幸田露伴編「掌中山水」上卷に、本文引用増毛紀行の一部を收む。
- (六) 帝國地名辭典 太田爲三郎編・明治四十五年六月
- (七) 改正北海道全國(百萬分一) 内務省地理局・明治二十五年五月
- (八) 北海道實測圖(二十五萬分一・切圖三十七枚) 北海道廳・明治二十七年
- (九) 北海道沿海圖(八十六萬四千分一) 吉田晉著・明治十六年

十二月

二月(第八十三頁)

一七六

(十) 北海道蝦夷語地名解(再版) 永田方正著明治四十一年(第三七二頁)(本書初版は明治二十四年三月)

(二十三) 元録島郷帳 續々群書類従・第九地理部に收む。北海道誌に關する最古の文獻。

(十一) 北海道三角測量報文 開拓使版明治十年十二月(第七七頁)

(二十四) 蝦夷行程記 阿部喜任編・安政三年

七頁)

(二十五) 北海道々國郡名撰定上書 松浦竹四郎・明治二年

(十二) 日本地名字引 大槻修二編・明治八年十月

(二十六) 北海道地誌要領 明治七年十二月(第十五枚)

(十三) 毅堂集 鷲津毅堂著・明治年代

著者及發行所名を記せざれども、恐らく開拓使の藏版ならん。

本文引用は「掌中山水」上巻より再引す。

(一九三一・一〇・一六)

(十四) 新撰中地理書・卷五 山田行元編・明治十二年二月

(十五) 北海道地形圖(五十萬分一) 北海道廳地理課・明治二十七年輯製・卅年十二月増訂再版・卅四年二月三版

追 記

(十六) 北海道廳統計綜覽 北海道廳・明治二十九年十一月

(十七) 大日本地誌・卷九 山崎直方・佐藤傳藏編・大正二年

(十八) アイヌ英和辭典(第二版) パチエラー著・明治三十八年十月

十月

(十九) 皇國地名一覽 馬嶋維基編・明治八年五月

(二十) 日本名勝地誌・第九編・北海道の部 松原岩五郎著・明治三十二年(第百二十一頁)

この山道に關する増毛町役場の回答(十月二十六日附)によると、雄冬増毛間の新道路開鑿は明治三十六年頃で、現在では、岩尾村の人達はこの道路を増毛山道と呼び、増毛町に於ては山中山道又は雄冬山道と呼んであるさうである。即ち三つの名稱が並用されてゐる譯である。又武好驛遮の創設は余程舊いことに相違ないが、正確な年代は不明であるといふことである。

治三十二年(第百二十一頁)

(二十一) 日本名所事彙 物集高量編・明治四十三年七月

(二十二) 北海道地質報文(下編) 神保小虎著・明治廿四年十

谷川岳東面の岩登攀

小川 登喜男

田名部 繁

一九三〇年及び三二年の夏に試みたる市ノ倉澤、幽ノ澤、マチガ澤登攀記録

(参照地形圖)

二十萬分一、高田。五萬分一、湯澤、四萬。

東京に近い素晴らしい岩場として、谷川岳の名は既に廣く知られ居る所である。南北に走る上越國境線のその四軒餘りの尾根筋へ、千五百米の高距を以て東面から深く切込む峻険な五つの澤は、尙いくつかの未登攀の岩壁を残して、吾々若いクラッグスマンの心を誘つて止まない。

最近、それも殆んど一九三〇年から試みられたと云つていゝ幾つかの登攀記録の中、國境線へ迄完成したルートを示したものは、市ノ倉澤から入つて御立岩ミツタテイシの右に取付いた京都帝大の人達(關西學生山岳聯盟報告第二號)と、市ノ倉の二ノ澤から鋸岩ノコギリイシへ取付いて

マチガ澤との間の尾根を登つた青山學院の人達(青山學院山岳部報「尾根づたひ」第三輯)の記録がある。

その他に尙、市ノ倉澤、マチガ澤間の尾根は、東京高師の人や、湯檜曾の阿部氏等が、マチガ澤からも登つて居り、又私達の仲間の安村二郎、木下隆二兩君は、本年八月市ノ倉の尾根を京大の人達の登路とほぼ同じ登路を登つた(右寄りに行きテムニーのあるリンネを登つて尾根に出で、市ノ倉頭で露營し、翌日再び市ノ倉の尾根から一つ下のリンネをとつて下つた)が、その他は多くは目的を達して居ないもの様である。

吾々が北の方から遙々この岩に憧れてやつて來たのは、一九三〇年の七月のことであつて、市ノ倉澤正面の登攀記録はその時のものである。吾々はこの岩壁から受けた強い印象を忘れ兼ねて、一九三一年の夏再び谷川岳を訪れて、目的とした幽ノ澤の右俣と左俣の登攀に成功する事が出來た。最後にマチガ澤を登つて、直接北ノ耳の南の壁への登攀をも完成する事が出來た。之等によつて大體所謂谷川岳東面の岩場の様子を、一通り探知する事が出來たので、一先づこれを纏めて

見度いといふ希望を持つ様になつた。以下はこれ等の登攀記録である。

市ノ倉澤正面の登攀

一行 小川 田名部 高木(力)

一九三〇年 七月十七日(曇、午後夕立)

一ノ倉澤出合(六、〇〇)―雪溪下部(七、〇五)―雪溪の裂
け目(七、三五)―雪溪上部(八、二五)―一枚岩の岩場中の
臺地(九、二〇―九、四〇)―水のあるリンネ上の臺地(一、〇
〇―一、二〇)―尾根上の岩塊下(三、〇〇)―同岩塊のチム
ニー上の廣い臺地(三、三〇)―國境線の尾根(六、五〇)―南
ノ耳露營(七、四五) 翌朝西黒澤の道を下る。

暑い日中を重いリュックザックに汗を絞られつゝ、谷川
温泉の方から湯檜曾^{ユヒソ}を通つて、やつと市ノ倉澤に着い
たのは四時頃であつた。岩場の様子について全く知る
所のなかつた私達は、その豪壯な岩壁を見ると直ぐに、
道から近くの所へ天幕を張つた。谷川木谷の粗^{マナイクラ}岩で、
大した岩も味へずに失望した自分達は、この澤の鬱林
の上に立ちめぐらされた岩の、陰惨な相貌を望むに及

んで、新しい岩への熱情と、登攀への高揚せる意志と
を吹き込まれた。そして夕闇が全く岩壁を飲込んで終
ふ迄、暗い奥の壁を幾度も眺め返しつゝ、快い空想に
耽りながら、いそぐと準備を整へ寝に就いたのだつ
た。

その夜は思ひがけない蚊の襲撃に惱まされ、破れが
ちな微睡^{まどろみ}の中に明けた。空はどんより曇つて居り、霧
は昨日よりも低く岩壁の上に垂れ下つて居たものゝ、
兎も角岩の様子を調べようと思ひ、飯を濟ませると直
ぐ天幕を出た。

澤石傳ひに約三十分程行くと、右から小さい澤が落
合ひそこから狭い岩床となる。その所を右岸の人の踏
んだ跡を通つて過ぎると、澤は再び石が累積し幾分廣
くなつて、右岸から急な澤(一ノ澤)が落込んで居る。
そしてそのすぐ上手に於て既に雪溪の下端にぶつ
つた。夏でも雪があると云ふ事は曾つて成瀬岩雄氏
から聞いては居たが、高々六七百米のこの邊にこの様
な大残雪を見出した事は意外であつたし、又嬉しく
もあつた。

雪溪の下端は洞窟の様に融け込み、大きな口を開いてのしかゝつて居るので、何れかの岸壁を搦んで少し上から降りなければならぬ。兩岸は共に草の混つた急傾斜である。自分達は右を登り、念の爲ロープを付けて雪溪へと下つた。冷い朝の微風は心地よく頬をなぶる。時々前面の岩壁を見上げながら、堅雪の上をポツ／＼登つて行くと、やがて衝立岩ツイクテイロの眞下邊りで、二ノ澤の落込む少し上で、雪溪はくびれた様になつて幅一米半程の裂罅が雪溪を上下に切裂いて居る。

自分達は是非奥の壁に近づいて見度いと思つて居たので、うまく飛越せはしまいかと狭まさらな所を捜して裂罅の縁を歩いて見たが、向ふ側がやゝ高いし、蒼白く裂込んで居る深いその中を覗くと、餘りいゝ氣持がしないので暫くためらつて居た。併し自分が右手の一枚岩の岩場を下から大きくまいて上へ出るルートを考へて居ると、田名部が「ブロックを作つてロープで降りようぢやないか」と提議したので、やうやく自分も本で見たその技術を出し早速取掛る事にする。裂罅の右端へ行つて見ると、充分雪の厚みはあり十米程

下の岩場の工合もいゝので、そこを選んでピッケルを振ふ。間もなく方二尺位のブロックが切られ、リングに通してロープが垂されると、最初に田名部が巧みに降りて行く。そしてルックザックを下して、次に高木が、それから自分が堅雪の壁を樂に降り、容易に下の岩場に立つ事が出来た。思ひがけなくも此處で、今迄試みた事のない技術をうまく使つたと云ふ喜びが、皆の顔を明るくした。

再びロープに結び合ふと、その岩場を左上へと登り、五十米程行つてから裂罅の小ささらな所を撰んで上の雪溪の傍へ下る。その裂罅は五十度餘りの傾斜なので十程ステップを切つて雪溪の表面へ出た。

ブロックを使つた事に對し、何かしら得をした様な氣持になつてすつかり氣をよくした三人は、昨夜の不愉快な蚊の事や、寝不足も忘れて、上部の雪溪を調子よく登つて行つた。雪溪の傾斜は段々増し、その最上部は相當急でもあり、表面が融け固つたのか、或ひは激しい雪崩の壓力の爲か、氷の様に蒼白く光つて居て靴釘ネイルが充分喰込まない様な所もあつて、ピッケルを持たない二

人の爲に二三度確保したりする。雪溪の最後は巨大な雪塊が群立ち、寫真で見る氷河の感を與へて自分達を喜ばす。この小さいセラックスの様な間を抜け出て、やうやく奥壁の岩場の最下端に達する事の出来たのは八時半頃であつた。之から上は見上る限り做煩な岩壁である。僅かな休息の時を探ると、直ちにすぐ上に擴つて居るなめた様な一枚岩の大きな岩場を、縦に走つて居る岩の節理に導かれながら登つて行く。

この一枚岩の綺麗に磨かれた岩場は三十度餘りの傾斜なので、氣持よくぐんぐんと登り、さして困難な所もなく程なく百米程上の臺地に達した。丁度そこは上のリンネ(本澤)から水が迂り落ちて居る所なので、第一回の食事を攝る事にする。上の霧は盛んに東へと卷いて居るが、少しく雲切がしては薄日がさすので、のんびりと美しい岩の相貌を楽しむ。白く見え隠れして流れる湯檜曾川の森林帯から、今迄登つて來た澤や雪溪が足下迄延上つて居る。左右の懸崖は六十度程の角度を以つて落込み、自分達は僅かに前面を打開された大きな鐵の箱の底に居る様な感さへする。三四十羽と

一群なす岩燕は、この巖の大伽藍を守護する小さな精靈達の様に、見なれない自分達を巡つて目前の空中を飛び交ふ。

やがて充分な休息の後、張切つた氣持で新たに登攀が始められる。左に瀧澤の逆層で切落された壁を見ながら、この一枚岩の岩場を登りつめると本澤のリンネの入口に達する。そこからは急に岩質が變つて、角々した岩場になるが、すぐ正面は小さいながらも壁をなし水が滴つて居て一寸厄介に見えたので、左に割込む細いリンネの方へ廻り、それから右上へと登路をとる。暫く登りその上に出て、本澤のリンネを覗くとそれは深く刻れて居てそれについて行く事は出来ないのだ、そのまゝ上の草の混つた胸壁バットレスを登り続ける。

その邊の傾斜は六十度餘で、岩角で確保しながらほとんど平になつて見える先程の雪溪や一枚岩の岩場が銀灰色に光つて見える。時折雪溪の一部が轟然たる反響を残して崩れ落ちる。岩を搔くネールの音や、不安定な石を落す沓えた音だけで、緊張した静けさが続く。やがて右へとトラヴァースし暫くして、リンネの上の



市ノ倉澤正面の岩壁

桑田英次

小さな岩塊を廻り、斜上氣味に狭い棚を行くと、水の滴つて居る比較的大きなリンネへ達する。本澤のリンネはすぐ横に見下せるが、一寸落込んで居て手強さうなので、すぐそのリンネにルートをとる事にする。

そのリンネはかなり急であるが、手懸の多いガッチリとした岩なので、緊張しながらも愉快にはかどる。やがて右の岸壁に入つて居る急な棚状の箇所を行きつめると、リンネは一枚岩の岩壁で圍まれて、三四十米の外側の開いた悪いチムニー状の所となる。中頃迄チムニーに登りによつて登り、それからは狭い裂け目について僅かな手懸りを求めて行く。裂け目の最上部はオーバーハングであり、二番目の者が確保する所もよくないので、水で濡れたその箇所を左上へと切抜ける時には、可成り激しい緊張を餘儀なくされた。

やうやく無事にこの難場を了へ、少し上の小さい緩傾斜の臺地に落着くとすぐに食事にする。霧は相變らず邊りをかすめて巻上り、目近かに見える烏帽子型の岩峰や、尾根々に並び立つ尖峰を薄くぼかして、奇異な景觀を造る。足下には霧のうすれた間から燻んだ

雪溪ががぼんやりとその姿を現す。

意外に時間を喰ひさうなので、そこに心許りの積石を積むと、すぐに動き始める。それからは暫く、草付の混つた岩場を右上へと縫ふ様に登つて行く。やがて小さな岩塊を右に廻つて上に出て見ると、赤黒い大きな胸壁が行手を遮つて居るのに面した。前面及び左右共に直立して居り下から見ると、ほとんど取付く事も出来ない様に思へたが、近付いて見ると尾根の行き盡した正面の右に入つて居る一本のリンネが、唯一の可能なルートを示して居る。尾根は兩側のリンネへ急角度を以て落込んで居るからどうしてもそれにルートを取らなければならぬと思つた。胸壁の下に来て見ると、そのリンネは深く十米程のチムニーをなして居るらしく、その入口迄尾根の行き盡した所から横に深い裂け目が走つて居る事を知つて喜んだ。先づ裂け目の安全な手がかりに頼つて、ほとんど足場のない一枚岩を膝の磨擦で助けながら、十米許りトラヴァースし、チムニーの中に身體を押し込む。チムニーの入口はやつと二人入れ得る程なので、二番目の者がその足場に立

つと、すぐに自分はチムニー登りでもつて登つて行つた。チムニーの出口は具合よくなつて居たので樂に上の廣い草の生へた臺地に出る。一先ブルックザックを引上げ、皆その臺地の上に立つと、軽い氣持になつて暫く憩ふ。

既に三時半であり、露營する用意もなくその日の中に谷川温泉へ下る積りの私達は、上の解らない岩壁を控へて、幾分の焦躁さへ感じた。やがて亂れ飛ぶ霧に、せき立られる様にして立上ると、臺地のすぐ上を登つて行つた。この壁は思つたより手強かつた。岩は堅く緊つて居るが、手懸は小さく足場は少い。臺地から五十米許りの間、二箇所の難所に極度の緊張とバランスとを要求せられる。

やうやく自分がそれをやり終へ、二番目の高木が第一の難所の上の足場に立つた時、先程から怪しく密集して居た霧は、遂に水滴と變つた。來たなと思ふ間もなく、豪雨は沛然として乾いた岩を黒く染めて行く。暗い霧の中に紫の電光が閃いて、激しい雷鳴がうす氣味悪い反響を周圍の岩壁にたゞき附ける。強い雨足は岩

に當つて白い沫しぶきをあげながら、無數の細い瀧となつて亂れ落ちて行く。身を寄せる岩陰もない岩壁に、術もなく小鳥の様に立ちすくんだ三人は、ロープを引緊めたまゝ言葉もない。濡れそぼるまゝに懸崖に寄り添つて、身のまわりを立籠める灰色の霧を見詰めて居ると、何かしら無限の彼方に吸込まれる様な無氣味な感がある。併しそれも段々と快い放心に變つて行く。

隨分長い時が經つた様に思はれた。やがて雨足も弱つて霧が明くなり、途切れ始めた雲の中に、遠く笠ヶ岳の頭が夢の様に浮き出した時は救はれた様に感じた。間もなく市ノ倉岳の斜面に薄日がさすと、ほつとした明い氣持になつて、再び行動が開始され、ロープがたぐられる。もう八時間もの登攀を續けて居るので、この濡れた岩は實際困難であつた。幾度かロープを引緊めては、可成の時間を要して登つて來る。

漸く胸壁の上の草の生へた緩斜面へ着いた頃は夕暮近く、霧れ間に見える陽に照らされた山の色は非常に冴えて、夜の近い事を指示して居た。最後の飯を分ち、暫く休むと、そさくさと濡れてこはばつたロープを引

ずりながら上へと急ぐ。岩場は終つて居た。併し急な草付は濡れた爲か迂り勝て、同時に行動する事を許さない。やがて草は笹に變つた。最後の岩塊を避けて右へと抜け出ると、急に傾斜がなくなつて、漸く自分達がか國境線の尾根筋に出た事を知つた。

卷上る霧の中にぼんやりと浮ぶ茂倉岳の肩の邊を、赤々とうるんだ夕陽が沈んで行く。ロープから解放されて、長い闘争の後の限りない安易に浸りながら、固くこはばつたロープを巻き收めつゝ、じつと沈んで行く夕日を見つめて居ると、激しい疲れと同時に何かしら淡い哀愁を覺える。

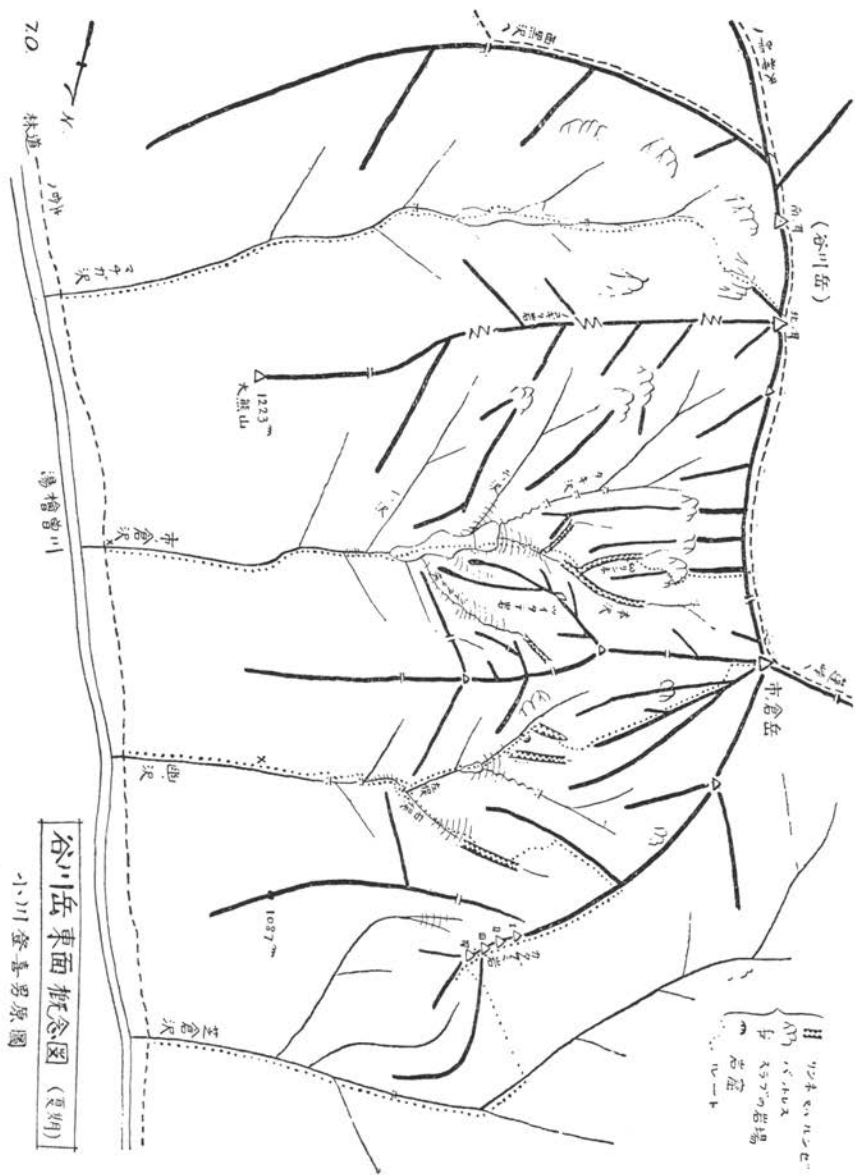
夜の帳は迫つて居る。短い休息をとると、山の脊に付けられた歩きにくい道について、南へと急ぐ。漸く南ノ耳に辿り着いた時は、全く夜の闇に閉されて、遂に道を失つて終つた。わずかに標識をすかして見て、之が谷川岳の耳二つだと云ふ事は確められても、短い草付と荒れた土肌の爲に道は消えて居た。暫く捜してから諦めると、そこで一夜を明す事に決め、小さな岩陰に三人身體をつけてしやがみ込む。

ずぶ濡れになつた自分達には、その一夜は樂ではなかつた。併し二人は濡れない上着を持つて居り、自分は純毛のシャツだったのでかなり助かつた。ルックザックの底に残つて居たわずかな菓子等を片付けて落着くと、山の歌が唱まれる。そしてこの登攀の喜びや、心に生々と甦える岩の回想を語り合ふ。やがて激しい疲れにうつ／＼すると寒さが揺り起す。時たま暗い霧がうすれて月影がにじむ。

こうして一時間おき位に時計を出して見ては、ひたすらに光に焦れながら、思出多い一夜を過して行つた。翌朝四時うすらと明け初めると共に直ぐに道を捜し、道の導くまゝに西黒澤へと下つて行つた。そして早朝暖い陽を浴びて湯檜會の温泉へと達し得た。

〔註〕

市ノ倉澤側はこの谷川岳東面の岩場の中でも最も大きく、且つ複雑なものであつて、興味ある未登攀の幾つかのルートを藏して居り、之からの研究に待つ所大であるが、それについても大體著しい澤(多くリンネ乃至ルンゼであるが)その他の名稱を定めて置く事は、記録をとる上にも、之か



谷川岳東面概念圖 (夏期)

小川登喜男原圖

ら遊ばれる人々にとつても必要な事と思はれる。自分は今迄の諸記録、殊に「關西學生山岳聯盟報告」第二號のスケッチマップ、及び「山と溪谷」第九號の黒田正夫氏のものに参考とし、自分達の觀察した所に基いて概念圖を作つて見た。この中一ノ澤、二ノ澤、衝立澤の方面は未だ自分の知らない領域であり、瀧澤は全く手がつけられて居ない所である。奥の壁の中、本澤ホンザワ（ノゾキの澤と云ふ呼稱はとらない）は下からでは衝立岩の陰になつて全く窺ふ事が出来ない。その左の水のあるリンネは、前記の記録の如く昨年始めて自分達のとつたルートであつて、市ノ倉澤の下から眺めると、衝立岩の急峻な左の尾根のすぐ横に、細く暗く眞直ぐに刺込んで見える特徴のあるリンネを指す。このリンネの左に尙凹んだ岩場があるが、それはリンネと云はれるよりもむしろ凹んだ壁であつて、その一番左に、手前の急峻な尾根に添つて長いチムニー狀のリンネ（勿論入口迄行かないと解らない）が入つて居る丈である。尙本澤のリンネに依る登攀も最近試みられた。

（小川記）

幽ノ澤登攀

幽ノ澤を溯つて國境の尾根に到達せんとするには二

つのルートが考へられる。即ち、湯檜曾川と幽ノ澤の出合から約一時間の地點に存在する二俣を左に入るものと、右に入るものとである。別圖のスケッチはこの二俣から幽ノ澤の岩壁を望んだものである。二俣の正面は物凄い胸壁で初めから手が出ないことは解つてゐるので敬遠して先づ左方を觀察して見よう。圖中A及びBは残雪である。残雪Bに達する迄は小さい瀧の連続で勿論一枚岩である。我々は先づCなるリンネに眼をつけたがこれは瀧になつてゐる。そして左壁は、ひどい一枚岩であるが右壁は草付になつてゐる。瀧は殆んど垂直で且相當な長さを持つて落ちてゐる。このリンネをよく眺めた時、我々の頭には、どうしても突進する自信が浮んで來なかつた。

我々は次に、瀧の左に深く入つてゐる又一つのリンネに眼を向けたのであるが、これは残雪BとAを連結して行けば可能性は充分に認められさうである。實際には、我々は残雪Aを通過せずに残雪Bから直接に一枚岩を登つて、このリンネに入つたのであるが、上はオーパーハンダの岩で美事に撃退されてしまつたので

ある。二俣から眺めると、このリンネが一番可能性がある様に見えるのではあるが、Dは一つの洞窟であつて、一晚の露営には極めて適して居る。可能性を認めたリンネから左にドラヴァースして、この洞窟を通過すると、連続四つのチムニーを有するリンネとなる。我ははこのチムニーを登りつめて、最後のオーバーハングの岩から約十米下で右に向つてこのリンネを出て、草付に取付き、市ノ倉岳から發する三本の細い尾

三岩場
川草付
D洞窟
C滝のあつリンネ
AB残雪



山次二俣 1931 7 S T

根の中央のものを登つたのである。我々のこの登攀によつて得た知識では、恐らく我々の登つたリンネの右方には、より良いルートは存在しない様に思はれる。只、初めに、撃退されたオーバーハングの岩から、右方の胸壁を登れば、登り得ると思つたが。

我々のルートの左方(チムニーを有するリンネの左)には、又一つのリンネがあつて、これは行かれさうに見えたが、上に相當藪があるので面白くなささうに見えた。

次に右俣に眼を轉じて見やう。右俣を登りつめると極めて美しいリンネとなる。そしてこのリンネ以外には全然ルートは

發見されない様に思はれる。何となればリンネの右壁はオーバーハング氣味の、ひどい逆層であるし、左は同じく殆んど垂直に近い一枚岩であるから。このリンネの切込みは極めて深く、二俣からはこの内部は見分げがつかなくかつた。我々が得た知識を以つてすれば、このリンネの登攀は唯一のルートで且つ岩場の感觸は理想に近いものであつた。

我々は次に、各々の登攀について記述して行かうと思ふ。

幽ノ澤 左俣

一行 小川 田名部 栢田(定司)

一九三一年 七月二十四日(曇)

幽ノ澤天幕發(六、〇〇)―二俣(七、二〇)―雪溪取付(八、二五)―岩場取付(九、〇〇)―リンネの下(二〇、〇〇)―リンネの行詰(二一、〇〇)―リンネの下(二一、四五)―洞窟(二二、一五)―チムニーのあるリンネの下(二二、三〇)―第二のチムニー上(二一、一〇)―一、四〇)―チムニーを出た上の草付(四、〇〇)―尾根の中途で露營(七、一〇)

二十五日(曇後晴)

出發(五、三〇)―市ノ倉岳(七、五〇)―茂倉岳(八、二五)―檜又岳(二〇、〇〇)―白樺小舎(二一、四〇)―二、四〇)幽ノ澤天幕(一、五〇)

長雨に無聊を喫じて居た我々は待ち切れなくなつて、遂に七月二十一日雨の中を土合進入つて行つた。實は、秘かに、もう晴れるに違ひないと云ふ豫想を持つて出發したのであつたが、無情の雨は翌日も我々を、土合の汚穢い工夫長屋の一室に閉じ込めて晴れようとしなかつた。それでも呑氣な三人は、パイプから紫の煙をあげて悠々と伸びて居た。窓外には雨に煙る湯檜曾川が水音を立て、單調な響に我々は兎もすれば眠くなる。

午後マチガ澤に遊びに行く。雨は絶えず降り續いて澤は我々の足元で元氣に唄つて居た。残雪が見え初める頃、雨は小降りとなつたが、霧は濃く谷に溢れて上方は見えない。残雪の上でピッケルを振つて見たりしながら間もなく降る。一本の澤グルミの下に腰を下して、ネーベルファンタジーを恣にする。小川と栢田は煙

草を吸つて何か考へてゐる。晴れないかなあ……。雨は又サツと降つて來た。

廿三日は午後になつてから、やつと青空が見え出したので、我々は希望に満ちて幽ノ澤に入つて行つた。

そして湯檜曾川の出合から約十分の地點に天幕を張つた。見える。見える。幽ノ澤の傲頑な岩壁は霧の中に裾を現はして、我々の上のし懸つてゐる。鬭争的な、青黴い岩肌は三人の鬭志をいやが上にもそゐる。

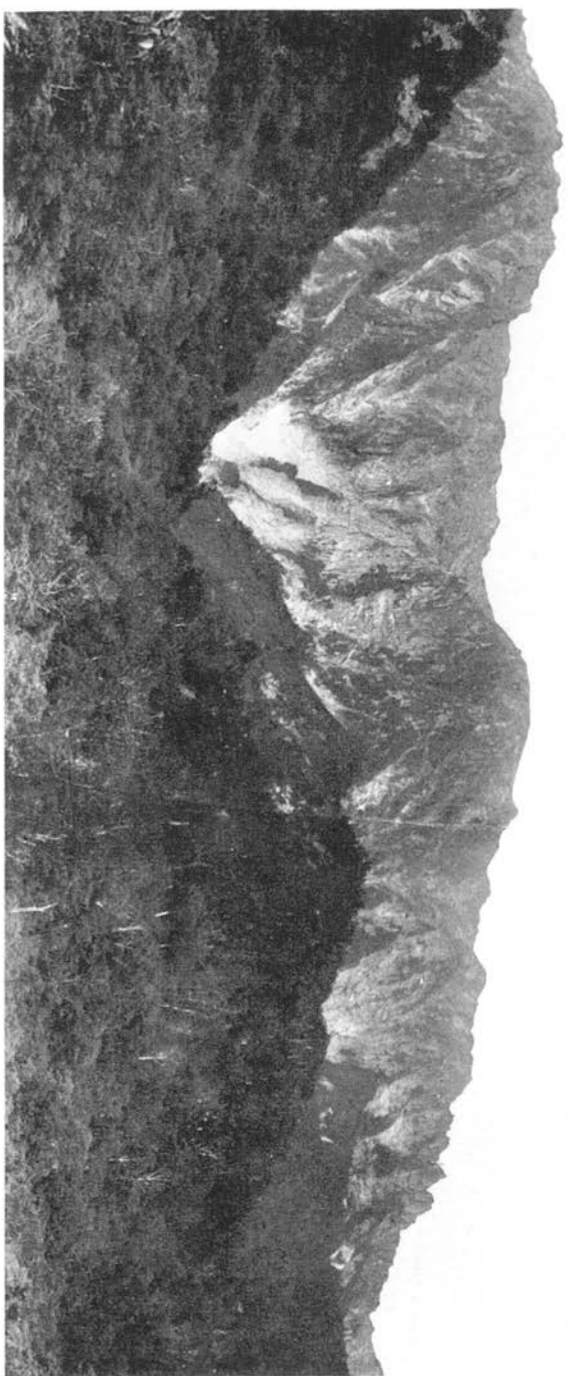
我々は、やがて楽しい夕食を終へて明日の準備に忙しく働く。美しく張られた河原の天幕に澤風が當つてハタハタと鳴る。

廿四日は爽やかな朝風と共に我々の上に明けた。躍る心を胸に抱いて午前六時天幕を後にした。磨かれた美しい岩床の上を雪解の水はサラサラ流れる。最早堆石も止めぬ急湍である。三十分の後高さ五米の瀧を右岸に絡む。陽は登つた。早朝の朗かな光線は我々の前方を照してゐる。間もなく二十米の緩傾斜の第二の瀧に着いた。岩の樋を傳つて水は勢よく落ちて居る。我々は右岸の岩と岩と藪との間を登つて行く。澤が右折す

る附近には深い池が二つあつて、その左岸は直立した岩場であるが、右岸は可成廣闊な感じを與へる傾斜二十度位の草付の一枚岩である。我々は皆鉄靴を履いてゐるので、その右岸のトラヴァースは一寸嫌であつた。

澤が右折すると兩岸は喉の様に狭つて二十米程の瀧になる。左岸の直立した岩を登つたが、手懸りが澤山あるるので樂である。七時二十分には我々は既に二俣に立つ事が出來た。寫眞を撮したり、スケッチをしたりして、暫く休む。我々の進むルートは此處から精しく觀察する事が出來た。二俣の左は小さい瀧の連続である。右岸の藪の中に入つたが、次第に増して來る暑氣の爲めに大分苦しめられた。

八時二十五分、O—M—Tの順位でロープをつけて第一の雪溪(B)に降り立つ事が出來た。この雪溪は樂で九時には、もう岩場に取付く事が出來た。我々は第二の雪溪(A)を目的としないで、直ちに目指すリンネに向つて登攀を開始した。練習の爲に順位をM—T—Oに変更した。岩質は雪崩の爲に磨耗された一枚岩である。逆層であるが縦に大きいリンネが入つて居るの



市ノ倉澤(左)及び幽の澤(右)の岩壁

榎田定司

で比較的樂である。傾斜は三十度位で、我々は、バランスの快味を味ひながら調子よく登つて行く。

斜左に登攀を續けて十時には目的のリンネの入口に着く。この岩場は全然草が無く、久しぶりで岩らしい氣分が濃厚に出て、お互ひに皆愉快さうな顔付である。此處で一食事にした。薄陽の良い天氣である。このリンネの下部は小さい瀧の連續であるが別に困難も感ぜず登つて行く。約三十米も登つてから少しこのリンネを出て右側を絡む。この附近になると、傾斜は四十五度以上である。右側からリンネの出口を見ると、怪いと思つた通り、オーバーハングになつてゐる。そこで左右から左に約十三米の一寸嫌なトラヴァースをやつてこの難場の下に三人集つて相談する。このトラヴァースはO—T—Mの順位で行つた。時に十一時である。リンネの中にはピトンを打つか、或ひは二米の困難なトラヴァースをやれば降りられるのであるが、リンネの割れた壁と、のし懸る楔、右は手に負へぬ様に思はれたので、我々は降参して、M—T—Oの順位でこのリンネから退却する事に決めた。相當に良い足溜りに腰を

下して肩で確保する。先頭は今來たルールを徐々にトラヴァースして行つた。然し最後の場所は一寸した草付で、窪みになつて居る。そして二米程離れて居る手懸りを見付けて、一歩下に降りてからトラヴァースしなければならぬ。

先頭は右手の草の中で暫らく動いてゐた。自分は漠然と、それを眺めてゐた次の瞬間に、音もなく岩にへばり付いた格構のまゝで、眞直に落ちて行く彼の姿が眼に入つた。自分は愕然とした。それは一秒もかゝらぬ瞬間であつた。彼の姿が、眼前に突起をなしてゐる岩塊の蔭に見えなくなつたと思ふと、烈しい衝動が左肩に來た。自分の右足は思はず一歩前に出たと思ふと、左の頬は強く岩壁に打つけられた。このアクションは實に突發的であつた。前に出た右足が幸ひにも滑らなかつた爲に彼の身體は、自分の左肩から伸びてゐるロープによつて完全に止められた。ロープの長さは約八米であつた。茫然とした自分は、唾を呑み込んで思はず「大丈夫か」と聲をかけて見る。下からは元氣な答へがあつた。そしてロープを三米程伸して彼は向ふ

の尾根に安全にトラヴァースする事が出来た。飛んで行つて慰めてやることも出来ない。然し自分は尊い経験を得た事を喜んだ。今の場合は、足溜りがよかつた爲に僅かに止まり得たのであつて、決して自分の力で止め得たものではなかつた。

やがて自分もOも完全にトラヴァースしてからリンネの入口迄戻つた。Mは二重結びをして居た爲、ロープで振られたけれども別に大した打撲も受けなかつた。Mは苦笑ひしてゐる。Oは笑つてゐる。此處で我々は飯にした。今のアクシデントで一時に腹を減らしてしまつたから。

今度はO—T—Mの順位でリンネの左に出て、比較的樂な岩場を登つて行つた。十二時十五分大きい洞窟を發見する。これは二俣から見た時、黒々と、よく望見されたもので安全な泊り場である。

天井には、幾つかの岩燕の巢があつた。そして音を立て、この岩場の君子は、我々の頭上をかすめて飛び廻つた。この洞窟を廻つた左上に登つて行くと、下からは隠れて望見し得なかつた狭いリンネが右手に入

つて居るのを發見する。即ち我々が失敗したリンネの一つ左のものである。これは直ちに垂直のチムニーとなつてゐる。そして左の岩壁を傳つて流れる水は相當多量である。チムニーの左壁は外方に向つて少し開いてゐて、然も殆んど手懸りは無い。右壁はオーバーハングで内側に少し剝れてゐる。高さは七米位であるが巾は大體約一米で、中頃には半米位のところもある。

先頭は次の支へるピッケルを手懸りとして一米程登つてから右壁を脊にして、チムニー登りに移り、調子よく登つて行つた。背中がオーバーハングである爲に、身體を上げるのに力が要つた。それに岩を傳つて流れる水が袖口から入つて、胴を傳はり、ゾボンを通つて靴の中に溜るのには全く參らされた。楔石の左を廻つて第一のチムニーを了へ、ルックザックを引上げた。

上を見ると又チムニーである。高さは前と同じ位であるが第一のよりは樂らしい。典型的なチムニー登りで第二を登り切つた時は、既に一時十分であつた。二つのチムニーに約四十分を要した事になる。

我々は天氣がよいのに、濡れ鼠になつたが、それで

も、すつかり愉快な気分になつて、チョコレートで喜んで了ふ。眼前には鋭い(と云つても木が生へて居るが)尖峰が岩の窓から眺められる。下の方には湯檜曾川が光つてゐる。思はずヨードラが口をついて流れ出た。

我々は約三十分も、幸福を味ひ、充分に休息を取ると、思ひ出の積石を積み、再び立上つてロープの縫れを直ほして、上に向つて行動を開始した。上は直ちに第三のチムニーである。高さは十米位であるが、出口はよくないらしい。それでも下向きに突出してゐる板状に角張つた楔右の右側に半身を押し込んでから、その岩を抱く様にして、左に廻つて、これも片附ける事が出来た。上は又チムニーである。我々は少々驚ろいた。何時迄チムニーが續く事であらう。第四のチムニーは高さ二十米もあるが、チムニーとしては下半分の十米である。上は巾が廣くなつてゐて、急な草泥りの狭いリンネになつて居る。チムニーよりかへつて手に負へない。ロープを伸して、先登はこれを登りつめて見たが、漸く身體の入る深いリンネで、その上は物凄いオーバーハングをなし、滑らかな兩壁はヌルヌルに

濡れて居り手も出ない。

相談の結果第四のチムニーの中央から右にトラヴァースする事に決める。先登の確保で次の者がトラヴァースするのであるが、確保點が無く、足溜りは實に悪い。緊張の中に無事に五米程トラヴァースしてから、上に向つて約五米登ると、一つの岩の隆起の下に達した。二人分程の足溜りである。

この附近は傾斜は五十度以上で難場である。この岩の上は草付であるが、上の方は、まるで見えない。身體をスキングさせてこの岩にまたがつて、乗り切らうと考へたが、その先の手懸りがならしい。此處はどうしても、肩を用ゐるべき場所である。自分の確保でOは下は廻つて見たが、良いルートは發見されない。遂に、肩を用ゐてOは上の草付に立つ事が出来た。幸に、一本の岳樺の木があつたので、自己確保法をやつてルックザックを引上げた。既に四時である。

岩場としては大體終つた様である。急な藪の中で數本の太い灌木に寄つて飯にする。

この頃から空模様は險惡になつて、霧は我々の廻り

に烈しく飛び初めて来た。

我々は岩と藪の混つてゐる、市ノ倉岳から發する三本の尾根の中央のものについて、ロープを結んだり、解いたりしながら、疲れた身體を上の方に運んで行つた。併し尾根に露出してゐる小さい岩峰には二三の積石を積む事を忘れなかつた。夕暮は次第に邊りを朧ろにし初めた。霧雨が音もなく降つて来た。今夜は岩陰に眠る覺悟であるから別にあはてもしない。七時十分に、一寸した岩場の下でロープを解き、臺地左手の藪の中に入つて腰を下す。ロープは濡れてワイヤーロープの様に硬く身體をしめつけてゐた。やがて雨は烈しく降つて来たが間もなく止んだ。一本の蠟燭を圍んでお互ひに無口になつて、一夜を明した。うつ／＼の中に様々な思ひ出が幻想となつて自分の頭の中をかけ廻つた。長い夜も、何時の間にか過ぎて夜明の空は次第に明るくなつて来た。我々は臺地に立つて、思ひきり朝の、まだ冷々した空氣を吸ひ込んだ。五時半である。直ちに濡れたロープを腰に結んで、凍える手先に冷い岩角を握りしめながら、昨日と同じ様に再び上に向つ

て登り初めた。この岩場を抜けて草付に出た頃霧は少しづつ薄くなつて来た。多少動いて暖かくなつたので我々は貧しい朝飯を取る事にした。もう少し許りの堅パンがルックザックの底にころがつてゐるのみである。併し市ノ倉岳は最早遠くはない。霧がしきりに動いて空は明るくなつて来た。ロープを解き、次第に傾斜のなくなつて行く熊笹の斜面を漕いで七時五十分、我々は遂に市ノ倉岳の上に立つ事が出来た。

薄陽が輝き初めて、草原にのんびりと寝轉ぶ自分達は、北の耳に吹きつける霧の動きを見つめた。時々、黒々とした頑丈な北の耳の岩峰が身を翻す様に眼前に現れて来る。市ノ倉澤は下に深く落ち込んで見通しもつかない。霧が又卷上つて来た。

我々は立上ると、昨日の登攀を夢の様にかへながら尾根を北に向つて歩いて行つた。陰惨なあの岩場に比べて、これは又何と云ふ楽しいプロムナードであらう。緩い傾斜の降りには膝の關節に心地よい律動を與へる。

我々は皆快活になつた。そしてナンキンコザクラ、イワチドリワチドリの群落の間を下つて行つた。蓬峙モモの手前千六

百米附近のピークに着いたのは十時半であつた。朝日岳も笠ヶ岳も眼前に聳えてゐる。何時もながら峠は廣々として懐かしい。烈しい生命を賭した岩登りの後で、悠久を思はせるこの廣い眺めは、自分の心に又、別の精氣を吹込んだ。

白樺小舎を通つて、やうやく暑くなり初めた林道を、時々堅炭岩の岩塔を見上げながら一時五十五分幽ノ澤の天幕に歸つた。

幽ノ澤 右俣

一行 小川 田名部 耕田

一九三一年 七月二十七日(晴)

幽ノ澤天幕發(六、五〇)―二俣(七、三三)―リンネ入口ロープを付ける(九、四〇)―リンネ中の難場上(一一、四五)―リンネの行詰りから左の岩壁に取付く(一二、三五)―急傾斜の草付を終る(二三、三〇)―幽ノ澤と芝倉澤を境する尾根の一八八〇米附近の隆起(四、五五)―堅炭岩第三、第四峯間の鞍部にて露營(七、一〇)―
翌朝芝倉澤へ下る。

廿六日午後食料を仕入れて天幕に歸へる。天氣は未だ定まらないらしい。途中で大分雨に降られた。夜は美しい星月夜であつた。

廿七日。起きて見ると空は高く、冷々とした朝風が氣持よく頬を颯る。今日はきつと天氣に恵れるらしい。我々は前の苦い經驗から今日は足袋を穿いて出掛けた。一枚岩の岩床や瀧を絡む事もなく、今度は最後の大瀧の左の岸壁を登つて七時半には二俣に着いた。

右俣に入ると直ぐに小さい瀧の連続である。大體澤に沿つてロープをつける事もなく登つて行つた。足袋は滑かな一板岩でもピタピタと吸ひ着く、傾斜は余り無いが、まるで岩の桶の中に入つてゐる様な感じがして、多少市ノ倉澤の取付に似てゐる。九時十分にはリンネ下の瀧に着く。此處から傾斜は次第に急になつて来る。我々はもう穴のあいて終つた足袋を捨てて靴をつけた。

このリンネの右壁は物凄く直立した逆層である。我々は直ちにロープをつけて、リンネには入らず左側の一枚岩を徐々に慎重に登つて行つた。逆層で然かも脆

ろい。縦に大きく入つてゐる裂け目を利用して行く。傾斜は三十度位であらう。確保は殆んどしなかつた。

の内部は可成多量の水が流れてゐる。岩は堅固になつた。我々は直ちに行當つた瀧を避けて左側の胸壁寄り

順位はT—O—Mの順である。この附近から

に急傾斜を登り、更に右上へとトラヴァースして瀧の上に出た。此處は難場の一つである。上は

眺める鋸岩の尾根は鋸の目の様で、我々の登攀慾をそそつた。登る

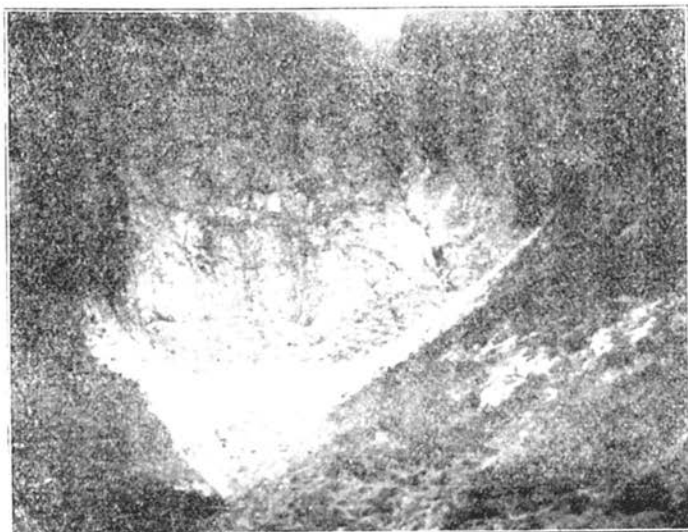
又巾広い瀧で、直立した兩岸壁は大きい岩の箱を作つてゐる。斜右上にトラヴァースを續けて、

に従つて傾斜は次第に強くなつて来る。やがて行手に當つて逆層の胸壁が見え初めた。我々はこれを避けて右に四十米程トラヴァースをして初めてリンネに入つた。

瀧の手前迄登つて見たが、殆んど垂直で然かも手懸りの無い難場である。瀧はオーバーハングであるから、あきらめて、左手を真直に登るより外にルートはない。然かもこの足溜まりは二人僅かに立てる位で、確保の場所は全然ない。下は十米余も落ちて、瀧になつてゐる白っぽい楔石を越して、遙かに遠く切れ

此處に来る迄は殆んど確保する必要は無かつた。一行の技量が揃

つてゐるので氣持よい連続登攀を續けて來た。リンネ



岩壁の侯右より望める二澤ノ幽

込んで居る。胸の高さの所に手懸りが一つあつたので、

それを頼りに肩を用ゐて約一米登つて見たが、その上に僅かに求め得られる小さい手懸りは皆下向きである。ピトンを打つ適當な場所も見付からない。順位を替へてOがやつて見る。四米程登つたが、そこでピタリと止つてしまつた。物凄い緊張が三人の間に續けられる。手を出しては何回となく躊躇してゐたOの身體は約五分の後少しづつ右方に動き初めた。そして次の瞬間、しつかりした手懸りを掴んだ彼の喜びの聲が揚つた。終に成功したのである。穂高に遊んだ折、明神岳のギャップから第二ピークへの真正面の岩壁で困難な裂け目の登攀を試みた時以來の難場であつた。逆層で然かも手懸りの小さい時は、ある程度迄身體を岩面から離して完全なバランスングをやらねばならぬ。少くとも此處は二三本のピトンものであらう。

上に立つたOは精力を一時に失つた様な顔をしてゐた。ルックザックを引上げると、僅かな足場に寄り添つて食事にした。

やがてT—O—Mの順位で再びリンネの中に入つて、上に向つて登り始める。

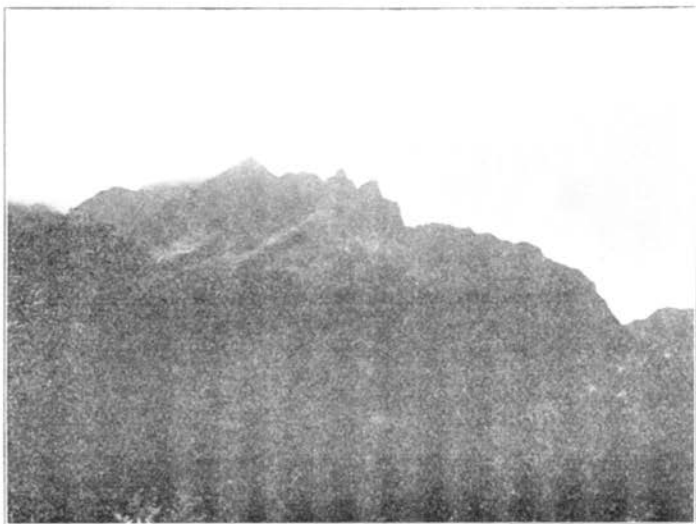
十一時四十五分、大きな楔石の上で休憩を取る。空は良く晴れて武尊山タケノカミがよく見える。岩の窓から眺める奥日光の山々は、その上に純白の巻雲を浮べて美しい。リンネの右の壁は巨大な一枚岩でオーバーハンク氣味に切り立つてゐる。このリンネは今迄の中で一番美しいものであつた。磨かれた岩肌は白色を呈して、極めて堅固である。十二時二十分再び續けられた登攀の後少憩をとる。

この邊から僅かに、リンネの中を離れて右の棚に登つて行つた。時々灰色の雲が素早く飛んで岩壁が鉛色になるかと思ふと、又明い光線が雲の切れ目から流れて、濡れた岩がキラリと輝く。我々はこの棚に沿つて左方にトラヴァースしてリンネを越し、更に尙左の岩壁にトラヴァースを續ける。上を見上げると大きく割れた逆層の瀧である。尙左右にトラヴァースして、急傾斜の胸壁を登る。これを切抜けて、草付の臺地に出た。一時三十五分である。我々は此處で又休息を取る事にした。天氣は良いし、難場を幾つか了へて良い氣分になつた我々はすつかり伸びてしまふ。然しこの臺地か

ら上の草付の岩場は急傾斜の逆層で登るに従つて前にも増した困難を味つた。なるべく笹の生へてゐる場所を選び僅か一本のビツ

ケルで確保しつつ、一人づつ動いて行つた。

三時半漸くこれを切抜ける事が出来た。行手はもう大丈夫だ。我々は岩陰に寄りそひ持参のメロンを出して舌鼓を打つて陽氣に笑ひ合つた。着のみ着のまま岩場に眠る事に味をしめた我々は「今夜こそは天氣も良いし、一つぐつすり眠つてやるぞ」なんて云ひながら毛皮のチョッキを撫でたりした。



芝倉澤出合より望める堅炭岩

此處から上はロープを結んだまま樂に藪を抜けて左の大きな尾根に出た。これを登りつめて、カクズミイワ堅炭岩から

市ノ倉岳に到る尾根の千八百八十米附近の小さい隆起の上に立つ事が出来た。四時五十五分である。我々は樹木の枝を切つて記念の署名をした。檜又岳が時々映えの赤い空に頭を出す。

この尾根を堅炭岩の方に向つて偃松と石楠花の藪を漕いで行く。今登つて來たりンネの上部はカール狀に足下に擴つてゐる。堅炭岩の上から數へて第二峰に積石を見出したが恐らく湯檜曾の阿部氏が春來た時に積んだものであらう。夕焼けが美しい。途中第三峰第四峰のギャップで十米程の處をロープで降つて楽しんでしなから七時十分、その鞍部から幽ノ澤

側に入つて岩蔭に寝る事にする。

今日は身體が濡れてゐないから氣持が良い。くつきりと隈取られた黒い岩峯を前にして、乏しい食事を取り、煙草をふかし、星を眺めたり、冗談を云ひ合つたり、唄を歌つたり……、そして間もなく月光のさし込む岩蔭で三人は氣持よく眠込んだ。

翌日も良い天氣であつた。六時に岩蔭を出て、二度迄ロープで降つて第四峯を下りかけたが、下が物凄くて見通しがつかないので少し戻り、芝倉澤に降る事にする。第三峯の方へ急な草付を巻いてから、緩い笹の中を北へと下つて七時十五分に芝倉澤に出た。そして途中で晝寝をしながらも、十一時には天幕に着いて居た。

夕方迄伸びると荷物を片付けて、土合に天幕を移した。夜は明い大きな月が登つた。(田名部記)

マチガ澤より北ノ耳へ

一行 小川 田名部 栢田

一九三一年 七月二十九日(快晴)

雑 録 谷川岳東面の岩登攀

土合(七、〇五)―マチガ澤出合(七、三〇―八、二五)―第一の滝下(一〇、〇〇)―雪溪下部(一〇、三〇―一一、二〇)―雪溪上部(一二、〇〇―一二、一五)―北ノ耳の南壁下(一二、〇〇)―同上の臺地(三、四五―四、〇〇)―北ノ耳(四、五〇)―土合(八、一〇)

幽ノ澤をやり終へた氣樂さと疲れとで起きしぶつた爲に、土合の天幕を出たのは、日のカン／＼當る七時過ぎだつた。それにマチガ澤の出合へ來ると、余り天氣がいと云ふので、わざ／＼一ノ倉澤迄寫眞を撮りに行つたりして、其處を立つたのが八時半に近いと云ふ呑氣さだつた。厄介だつたら、どこでも寝て終ふ積りの自分達は、ゆつくりと澤を登つて行く。出合から三十分入ると、始めて前方にマチガ澤の全景が眺められる。相當大きい雪溪があり、ずつと尾根迄數多くの露出した岩塊が重り合つては居るものゝ、市ノ倉澤や幽ノ澤の様に手強はさうな大岩壁もなく、岩場として纏つた感を與へない。

暑い陽光に蒸されながら、休み／＼一時間も登ると、數日前小雨の中を遊びに來た小さい殘雪のある所へ着

く。一週間の間に、雪は驚く程減じて、殆んど利用出来ない。石の上を飛び歩いて、前面の右上に掛つて居る最初の瀧の下へ来る。瀧は二十米程で、傾斜はさして急でない。念の爲ロープを結び、樂さうな右手の岩壁を撰んで、登つて行き、瀧の稍々上手に下り立つ。

そこから大きな澤の中の岩を縫ひながら暫く登ると、間もなく下から眺められた大きい雪溪へ出た。

雪溪は大して急でもないが、中頃の狭くくびれて居る所で上下に切離されて居る爲に、雪の上を少し歩いてから左岸の稍々急な草付に取付き、そこを大きくくつむ。

雪溪の上部をぼつ／＼登つて行くと、左手の西黒澤側の斜面から三人聲を掛けながら降りて来た。一寸意外に思つて聞いて見ると、數日前西黒澤の尾根から落ちた白木屋の人が、二人の人夫を連れて今朝その荷物を取りに來たのだつた。落ちた場所はよく判らなかつたが、その斜面は一帯に急で、胸壁が並んで居り相當悪い。

その人達が雪溪を下りて行くと、私達は耳二つへ向

つて、段々狭く急になつて行く雪溪を登り続ける。雪溪の最上端は瀧に面し、大きな裂け目をなして居るので少し下から右の岩場に移つた。その上の岩壁は暫くで、面白い岩場となつて居り、調子よく六十米程登ると、廣い臺地狀の緩斜面に着く。それから澤を離れて眞直ぐに、小さな岩澤の入つて居る斜面を登つて行つても、北ノ耳の下へ出られると思つたが、自分達は兎も角本澤を行つて見ようと、再び左へトラヴァースし本澤へ下り立つた。水は少いけれど、もう澤は小さい瀧の連続で、澤通しに行く事が厄介な爲、大體左岸の岩場と草付にルートを求めつゝ登つて行く。

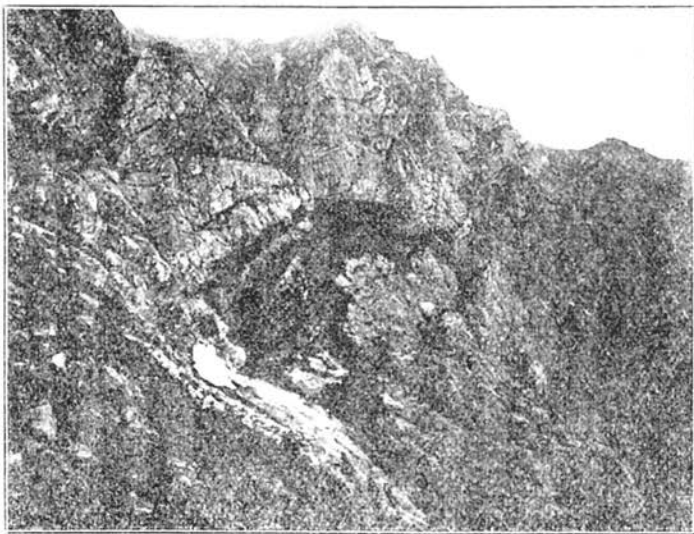
天氣がいく／＼のと、市ノ倉澤や幽ノ澤の様な深い急峻なりンネがない爲に、澤は明い朗かな氣分を與へる。そして遠く燧、至佛、武尊等の大きな山容と、近く美しい笠ヶ岳の容姿とが、絶えず相對しておほらかな景観を擴げて居る。

やがて本澤は、南ノ耳の方へと曲り込んで行くので、私達は右へ分れて居る浅いリンネに入つた。それを少し登つて、小さな残雪のある邊から右の岩壁へ移り、

暫く急な斜面を右上へとトラヴァースして行くと、やがて北ノ耳の南の壁が、目前近く豪然と立はだかるのに相對する。

今迄登つて來る間にも、遊ぶにいい様な岩場はいくつかあつたが、この様にまとまつて居るのは見られなかつた。南ノ耳側にある、草付の棚を持つた巾の廣い岩場も面白さうではあるが、ガッチリと構へて居る手強さうなこの胸壁は、自分を誘つた。

草付の急な斜面を、大きくトラヴァースし、耳二つの間へ入つてリンネを横切つて、目指す岩場の最下端に到つた時は、二時を過



谷川岳北ノ耳の南壁

ぎて居た。張切つた自分達は、休みもせずO—M—Tの順位で登攀を開始する。

岩壁の正面からやゝ左よりに、小さいリンネが割込んで居るが、かなり悪さうなので、その右の幾分凹み氣味になつて居る所から取付く。五米程上つて更に五米も壁を右へトラヴァースし、上の樂な足場に立つ。其處から更に右上へとルートを探めて見たが、下から眺めたよりひどい一枚岩ですぐと行詰まつて終つた。それを諦めると少し下り、左の小さく出ばつて居る岩からその向ふの裂け目に移つて、上の草付の臺地に出る事が出来た。こゝでルックザックを引

上げ、臺地を歩きつめて次の裂け目に向ふ。感觸のいいそのリンネを十三米も登ると、いゝ足場に出る。か

うして、自分達は右上へとルートを取つて行く。

この岩壁は、赤黒く堅くしまつた岩質で、小さい手懸りをも信頼出来るので非常に氣持がいい。併しその岩質や、足場が少く直立した壁は、曾て苦闘した市ノ倉澤の最上部の難場を思ひ起させる。

やがて百米近いこの岩壁を登りつめると、廣い臺地に出た。そこからはずつと尾根になつて居て、もう北ノ耳迄楽しい。臺地の端に積石を積んで、飯を食べ樂しみのメロンを切ると、自ら微笑が浮ぶ。尾根の下半は岩である。ナイフエッジの様な鋭い箇所や三米程のギャップを通り過ぎ登り続けると、程なく上半の尾根となり、やがて頂上近くの緩い草付の斜面へ来る。そして四時半過ぎには北ノ耳の上に立つ事が出来た。

頂上に着いた時は、生憎く西側から霧が巻いて來て眺望は得られなかつたが、充分愉快な岩の感觸を味ふ事が出来た私達は、満足してそこを去つた。時間は五時過ぎて居たが、なるべくなら明い中に土合迄と、急いで南ノ耳から夕映えの空の下を、急な西黒澤の道について降りて行つた。そして三十分程ラテルネで道を

拾ひながら、漸く土合の天幕に歸り着くと、早速荷物をもとめてそのまゝ明るい月夜の街道を、一里足らずの湯檜曾温泉へと歩いて行つた。(小川記)

附 記

谷川岳東面の岩場として數へ得る五つの澤の中、岩登りの對象として實際適して居ると思はれるのは、市ノ倉澤、幽ノ澤、マチガ澤の三つであらう。それ等は、奥深く陰慘な感さへする市ノ倉澤の豪壯さ、美しいリッネを持つて居る幽ノ澤の魅力ある岩壁、岩登り場として多くのいゝ岩をもつマチガ澤等、各々特色ある味と異つた氣分とを與へる。併し之等三つの者以外に尙、芝倉澤は中頃の左岸に百米近くの胸壁を有して居て一寸氣を引く。五月にその澤を雪溪について登りながら眺めた所では、それ以外に眼につく様な岩は見られなかつた。けれども夏尾根筋から望見した所では小さ浅い雪を所々に残し、中部以上は瀧の連続の様であるから、澤登りとして別の面白味があるであらう。

湯檜曾から少し行くと、既に四つの尖塔狀の堅炭岩カクズミイワ

が目を惹く。それは幽ノ澤と芝倉澤との間に位し、幽ノ澤側へはいづれも切立つた凄^{しみ}い岩壁を並べて居るが、芝倉澤側へは第一峯第二峯は緩い草付の斜面を以て連り、案外貧弱である。併し第三、第四峯は獨立した岩峰を形造り、急傾斜をなして落込んで居て、殊に三方切立られた末端の第四峯は立派である。恐らくは直接此等の諸岩峰に向ふならば、短いが興味ある登攀がなされ得るであらう(湯檜會の阿部氏は、今春幽ノ澤側から第三と第四の間を登り、第二と第三との間を降りられた由。又早大の人も之を下りて居る。この各岩峰間のリンネは岩が少く、鞍部迄笹の混つた急な草付が続いて居るから、確實な登降路となる)。

谷川岳東面の諸岩壁が、岩場として親しみ易く優れて居ると思はれる點は、地理的に東京及び根據地としての湯檜會から近い事、澤の出合から岩場迄の距離が短い事、登りきつた國境線の尾根に道が切開かれて居る事等數へられるが、それと共に、全體としての山容も大きく華かな穂高等の岩に比し、はるかに岩質が堅^しつて居り、不快な落石の心配が殆んどない事である。

而して市ノ倉澤、幽ノ澤等の岩壁は、穂高の屏風岩の登路である手強いリンネに比し、少しも遜色のない美しい立派な容姿と實質を有し、岩の少い吾國では他に得られない獨特の味を持つて居ると思ふ。之を試みた人々が、登攀の途中又は國境線に於て、しばし夜を明さなければならなかつた事は、この登攀の勞力の大きい事を示すものであらう。

岩場は市ノ倉澤に於て約八百米、幽ノ澤に於ては約六百米の高距を有し、森林帯が終り澤が岩壁へと續く岩場の下部は、大きく縦皺が走つて居る約三十度の白く磨れた特長ある一枚岩で、廣く開けた氣持のいい岩の領域をなして居る。その次の岩場の中部は六十度余りの立廻らされた岩壁によつて形成され、水の滴り落ちる幾つかのリンネやルンゼが割込んで居る。この部分は比較的岩の脆い所であるが、チムニーその他リンネ特有の味を與へて呉れる。更に岩場としての最上部は、藪と草付と岩との混合であるが、幾分傾斜は緩くなり、所々に露出する赤黒い岩峰や岩塊は、ガッチリとした良い手懸りをもつて居り、面白い登攀をなす

事が出来る。而して最後は大體に於て笹の斜面により尾根筋又は頂上へと続くのである。この三つの著しい岩場の變化は、市ノ倉澤と幽ノ澤にのみ明かに見られるが、マチガ澤その他のものでは、一枚岩の岩床から幾つかの瀧を経て、段々多くの岩塊や峯塔をもつ草付の斜面となり、尾根筋へ擴がつて居る。之等の澤以外に各急峻な尾根は魅惑的な多くの岩峰を排並べて、吾々の心を牽きつけるのである。

自分達は幽ノ澤右俣に行く時、下の一枚岩の澤で足袋を用ひ、非常に有効に感じたが、それ以外はすべて鉄靴によつた。澤及び下部の一枚岩の岩場では、岩靴若くは足袋であれば樂であるが、濡れたリンネや、上部の急な草付や岩と藪の混合せる斜面に出では、鉄靴少く共爪の短いアイゼン是用ひなければならぬであらう。實際この岩場に於て、しばしばぶつかかる所の草付の急斜面は、他の山で余り經驗されない爲か、可成緊張させられる。この箇所では又ビッケルが相當役立つ。

終りに、この方面の岩登攀の時期としては、佐方氏（關西岳聯報告第二號）も云はれる如く、六、七月頃殘

雪は相當あるが、上部の雪が少くなつて、澤やリンネやリンネの水がより少くなつた時が、最も適して居ると思ふ。岩場に源を發する爲に、澤は一日の晴雨如何によつて著しい水量の増減がある。若しリンネの登攀中豪雨にでも見舞はれたなら、随分と苦い思ひをしなければならぬであらう。併し尙岩場の上部が草付である爲に、リンネの中の水は常に覺悟しなければならぬ。



穂高岳屏風岩

小川 登喜男

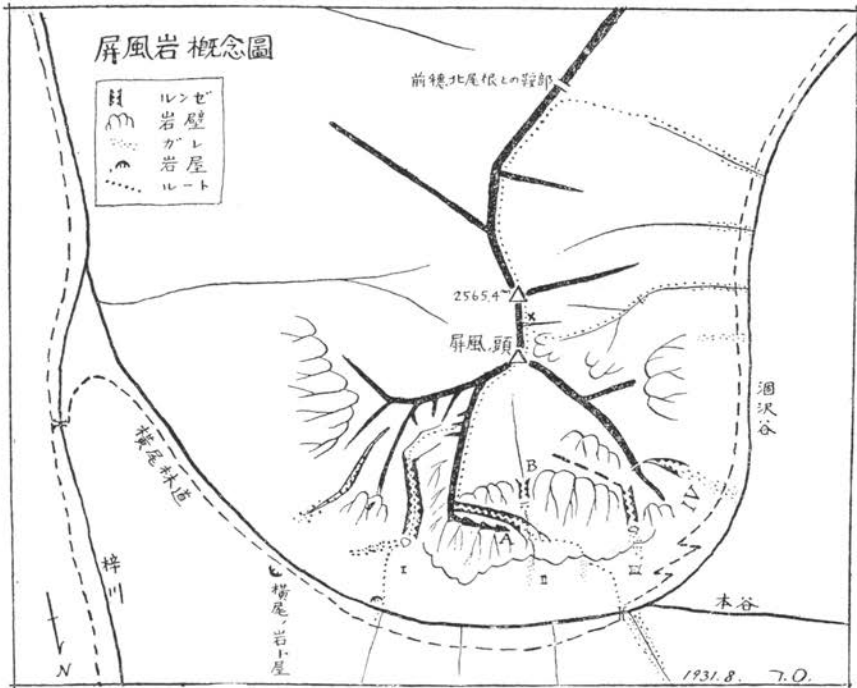
(参照地形圖) 五萬分一、上高地。

前穂高岳北尾根の突端に屹立する魁偉な屏風岩の容姿は、穂高附近に遊ぶ多くの人々の親んで居る所でありながら、余りにも壓倒的なその風貌は容易に人を寄つせず、今日迄それに手を付けた者は極めて少い。三年前私は二人の親しい山友達と潤澤の岩小舎からの歸りに、その正面の暗いルンゼ(後にのべるルンゼII)の入口迄偵察を試みた。更にその翌年穂高に遊んだ際、それを完成すべく準備をして居たが、金澤醫大の人の單獨登攀のアクセントがあつた爲に、氣を腐らして止めて了つた。併し遂に今夏再び穂高に入る機會を得て、目的とした所のその憧れの岩壁の一部分を知る事が出来た。

屏風岩については、一九二三年の七月慶應の人々に依つて初めてなしとげられた登攀記録(「登行高」第五

年一九二四年度)が唯一の貴重なる文獻であつて、それ以來本年に到る迄、その登路について話された事もなく誌されたものもない。細かい所に煩はされる岩の記事が多くさうである様に、屏風岩の登路として記された「登高行」の記録もそのみで見ると、下から單に岩を望見した丈では、ルートがどうも解りにくい。私はその轍を踏む事を恐れながらも、自分の觀察した所に従ひ、屏風岩の登路について一先づまとめて見てみようと思ふ。

屏風岩に對する時、先づ眼につくのは、高距六百米余りをもつて北面する影の多い巨大なる一枚岩の岩壁である。それは勿論手の付けられるものではないが、それを中心にして左右に刻まれて居る幾つかのルンゼ若くはリンネは、吾々にその可能的な登路を與へてくれる。之等のルンゼに就いて述べれば(概念圖参照)、今之を横尾谷の入口(即ち東側)から順次にI、II、III、IV、とすると、Iのルンゼはその巨人の楯の様な一枚岩のすぐ左側に、幅廣く延上つて居る白い美しい岩溝を示すものである。それは可成上迄眞すぐに割込んで



居るが、上部に於て大きく右へと曲込んでその姿を隠して居る。次にこの一枚岩の右奥に、暗く陰凄な印象を與へるIIのルンゼが、一枚岩の真上迄割込んで居る。そしてその入口へは逆層の壁の上の、Bなるルンゼから水が落ちて来て居て、深く割れて居る。それからずつと右に大きな岩壁を隔て、IIIのルンゼが入つて居るのであるが、之は直接下の道から認められないものであつて、本谷出合の橋の上の對岸のガレに上ると、始めて真正面に眺め得るものである。手強はさそうなこのルンゼは百米余りの高距を持ち、その上端から斜左に幅廣い大きな棚がのびて居る事を望見し得る。終りにIVのルンゼは、IIIのルンゼのすぐ上の所へ洞澤側から割込んで居る小さなものであつて、その下の草の生へたガレは洞澤の道を横切つて居る。又別に、Iのルンゼの左には尙灌木帯で圍まれ、中央に大きいオーバーハングの箇所を持つて居る細長い一枚岩

のルンゼが見られるが、岩登攀の對象としてはさして面白くもなさそうなので問題外におく。

之等のルンゼの中最も立派であり且魅力のあるものは、I及びIIの二つのものである。私はこの二つの登路を試みたのであるが、實際各々異つた味を持ちながら共に岩登の對象として相當手強いものでもあり、快い岩の感觸を興へて自分達を満足させて呉れた。

記録を讀返へして見ると、慶應の人々はIIのルンゼを目がけて、その直下から水の流れ落ちる下の一枚岩の岩場を登りルンゼの入口に達したが、ルンゼの中に入らずに、そのすぐ外側にある、所々木の生へた段階狀の尾根(A)について登つたのである事が解る。ルンゼの入口迄のルートは、時間から云つても私達のとつたルートの方がずつと樂であると思はれる。

IIIのルンゼは短いとは云へ可成手強そうに見える。

このルンゼは今夏六高の人達に依つて登られた。VIのルンゼもまた私は知らないが、IIIのルンゼを登り、上の廣い棚で遊び、IVのルンゼを下つたなら、愉快なルートが得られるであらうと考へて居る。尙、六高の人

達よりなる他の一パーティーは、Aの尾根の登攀に成功したさうであるが、未だそのルートの詳細を知るを得ない。

とにかく我國有數の大きな岩登り場たる穂高山塊の中でも、屏風岩は最も興味あり且美しい岩場であるに係はらず、未だ研究が不充分なので、之から試みられる人々の爲にとも思ひ、敢へて自分の觀察を述べた。

以下そのIのルンゼについての簡単な記録であるがIIのルンゼについては桑田氏の記録を見られたい。

屏風岩ルンゼ(I)の登攀

一九三一年 八月二十一日(快晴)

横尾谷の泊場發(六、二五)―ルンゼ入口(六、四三―七、〇〇)―中部の臺地(九、一〇―一〇、〇〇)―食事―上部の草付の臺地(一二、四五―一、三〇)―食事―最上部のルンゼ入口(二、二〇)―ルンゼ上の尾根(五、二五―一六、一〇)―食事―屏風ノ頭にて露營(七、〇五)

八月二十二日(快晴)

屏風ノ頭發(六、五五)―北尾根との鞍部(七、二五)―涸澤道(八、三〇)

一行 小川登喜男 小川猛男 熊澤誠義

先づ登攀に必要な根據地たる泊場であるが、幸ひ今夏は八月に入つてからすつかり天候が定つたので、私達はなるべく近い所と思ひ、横尾の岩小舎から道を暫く行つて一番初めの丸木橋のすぐ手前から澤へ下り澤を涉つて、そのルンゼの正面にあたる河原の砂地に簡

單にサックテントを張つて寝た。併し翌朝明るくなつて氣付いたのであるが、十間程下手に五六人は樂に入れる位のいゝ岩屋があるから、再び此處に來られる人は天幕の心配はいらない。この泊場からルンゼ入口迄は、すぐ上の森林帯をルンゼの見當に登つて行けばいゝのであつて、拇の森の中は混んだ藪もなくその上の灌木帯は僅かなので案外樂であつた。

次に岩場については大體三つの著しく變つた部分に分けて考へる事が出来る。第一の部分は、下から見えるルンゼの大部分であつて、入口の残雪から深く割込んだ白いルンゼを以つて幾分弓なりに上へと延びて居るものである。之は水で洗はれた平滑な一枚岩が多く、この登攀の中で最も手強い部分をなすと思はれる。第二のものは、第一の終りから急に幅廣く緩傾斜の平な

一枚岩となつて、右に大きく曲り込んで居るもので比較的樂な岩場である。又第三のものは、この第二の岩場の上から尾根筋に入つて居る百米足らずの急峻なルンゼよりなる部分である。次に順次そのルートについて述べよう。

先づ第一のルンゼの入口にある残雪は小さいながら上下二つに割れて居り、上の中が洞穴になつて居るのでその下をくゞつて岩場に達した。こゝで私、弟、熊澤の順にロープを付ける。ルンゼ最下端のその岩場は、右に水で洗はれて居るなめらかな狭いルンゼがあり、左に又細い小さなルンゼが淺く入つて居て、正面は一枚岩の胸壁をなして居る。後から考へるとこの左の細いルンゼをとるのがよりよさそうに思はれたが、私はすぐその正面の胸壁を、指のやつと懸る様な裂け目によつて登つた。併し一枚岩なので勿論鉄靴は用意の足袋と穿換へたのであるが、極めて足場の少い所であつて相當手強く、靴を入れて重くなつて終つたルックザックを引上るのに苦心を要した。この胸壁を左寄りに行き、左の小さいルンゼの上に出ると草が生へ

て居て樂になるが、ルンゼはやがて上の草付と藪の中へ消えて居る。其處ですぐと右に緩くなつた以前の胸壁の上方へ登り、それから尙右へとトラヴァースして、ルンゼの中心をなす右の白く磨かれたルンゼへ入つた。このルンゼに入るあたりは全く滑らかな一枚岩で足袋であればこそ行き得ると思つた。その狭いルンゼを三十米も登ると一寸段になつて居て、それを越える

と第一の岩場の部分の中部に位する臺地狀の所に達する。此處で休憩しながら眺めると、南岳を背景にして屏風の一枚岩がその素晴らしい横顔(横顔)をまざざと見せて居るので、荷が重いと云つて置いて來た寫眞機が惜しかつた。

これからルンゼは心持左に曲つて居るのであるが、暫らくは極く樂な所が続く。併し間もなく兩壁が狭つて二十米程のチムニーとなる。このチムニーは少し外の開いた滑かな壁の厄介なもので、中途迄裂け目によつて、それから上は脊と足とによつて登る。チムニーの出口は確りした楔石が挟つて居て、いゝ手懸と足場を作つて居る。この上は暫くにして再び狭まり、このルンゼ中で私の最も手こずつた所となる。十米もそのまゝルンゼの狭い割目の中を行くと、上がオーバーハン

グの岩で妨げられて居るので右に出て、すぐ上の裂け目に手懸りを求めながら登つたが、この裂け目は右に傾いて居る上に、左が直立した平たい岩で、右がつる／＼の一枚岩である爲に非常にバランスが取りにくかつた。再び之を試みる時はそこにピトンを打たなければと思ふ。

この上は再び小さなチムニーがあり、暫く狭いルンゼの中を登ると漸く最も困難な第一の岩場の部分を了つて、上の緩傾斜の臺地に達する。その上は廣い草の生へた斜面で、岩場の第二の部分がすつかり見渡せる。

第二の廣々とした岩場は所々岩屑をのせて居る緩い一枚岩で、私達は主として連続登攀によりその左側を登つた。そして裂け目の導くに従ひ少しく右寄りに進み簡單にその奥に達し得た。この第二の岩場へは、尾根から五つ程の急なルンゼが並んで落込んで居るが、私は出来る丈ルンゼについて行かうと思ひ、その赴くまゝに右方のルンゼに入つて行つた。

之から第三の部分になるが、最も樂なルートと見えるのは、第二の岩場の奥から左に折れ直接屏風の頭の方へ向つて居る、急ではあるが草や木の生へた斜面を登るものであらうと思ふ。私達の入つたルンゼは屏風一枚岩の方へのびて居る尾根筋に唯一つある小さな凹所へ割込で居るもので、入口はよかつたが中に入ると崩れ易い岩壁に圍まれ、それを登り切る事が出来な^い。私はその行詰つた所から左にトラヴァースしてルンゼを出て、次のルンゼとの境をなす胸壁に移り、このほど正面の狭い裂け目について登つた。この胸壁は堅い岩であるが、手懸りの少い相當緊張を要する所で、僅かにへばりついて居る小さな木によつてやうなく確保する事が出来た。胸壁の上は狭い小さな尾根となり、その登り盡した所は再び壞れ易い二十米余の壁によつて遮ぎられて居るが、うまく斜めに入つて居る裂け目によつて、終に尾根の上に立つ事が出来た。

ルンゼの入口から約九時間の登攀を了つて、十時間余り付けて居たロープから解放され、全く軽い氣持になつて鉄靴に穿換へると、ゆつくり尾根の藪を屏風の

頭へと漕いで行つた。そしてこの前に寝たおかん場で、靜かな一夜を過して翌朝前穗北尾根との鞍部をとつて下つた。

以上を以て私の知り得たIのルンゼの登路の記録は了る。IIのルンゼが常に深く入り込んで暗い陰を作り、濕つた岩や、苔むした壁をもつて壓迫感を感じしむる程奥深い印象を與へるのに比し、ほとんど全面に陽を浴びて、白く光つた美しい岩からなるIのルンゼでは朗かな快い氣分を受ける。その岩の感觸も亦各々異つた味を持つて居る。

Iのルンゼは大部分一枚岩であるから、全く鉄靴は不利である。殊にひどい滑かな一枚岩のある幾つかの難場では、トリコニー靴を以つてしても困難であらうと思ふ。私達は遂々重い三足の靴を始めから終り迄擔上げて終つたが、ほうり出すわけにも行かず癢にさわつて仕方がなかつた。この登攀には全然始めから鉄靴を着けずに、軽い丈夫なわらぢでも用意して、上や下の藪は少し辛いけれどもそれでもつて歩く事にしたらいゝだらうかと思ふ。

穂高岳屏風岩の一登路に就て

桑田英次

(参照地形圖) 五萬分一、上高地。

一

一行 小川登喜男 三輪武五郎 桑田英次

八月十四日晴 上高地―横尾岩小屋

八月十五日晴 岩小屋(六、三〇)―潤澤出合の橋(六、五五―七、一五)―岩壁下の草付(七、四五―八、〇五)ロープを付ける―ルンゼ(II)入口(八、三〇―九、〇五)食事―オーバーハングの瀧の上(一〇、三〇)―第一のチムニー下(一〇、四五―一一、〇〇)―第二のチムニー下(一一、二五―一二、一五)―食事―最後のチムニー状ルンゼ下(一二、五五―一三、一五)―上の尾根(一三、一五―一四、〇〇)食事、ロープを解く―以下藪を漕いで屏風の頭南肩(六、四五)露營
潤澤出合の橋を渡り對岸の灌木と雑草を分けて屏風岩壁の裾に達し、一枚岩に取付くところから私達はロープを付けた。順序は小川―三輪―桑田である。

雑 録 穂高岳屏風岩の一登路に就て

こゝから初まる岩場は大體五つの部分に分けられる。(一)屏風岩末端の一枚岩 (二)ルンゼに入り取付きのオーバーハングの瀧 (三)第一のチムニーとその上の一枚岩 (四)第二第三のチムニー (五)最後のチムニー状ルンゼとその上の一枚岩。

(一)屏風岩本来の白い一枚岩である。傾斜は寫眞に見られる如く大したものではないが、丸く角のとれた逆層岩である。之を攀ちて左へ草付きの棚を絡みルンゼの入口に達した。

(二)取付きのオーバーハングは出合の橋から望見し得る暗い瀧状の穴である。こゝを登るべく三十分程費したが岩隙のない立壁には到底ピトンを打込めず、結局追ひ返されて入口から岩靴を穿いて左壁を巻いた。岩靴を用ゐる事が出来たのはこの逆層の壁だけであつた。オーバーハングを攀ぢるとすれば少くもピトンを二三本連続的に打つ必要がある。

(三)瀧の上からルンゼに入ると岩が濡つて来たので第一のチムニー下で再び紙靴を穿く。チムニーは高さ廿米、ひどく濡れて下部には苔さへ付けて居る。そして

中部には巨大な楔石が挟まつてその裏を抜けられる。つるりとした兩壁に脊と足を突張つてせり上るのであるが、乾いた岩と異り余り氣持のよいものではない。この上でルンゼは少し展けて底部が一枚岩をなして居る。逆厩で手懸りが無いから相當苦しい。

(四) 第二のチムニーは高さ十米、兩壁に手懸りを求められるからチムニー登りを要しない。面白いことには、上部近くに懸つて居る大きな楔岩のためチムニーは完全な縦坑を形成し下から覗くと文字通りの「煙突」である。中部の邊りで先頭は肩を借り、且つちよつと石屋をやつた。このチムニーから暫くすると狭いオーバーハングの所となり、ルンゼの中は行けないので、左の草の生へた岩壁へ移る。そしてこの上の四米程の小さいチムニーを登つて、再び草付をトラヴァースしてルンゼの中に入る。

(五) 最後のチムニー狀ルンゼは取付きが瀧狀をなし軽いオーバーハングである。こゝで再び石屋をやり、順次肩に乗つて越した。最後のKは先頭のOから降したSteigbügelによつて登じた。ルンゼ上半はチムニー狀

に狭まり上端が閉塞されて居る故、左壁から外に這ひ出した。この上の一枚岩がまた悪く石屋仕事をやらねばならなかつた。こゝから上は容易く尾根まで登れた。

以上五つの部分を聯結する間の岩場は三人同時に進行し得た程度のもので別に記すまでもない。そしてルンゼの中途から左手の小さな藪尾根へ樂に外れることが出来る箇所もこの間にある。即ち私の記憶する限りでは(二)の左壁、及び(四)の上より(五)に至るまでの間の左壁の二ヶ所である。然し私達のルートは「ルンゼII」を忠實に辿つたものであつた。視野の狭いルンゼ登攀中は足の下から覗かれる屏風の白い一枚岩の他には南岳が終日の友であつた。

上の尾根(屏風の頭から東北に派出する尾根)はびつしりと藪の密生した不愉快極まるものである。然し頭を越さなくては容易な降り口がないから致し方なく。

露營地は屏風頭の第一二峰間の鞍部であつた。登攀の困難を豫想した私達は露營の準備としては各々下着一枚を持参したきりだつた。然し夏のことであるし



屏風岩のルンゼ(Ⅱ)

桑田英次

天氣も至極穩かだつたので可成りの時間熟睡することが出来た。

八月十六日 晴 露營地(六、一五)―洞澤路(八、一〇―八、一八)―出合の橋(八、四〇―九、一五)―岩小屋(九、四〇)―上

高地

おかん場の朝は爽かだつた。前穂、奥穂から槍に至る主脈、そして洞澤を始め四つのカールが近々と呼びかけて来る。寫眞機があつたらと一同残念に思つた。

私達はおかん場からすぐ右手の澤を降りて行つた。明神あたりの狭いガレによく似て居る。相當下りてから廊下状をなした處に八米の瀧があり、兩壁は絡む事が出来ないでロープで下降した。末端近くに汚れた雪溪が横つて居た。時間は下の道迄二時間で思つたり早かつた。

二、

「ルンゼ(II)」の岩は概して一枚岩性の逆層をなして居る。岩の表面は穂高の尾根附近によく見られる岩た

けの生へた粗面ではなく、平滑で摩擦が少い。それ故履物としては若しも岩が乾いて居るならば岩靴が最も適したものである筈だ。然るにルンゼの入口を越して以後の難場は殆ど例外なく濡れて居るので、私達は否應なしに鉄靴で押し通さなければならなかつたのである。鉄の種類は敢てトリコーニたるを要しなと思ふ。

何故なれば登路は凡て剥き出しの岩ばかりで草付きや薄い表土を載せた悪場は一ヶ所もないからである。然しあの様な岩質に對してトリコーニとクリンカーと何れがより有効であるかに就いては、岩登りの経験が浅い自分には何とも云ひ得ないと云ふより仕方がない。たゞ私達三人はクリンカーの靴を用ゐて居たことを附言するに止めておく。要するに元來が岩靴に適した岩肌を持つて居るのだから、鉄の引懸りを問題とするよりも寧ろ、手懸りと足場に對して如何に體重を分配しバランスを保つかゞ遂に重要事であるといふことを痛切に感じたのであつた。

岩は非常に堅いから難場に際して手懸りが缺けたりする様な危険は全くと云つてよい程ない。然し未だ一

般の登路となつて居ない場所だからルンゼの段やチムニーの棚に堆積して居る岩屑は随分と落ちる。最も恐るべきは自然的に發生する落石であらう。無闇に起るものとも思はれないけれど一步ルンゼに足を踏み入れたら常にこの警戒を怠つてはならない。私達もルンゼ入口で物凄い落石のお見舞を受け幸にして避難するを得たが、今思ひ出しても余りよい氣持はしない。

之に關聯して登攀當日の天候には相當の注意を拂ふ必要がある。一口に夏山だと云つて片附けて了へばそれまでであるが、このルンゼでは如何に進行速度を早めたとて二三時間で攀ち登つて了ふことは先づ不可能だ。そして岩場の中途で夕立にでも遭へば登攀それ自體が不可能になるばかりでなく瀧や岩崩れにやられる危険がある。この點から見ても、之を試みるのは雨氣の切れた季節——最近二三年の夏季について云へば八月上旬以降——が最もよい。七月中では夕立が多いし、それに奥屏風の方に雪が残つて居るからルンゼ内の水分もより以上に多いことを覺悟しなければならぬ。積雪季はさておき、初夏には水氣が多いし、水涸れの秋

になれば恐らくチムニーには氷が張り付いて了ふだらうから望みが絶たれるに違ひない。北向きで一日中日光が射し込まないルンゼだから氣難かしいのも已むを得ない。

私達は特別な道具としてピトンの太さ位の軽い石工用の鑿を持參して隨所石屋仕事を試みた。斯るものを用ゐるのが好い事か悪い事か知らないが、岩隙がなくピトンの打込みが悉く失敗に終つたのに反して、これは甚だ有効であつた。勿論餘裕綽々たる充分なる手懸りを刻むことは不可能であるが、單にバランスをとるための微かな引懸りならば比較的容易に作り出すことが出来る。そしてピトンよりも遙かに輕便なものであると感じたのであつた。二日目の朝、ロープで下降する折にも岩の角を欠くのに役立つた。

ロープは廿五米及廿米の二本を用意して行つたが廿米以上の悪場には出遭はなかつたので一本で間に合つた。然しルックザックを引上げなければならぬところが數ヶ所あるから、三十米位の細い綱を携帯すれば餘程手数を省くことが出来たであらう。

西穂高岳天狗岩の東壁

桑田英次

(参照地形圖) 五萬分一 上高地。

天狗岩の信州側は全體として一つの壁をなして居る様に見える。そしてこの側面に於ては概して逆層の大きな一枚岩が連続して居るから傾斜は左して強くないとしても胸壁そのものを忠實に攀づるのは相當困難であらう。

私がこゝに記さうとする二つの直登路は何れも字義通りの胸壁登りではなく、之に刻まれて居る溝谷或ひは支山稜による平易な登路である。所謂岩登りとして微妙な體のこなしを要するやうな悪場もないし、又僅か百米内外の小規模な岩場に過ぎないから大したものではないのは勿論のことである。

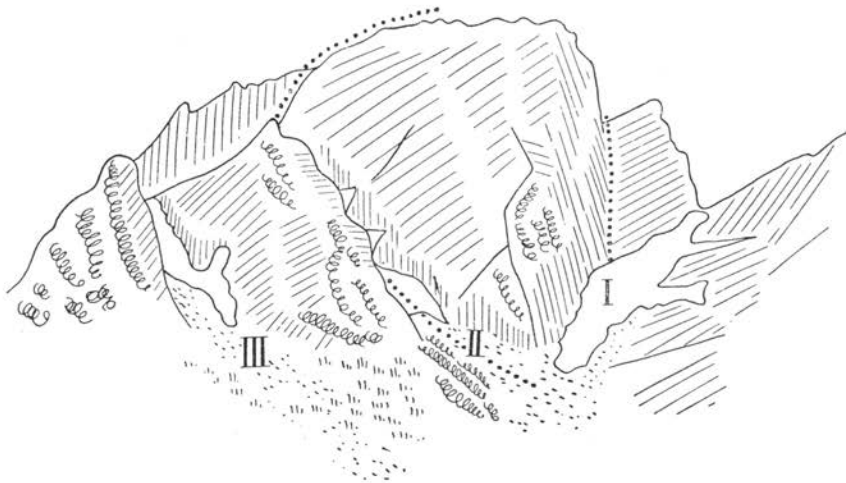
圖によつて略々明かなる如く天狗澤の本谷は、その上部、中部及び稍々下部より三本の支谷を分岐して居る(假に之等を上から第一・第二・及第三の支谷と呼ん

でおく)。

第一の支谷は天狗岩北端の肩附根へと割れ込み、第二及第三のものは頂上より派出する支稜——初めは南に次に東南へと降つて天狗澤と間の澤とを分つて居る尾根——の小さな鞍部へ導く。谷の形は第一と第二は何れも右手がこの附近特有の平たい逆層の岩、左手は立壁をなし、この二つの面が交るところに刻まれて居る楔形の溝谷である。

第三の支谷は幅も廣く傾斜も緩く、何の變哲もない普通の雪溪に過ぎない。私は昨年十一月、三人の友達と共に第二の溝谷を遡り豫想外の困難を嘗めた事があつた。それに心惹かれて今夏上高地を訪れた翌日に再び之を遡行し、數日後今度は第一の溝谷を攀ぢて見た。以下之等の登行の概略を誌しておきたい。

第二の溝谷の登行。今年の夏は残雪が非常に豊富だつた爲、溝谷の遡行はお話にならぬ程簡單なものであつた。入口から細い残雪を辿つて登行を續ける途中、雪と岩との間隙や雪面の割れ目に注意を向ける以外に



岳川谷ヨリ天狗岩

桑田英次

は、中段の急傾斜で一時間程足場を切つて見たに過ぎない。若し本式の金標を用意してあれば氷斧を振ふにも當るまい。然し秋が近づいて雪面が大きき口を開いて了つたり、或ひは新雪季に入つて未だ埋りきらない底部の悪い岩や小瀧に蒼氷でも張り詰めたりすれば相當面倒になる。上端に近づくると雪消え後未だ間もない濕つた岩混りの草付が現れ、次で數米の小さな壁を攀ぢて支稜上の切れ込みに達する。こゝから瘠せた堅い岩稜を傳ふのであるが、取付きの甘米足らずの間は少し傾斜が強い。右側を終んで岩の毀れたところを登ることも出来る。之を過ぎると後は頂上まで何處でも氣儘に歩ける。歸路は同じ路を傳つて鞍部まで辿り、間の澤に出て岳川へ降つた。

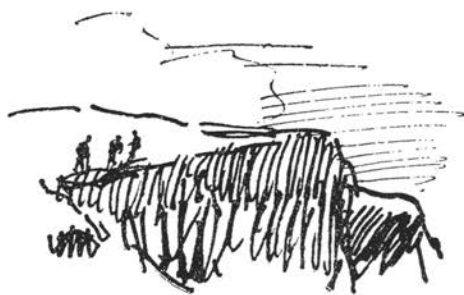
昭和六年七月廿五日 上高地(八、二〇〇)―岳川水飲場(九、四五)―第二溝谷入口(二、〇〇一―二、二〇〇)―支稜上の鞍部(二、〇〇一―二、一〇〇)―頂(二、四〇一―二、五〇〇)―鞍部(三、一〇一―三、三〇〇)―上高地(六、〇〇〇)

第一の溝谷の登行。天狗の窓が頭上間近くなつた頃雪溪の縁が壊れた點を見出して溝谷の入口へと降る。

雪の断面が深く割れた洞穴内には氷塊や氷柱が散亂して居る。溝谷は日當りが悪い故か多少濕り氣を帯び、末端の三十米は赤つちやけたぼろ／＼の岩で驚く程脆い。そして溝の底には動き易い岩の破片や屑が詰つて居るので注意して登つた。然し遂に岩崩れを惹起して了つた。不安定な足場に立つて頭上の大きな楔岩に手を懸けた時、突如足許の岩屑が摺り初め續いて多量の砂と岩塊が不氣味な音を響かせながら下方の洞穴めがけて躍り込んで行く。手懸りにしがみついたまゝ怖ろしい二三分が過ぎた。「非常に軟化した」と云はれる國産の岩崩れもなか／＼馬鹿にはならない。早速右手の壁に這ひ出して少し登つてからよく見定めて再び溝に入る。中段以上は岩も餘り揺がす小さな瀧狀の箇所も岩峽登攀の眞似事をやつて過ぎた。上端は急な草付で容易く肩の小窓へ這上ることが出来る。肩からは普通の路により頂を越し、間の澤鞍部へ出て第三の支谷を降りた。

八月一日 上高地(七、〇〇)―岳川水飲場(八、三〇)―九、〇〇―第一溝谷入口(一一、四五)―肩の小窓(一二、四〇)―

一二、五〇)―頂(一、〇〇)―一、三〇)―間の澤鞍部(二、一〇)―二、二五)―第三の支谷を降り天狗澤に出合ふ(三、〇〇)―上高地(四、五五)



大山及烏ヶ山略圖に就いて

小 出 博

「山岳」第二十六年第一號の雜錄一二九頁より一四四頁に互つて「伯耆大山」なる標題のもとに頗る簡單な

ら、大山に就いて未だ一般的には余り知られてゐない方面の紹介を試みて拙文を書いた。その一三二頁に「大山略圖」と見出して、眞に文字通りの略圖を附加しておいたが、實の所、この略圖を描いた當時、即ち昨年九月頃に於ける私達の大山に關しての知識は、誠に貧弱なるものであつて、この略圖以外には一步も出ないと云ふ様であつた。従つて心中誠に不滿に堪えざるものゝ迫つて來るのを感じつゝも、一時的に「大山略圖」を以て間に合せてゐた次第である。そして後日完全なる圖を再び、本誌「山岳」上に載のせさせて戴く事を私に心に誓ひ、その時機の來るのをまつてゐた。思へば誠に汗顔の至りであつた。

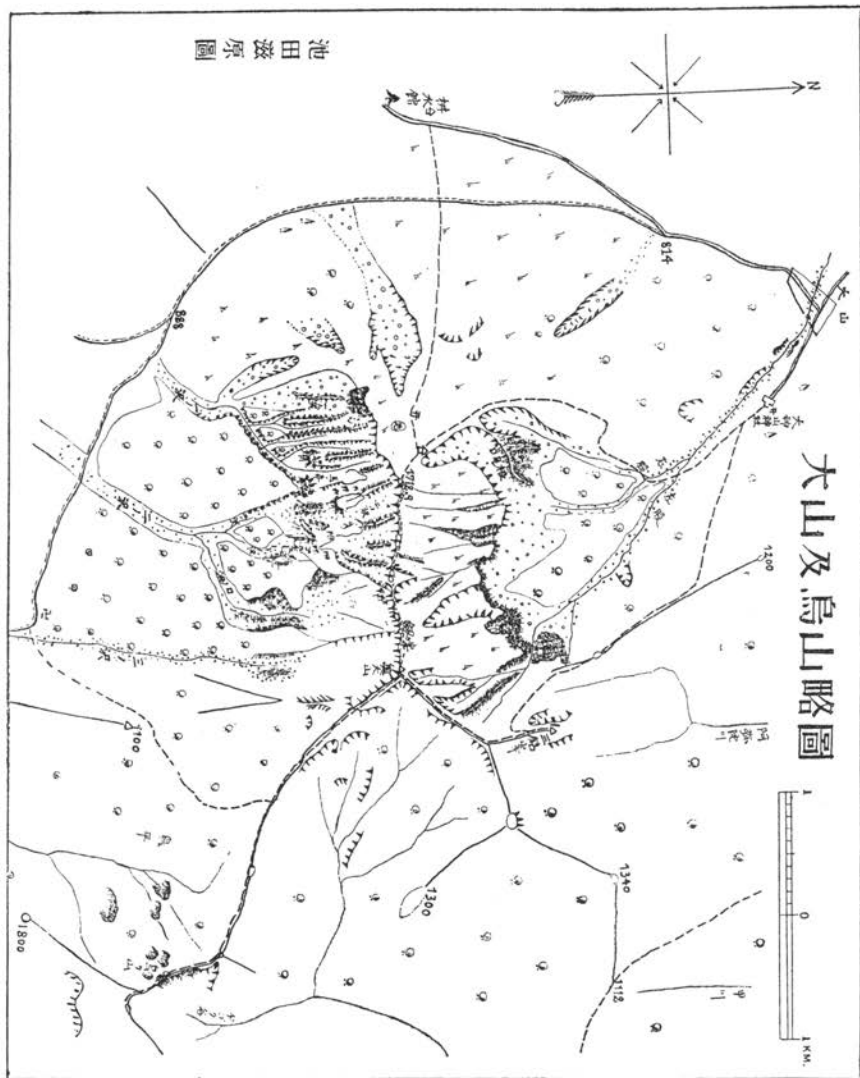
その後、昨年十月より本年八月迄に互つてなされた、

六高山岳部々員の大山登攀の結果より、殆んど完全に近きまでにその山容を知り得たので、現在最も大山に通じた池田滋君を煩はし「大山及烏ヶ山略圖」を描いてもらつて、茲に數ヶ月間の心の重荷を降し得た事を喜ぶと同時に、併せて池田君に心から感謝する次第である。

先づ最初に「大山及烏ヶ山略圖」に就いて説明しよう。同圖に用ゐられてゐる符號その他の凡例は、主として參謀本部陸地測量部の五萬分之一地形圖のそれを使用してゐる。けれど、頂上より南方に當つての尾根中及びゴルヂェー附近に四ヶ所ばかり特殊な形に描き上げてある箇所があるが、この部分は下方より見て、かかる形をした著しい、一見ジャングルム状に見える隆起部、或ひは岩壁をその見えるまゝに現してゐるのである。

この地圖も矢張、もとより正密なる測量の結果を圖示したものでは勿論ないから、縮尺の如きものは、ほんの概念的な大きさを知るに或ひは便利かと思ふ老婆心から附加しておいたのである。又、等高線の如きも

大山及鳥山略圖



池田原圖

かもしれない事を先づお断りしておく。

一九二九年一月及二月

一九二八年の晩秋になつて初めて伯備線の開通を

見、翌一九二九年新春早々一月・二月の二回、西斜面より積雪期の登頂を試みたが、二回ともに吹雪の爲約八合目附近より引返し無爲に終つた。

一九三〇年一月

桂逸人、外三人よりなる隊に依つて積雪期の大山登頂を西斜面より成功し、それより一週間の後、小出・池田・桂の隊は頂上・劔ヶ峰間の瘦尾根を往復した。掛水館より往復約七時間を要した。

一九三〇年二月

清田・池田外三名の隊は一の澤頭の岩壁直下迄登行したが、吹雪の爲登頂を果さず引返へした。積雪軟く腰までも深くもぐつた。

又同隊は烏ヶ山を烏平より西北稜にとりつき登頂せんとして、吹雪の爲道を誤まり、奥大山に到る山稜を登り、途中にて引返した(この行には會員藤木九三氏の一行と途中より一諸になつて、行動を共にした)。

のを記入されていない爲に、地形圖としての形式を十分に具備しておらず、爲にその山容の細微なる點に就いては、充分明かには現されてゐないが、是は殆んど不可能な事でもあり、且つこの地形圖の元來の目的上より云つて、さしたる必要をも認めない事であると思ふ。第二十六年第一號の「大山略圖」は全く單なる概念圖に過ぎぬもので、主としてたゞ澤のみを、それも至極簡單に現して居り、尾根は主要なるものをも圖中には示さず、文中に記述しておいた。従つて尾根に就ては全く不完全なものであつた。こんどの池田君の作圖になる「大山及烏ヶ山略圖」は特にこの點に大いに注意を向けてもらつたから、尾根の状態に就ては、登攀を目的としてならば、可成の満足が出来るであらう事を信ずる。その他、登攀上直接に問題となり得る、南壁・北壁・烏ヶ山附近の主要なる澤、岩壁等に就いても、ほど完全を期し得たと思ふ。

次にこの地圖に依つて、今日までになされた登攀の中、主要なるものの概観を述べやう。或ひは「山岳」第二十六年第一號の「伯耆大山」と重複する點がある

尙この時、大阪醫大の水野詳太郎氏一行は、大山寺より北壁に向ふ。その詳細はR・C・C報告第四號を參照されたい。

一九三〇年五月

中村一夫一行四名三の澤より奥大山登頂を試みて落石にはまされ途中より引返す。

一九三〇年九月

小出、外三名の一隊、一の澤よりの登頂に成功。

ドの澤よりの登頂を試みて失敗した。

一九三〇年十月

池田、坂本の兩君の隊ノドの澤よりの登頂に成功。

又兩君は烏ヶ山西面にある急傾斜の狭谷を下る。途中猛烈なる笹藪に苦しめられた。

一九三一年一月

森藤外四名の隊ノドの澤を登り、ゴルヂェー頂上間の約半ばにて引返す。この登高中は常に降雪に見舞はれ、その降雪中は到る所の岩壁、小谷より間斷なく大、小の雪崩の崩落するのを見た。又積雪期以外の時には、深く狭く刻まれた二の澤、ノドの澤が恐しく多量の積

雪の爲に、割合に廣く明るい澤と變化し、夏期にあらはれる二丈余の棚も完全に埋れてゐるのを知つた。雪崩の危険性なき場合は、夏期よりも冬期の方が遙かに簡單である。

けれどこの附近一帯は、雪崩の危険は實に多大なる爲注意を要する。二の澤、ノドの澤合流點より約二、三町位登つてから上部は、スキーを脱し、アイゼンに依る事は勿論である。ゴルヂェーより頂上までの傾斜は相當急傾斜である。そしてこの時は積雪は柔かく、腰まで完全に埋つてしまつた。二の澤の滑走は實に愉快で、關西では稀な所である。

次いで一行は烏ヶ山の登攀を試みた。三の澤より夏道を鳥見峠を越して烏平(烏ヶ山西方の平で、土人は平の事をナルと呼んでゐる)に出て、之を北に向ひ、奥大山・烏ヶ山間の最底鞍部附近より尾根を傳ひ、烏ヶ山最後の岩峯直下まで行き、吹雪の爲引返した。平をすぎ、林に入り、傾斜が急になつてからは、全部輪カンジキを用ゐたが、尾根に出たからは、相當瘦せて居るからアイゼンの方がよい。尾根に出るまでは雪が

相當深く潜つたが、尾根は全部ウインド・クラストを形成し、所々相當の雪庇をのせてゐた。若し榊水館を根據地にするならば、どうしても往復十時間位は見積つておく必要がある。

この行より約一週間の後清田・池田兩君の隊がノドの澤を登り頂上までの積雪期に於ける最初の登攀に成功した。この時兩君は一週間前には認めなかつた大きな濕潤雪の雪崩のデブリーを、ノドの澤にも二の澤にも一面に認めた。雪質もまばらで、カット・ステップの必要はないが相當堅い雪と、腰までももぐる軟い雪とが交錯してゐたさうである。兩君の根據地は八八八米附近の小屋であつたが、この小屋から往復約八時間位を要してゐる。

一九三一年二月

堀外二名よりなる一隊はノドの澤コルジューより右に劍ヶ峰附近に達する澤を登り、大山・奥大山間の主尾根より約二十米下部で、澤の急なる爲側尾根に依らうとして一箇所通過不能に陥り、その儘引返へした。雪は甚だしく濕潤化しており、アイゼンのツツケの間

に玉の如く附着して、登降共に非常な困難を覺えた。又當時雪崩崩落の危険性も大いにあつたとの事である。

一九三一年五月

森藤外三名の一隊は、口の澤を登り東ゴルヂェー通過後、三の澤との間の尾根に依つて劍ヶ峯に到る登路、及び二の澤より頂上に至る登路に成功した。

同時に池田・馬場の兩君はD尾根—この尾根は又北尾根とも呼ばれて居て、大山の北方に出た尾根でもあり、更に下の左股・右股合流點から見た所は、前穂高岳北尾根の一・二・三峯を潤澤より見た感じに非常によく似た所があるのである—の第二第三峯間の鞍部まで達してゐる。實に岩のゆるんだ尾根で、手に觸れるものが殆んど皆崩落して行つたかとさへ覺えるものであつたと云ふ。然し決して登行不可能ではないさうである。

この外にこの時兩君の成功したものには、北尾根兩側の澤、大山頂上附近より北に落ちる澤、劍ヶ峯より西方第二番目の峯附近より北に落ちる澤、奥大山より

北に落ちる左股となる澤と合計五本の澤の登降に成功してゐる。北壁は概して下部が固い岩壁よりなり、岩登りとして非常に興味があるさうである。

以上で大體大山に於て、今日までに試みられた登攀の主要なるものに就いての簡單なる紹介をなし得たと思ふ。従つて同時に大山南・北兩壁に於ける、登行可能であり、又可能なりと思はるゝ場所をも併せて述べ得たつもりである。

各登攀には、所要時間をも記入すべきが至當であるが、唯今正確なる記録が手許にない爲と、積雪期の日本アルプス一帯に比すれば、多くが遙かに短時間である爲に、一つく記入する必要がないかと思つて省略してしまつた。極く概略的な所要時間としては氷水館を根據地とし南・北・兩壁・及び烏ヶ山に向ふ場合には八時間から十時間位を見積つておけば先づ充分である。

一九三一・九・三〇



(657)

「山岳」第二五年第二號、雜錄

「飯豊山の登路について」に對す

る參考二、三

鈴木 岩 雄

(1) 八四頁下段一五行 この方面に關しては荒澤部落の玉木清八氏詳し。

荒澤部落には玉木清八なる人は居らず、玉木清吉といふ人は居れども、山のことは知らず、多分玉木猪八氏の誤ならん、猪八氏は國有林の山守りをなし居るものにて高陽山附近までの地理には委しき山、荒澤部落區長佐藤惣吉氏より聞き及べり。

(2) 八五頁上段一三行 堰堤より笠掛山まで(43)、又湯ヶ島より櫛ヶ峯山稜まで孰れも一日の行程なり。

前行に「杉ウド尾根(之は杉淀尾根の誤り)より笠掛山に登るを得る」とある所より多分堰堤より川沿

ひの林道を通りツボヤス澤を越えて杉淀尾根に取付くものと考へらる。然るにこの一日はあまりに所要時間を大きく見たるものに非ざるか、半日としても樂の行程なり、堰堤より尾根取付きまでは立派なる林道にて約二十分を要すべし。尾根の藪は大部分徑一・二寸位の疎林にして、所々櫛の大木ある所は開けてあり。岩場は全くなし。上部二百米位は稍々困難なる藪なり、小生等三名山登りには全くの素人(發電所々員)のみにて荷物は四貫五百匁乃至三貫目位宛負ひたるものにて堰堤を通過してより笠掛山三角點まで四時間と十分を要したるのみ(六月二十日雪全くなし)。又冬季堰堤番人に聞くと堰堤より三時間を要せぬ由なり。

(3) 八五頁上段一五行 笠掛山下に沼あり、山稜上有數の泊り場とす。

笠掛山南肩の所謂笠掛沼は冬季は勿論夏季も水なし(實川村、猪俣留次郎氏の言)。但凹所に殘雪ありたり(本年六月二十日)。實際水ある沼は笠掛山の北稜、

牛首との鞍部に近き所に長さ十數間位の細長きものなり、附録圖面は水のなき笠掛沼の位置を示しある故不案内の者之を探して失望することなきか、水ある沼は笠掛山北稜なる事の附記必要に非ざるか。

(4) 八五頁下段三行 湯ヶ島より鏡山に至る林道ある由豊實にて聞けり、されど狀況は知らず。

小生等今春五月三國岳に登りし時上述の道に出逢ひたり。鏡山の西南隣の一三二〇米の峯より西に下りアシ澤合流點の眞向ひにて終る尾根に登りたるに八五〇米等高線あたりにて偶然林道に逢遇し、以後之に従つて前記一三二〇米の峯の頂上の雪に没して消ゆるまで辿りたり。電光形に登る小徑にして所々に二、三年を経過したる鈍目あり、左程荒れても居らざる様見受けたり、只實川の河岸よりの取付きを見出し得ざりしは残念なり、因みに湯ヶ島向ひ岸より堰堤の約半里奥の釣橋まで實川の左岸五十米位の所をへつる林道は途中一ヶ所破壊したる所を除けば踏跡明かなり。

(5) 八六頁上段一九行 水晶峯南方「大根オロシ」の岩嶂は山脈の輕裝せる獵人も綱を用ひて通過する難所にして荷重きときは困るなりと聞けり。

「大根オロシ」は高メアテより眺めらるゝ程割合に困難なる所に非ず、實川村人の二、三に尋ねたるに何れも綱を用ゐる必要なく、夏冬共に上下左して困難ならずとの事なり。小生等本春三月下旬尾根傳ひにて笠掛山まで往復せる時、豫期せざりし「大根オロシ」(この名は後程聞き及べり)に遇ひたり。勿論綱も用意せず、山登りには殆んど無經驗の二名なりしが、鞍部より尾根の正面を十米位登り、それより水晶峯に向つて尾根の左側の(裏川側)ブッシュ(腰丈位の密叢)に取つき左して危険を感ずることなく割合樂に上下したり、風の吹付け烈しきため難場は雪全く吹拂はれ居たる故夏季も大して差異なしと信ず。

山岳二十五年第二號附録地圖「飯豊山塊」について(地圖参照)

(6) 笠掛山三角點より南に下る尾根杉ウド。尾根。

杉淀^ま尾根の誤りなり。

(7) 孫三郎へツリの位置(裏川合流點附近下流)

孫三郎澤と長坂澤の間に記入しあれ共之は孫三郎澤とワサ澤との間橋記號の上の所に記入すべきなり。

(實川猪俣留次郎氏)

(8) 小荒橋(實川端附近ネモト澤、ヒカゲ澤の間の橋)より小荒井までの右岸の林道。

ヒカゲ澤附近までは立派にあれどもそれより小荒井までの半分位は近年(十年位)使用せず、全く道あとなき所多く通行困難なり、道路として記入するは無理ならん。

一般に實川口の登路(尾根筋)日程は余りに餘裕を見過ぎたるに非ざるやと思はる。時季、天候、人數、荷物等の如何によりて大いに遅速あらんも登山に關しては經驗殆んどなき小生等の行程より見るも笠掛山より

飯豐本山まで二日を要したりなどは如何にせしか想像も出來兼ね、之等の記事のみを見て實川口の幾分敬遠せらるゝことあらば遺憾に堪えず。小生等午前四時に實川村を發し午後四時二十五分大日岳頂上着、この日は此處に露營翌日五時半頂上發、西ヶ岳、飯豐本山を廻り山都口に午後六時に到着當日午後九時には歸村せり。日程に稍々無理あるとしても各三角點等には相等の時間を費やしたるものにて更に一泊を許せば、充分の餘裕を残すべし。地方より實川に入るに一日を費やすとしても實川泊りを含めて三泊位にて實川口(尾根登り)より大日、飯豐を廻り得るものと想像さる。

木曾街道の錦繪

(口繪に關する説明)

小島 島 水

江戸から京都への二大街道は、言ふまでもなく、東海道と木曾街道であるが、前者は海に沿うて明るく、後者は山谷の間に挟まれて暗い氣がすると見えて、木曾の方が、おつくうがられる。尤も東海道必ずしも、海に沿うて明るくばかりもなく、木曾街道と雖も、吾氣に歩ける平野もあり、里程は東海道の宿驛五十三次を通じて、江戸京都の間、百二十六里六丁一間、木曾街道(廣義には中山道、又は中仙道と呼ぶ)六十九次が、百三十二里十町八間で、東海道の方が六里四丁七間近いわけだが、扱、孰れの道が、嶮阻困難であるかといへば、東海道には、箱根今切の御關所があるに對して、木曾には、碓氷と木曾福島に御關所があり、渡船川越えは、東海道には「越すに越されぬ大井川」を初め、旅人泣かせの河川が多いが、木曾街道には、千曲

川、太田川、長良川などあつても、大抵渡船が利して、東海道ほど難儀でない。峠は東海道に「箱根八里」の嶮があり、宇都の谷峠、鈴鹿峠など、音にひびいてゐるが、木曾の方が、さすがに碓氷峠、鳥居峠、摺針峠など、可なり惱ましたものであるらしい。併し兩街道を公平に觀察して、必ずしも東海道が安樂で、木曾街道が困難だとはかりは言へない。かの貝原益軒先生は、有名なる岐岨路記に、後叙を附けて、自分は江戸に行くこと十二度であつたが、皆東海道を往還した、併し老いの身のおもひ出に、只だ一度木曾街道を旅して見たところ、聞いた時ほどに、道が嶮しくなく、棧橋なども危なくはないし、大井川阿部川のやうな、洪水で越えられないところもなく、桑名新江のやうな渡海の惱みはない、尤も碓氷峠から馬籠まで、信濃四十七里は、山中だから、阪は多いが、箱根ほど嶮ではない、山中だから、人心が素直で、旅宿の主人のもてなしも、懇篤で、宿所も、器物も、汚なくは無く、行人も比較的少ないので、道中も心が静かであり、人馬の力が強いから、籠でも、馬でも、氣丈夫に乗れるし、山川林

樹の風景が、秀ぐれてゐるから、日々心を悦ばせるといふ趣旨を、述べられてゐる。要するに、木曾路は案外によかつたのである、そして、案外に苦しくなかつたものである。

併し大抵の旅人は、木曾街道といふと、深山幽谷を空想して、おのゝき怖れ、三度に一度も、木曾の方は通行しなかつたらしい。殊に文藝繪畫の如きに至つては、東海道は早くから記載され、描寫されてゐるが、木曾の方になると、遙かに後れてゐるのみならず、文獻畫品も、あまり多くない、東海道の方では既に鎌倉時代に、曲舞くまひの盛久東國下りなどがあり、下つて萬治年間には、淺井了意の有名な「東海道名所記」があり、硬文學の方では、林道春先生の丙辰紀行などがあり、繪畫では菱川師宣描くところの元祿繪圖などがあるが、木曾路の方は、文藝繪畫、兩方面に於て、遅れてゐる。貝原先生の、前に述べた岐蘇路記は、貞享二年、五十六歳の折の旅行記を、寛永六年、八十の高齡に達せられて、開板したものであるが、道中記としては、恐らく最も古い方であらう（この外、古いものに、

芭蕉翁の俳文紀行はあるが）。寶曆六年出版の「岐蘇路安見繪圖」の序文に依るも「岐蘇路を委しく記せる書は貝原先生の木曾路の記と、千鐘坊の木曾懷寶鑑の兩書のみ也」と言つてゐるのを見ても、貝原先生が、祖述者であることが伺はれる。江戸近世期に榮えた名所圖會類や、寺小屋で用ゐた御手本類（所謂往來物）でも、東海道が先に出て、木曾街道は後から出てゐる。即ち秋里籬鳥作の「東海道名所圖會」は、寛政九年に出て、同人著の「木曾路名所圖會」は、文化二年に出ている。往來物では、東海道往來、都路往來など、享保頃の作として傳へられてゐるが、「中仙道都路往來」「木曾の掛橋往來」など、下つて弘化頃の述作である。

以上兩道の文獻を略述したが、勿論これは、大體のもので、紀記歌集謡曲などの中から、擧げてくれば、もつと古いものが澤山出て来るが、本文の關するところは、實地の旅行記、實際の寫生圖であるから、引用の資料も窮屈になつてくるわけである。

木曾街道を通じて、纏まつた繪になつたものは、何

と言つても前述の、木曾路名所圖會であらうが、本の性質が、名所案内だから、説明的、挿繪式であることを免れない。獨立して鑑賞に堪へるものとしては、歌川廣重と、溪齋英泉合作の、木曾街道六十九次が、初めでもあり、又その後、之に代るべきものが現れてゐない。

木曾街道六十九次は、大判の横繪で、天保五年に、廣重の東海道五十三次が、好評の裡に完結してから、直ちに取つかゝつたものらしく、翌天保六年に英泉が最初の日本橋を描き、引きつゞいて、板橋、蕨、浦和、大宮から、本庄宿まで、十一枚を描き、新町を初めて廣重が描き、以後、或は英泉、或は廣重と、枚數不同に、交互に描いてゐるが、三渡野から、以後、最終の大津驛までの間は、英泉は僅かに馬籠、鷓沼、河渡の三枚を描いたゞけで、他は全部廣重が描いてゐる。結局總計七十枚の内、英泉が二十三枚、廣重が四十七枚を描いてゐる。板元は保永堂、伊勢利(錦樹堂と稱す)、山庄の三軒になつてゐるが、初めは英泉の分を、保永堂、廣重の分を伊勢利で發行したのを、後に伊勢利が、

保永堂の板權を買ひ受け、全部伊勢利の板行として、何故か、英泉作の分に限り、落款を削除して、恰も廣重作の一部分でもあるかのやうに、誤まられる恐れがあるやうになつたのは、何か事情が伏在するのであらうが、今日未だ明らかにされてない。其後、更に全部の板權を、山庄が買ひ取つて、粗惡極まる摺刷品を賣り出したが、この分は、鑑賞に堪へない。本畫集は、初刷の第一作日本橋は天保六年に出たのであるが、何故か完成までに、多大の日月を要し、最後の一枚の出たのは、恐らく天保十二年頃であつたらしく思はれる。兩作者のうち、廣重は言ふまでもなく、浮世繪師中での、風景畫家で、東海道五十三次で、一躍大名を成し、木曾街道の連作に移つてからも、巧妙なる長所を發揮し、人氣も、出來榮えも、恐らく英泉の上に出てゐやう。併し英泉は、美人畫家として、當時歌川國貞と並んで、滿都の子女を惱殺してゐたが、風景畫の方面にも、新らしく進出を試み、廣重と技を角して、別趣の味ひを出してゐる、英泉の風景畫としては、この外に、月夜山水、雪景山水の如き、縦大判二枚繋ぎの

傑作があり、多くの江戸名所があるが、最も特長を發揮したのは、矢張りこの木曾街道であらう。

本號の口繪に掲げた「木曾路驛野尻伊奈川橋遠景」は、英泉傑作中の一枚で、保存極めて良好なる初板に屬し、作者の名「溪齋畫」の落款を存し、初めの板元、竹内保永堂の朱印を、畫面に存してゐる（後に溪齋畫の落款を削られ、板元が、錦樹堂に變つたことは、前述の通り）。この外、口繪の版には、顯はさなかつたが、欄外に瓢箪形の墨印があつて「極竹」の二字を印してゐる。これは「極め竹内」の意味で、見本刷に押捺した、刷り卸しを意味する。英泉は宋明の古畫を好み、先輩北齋に私淑してゐたから、描線勁拔、時に拮据の弊がなかつたとは言へないが、廣重の、四條派の山水畫から來た、穩和にしてなだらかな線と比較して、特色が發揮せらるゝのみならず、木曾路の峻岨なる山水などを取材とする時に於て、長所と畫材が、よく適合する感を與へる。

こゝに取材された野尻の伊奈川橋といふものは、何の邊にある橋であるか、私の木曾街道旅行は、何分に

も二十餘年前のことで、明らかなる記憶がない。野尻といつても、須原に向いた方でなく、野尻から三留野に行く間で、伊奈川橋下の奔流が、木曾川の本流に落ち込むところであらう。奔流を亂すところの三角形の岩石や、兩岸の絶壁は、俗緒や青で塗つてはあゝ、花崗岩質の塊状岩の原形を、あらはしてゐないこともない。併し浮世繪の風景畫に、地質學などを持ち出すことは禁物で、こゝでは、只だこのやうに表現された風景畫として、高地の疎岩なる風色を味はつてゐれば、それでいゝ。

抑も野尻から三留野の間（言ふまでもなく舊道）は、木曾街道中で、最も木曾らしい風景をあつめてゐるし、代表してもゐる、貝原益軒先生の木曾路の記から、一節を抜く。

野尻より三留野へ二里半、野尻家數五十許、荒田村より十町程行、かてい坂あり、其先に橋二あり、一は欄干あり、たてんのはしといふ、凡信濃路は、皆山中なり、就中木曾の山中は、深山幽谷にて、山のそばづたびに行、がけ路多し、殊更野尻と見との、間、尤あやうき路なり、此間左は

山也、其山のかたはらの、わづかなる、石おほき道を行、右は數十間高きがけにて、屏風を立たる如なる所もおほく、其下は木曾川の深き水也、此間、かけはし多し、まへにある名を得し木曾のかけはしより、あやうし、いづれも川の上にかけてる橋にあらず、そは道のたえたる所に、かけたる橋なり、かやうのかけはし、唐繪などに多し、他國には、かやうのかけはしまれなり、山の尾崎をいくらもまはりて、谷口へ入、又先の山の尾をまはる所多し、あやうき事甚し、此間に、中柄といふ所あり、其むかひに、垣反と云所有、其所より谷川ながれ出、むかひとこなたと、兩岸に大岩有、ことに好景なり、又其下、左の方に横河戸と云所に、谷川おくより流出橋有、横河戸のはしといふ、又かけはし有、曲尺のごとくまがりてかけたる橋也、谷川の奥に、横川といふ村あり、凡此山中の橋、かけはしを、尾州君よりかけ給ふに、其つゝいふ甚多しといふ。

之を英泉の繪と對照すると、左は山也、其山のかたはらのわづかなる石おほき道を行、右は數十間高きがけにて、屏風を立たる如なる所も多く、其下は木曾川の深き水也、此間かけはし多し、前にある名を得し木曾のかけはしより危うし」とのころを、描破し得てゐ

るとおもふ（文中の右左といふのは、野尻から三留野に向つての方角）。

終に臨んで、木曾街道の如き山驛が、斯く一驛毎に、名畫に寫し取られたといふ如き例は、世界の版畫に、その例がない。やはり風景のいゝ日本、版畫國たる日本にして、始めて見られることと思ふ。過去の山川の姿、民情風俗の姿は、この一大畫集に依つて、永久に保存せられてゐる。

作者英泉は、藤原姓、池田氏、名は義信、文筆をもよくし、一筆庵可候の文名がある。寛政二年に生れ、嘉永元年七月二十二日、五十九歳を以て歿す。墓は、東京市外、杉並町高圓寺にある。

前文を草し終つてから、私は或錦繪商の店頭で、司馬江漢の「西遊旅譚」をひやかし半分に、めくつてゐたら、偶然にも、英泉原畫の藍本ともいふべき一圖を發見した。この本は、「寛政庚戌四月、江漢先生著、門人蘭江平民誌」と奥書きがあるが、門人云々は、假設の人物で、實は江漢一人の製作である。この卷之五の

第十六枚目と、第十七枚目にわたつて、木曾街道の略畫を入れてある。「稻川橋、野尻須原の間、流は岐岨川に入」と題してある。英泉の錦繪では、稻川橋が、御覽の通り、伊奈川橋になつてゐる。「旅譚」の方は、粗末なるスケッチ風の略圖ではあるが、橋から崖、流水、山小舎風の人家、石段の上の小さな屋根まで、後の英泉の作と構圖が全然同じである。只だ「旅譚」の方には、橋の上に旅人の姿を見ないといふだけの違ひである。従來、この木曾街道の錦繪は、廣重英泉の兩作とも、材料の出所が、全く不明とされてゐたものであるが、英泉の本圖が、「旅譚」から出たことは、今回初めて發見されたもので、偶然であるだけに、私には意外の獲物であつた。

次に言ひ添えて置く、「旅譚」の木曾の繪には、本文が添えてあるが、肝心の木曾路のところは、殆ど略畫だけで、御免を蒙むつてゐる。繪解き風の文章に「十斛峠、一里廿五町あり、峠に馬籠宿あり」などあつて

胞衣えなヶ嶽、雪にて白し、此所より五里有、九月十

九日祭禮、飛驒國乗鞍岳、北ノ方、御岳、加賀の國に白嶽、又右の方、駒ヶ岳、皆雪峰也。

とある。この邊から、加賀の白山(白嶽と書いてある)は見えまいが、乗鞍、御岳、駒などの名を列ねて、それとおぼしき白い遠山を、描いてあるのに、目をひかれる、是等の山々に關する、古圖書といふほどに、古くはないが、とにかく、舊いものの一つであらう。

遭難顛末概報

附屬中學桐陰會山岳部員の佐渡妙見山に

於ける遭難概報

遭難の顛末

昭和六年三月卅日一行二十名夜行にて東京發、

卅一日夕刻佐渡兩津町着一泊。翌四月一日自動車にて千種^{ケツ}に至り、高野案内の相川より來るを待ち合せ、千種在の清水案内と共に午前八時二十分同所發、新保川に沿ひ金北山に向ふ。時に小雨止み薄陽射し、十時過まで引續き日照、暖し。後天氣再び悪く十一時四十分晝食(新保川と四〇〇米曲線との交點附近)の頃は、霧深く多少の雨。こゝより金北妙見の鞍部白トネ(九五〇米)迄全部雪。途中豫定を變更して金北登山を中止、白トネを経て(午後一時)直に妙見山に向ふ。その間依然霧・小雨・妙見山近く融雪による泥濘にて輪樑・爪掛ケを損する者多く、二時四十五分妙見山頂(一〇四二米)の御堂着。寒く手のかじかむ者あり、焚火點呼一同異常なし、故福島・大島亦異常なし。當時は「あたり暗く、急速に次ぎぐ」に霧が飛んでぬた(清水談)が、三時風や、靜まり霧晴れ同所出發、清水は、こゝより返

す。出發より三十數分後、後尾の一名爪掛ケを靴に履替へるに手間取り、中間の者前後の連絡に努めたが、先頭止らず、小時の後前方の本隊よりも亦連絡を試みたが、突如雲交りの烈風の襲ふ所となり(三時四十分)、烈風をまともに受けて戻り得ず、又寒氣の爲永く停止し難く、約十五分を費して終に連絡を斷念。以後案内者は屢々轉倒し、一行中三名も疲勞し、四時少し過ぎ小憩、當時福島は既に足元危く友人の肩を必要とし、三角點九八八・二米の南方の小憩時には、大島も同様となる。依然雲・雨・雪・烈風。五時前福島の疲勞加はり眠りかける。五時二十分風當り比較的弱き木蔭にて休憩夕食、大島は食へど、福島は握飯を口に入れても食はず、同三十分意識を失ふ(脈はなほあり)。よつて相談の結果、案内高野生徒二名を急報の爲先發せしめた。

出發より約十五分後、案内(高野)は路をそれ雪の急斜面を下る。制止して行かれるのかと聞けば首を横に振り、しつかりやつて呉れと激勵すれば泣き出し、急に其場に倒れた。立上らせて再び路を問へば答へ得ず、よつて二人は足跡を辿つて戻るべく言ひ残して一行の所へと引返す。途中振返るに高野は谷の方へ歩き出して居たといふ。翌朝捜索隊は、路より約廿間下方の檜林中のイタヤの木に、中腰になりて倚掛れるまゝ、死亡せる

高野を發見した。

他方、残りの十一人は、疲労者に夫々二三人づゝ、附添ひ、新たに歩行困難となれる者を先頭に徐々に進むうち、風殆んどなき林に入る。この時先頭の疲労者口より泡を吹き、他にも痲痺を起すものあり、一同そこに停止、先發の兩名亦戻り来る。一方福島は、手足を持つて運ぶうちより泡を吹くに至り、附添の者亦極度の疲労に運び得ず、止むなく合羽にのせ約十米辛じて引けど、それ以上引けず。時に福島虚空を掴み、脈を見るに感ぜず(夕食後約廿分、午後五時五十分)。再び引かんとせる時、先發の一人來て二三町先(實は廿間餘)の林中に一同居る旨を告げる。よつて一名は手傳ひを求めに林迄ゆけど、誰も立上る能力なく、自分も腰を下せるまゝ、再び立ち得ず。更に大島と附添ひの二人は、前進中風の爲に吹き倒され、大島は三間餘谷側に落ち、そのまゝ、四つ這ひに谷へ下らんと動作を制止する所へ、福島に附添ひゐた二名來り、四人協力して路へ引上げ、福島の上まで連れて行くに急にうつ臥せに倒れ、引けど動かす。二名は一同に助力を求めに行きそのまゝ、戻り得ず、他の二名は足部の痲痺にて其場に横臥す。約五分後大聲に大島を呼べど最早返事なし。よつて應援を求めに林に行き、同様に再び立上り得ず。

次々に來てそのまゝ、皆動けなくなつた林には、雪時々ちらつき、意識朦朧乃至不明のもの更に二名を生じた。十時頃より滿に近い月一同を照し、寒氣甚しく、多くの者錯覺を起し、木が人に見え或は小屋に見えたりする。二日午前三時頃救援隊の灯を發見、懐中電燈・呼子等で合圖する。四時頃再び近くに灯を認め、五時頃つひに一同の處に至る。兩人の遺骸を一同の所に運び、篝火を焚き、食糧介抱を受く。重態の二名は人に負はれて相川に下る。

別隊、一方連絡の断えた後方の六人は、雪無き草尾根にてその跡を追へる本隊の足跡を見失ひ、且つ猛烈なる風寒に、風下の谷側に下り(妙見山の西南なるガレの西方の支尾根、後出のサカイ澤はこのガレより發源するもの)、相談の結果本隊との連絡を断念、澤を下り里に出ることとする。澤は一面の雪、行くうちに権田疲労を見せ、五時過ぎに夕食。五時半頃(サカイ澤の四七〇米附近)権田の疲労加はり口も自由ならず、よつて小林・最所の二名先發。兩名は二日午前一時半眞光寺村の一農家に到着、救助を求めしも疲労の爲その意を充分盡し得ず、先方も亦仔細を問はず、そのまゝ、約四時間同所にて休憩睡眠。後同所發相川着二日午前七時半、直に搜索の手配に着手す。

一方残る安藤・権田・宇野・笹田の四人は、先發との約により

其場を動かす、互に睡眠を警戒して曇晴時々雪の一夜を過し、急援を待てど至らず。二日午前十一時半先發に萬一の場合を思ひ笹田出發。この日午前は時折雪霰、午後より晴。笹田は約一時間の後二段の澁(サカイ澤四〇〇米附近)に出合ひ、それをへつる途中、澁の中間の岩上に滑り落ち、再び登る氣力なく、同午後八時半捜索隊に發見される迄、その場に眠る。笹田出發後の三人は、ひたすら救援を待てど依然至らず、午後三時字野は待ち切れず極力下ることを主張、つひに單獨出發。但しサカイ澤の下流石田川の二〇〇米附近にて倒れ、翌三日午前零時十五分發見、同三時十五分眞光寺村の捜索本部に到着。

かくて終に二人となつた安藤・權田のうち、權田は字野出發の約三十分後急に後に反り返り、眠るのかと思へば時々その息の絶える様子に、安藤起せど權田正氣に返らず、身體をた、き且つ摩擦して危険防止に努める。日暮よりは腹の間に抱きて暖め介抱を続けるうち、午後九時捜索隊に發見せらる。權田は其場にて一應手を盡せど恢復の兆なく、人に負はれて(安藤は徒少)醫師の出張せる眞光寺村に急行、途中笹田と合し、午前三時本部到着。既に脈搏なき權田は、三時間後醫師の手當により漸く危険状態より脱するを得た。

搜索

(A)相川方面(第一次)、四月一日午後九時出發、むしろ

念の爲のものに付鑛山々林人夫二名、但し食品携行、同十一時頃乙羽ヶ池(獨立標高點七七八米の南方)に至り、燈火を振り大聲に叫べど應答なく、且つ身拵へ不充分なりし爲引返す。(第二次) 同十時半準備、十二時出發、計十三人、握飯・藜等を携へ、二隊に別れ別途より妙見山迄行くこととす、二日午前五時一同を發見(前述)。(第三次) 二日午前一時五十分出發、巡査・消防計九名他に有志、石油其他携帶、五時半遭難現場に到着、第二・第三次隊員の一部を六人組搜索の爲、金北山迄行かすむ(但し空しく歸る)。(第四次應援隊)傳令による鑛山電話にて一同發見二名死亡の通知に付、二日午前六時半出發、鑛山人夫・相川中學職員生徒・役場員等約七十名、食糧・死亡者收容品等携帶。

(B)眞光寺方面、上記の如く先發二名の話のよく通ぜざりし爲、この方面の搜索は遅延した。(第一次) 四月二日午前八時出發、消防・青年團約三十名、後暫時にして更に約廿五名出發。但し談話者・聽取者の双方に誤りありて遭難者の位置判明せず、かつ降雨に遭ひ交替を要すとの傳令に、午後三時小林・最所の兩名を呼び寄せ、(第二次) 同四時出發、私設消防・鑛山人夫、役場員等四十四名。兩隊共に石油・藜・握飯・卵・餅・衣類等携行。八時笹田發見、九時安藤・權田發見、字野の發見遅れたる

は、第一隊の既に搜索せる所へその後来て倒れた爲である。なほ醫師の出張せる搜索本部と、最遠隔の遭難者(安藤等)との距離は一里弱である。

参加者 先生二、生徒十八計二十名、生徒年齢十六―十九才(算へ年)登山無經驗者廿名中三名(但し箱根鞍掛山・伊豆達磨山等は登山經驗とせず)他の者は何れも少くとも一回乃至二回日本アルプス・尾瀬方面の登山を行ひ、うち六名は七日乃至廿七日のスキー練習をなす。案内者高野は鑛山山林監視人、妙見山以西の地理に精通、六十一才、前日還曆の祝あり、但し平生より酒は飲まず當日亦同じ。登山當日の服装も充分と云ふべきものである(一般参加者の服装等は後述)。

行程 (1) 千種より金北山を経て相川町(町役場迄 豫定コース)地形圖上に於て二五・五軒、登一四三〇米、下一四四一米。昭和三年度の旅行に於ては、今回より多量の積雪中を、四十七名の一行が八時間半(他に休憩合計二時間)を費して居る。今回は前回の案を踏襲したものである。(2) 千種出發は、はじめ七時の豫定であつたが、前記の如く案内の都合で遅くした。(3) 行程進捗の割合、次表参照。

千種	發着時刻	距離(米)	絕對高比 (米)	水平距離 (軒間時分)	所要時間	水平距離四軒に對する所要時間(時分)
	前八・〇發					
書飯地	〃 二・二着 〃 二・四發	四〇〇	發三五〇	七・九	二・三五	一・一八
白トネ	後一・〇通過	九五〇	發五五〇	二・〇	一・一〇	二・三〇
妙見山	〃 二・五着 〃 三・〇發	一〇四二	登二〇七	一・六	一・四〇	四・一〇
暴風襲來の地點	〃 三・四着 〃 三・五發	九二〇	登一五〇	一・五	〇・四〇	一・四六
最後の地點	〃 六・〇頃着	七〇〇	登二五〇	二・五	一・三五	二・三三
合計	休憩を含む所要時間 九・四〇		下三三二 下五四七	七・四〇	平均 一・五九	

表の中、白トネ・妙見山間の不常に莫大な所要時間は、當時既に一同疲勞せるやを疑はせるが、参加者の言に徴するも、通路・天候の状況・途中唯一回五分の休憩に徴するも、事實はその反對で、恐らく金北登山中止の爲前途を容易に考へ、緊張を缺いた結果であるらしい。なほ暴風襲來後の速度は、言はれて居る困難に比し、むしろ速すぎると思はれるが、それは下り坂の上に烈風が追風であつた爲であらう。

天候 (1) 四月一日新聞掲載の天候豫報「南の風西に廻り曇小雨」。(2) 兩津町夷港の宿泊旅館主・千種の老獵夫・同伴の二案内者、何れも當日の天候を保證した。(3) 山上の暴風は前記の如く

午後三時四十分突如襲來、初め霧、後雪、その量地表の灰色になる程度、又時に雨を交ふ。風速は木が根元より搖れたことより最大二七—二八米と推定(二九米以上拔木あり)。風向北或は北々西。氣温は霧・雨を交へた事より零度前後(相川の氣温より換算する時は零度以上となる)と推測される。一行の感じた寒さは、従つて氣温そのもの、爲といふより、下半身の既に雨に濡れてゐた所へ烈風を受けて、急速に體温を奪はれた爲と思はれる。

服裝

(1) 雨具、一行全員着用(防水マント二、外套一、他はハーフコート)(2) 一行の服裝の不備と思はれる點を列擧すれば、

ア、カーキ色ズボン等絨製なるざるズボン着用のもの……回答者……七人……特に疲勞せる……五人(七分)ものそのうち……一人(一分)

イ、ズボン下無きもの……同……十七人中……四人……

ウ、上半身の下着一枚のもの……同……三人(七分) (同但し厚薄を問はず)……十八人中……六人……

エ、……四人(六分)

こゝに特に疲勞せるものとは、歩行困難・意識朦朧或は不明を意味し、又死亡を含む。死亡者の一人はこの三條件を全部他の一人は一條件を具備してゐる(因みに後者は最年少者の一人である)。但し一人にて以上の二條件を備へ、何等異常のなか

つたものもある。

履物 雪路となりてより最後の地點迄の一行の履物を類別すれば

スキー靴或は兵隊靴(うち一名輪標併用)……五

中途で靴にはき替へしもの……四

爪掛ケ・輪標 最後まで爪掛ケ・輪標のもの……七

中途で靴下のみとなりしもの……四

最後まで爪掛ケ・輪標のもの、中には、中途にて新品とはき替へしもの、輪標破損せるもの及び輪標を妙見山の御堂に遺留せるものを含む。爪掛ケは底の厚さ約五六分、爪先はスリッパ状、踵其の他の部分は草鞋と殆んど同様の構造。輪標は爪無く木部は「トドラ」「ドゥボウ」の木にて作り、藁繩を用ふ。豫備としては爪掛ケ五足輪標四足を携行せるのみ。

はじめ一行の少くとも半数以上は靴で登る豫定の所、千種の古老の推薦と案内の保證とにより、結局大部分のものは爪掛ケ採用を見るに至つた。しかし案内に履かして貰つたもの以外は、殆んど途中にて履き切り、うち五名は暴風襲來後なりし爲靴下のみで歩き續けた(但し一名は暴風中で靴をはく)。その結果は四人中、死亡一、特に疲勞一、人並の疲勞一、最も疲勞少きもの(安藤)一となり、疲勞との相關關係は、材料過少と

は云へ、服装の場合ほど明瞭でない。尤も爪掛ケが凍傷（凍傷にかゝれるは發見の遅れた別隊中の四人）の原因となつた事は云ふ迄もないが、それを悪化せしめたのは救助後直に炬燵に入られた爲もある。

携帶品 (1) ルックザツク、一行中十五名携帶、他の五名は友人と共同で使用。

(2) 食糧 辨當二食分（直徑約四寸の握飯四ヶ、澤庵四切、干物一つかみ）、他に各自菓子類を所持、飲料を用意せるは一行中十三人。

(3) 衣類 一行中豫備の下着を携行せざりしもの五人、但しうち一名は一行中最も完全なる服装、他の一名も充分な服装であつた。他の十五人は何れも豫備の下着、多きは五枚）を携帶したのであるが、その着用は最後の地點に至るまで殆んど行はれてゐない。而して死亡者二名、特に疲勞せるもの、八割は、この下着携行者中より生じて居る。

(4) 火道具 提灯・ランタン・懐中電燈等の燈火用具携帶者は五人、マッチ・メタ等の發火用具携帶者七人、火道具を何等携行せざりしもの十一人による。遭難當夜、焚火は試みても出来なかつたが、しかしそれはかゝる不用意の直接の結果といふより當時の外界及び一行の状態の然らしめた所と思はれる。

以上は遭難の經過と、中學生の團體登山といふ點より見て必要と思はれる諸事項との概略である。なほこの調査は卒業生有志の協力によるものであるが、本稿に關する責任は専ら筆者一人にある。

(岡山俊雄)

故中野克明氏前穂高北尾根に

於ける遭難顛末報告

昭和六年七月十七日我々一行七名の中寺岡、越、中野の三名が前穂高北尾根第四峰登攀中岩石崩壞の爲、不幸にして中野克明は奥又白側に墜落し翌十八日夕逝去した。以下數項目に分つて遭難顛末を報告する。

一、遭難事實の起因 ルート直下（足場）の岩石崩壞（北尾根特有の unsound rock）並に數日前迄の長雨が更にこの性質を強めて居つた事）

一、天候 當日は晴天、前日（十六日）は晴、前々日は午前中霧雨、午後晴、それより以前十數日間殆んど霧雨又は雨。

一、身體の状態 中野及他の二名共良好。（前夜の睡眠八、九時間、朝食攝取通常、遭難當時直前三者共未だ疲勞を覺えず。）

一、經驗 寺岡は北尾根登攀（夏期七月）二回（昭和四年及昭和五年）の經驗あり。中野及越は北尾根登攀の經驗無し。

一、經過 午前七時二十分潤澤岩小屋出發。岩小屋直前よりアイゼンを付け雪溪傳ひに進む。午前八時二十分北尾根第五峯と六峯間の鞍部着。十五分間休憩。午前八時五十五分第五峯頂上着。十五分間休憩。午前九時二十分第四、第五峯の鞍部通過。

第四、第五の峯の鞍部に於ては休息をせずに直に、寺岡、越、中野の順にて間隔各人同約四、五、六尺を置きザイルを用ゐずして進む（ザイルは第四峯の中程の地點より使用する積り）。第四、第五峯の鞍部の最西南點より約二間（距離）第四峯の尾根を稍奥又白側に擯んで居つた時、中野の足下の比較的細い岩石が崩れ始め中野の足場が凌はれんとした爲、中野は本能的にその上の確實さうに見えて居た比較的大なる岩に捉らうと試みたが、この岩も亦不安定なるものであつて崩壊し、遂に中野はこの岩を抱く様にして仰向けになつて約三間直下の又白側雪溪に岩諸共に墜落し、その儘急峻なる雪溪傳ひに下方へと滑り去つた。第二位に在つた越もこの岩石崩壊の余波の爲に危く墜落する處であつたが幸にして之を免れ、先頭寺岡は既に尾根の上にあつて安全であつたが如何とも手を下す事が出来なかつた。時に午前九時二十五分。

一、搜索及救助 先頭寺岡は越に潤澤岩小屋に居る我々殘

余の一行に急を告げる様命令すると共に、自身は直に鞍部に駆け下り中野の滑り落ちた雪溪をグリースードして中野の後を追つた。午前九時三十二分中野墜落後七分にして寺岡は遂に中野を發見した。中野は雪溪を肩より約二百四、五十米下り左右から岩壁が迫り極度に雪溪が狭つた處で上から行つて向つて左方の岩壁と雪溪との間隙に落ち込んで居つた。寺岡單獨にて傷ける中野を呑真ひ上げるのは不可能であつた故寺岡は衣服を脱いで中野を覆ひ彼を抱いて我々の到着を待つた。

他方越は直に第四、第五の鞍部より潤澤雪溪に下り十時二、三十分頃岩小屋に到着我々に急を知らせた。で、我々は直に次の如く手配を決め救援を行ふ事にした。

イ、中野は勿論寺岡も亦危険であるから越と私が二人で現場に急行す。

ロ、桑田を穂高小屋に派し今田重太郎の應援を私及越と同じく北尾根側から頼む。

ハ、武光（一高）を池の平に幕營中の人々の應援依頼に派す
ニ、横・大崎を上高地に派し、又白側を下から醫師及人夫の廻行を依頼すると共に中野家へ急電を打つ。その間何れかの一人は下からの搜索隊に参加し、他の一人は直ちに潤澤に降り我々と合し上からの救助に参加す。

私は越と共に藥品、飲料水、ピスケット、レモン、ピトン、捨繩、ザイル等を携帶し第四、第五の鞍部へ雪溪傳ひに出て、越は連絡の爲に鞍部に留り、私は同じ又白側の雪溪を寺岡の名を呼びつゝ、下つた。午後十二時三十分頃前記の中野及寺岡の居る地點に到着寺岡と種々の相談をなし、中野引き上げ又は引き下ろしに二人にては尙力に余る故、今田重太郎の到着を待つ事にした。

一時三十分、今田重太郎は内方重藏を連れて到着して呉れた。重太郎等と相談の結果、又白側に下るす事は不利であり、上りの二百四、五十米の辛さはあつても涸澤側に出す方がその後の種々の都合なる事を認め我々四人懸りて一先づ鞍部に引き上る事に決した。腹造へをし、中野を脊負つて上るには余りに雪溪が急峻過ぎて、脊負ふ者も附添ふ者も共倒れとなる危険を虞れ、下方に生えて居る小木を切り集めて「モッコ」乃至は橋の如きものを造り、毛布を敷きて中野を之に乗せ、ザイルでズリ落ちぬ様に掬み、縛つて雪溪沿ひに引つ張り上げ始めたのは午後三時十五分であつた。

午後六時第四、第五の鞍部着。我々第二回目の腹造へをし、六時三十分鞍部出發。涸澤の雪溪沿ひに下り始めた。又白側の上りの約三時間は我々の覺悟せる處であつたが、涸澤側の下り

は、二、三の巨大なるクレヴァスに行手を遮られ、その度に迂回を余儀なくされて豫想外に手間取り、一高、京醫大、早大、松坂屋等の山岳部員の好意に成る池ノ平キャンプに到着せるは午後九時三十分であつた。

その間越をして下からの應援を頼むと共に、肩に迎へに來た桑田をして今田友重と共に上高地に夜行して第二回の醫師及び應援人夫の派遣を依頼すると共に又白側派出の人夫の引上げを頼んだ。

天幕收容後前記諸山岳部の人々及び人夫平林等の看護手當を受けた。

十一時頃より小雨が降り始め、その頃、又白側に廻つて呉れた、小林（一高出）及吉田（一高）の兩君が歸營して中野の發見を喜んで呉れた。

翌十八日午前二時二十五分。上高地より東京醫專の長田氏が人夫を作つて到着され直ちに中野の看護をそれより引き續き赤十字社醫に中野を委される迄續けられた。

中野回復の見込がつき始めた爲人夫一人を上高地に派し藥品の増補及應援人夫の増加依頼を爲し、その後午前八時松本市立病院より外科醫の來援を乞ふ爲一行に先立つて私は山を下りた。

午前九時天幕より中野を運び出さんとした際急變したので大崎は之を報告に上高地に下つて來た。

十二時十分、これ以上の手當の必要上兎も角も德澤小屋迄は下さうとして、中野を夏スキーを利用して造つた橋に乗せ天幕より出發。長田醫師・寺田、武光、横、吉田は之に同行した。

一行は横尾谷入口にて中野家の人が越に案内されて來るに會ひ中野家よりの醫師が上高地に於て待ち居る旨を聞き同地に直行せんと考へたが、一行は腹造へ及び休憩の爲に德澤小屋に入った。德澤小屋出發上高地に向ふ途中、吉城屋を少し過ぎて遂に擔架上にて中野克明君は逝去した。時に十八日午後六時十八分。

(一行リーダー木村武男後記)

山案内人牛田佐市遭難顛末

この行は明治大學山岳部昭和六年度夏期登山計劃第九班として聖、赤石、鹽見岳に向つたのである。一行は部員藤井運平、坪井芳太郎、及び渡邊長二郎の三名で案内として山梨縣北巨摩郡柳澤の牛田佐市を連れて行つた。

聖澤を上河内岳の尾根近く迄行き悪天候に再び碁嶋に引返へし計劃を變更して信州大河原へ下るべく七月二十一日荒川小屋に到着した。連日降雨の爲小澁川の増水して居る事は判り

切つた事であつた。渡邊の疲労よりして三伏峠へ到る登路、板谷谷を経て小澁湯に到る登路は不可能であつた。小屋に居た大河原の人夫より小澁川の徒渉が例年に比して非常に少ない事、今朝登山客が下つたと云ふ事を聞き兎に角廣河原小屋まで下り澤の様子を見て進退を決する事にする。

七月二十二日

小雨を衝いて出發する。廣河原へと下るに従ひ荒川の激しい流の響が耳の底にこびりつく。十時半廣河原小屋に着き小屋に未だ焚火の燃え残りの燻つて居た事に依り昨日下りたる登山客が今朝下つた事を知り小澁川を下る事に決す。下るに際して草鞋が三足しか無かつたので藤井、坪井、渡邊が穿き、佐市は穿かなかつたこれが後に顛倒したる原因とも考へられる。

(後日大河原にて知りたるが出合より荒川を一町程廻り高山をまいて小澁湯に到る避難路の在りたるを知る。然しこれは小澁に入りし伐材人夫の爲の路にして發表されず又自分が先年同地方人夫と共に雨中下りし時もこの路に就いては聞かなかつた。北澤の出合より二流して居る地點を右岸に徒渉し北澤、高山澤との中程の處にて再び材木堰を利用し左岸に移る。河原を傳つて行くと流は左岸の岩壁に當り右岸へと渡らなければならなかつた。河原の盡きる少し上流にて瀬になつた奔流がや

ゆるくなつて居る地點にて右岸に積石在るを見て渡る事に
する。十二時五十五分佐市を先頭に自分が直ぐ後に續く。水
量は膝を少し出る程度である。自分は流れに入つて水勢激し
い濁流に足を掬はれ易く駄目だと思つた。佐市はすでに流
れの中程に達しその儘行けば直ぐ對岸に達せられると思つた

が佐市は急に引返へし始め足を踏み出した瞬間聲をも出さず
に顛倒し荷の重みで仰向きに頭を下にして、流に巻きこまれて
しまつた。自分は一間程の處に居ながら余りに瞬間に起つた
事として如何ともすることが出来なかつた。暫く跡を見て居る
と二三十間下流の左岸が始まらうとする處にて肩まで露出し
流れに逆つて止まつて居るのでその地點まで行かうと左岸の
崖をまいたが途中峭壁を有した急澤に依つて進むを得ず止む
なく引返へした時には佐市の身體は再び奔流に巻きこまれて
しまつた後であつた。食糧の大部分は佐市に託してあり、下る
ことが不可能になつたので今日一日荒川小屋に滞在して居る
と云ふ大河原の工夫に急を告げ共に大河原へ下らんものと直
ちに引返へすことにした。

廣河原の出合附近にて下りて來る數名の人を見て注意を引
いたが彼等は直ぐ後へ引返へし始め遂に姿を見失つた。後日
大河原の工夫なる由を聞く。廣河原小屋にて用意を整へ未だ

降りしきる雨の中を荒川小屋に向つたのは三時過ぎであつ
た。六時荒川小屋に着いて見ると居る筈の大河原の工夫が居
ない、自分達の大河原に出る望みは断れてしまつた。萬事休し
仕方なく早く甲州側に出て急を知らすことに決す。

七月二十三日

朝起きて見ると深い霧雨に包まれて居たが明るく晴れさう
であつたが食糧も少く相當疲れた自分達は矢張り甲州側へと
引返へさなくてはならなかつた。八時に小舎を出て荒川前岳
にて久し振りで陽光を見る。惡澤を越えて千枚岳より東に派
出された山稜を直接二軒小屋へ下り同夜東電事務所に一泊。翌
二十四日轉付峠を越え小さな足袋に足を傷め曳きづる様にし
て新倉に着きトロにて早川釣橋に到り自動車に便乗甲府驛に
着いたのは夜の七時半であつた。直ちに大河原案内組合に搜索
頼むの電報を打ち驛より學校の登山本部へ電話にて知らす。二
十五日柳澤に到り詳細を知らせ佐市の息、組合の者五名至急大
河原におもむくことに決す。その夜屍體發見の通知を受ける。
汽車の連絡悪しく二十六日未明出發、同日四時半信州大鹿村々
役場に着く。屍體發見の詳細を聞く。今日檢屍をしたとの事であ
つた。發見現場より屍體を運び出すこと困難なるに依り現場
にて茶毘に附す許可を得て大河原丸川屋に赴くと搜索の爲現

場まで行つて下さつた大河原案内組合より十六名、検屍して下さつた酒井巡查、醫師村役場の方が今日一日の降雨に再び小澁川が増加したので一同引上げた處であつた。私は足を傷めて居たので現場まで行く事が出来なかつたが、詳細なる報告に依ると二十五日早朝より捜索に従事し発見されたのは同日午後にして現場は佐市の流された所より約一町程下流高山から出て居る尾根の附近にして屍體は材木堰にかゝつて居たとの事である。検屍の結果前額部に一錢銅貨大の骨膜に達する挫傷あり後頭部にかけて裂傷があり他には異状がなかつた。これは顛落の際岩にて受けたる傷にして是が致命傷となり即死したるものであることが判つた。自分は佐市は溺死をすする様な男ではないと信じて居たが打傷に依る即死と聞いて運命なりと諦めなければならなかつた。二十七日佐市の息、柳澤組合より三名現場に到り夜茶毘に附し二十八日遺骨を持つて柳澤へ歸る。私達は氏の遭難に際して盡力下さつた大河原赤岳會、案内組合、村役場、丸川屋に御禮を述べて二十九日辰野にて東京から來て下つた越部、赤星君と會ひ共に柳澤に到り三十日神宮部長、甲斐山岳會の方々の列席を得て葬儀を濟ませ夜行にて歸京した次第である。

(明治大學山岳部藤井運平)

大井川西俣に於ける小林義夫氏の遭難

氏は昭和五年四月本會に入會せるものにて享年廿四才、勤務先は神田區三省堂である。

昭和六年八月十一日、大井川上流西俣、二軒小屋より約十二三町上流に死體として発見されたものであるが、單獨行であつて遭難事實の探究には尠らず困難がある。以下本會に送られたる三省堂内山行會發行「山行、小林義夫追悼號」(九月三日發行)に依つて遭難顛末を記す事とする。

死體発見の經過 八月十一日午後一時過ぎ東電田代川詰所勤務深澤富義氏は東海紙料で開いた道を西俣に沿うて十二、三町進んだ所にて澤の流れの中心の岩に引き懸つたルツクザツクを発見、更に溯るとマンボウ澤附近の河原、水より五丁程上つた所に地圖が折られたまゝ、発見された。尙上流を探索したが惡澤附近より上流には水流の關係上、ルツクザツクの流れ來る筈なしと斷念し、次に下流を尋れた所、ルツクザツクの発見された個所より約一町下流の水流中に僅かに頭髮が水より出て岩にかゝつて留つて居る死體を発見した。ルツクザツク中の名刺により三省堂にこの報せがあり、十三日正午近く關係者一同は二軒小屋東電田代詰所に到着。

檢死の結果 栗山醫師談「死體は水を殆んど飲んで居ない。前額部に一錢銅貨位の打撲の跡三つあり(これは死後水に流されて出来たものではない)左眼窩上に巾二分長さ六分位深き骨膜に達する裂傷がある。尤もこの裂傷には繃帯がしてあるので死の直前に受けたものではないだらう。但しこの傷で眼の角膜に充血して居るので視力は衰へたらう。更に鼻下右唇唇が裂傷、左前歯二本折損、これは同時に起きたもの。手足其他に骨折なし、膝頭兩方とも少々擦り傷あり。以上の負傷は致命傷に非らず。で第二回墜落の折氣絶し水中に轉落したる爲遂に蘇生せず死亡したと思はれる」

其他檢死に立合つた人々の話。

死者の服装はツイシャツ、チヨッキ、カーキ色ズボン、ゲートル着用、足袋の上に草鞋を穿く。帽子、シガレットライター、磁石、山日記不明。時計は八時三十分を示し、硝子は破損してゐる。身體は寒冷な水中にあつた爲に數日間経過したものと見ても殆んど變化がない。

ルックザックの中に、飯盒の中には飯が約三分あり、靴を結んだと思はれる皮ベルトが一本あつたが靴は不明。内部は整然として居て食料も豊富、ランタン及び懐中電燈もルックザックの中にあり、時計の八時半がもし遭難時間としても午後とは以上

の事實より考へられない。

今度の遭難は先づ鹽見岳を北俣澤に下るあたりで第一のアクシデントで眼の上に傷を受けて可成りの精神上にも痛手を受け、北俣小屋あたりでゆつくり傷の手當(繃帯して居た)をした上、早く二軒小屋へ出て轉付峠を越え歸京する積りではなかつたか。そして道を急ぐ中不幸にも惡場を越え、マンボウ澤に近付いて後少して危險地帯も終ると云ふ所で第二の轉落となつたのであらう。遭難時間は晝の十二時前後と推測する。

遭難迄の小林氏の豫定コースと日程

第一日 伊那八船町—高遠—小瀬戸湯

第二日 小瀬戸湯—三峯川—巫子ヶ淵—荒川渡小屋(若くは

南荒川上流にて野營)

第三日 荒川渡小屋—南荒川—鹽見岳—北俣澤—北俣小屋

(若くは鹽見澤を下り北俣小屋)

第四日 北俣小屋—西俣—二軒小屋(若くは強行してカリタ

チ澤附近野營)

尙豫定コースは二軒小屋より東俣を溯り、白峯澤より間の岳小屋に出て、白峯三山に登る計劃にて、總日數十一日間、七月卅日出發、八月十日歸京の豫定である。

遭難の日は明記してないが、以上よりして八月三日と推定さ

れる。第一回の眼の上の負傷を北俣小屋到着前であるか、又はそれ以後であるかは判断が出来ない。然し自分は一度鹽見澤より西俣を下つた経験があるが、大した悪場もない所である。

それに反して鹽見岳と蝙蝠岳との間の北俣は非常に急傾斜の谷であるから負傷したとすれば北俣かも知れない。要するに遭難より死體發見までに八日間を経てゐる事と、關係者が第一回の負傷をしたと推定する北俣及び北俣小屋方面を歩かなかつた爲に不明の點が多い譯である。鹽見山頂で故小林氏に會つた登山者があるか、或ひは鹽見澤に下つたかを知る人が一人でもあれば更に詳細な事情も判明する事であらう。

大きな傷を受け、獨りで假の手當をなし二軒小屋に急ぐ途中不幸にも第二回の墜落に因つて倒れて再び歸らなかつた事は悲しき限りである。

登山経歴

大正十五年 七月燕岳、槍、上高地。十月黒瀧山。

昭和二年 二月武甲山。七月八ヶ岳縦走。甲斐駒ヶ岳、仙丈

岳、三國山、野呂川、鳳凰山。九月雁坂峠、甲武信岳、朝日岳

金峯山縦走。

昭和三年 二月大菩薩峠越。三月丹澤山塊縦走（失敗）。七月木曾駒ヶ岳。針ノ木峠、立山、劔岳、黒部溪谷。十月笛吹川

東澤湖行、梓山。

昭和四年 一月足馴峠、二月武州御岳、大岳山、馬頭刈山。

大岳山、鋸山。三月小金澤山、黒岳山、眞木澤。四月大菩薩連

嶺縦走。五日榛名山。七月姥子山、雁ヶ腹摺山。赤石岳、荒川

岳、鹽見岳。十一月長峯、小金澤山。

昭和五年 一月日光湯元、金精峠。四月大菩薩嶺、日川谷。

笛吹川東澤湖行、甲武信岳、信州澤。六月日川谷湖行、大菩薩

嶺。七月槍ヶ岳、前穂高岳、鳳凰山、白峯三山。九月大藏高

丸、瀧子山。十一月日光白根山。御坊山、佐野峠。十二月赤城

山スキー練習。

昭和六年 一月湯ノ小屋スキー練習。二月土合スキー練習

高尾山・小佛峠スキー。四月武尊山スキー登山。六月鹿留山。

七月三峯川湖行、鹽見岳、大井川西俣（遭難、八月三日）

（角田吉夫記）

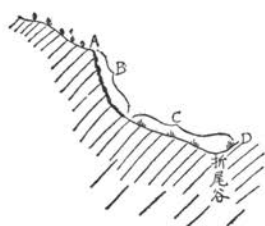
東京商科大学山岳部員の北仙人

山に於ける遭難に就て

本年七月東京商大山岳部員小橋謙三が北仙人山で墜落、重傷を負つた事は既に會報第九號で御承知の事と存じます。今左にその概略を御報告致します。

商大生遭難現場略圖

断面圖



—— 山稜。

--- 徑。

--- 墜落した道。

--- 足と踏外した地点。

--- 岩面露出せ

3 秒分（ク

ローアー

ル状をなす。

アツシユに

隠れて道よ

りは見えす

。

草地。

停止位置。

天幕地。

平面圖



E D C

一、遺難迄の概況

一行は小橋謙三、打橋壽郎、宮川雄二郎、伊藤文平、賀井善智の五名で、コースは次の通りであります。

七月十二日 富山―芦峯―立山温泉。十三日、十四日、十五

日 雨天滞在。

十六日 晴 立山温泉―追分―室堂

十七日 晴 室堂―雄山―眞砂澤―池ノ平

十八日 雨 池ノ平―北仙人山（小橋遭難）

十八日には午前七時三十分池ノ平發、仙人尾根の新道を辿り十一時十分、地圖上立山圖幅から黒部圖幅へ移る一分位手前、道が黒部側を巻く所に差掛つた時、この時行進順序は宮川、打橋、伊藤、賀井、小橋）先の四名は突然背後に岩崩れのやうな音か聞いて振返り、小橋がルックザックを背負つたまゝ、崖を落ちて行くのを見たのであります。直ちに小橋を呼ぶも返事が無いので崖を迂回して下つて行つた處、容易に小橋の倒れてゐる場所に達しました。小橋は前額部、後頭部に負傷し、意識は不明でした。

同處は略圖の通り、岩面露出しクローアル状をなす部分と草地とよりなり、合せて三十米程の長さがあります。

二、同行者の執つた處置

一行は直ちに頭部の傷に應急手当を施し、打橋は鐘釣、賀井は池ノ平へ救援を求めに出發し、宮川、伊藤は現場に負傷者の看護に當る事としました。但し打橋は出發後間もなく鐘釣へ下る大阪鐵道局の方に、池ノ平へ向ふ早大の方三人に會つたので大阪鐵道局の方々に鐘釣への通知を依頼し、早大の方々からは天幕を拜借して現場に戻りました。賀井は池ノ平の佐伯軍二を伴ひ、食料と毛布を用意して午後七時十五分現場に戻りました。一行は軍二の手を借りて負傷者を平な場所に移し、十八日夜は一同揃つて現場に野營致しました。

一行に遭難の通知を託された大阪鐵道局の方々は十八日午後二時現場發、同夜鐘釣に到着された時には既に電話が不通になつてゐたので(日電の鐘釣宇奈月間の電話は午後六時以後は使用出来ない)翌十九日朝宇奈月巡查部長派出所に届出られ、同所からは直に杉田巡查を派遣、正午頃鐘釣に到着されました。

十九日早朝、打橋、賀井は現場を發して鐘釣へ下り、賀井は日電の入夫山本忠造を伴つて直ちに現場へ引返し、この間に佐伯軍二は池ノ平へ引揚る。打橋は杉田巡查と共に入夫の狩集めを行ひ五人の入夫(宇奈月)を得たのでありますが、彼等は雨中小人數で現場へ急ぐ事を肯ぜないので、止むを得ず彼等を小屋

平(日電軌道終點)に一泊せしめ、且第二隊を送るべき保證を與へて、翌二十日午前四時半、杉田氏に率ゐられて現場へ向ひました。打橋は更に七人の入夫を伴つて午前八時二十分小屋平發第一隊の後を追ひました。

第一隊は午前中現場に着き、小橋は入夫の背に負はれて下山の途に就き、途中救援第二隊・小橋家族、商大山岳部員、藤田醫師等に迎へられ、黒部本流に出てからは擔架に乗せられ、同日午後八時宇奈月着、直ちに宇奈月療養院に入院しました。

三、遭難者家族並に留守部員の行動に就て

遭難パーティーから東京商大山岳部宛に打つた電報は種々の手違ひから不着になつた爲、留守の部員は七月十九日午後五時、時事新報社からの通知(小橋小黒部にて遭難、生死その他不明)に依つて始めて小橋の遭難を知つたのであります。部よりは部員太田又一、増山清太郎の二名同夜十一時二十分上野發現場に向ひ、先輩浦松佐美太郎氏、磯野計藏氏、部員芋川稔一、清水達雄より成る第二隊が二十日午後七時二十五分上野發の準備を整へました(實際には出發せず)。學校からは豫科學生主事阿久津謙二氏が二十日午後現場へ出發されました。

小橋家族(神戸市在住)が知つたのは十九日午後二時大每からの通知でありまして、同家では直ちに日本電力株式会社本

に便宜を計られん事を依頼し、嚴父謙吉氏令兄薰氏(荷臺山岳會員)他二名の方々が出發、二十日午前九時三日市着、三日市警察署と打合せの上、直ちに現場に向ひました。

太田、増山は同日午後一時三日市着、警察並に小橋家族の執られた處置を點檢の上、太田は日電囑託藤田醫師を伴つて現場へ急行、小黒部谷手前で一行の下山するに會ひ、始めて眞傷の程度を明かにして手當を加へ、増山は宇奈月に留つて、東京本部との連絡、眞傷者收容の準備に當りました。

一行は午後八時宇奈月着、小橋は宇奈月療養所へ入院、二十日には白馬岳から來られた大阪帝大醫學部岩永教授の診察を受け、二十七日宇奈月發大阪帝大病院に入院致しました。その他は二十一日は一日休養、二十二日宇奈月發歸京致しました。

四、遭難の原因その他

前述の通り、遭難當時小橋は最後に位置し、墜落する瞬間を目撃した者がなく、小橋自身も頭を強打した爲、遭難前後の様子を全然記憶して居らないのであります。従て以下述べる遭難の原因も、主として同行者の想像に依るものであります。

遭難の遠因と言ふべきものも殆ど見當らず、強いて申せば、連日の悪天候の爲豫定の變更を餘儀なくされ、爲に一同稍々憂

鬱になつて居たのでありまして、これは過失を惹起す遠因と見られる事ありません。その他に過勞とか病氣とか云ふやうなものも全然ないのであります。

遭難現場は徑が崖の際を通つて居りながら、ブッシュが崖を隠して居ります。且つ徑には木の根の多い上に枯葉が堆積して居るので、その上を歩くと稍々足がはずみ上るやうになります。小橋もその爲に見えない崖に足を踏みはずしたものと考へられます。

佐伯軍二の談に依ると同處は昨夏名古屋の加藤某氏の墜死された所との事で、同氏は單獨行の爲屍骸が容易に發見されなかつたので、今回も人夫は小人數で救援に行く事を欲しなかつたのであります。同處は簡単な標識を設ける事に依つて、今後かうした事件を未然に防ぐ事の出来るのは申す迄もありません。

最後に、今回の遭難に際し、早稻田大學の諸氏は現場で雨中に天幕を貸與せられ、日本電力株式會社は度々臨時電車を運轉し、囑託醫師藤田氏を現場に派遣せられ、三日市警察署、宇奈月巡查部長派出所は救援隊の派遣に、人夫の周旋に種々の便宜を計られました。茲に誌して厚く御禮申上げる次第であります。

(東京商科大學一橋山岳部)

南アルプス荒川岳に於ける故川保 義重氏遭難現場及び原因推定報告

當日までの行程

九月二十二日 大河原 泊

二十三日 地獄谷天主岩下小舎泊

二十四日 大澤渡小舎 泊

二十五日 百間洞霧營 荒天の爲、福川を下る

二十六日 廣河原小舎 滞在

二十七日 同 同

二十八日 大聖寺平 赤石岳 荒川小舎泊

二十九日午前五時半小舎發、人夫の好意によりて、惡澤岳(東岳)頂上まで送られて人夫は大河原へ、川保氏は巖段より樺島へと、左右に別る(午前八時頃)。

その頃すでに霧卷き、見通しをさへざる、人夫は極力路を右へよれと注意したりと。されど平坦状の目標なき所として見通しきかず、路を失ひ、それを求むる中にますます悪化せる天候は遂に暴風雨となりて狂暴をたくましくす、これと闘ひつ、相當の時間、路を求めたる後、遂に小舎へ引返すべく、荒天と闘ひつ、荒川岳をすぎたるも、すでに極度の疲勞と寒氣の爲小舎間近くして、遭難されしなり。

位置は赤石岳近傍山岳圖五万分一、赤石岳荒川岳を結ぶ登山路上荒川小舎より約三〇分行程、ジツクザツクの路を登り二つのハナを巻きてや、平坦になりたる所、等高線二八〇〇米附近。遭難姿態は身體は俯伏し頭部を南西に、足はそろへて眞直ぐに延ばし左肩下に兩手を重ね、樺の杖を體と並べて右方に置き、兩手をその上に置く。ルックザツクはや、山側にかたむくも昔の常態にあり。服装は、薄手のメリヤスシャツ、及びズボン下、カッターシャツ、毛織地チヨッキ、アルバカ上衣、スレン地外套雨着を着し頭巾を深く冠る、スレン地ズボン、黒巻きゲートル、紺草鞋下、足袋、草鞋。草鞋は小舎出發の時は新しきものを使用せし由なれど九分通り摩滅す。なほ、飯盒の飯の残り僅小なるを見ても相當なる時間を暴風雨と闘ひたる後と推察す。

二十九日付時間不明のメモに「暴風雨一步も歩行あたはず」とあり、川保氏の沈着さを思ひ又いかに、荒天なりしかを想像するに難からず。

右は救護隊の私達及び同行人夫との綜合推定になる事を、書きさへ置く。

齋藤清太郎

池田高三郎

山口眞一郎

新刊圖書紹介

双六谷

冠松次郎氏著

(昭和五年六月第一書房發行)

(四六版四一二頁二圓五十錢)

同じ著者の立山群峯、劍岳、黒部の三冊に次で刊行されたもの、最初に「双六谷概観」次で「山岳及び支流概観」が詳細に述べられてある。この地方に遊ばんとする者には好個の案内記として役立つであらう。

この案内記的な部分は約百頁足らずで本書の大部分は紀行文である。双六谷の本支流、これらの谷を繞る山々に關する春夏秋冬の紀行が主たるものであるが、中には「高瀬入り」「蓮華小屋の二日」「晩秋の神河内」など双六谷に直接無關係な文も併録されてある。

この驚くべき分量の紀行を讀んでゆく中に一體著者の視ひ所はどこにあるのかといふ疑問が起つた。何時何分何澤の都合に著いて、そこから何十分を要して何十米の高廻りをしてといふやうな記述からみると案内記として書かれたものかと

も思はれるがそれにしては全體が甚だ冗長である。岩魚を釣り損じた、旅服を濡らした、砂糖とレモンとウィスキーを混ぜて飲んだといふやうな身邊の出來事が随分澤山出てくる。小五月蝨い感じである。それに案内記としては冒頭の概観だけで既に充分である。

またこの無慮三百余頁に上る紀行文が双六谷を中心とする山谷の印象の描寫を目的として書かれたものとするれば、決して成功してゐるとは考へられない。前記のやうに必要以上に時間記録の出でくるのも欠點の一つである。また山谷の形骸の描寫のみに筆が囚はれてゐるのも物足りなさを感じる一つの理由である。そして全體を通じて冗漫なのは讀者をして退屈させるのみである。またこれは用語の問題であるが餘り難解な新熟語は、不幸にして漢學の素養の少ない若人を苦しめるばかりである。「霧氷は極目の樹林を粧ひ、水蒸氣は寒煙となつて」といふやうな文或ひは「露呈、羊濇、海澄、直聳、凋倒」などといふ熟字は徒らに文を生硬ならしめ、傳説の谷、神祕の谷の面影は一向に讀者の心に浮んで來ない。

冠氏の文は以前「山岳」に發表された「白峯三山に登る」だの「秋信」だの時分の方が遙かに氣持よく讀まれる。次ぎ次に著書を刊行されるやうになつてから、即ちこの兩三年來發

表されるものはどうも讀み辛い。山を歩かれるときにも常に紀行文や案内記に纏め上げやうといふやうなことが念頭にあるのではあるまいかとさへ想像される。私は老ぬて一ちと早過ぎるかもしれないが——益々旺んな著者がその長き登山生活から得られたであらうところの心境を、また自然に對する感興を筆に托して語られることを望んでやまない。冠氏のごとく經驗深き登山家にして始めて語り得るやうなことが多々あらうと思はれる。私は畏敬する先輩から、案内記や説明的な紀行文以外の更に深味のあるものを聞きたい。

挿入の寫眞四十八面、地圖二葉、この地方の説明圖としては十分に役立つてゐる。

(藤崎敏男)

日本アルプス大觀

冠松次郎氏著

(昭和六年六月・木星社發行・參圓七拾錢)

本會々員冠氏の山岳寫眞集である。收載された寫眞は無慮八十七面の多き上つてゐる。大正十年から本年四月まで十年間の收穫の中から選擇されたものであるが、既に著者の數多い著書に於て發表された寫眞が尠くない。たゞかう大きく立派に印刷されたものに接するとまた其處に異つた味を見出し

得るかも知れない。

一枚一枚繪卷物を繰りひろげるやうに私は眞を繰つていつたがもの十枚もめくるとどういふものか飽きてきた。何となく退屈である。麗壁だの側壁だの下の激流だの奔潭だのがザア／＼流れてゐる寫眞に食傷氣味である。雪の山、霜葉の山、濃緑の山、いづれもが甚だ説明的寫眞に墮してゐるやうに思はれて一向に興味がない。

「日本アルプス大觀」といふ題名から察するに、この書の編まれたる意圖は、日本アルプス中この書のサブタイトルにある「立山・黒部・後立山」地方の山や谷の美はしき自然美を大觀するにあると思はれるが故に、紀行の參考資料としてのみ役立つやうな寫眞は除外されるべきである。

例へば第三十六圖「十字峽下流の惡場と日電の步道」の如きまた第二十九圖第三十圖第五十三圖第五十四圖の如き、溪谷の寫眞として何等の面白味もない、この種のもの若し「寫眞のみを以つてせる黒部川筋案内」といふやうな本が編まれるとすれば、その場合に大いに有用なものとなるであらう。

また山姿を收むる寫眞にしても第十五圖仙人山の如き極めてつまらない寫眞である。葉の落ち盡した潤葉樹は余程氣をつけて寫眞に取入れないと五月蝨い感じを免れない。第七

十四圖の如きもその一例である。

第十四圖黒部別山の頂上、こんな寫眞を挿入されたのはどういふ意味であるか？著者の胸にはこの寫眞から黒部別山に登られたときの想ひ出が楽しく蘇ってくるのであらうと想像されるが、第三者には全く聊かの感興も起らない。これは文章に於ても同様であるが自己の作品に就いては余程冷靜に判断する必要がある。

「大笠の天上、双六谷長壽、平湯から見た笠ヶ岳、金木戸」の如きは本書に収録されるべきものではないやうに考へられる。多作を以て鳴る著者は恐らく第二第三の日本アルプス大觀を刊行されるに違ひない。ますれば右の四葉は來るべき書まで筐底に藏しておかれた方がよかつたと思ふ。

以上私は自分の感想を随分無遠慮に書いた。だが本集中讀嘆すべき作品も尠くない。第五圖第八圖第十二圖第二十四圖第五十八圖第六十九圖第八十二圖の如き、山谷に憧憬をもつものの心を因へて已まぬものがある。その中のあるものは本邦山岳の持つ特色を遺憾なくうつし出してゐる。

撮影の地點を示した附圖は大變親切な試みである。既にフイリッピの大著ウエスターン・ヒマラーヤにも試みられた所であるが、本集の附圖には地點のみならず方向まで示されてある

のは甚だ便利である。

著者は本集の「寫眞説明」の冒頭に於て「寫眞機の覺術師」と言はれてゐるが、寫眞機は決して覺術を弄さない、極はめて正直に撮影者の意思を個性を表現するものである。私は著者が正直者の寫眞機を驅使して更に一層個性の滲み込んだ、山谷の生命をとらへた、作品を世に發表せられんことを望んで妄評の筆を擱く。

(藤島敏男)

後立山連峯

冠松次郎氏著

(昭和六年六月第一書房發行)(四六版二圓五十錢)

冠氏と「黒部」、この二つのものが直ちに聯想される程、同氏と「黒部」との間には深い因縁があるのは万人等しく認むる處だ。その「黒部」に就いて先づその谷を語り、「下廊下」を形造るに缺くべからざる役目を務めて居る「立山連峯」に就いて一書を著はし、更に黒部の中でも險絶無比なる劔澤とその源流を飾る劔岳とに就て「劔岳」なる他の一書を物せるは當然であつて斯くして殘されたる黒部の西側の山々、即ち「後立山連峯」は已でに一九二七年氏の處女出版たる「黒部溪谷」が世に見えた時からやがて現るべく運命づけられて居たものと言へよう。

されば本書は單なる「後立山連峯」として信州側からのみ論

ぜられたのではなく、その脊梁から黒部の谷までへの部分を主なる対象として生れ出でたものであつて、これが本書の一番大きな特色を爲して居る。然しその西面に焦點を置いてあるにはせよ、里からその黒部側へと入るには是非とも經なければならぬ。その東面の信州側についてもその記述は恣にしてあるわけではない。言葉を換へて言へば黒部が氏に與へた感銘は信越の脊梁を越えてその東面にまで滲み出て居ると言つても過言ではないだらう。

更に注目すべきは序文に書かれしが如く、齡已でに初老に傾ける氏の積雪登攀への躍進であつて、その元氣には驚かされる。そしてこの方面への積雪期登攀に就て造詣の深い逸見眞雄氏の「積雪期の後立山連嶺登山概略」なる一章が特に加へられてあるが、これは果して本書に収録すべき性質のものであつたか、どうかは疑問の餘地があると思ふ。尠くとも斯る一章を特に掲げた以上は本書は冠氏と逸見氏との共著であると言ひ得ると思ふ。その執筆者より原稿の寄贈を受けたにもせよ、共著とするだけの雅量があつてゐるものと思ふ。

本書はその前半を「後立山連嶺概観」と題して連華岳より唐松岳に至る諸峯及びそれに發する溪谷の精密なる記載に宛て、その後半には著者が昭和五年の春より本年の春へ掛けての間

に試みたる四つの山旅の紀行及び隨想を掲げてある。

本書の價值は「後立山連峯」に就いて書かれたものの第一位に推すべきものではあるが、自分達はこれを以て満足するものではない。その紀行に於ける記述は型にはまつた感を與へる事夥しく、何處を讀んでも一本調子で聊か退屈を感じる。ある人々は同じ著者の手による「立山連峯」及び「劔岳」に於いて既に斯る言を吐いて居るが、當時それ程にも思はなかつた自分も本書を手にしてその紀行の中に主觀が余りにも缺けて居るのを遺憾ながら認めねわけには行かなかつた。結局我々に取つては何處にどんな石があり、何處にどんな木が生へて居るかといふよりはもつと重大なものがあるではなからうか？

更に亦、隨想に於ても著者は余りにもその偏見を露はし過ぎて居るのではなからうか？ 己れには己れの主張があり、他人には他人の主張があるが、著者はその限界を超えて他人にまで己れの主張を強いて居る嫌ひがなからうか？ 黒部を通じて廣き眼を山と谷とに開き得た著者が自ら狭き牆を築きて己れの偏見に閉ち籠もる事のなからん事を祈るのは自分一人ではあるまい。

(渡邊 漸)

南アルプスと奥秩父

山梨縣山林會編著

(改造社發行・四六版・三百二十一頁)

寫眞五四面・圖版十八・定價貳圓)

山梨縣山林會が甲斐山岳の紹介を目的として編纂されたのが本書である。今井徹郎氏が同山林會より委嘱され實地踏査或ひは調査・考證をなしたものと序に書いてある。尙上梓に當り木暮理太郎氏が校閲をせられた事は、本書には書いてないとしても、より良き山岳書たる爲には喜ばしい事である。

題名は南アルプスと奥秩父であるが、内容は八ヶ岳火山葉も含まれてゐる。南アルプスは赤石山地として聖岳以北、白峯山脈、鋸、駒、鳳凰の諸山、奥秩父は金峯山脈を主とせる様に思はれるが雲取山以西及び大菩薩連嶺にも及んでゐる。

概説 圖版及び寫眞の三部に目次を分けてゐる點は圖版及び寫眞の數より見ても、本文以外のものに案内書の大きな目的のある事を點頭うなづかせる。

概説は南アルプスと歐洲アルプス及び日本北アルプスとの相違點より書初め、各山脈の歴史・地形の考究あり、山林會の特徴とする林況林相を述べ、各山岳の登山口を紹介してある。地名考證、日本登山概史はもとより一讀の價値は充分に認める

が、余りに多く他書より引用してある爲に編者の主張と引用者の意見とが錯雜する感がある。引用した著者、氏名をその文の終りに置い事は更にその感を強めてゐる。頁を重ね概説が各山脈に及んでも尙概説そのものに過ぎず、登山口の簡単な紹介に終へてしまふ點は讀者に満足を得ないのではなからうか。登山の案内書として讀んだ時には讀者の得る所は幾何であらうか。登山口の紹介を讀み、略圖によつて略々その行程を知り、参考事項の登山日程と登山時間を参考とするに過ぎない。個々の山岳を研究するには本書以外の案内書或ひは紀行文も併讀する必要に迫られる様に考へる。

これは要するにこの三百廿一頁の一書に甲斐山岳の全般といふ廣範圍の内容を抱合せんとした事に原因するものであらう。自分としては南アルプスと奥秩父その他を分冊にしてより以上に詳細な奥行のあるものを希望してゐる。尙山梨山林會の如き公けの團體より案内書を刊行する際には隣接する他縣の山岳の記述には簡略となる傾向は屢々北アルプスその他の地方に於ても見られる缺點であるが、それが一村、一登山口に於ける案内書に於ては著しい。本書がこの點に留意して他縣登山口に言及してゐる事は認められる。けれども、若し同會が南アルプスのみを目的として案内書を編纂したならば更によ

いものが出来た様に思ふ。然し南アルプス及び八ヶ岳、奥秩父の總括的な概念を得る爲には良書である事を疑はない。從來刊行された南アルプス、秩父等の案内書と全く記述方法を異にしてゐる點が特色である。

次に二、三讀後の感想を述べれば、一七九頁より始まる山小屋の項は蓋し山林會として當を得たものであらう。山梨縣々設の小屋について多くの寫真と建築様式の圖版は自分としては興味深く感じた。山小屋の管理、統一に關してスウィス、アルパインクラブの統制のとれたシステムを對照として、我國の亂麻の如き現状を嘆じ、解決策を考究してゐる點は同感する所であつて、從來登山者側のみに起つた叫びを、管理者側なる山林會より歩み寄つた事はこの問題の解決に一步を近寄らしたものである。日本山岳會を中心として完全な細胞組織を作らんとする統制問題の意見は現在直ちに賛成は出来難いと考へるが營業小屋或ひは個人所有の山小屋の少い南アルプス、秩父等に於ては、北アルプス、木曾駒、御岳、富士等に比較して遙かに具體化する可能性は認められる。

二九九頁山の文献は本邦全般に及んで集蒐羅列されてゐるが此處ではむしろ本書に關する文献に留めるべきではないか。アルペン行、九州の山水等を列べるよりは各學校山岳部々報或

ひは各山岳會の雜誌を調べて、本書に關係ある紀行、研究の目次と執筆者を示して呉れた方がすつと有難い。例へば「山岳」を一年から二十六年まで南アルプスに關するもののみを抜くのもよし、又「登高行」七年に於ける積雪期の南アルプスの項の如く、貴重なる文献の表示されん事を望んでゐる。

終りに本書に對する注文としては、將來積雪期の登山に關する概説を加へられ度い。北澤にスキー小屋があり、多くの登山記録のある今日に於ては調査資料には充分なるものがある。

(角田吉夫)

JOCH (一九三二)

(東京慈惠會醫科大學山岳部報創刊號)

卷頭の部分は昨年十月甲斐駒ヶ岳に於て遭難せる岡一男君の追悼編として捧げられて居る。その遭難の概要は已でに本誌第二十五年第三號に同大學山岳部より報告されてある通りだ。その部報の創刊號を追悼の言葉を以て初めなければならなかつた事は本當に思ひも掛けない悲しみであつたらうと同情に堪へない。

第二の部分は研究編に宛てられて居るが、「山岳病」(青本茂)「登山の血液に及ぼす影響」(安並宏)「防寒の醫學的考察」(加

藤義次郎)等醫學的方面の題目を捉へ來つて論じた邊り、一寸の追従を許さぬ思ひ付きである。然しながらその内容は専門的にそれを研究して居られるのではなく學生諸君が餘暇に纏められたものであるが故に、その事を先づ頭に入れて批判せねばなるまい。その内容は自分の如きその方面に就て餘り識る處の無い者の眼から見ても決して豊富なものとは言へない。自分達の求めて居る處はこれより突き進んだ未知の領域であつて、四千米級以上の高山の登攀に對して幾分なりとも關心を持つ者に對しては如何に痛切にその方面の研究の必要を感ずるものであるかは明かである。斯る題目を今此處に捕へられた諸君が將來更に一層詳細なる研究を發表せられん事を望んで止まない。紀行編に於て何等の特徴を見出す事を得なかつたと信じて居る自分はこの研究編に大いなる望みを有する事を、そしてこの方面の研究が將來更に展び得る餘地が充分にある事を確信して居る。

(渡邊 漸)

R・C・C報告 (一九三二)(R・C・C)

卷頭三木秀夫氏の Toller は從來斯る題目に就て論ぜられた事がなかつただけに注目に値する。然しその説く處はヨードラーの本質に觸れる處は尠く、作曲家の手によつて編曲せら

れしものに就てのみ論じ、且つこれよりのみして、結論を導かんと急いで居る餘みがないとは言へない。編曲せられしものよりしてその音樂的形式が民謡より相去る事遠く、遙かに完備したるものなる事を論斷せる邊りはどうかと思はれる。吾人が今日スコアに依つて知つて居る處のものは、僅かにそのレフレインに於てのみヨードラーの何物たるかを窺ふに足る程度のものに過ぎないのであつて、ヨードラー自體の研究には親しく彼の地に在つて刻明に忠實にその材料を採集し、その在りの儘のものを把握するに非らざれば不可能かと思へる。或ひは亦、今日では一定の變化を蒙つた後の形式しか知る事が出来ぬのではなからうかと思へる。兎に角、この方面への困難なる研究に先づ指を染められたる著者の勞は多とするが、餘りに早く結論を導き出す危険を忘れてはなるまい。

近代的形式による登山を高調される R・C・C 中に西岡一雄氏の如く水を主とする旅を基調とされる登山家を見出すのは外部の者から見ると一見奇異の感じを抱かせるに充分だ。從來、水を基調とした登山家の多くが、自然との對立ではなく、自然との融合をその登山意識の根幹となせるに對し、自然との對立を基調とせる雰圍氣に住める同氏の自然觀を窺ふは又興味ある問題であらねばならぬ。同氏の「續澤谷川」中には氏

がその何れに屬するやを知る事を得なかつたが、年齢と自然觀との間には離すべからざる移行がある事は争はれない事實である。この一章に同氏は主觀にのみ依つて筆を執つたと書かれて居るが、讀んで見て案外呆氣なく感じしたのは自分一人ではあるまい。もつとはつきりとしたものを、もつと深いものを掴んで頂きたいと思ふ。

加納一郎氏の「滑る、飛ぶ、登る」これは古いスキー技術に育て上げられた人間が一樣に考へて居る處で、山に行く人間で何となくスキーを中途半途のものに考へて徹底出来ない人間は、新しい技術に育てられて、スキーをスキーとして極度に樂まうと言ふ、山は二義的に考へて居る人達とは一致出来ないが、さりとて山へさへ登ればスキーの技術は下手でもいい、轉んでも降れさへすればいいでは濟まされない氣持にもあるのだ。技術である以上、それを會得しなければならぬとは知りながらも山を従にしてまでそれを體得しない儘みを持つて居る登山家は可成多い事であらう。

紀行報告篇中では「二月の伯耆大山」はそれが「一つの登山形式に就ての提唱」として藤木氏に依つて論ぜられて居るが、斯る試みは果して今更事新しく論じ立てるべきものかどうかは疑問であらう。紀行報告篇は一體に貧弱で、僅かに「奥三

方崩岳と野谷莊司山」(丸岡榮一氏)の一篇と加藤文太郎氏の「嚴冬の薬師岳から烏帽子岳へ」の單獨行の紀行が注目し値するに過ぎない。

加藤氏の記述はそれが一見何でもなさそうに簡單に取扱はれては居るもの、一月の北アルプスの登攀然かも數日を費やすトラヴァースが如何に困難なものであるか、又如何に驚嘆に値するものであるかを知る者にとつてはその一字一句は充分慎重に讀まれるであらう。

紀行篇よりは寧ろ「雜錄」の方が充實して居る。西岡氏の「アスナロ澤歟農鳥澤歟」は野呂川の荒川の最初の廻行として讀まるべきであらう。

研究欄の二つ論文は特に取立てて言ふ程度のもでもなかつた。最後に「爐邊語中」の加藤文太郎氏の「一月の思ひ出」は劍潭に遭難した自分の山友達と同氏との間の交渉を偽はらず書かれたもので、山男と言ふものが一個の人間としては缺けて居るが多々あるのではなからうか、山へ登る人達が人間味といふものを餘りに忘れては居なかつたか、他のパーティーに對する思ひ遣りに就て自分達はもつと／＼反省する點があるのではなからうかと思へてならなかつた。お互ひに理解し合つて見れば本當にいゝ人なのが、分らずにつまらぬ事から行き違ひ

になつた儘遂には二度と會ふ事が出来ずに終る、これ程悲しい事があらうか？

(渡邊 漸)

立教大學山岳部報 3 (一九三二)

(立教大學山岳部)

後立山山脈の積雪期の登攀はこの近年に於て注目目的になつて居るがこの方面へ逸早く目をつけ、數年來、倦まず、撓まず、着實なる努力を續けて來た立大山岳部の人達に依つて「早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳及び五龍岳」堀田彌一氏、「一月の白馬岳より黒部谷へ」(小原勝郎氏)及び十二月の鹿島槍ヶ岳と爺越え」(堀田彌一氏)等の秀れたる記録が作り上げられたのは理の赴く處當然の結果であるが、喜びに堪へない。

然かも全くブランクであつた黒部川側よりの後立山諸峯の積雪期登攀が試みられた事は特に注目すべきであつて、この方面からの登攀が斯くも早く行はれようとは自分達の豫想し得ぬ處であつた。堀田氏一行の本年三月下旬、東谷より鹿島槍ヶ岳と五龍岳への登攀は同氏等と相前後して行はれた京大、伊藤氏等一行の五龍岳より鹿島槍ヶ岳へのトラヴァースと共に特筆に値する。この二つのパーティーに依つて五龍岳、鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀は一段落を告げたのであつて、自分達は斯

る優秀なる記録は獨り各大學山岳部報は或ひは學生聯盟報告にのみ止めず、「山岳」へも寄せて頂いたならと思ふ。勿論、雜録でも結構であるから、その概要を掲げ得る事が出来れば幸である。

鋸岳への積雪期の登攀記録として「二月の鋸岳」(澤本辰雄氏)及び三月の鋸岳(斯波佛一郎氏)の二つを讀み得た事も矢張この方面へ從來數多くの努力が同大學部員諸氏に依つてなされた成果であると言へよう。

その他「春の北岳へ」(清水龍三氏)「四月の劔」(澤本辰雄氏)と本誌の紀行を悉く積雪期の優ぐれたる登攀記録のみにて覆ひ得た事は羨ましい。

卷頭辻莊一氏の「文明史的地による登山意識の一考察」は登山者としてよりは寧ろ山岳愛好者の立場より見たもので、登る事ばかり考へて居る若人達とは異つた見方で山は決して一面的なものではない事が分つて面白い。然しその興味が深いと言ふのは必ずしも此處に書かれた處のものが、直ちに悉く同感出來るといふのではなく、登山と言ふものを特に意識する事なしに登つて居る自分達が一寸氣が付かない様な見方や、その解釋を指すのである。要するに此處に書かれた處のものは著者の主觀に過ぎないのであつて、他の人に取つては山岳が斯

くあらねばならぬ必要もなく、又斯くの如く登山を意識せねばならぬと言ふ必要もない事は明かである。田部重治氏も言はれた如く現在では總ての事象を意識する事なしに濟ます事が出来なくなつたので登山もその範疇より免がれる事を得ないのだ。自己の登山意識を適確に分析し得ればこれに越した事はなからうが、徒らに登山意識のみ強調して實踐がこれに伴はない様でも困つたものだ。若い人達が餘りに早く自己の登山意識を定義づける事は餘程注意しなければ危険を伴ふものである事を慮れる。そして亦同一人に在つても登山意識は常に同一ではあり得ないので、年齢や環境に依つて影響される事を忘れてはなるまい。これからの永い將來を山と共に生きて行くべき、より若き人達が狭き殻の中に自らを閉ち込める事なく、常に彈力のある態度を探られん事を希望して駄まない。同氏の「山想雜叢」は巻頭の一文を補足しこれを碎けた表現で示さうとされて居るのは若い人達に取つて甚だ親切だと思ふ。

例に依つて寫眞は何れも素晴らしい出来で、各學校部報中出色のものであるが、どうも千遍一律で個性の現れが少い様な氣がする。寫眞も亦紀行と同じく創作であり得る點を注意せられ度い。

(渡邊 漸)

尾根づたひ第三輯 (一九三二)

(青山學院山岳部)

福島昌夫氏の「本邦山岳受難史の或頁」は近代的登山が吾が國に行はれる様になつてから記録された遭難の中の最初のものであらう。明治二十四年九月九日木曾駒ヶ岳にて遭難せる安東準平氏は青山學院の前身、東京英和學校の神學部の生徒であつたが故に、福島氏は「如上の一遭難事件が本邦山岳受難史上に占むる地位は、その初期の寂しき一頁であるに過ぎない、……それをしも猶、こゝに紹介したのは、青山學院の諸君を對照においたが故である。」云々と書かれて居るが、この一文は本邦に於ける近代的登山史に貴重な數頁を加へたものに違ひない。豊富ならざる材料に依つて、これだけのものを書き上げた著者の努力を多としたい。谷川岳市ノ倉澤の登攀は元氣に溢れた若い山男達がひたむきに新しい登路を目指して「誰がなんて云つたつて登つちやうんだ」と怒鳴つて居る場面を想像し得て、然かもその一人が小島烏水氏の息子さんである事と思ふと實に愉快だ。更に亦その小島準太郎氏の「冬の烏帽子岳」は驚嘆すべき數々の冬山の單獨行で知られたR・C・Cの加藤文太郎氏がR・C・C報告第四輯「嚴冬の薬師岳から烏帽子岳

へ」の末尾に「昭和五年の暮に東京の學生が一人で烏帽子へ往復したと云ふ其の努力には驚いた。」云々と書いて居るその學生に違ひあるまい。この登攀には小島氏一人ではなく人夫二人の努力が加はつて居る事を知つても登攀の價値は減ぜられるものではなからう。その他、春の烏帽子岳、野口五郎岳、春の木曾駒ヶ岳、春の鳳凰山北澤小屋の思ひ出等積雪期の登攀の記録で埋められて居るのは新興の部たる事を思はしめるに十分だ。然し積雪期の登攀や岩登りのみが登山の全體ではないのは勿論であつて、あらゆる時季とあらゆる形式に亘る登山を充分に體得するのは學生時代の特典であつて、一步學生生活を離れた者の登山形式は境遇に支配されて一定の型にはまつて仕舞ふのが常である。學生の方々が餘りに新しい形式の登攀にのみ煩はされて登山の眞の精神を没却する事のなからん事を、そして亦、新しい形式に依る登攀に依つて前人の及ばなかつた處を補はんが爲には常にその土臺となる基礎的のものが必要である事を忘れない様充分の努力を拂はれ度い。尙本書の編輯の形式はもう少し改良の餘地がある様である。(渡邊漸)

案内人手帳に就て

甲 斐山岳會及び飛騨上寶村案内組合發行

我國登山界の現状を、二十六年前即ち日本山岳會が生れ、「山岳」第一年第一號が明治三十九年に發行された頃と比較すれば山の姿こそ不變なるものとしても、山岳を中心として非常なる變化の起つた事については實に隔世の感がある。山小屋、山道の現状、案内人組合の成立、登山團體の増加等驚くべきものがある。そして今日の登山界に於てはあらゆるものが合理化され、秩序ある組織に移りつゝ、あると共に一般登山者のそれを懇求するところである。

この問題の一つとして案内人手帳がある。今日の日本アルプスの山麓各登山口にはそれ／＼、案内者の異なる組合が出来、雇傭者なる登山者は往昔の如く、案内人を求むる爲の煩らしさから大いに救はれる様になつた。案内料金を規定され、組合員の姓名を知る事も容易である。此點日本山岳會が昨年より發行した「山日記」の認められるべき一事であると信ずる。スウイスには案内人手帳が古くより各人に携行され、案内をして登山者の署名と感想がしたゝめられてゐるが、我國に於ては全く見られなかつたものである。案内人手帳に署名の増加するといふ事は案内者自身の経験を證明すると共に、後に來る登山者にとつては唯一の信頼し得る證明書となる。手帳を一讀して案内者の人格、経験を知り得る事は案内人と初対面の登

山者にとつて、どれ程力強さを覚える事であらう。數多くの署名の中には既知の人を見出す喜びもある。又この手帳は案内者自身としても、無言の中に自分を知らしめる貴重なる査證と

第一である。

一、上寶村登山案内組合員手帳

一、岐阜縣吉城郡上寶村の案内組合にて發行されたもので蒲田

昭 和 年	自 月 日	至 月 日	昭 和 年	自 月 日	至 月 日	昭 和 年	自 月 日	至 月 日	年 月 日	期 間	登 山 者 及 人 數	行 程

なり、彼自身の反映であれば將來の行動に對しても自ら鞭撻されるであらう事を疑はない。

昭和六年の夏、計らずも南、北アルプスより各一冊の案内人

手帳を送られ、大きな欣びを覚えつゝ、兩者を此處に紹介する次

口と平湯口の組合員が携行する事となつてゐる。

體裁 表紙綠色ブック張、大きき縦四寸五分、横三寸、表紙が

折返しとなり、裏表紙まで包まれる様になり、軍隊手帳と全

く同型、東京日本橋通三、武揚堂製、紙は上質の日本紙

内容 一頁乃至三頁は山案内組合「規約」第十條まであり、蒲田口、平湯口の各々主として任ずる登山個所の山名を列記。

四頁は「協約」を記し、案内料金規定を示す、組合加盟金として一人金參拾錢宛、組合費として組合員の案内強力服務報酬中より出勤一日金五錢宛を組合にて徴收する規定あり、其他に案内日當、特別割増金を明記、一日の持運荷物は五貫目以下とある。

五頁六頁は「心得」十ヶ條を書いたもので登山中に於ける案内人の守るべき心得と行動に對する注意がある。

七頁は「注意」として番人不在の山小屋使用及び冬季雪中登山に際しての届出の注意八頁、本籍、現在地、氏名、生年月日入會月日、退會月日、以上記入欄

九頁、會費納入書、年月日、領收印、以上記入欄。十頁、備考、白頁

以下三十七頁が登山者の記入欄となつてゐる。最後の頁に蒲田口、平湯口支部長今田金次郎の名がある。

前頁に示すものが登山者の記入欄の原寸大である。案内人手帳の最初のものとしてはよい出来と思ふが、實際に記入する場合には一頁三欄に分つてゐるのは狭過ぎる様に感じた。登山者の署名欄は擴大されて欲しい。尤も蒲田の案内者より本年

の四月自分がこの手帳を示された時には多くの登山者が必ずしも一欄一件を記さず、二欄を費す者もあれば一頁を占むものもあつた。記入者の意志にまかせて自由に書込みを受けなければい譯である。

二、案内手帳（甲斐山岳會）

前者は案内人組合長より發行されたものであるが、これは甲斐山岳會に於て發行したもので、南アルプス各登山口の案内者中に於て、同會の山案内講習會の課程を終了したるものに下附し公認せるものである。

訂裁 表紙灰白色、布製、大きき前者と同じく四寸五分——三寸。普通に見られる手帖の形式にて、鉛筆さしあり、西洋紙全頁百頁。

内容 中扉の裏に「公認之證」を示す、即ち

第 號 公認之證

本人寫真

郡 村 字 番 戸
昭 和 年 月 日 生
大 正

右之者本會登山案内講習會ノ課程ヲ終了シ本會公認ノ案内人タル事ヲ證ス

昭和 年 月 日

甲斐山岳會

然し後者に案内人料金規定を明記する頁の欠けてゐるのは遺憾に堪へない。これは各登山口によつて料金の差異がある都合が原因してゐるものであらうけれども、登山口各々の料金でも記入してある方が登山者には喜ばれやう。餘談ではあるが

登山者	住所 姓名	行程	登山 昭和 年 月 日 町 村 日 村 ニ 下 山 出 發	案内者ニ對ス ル感想

次頁は「案内人の心得」六ヶ條あり裏面は「注意」として本手帖の携行の必要と、出發者に登山者に提示すべき事を記し、其他四ヶ條あり、年一回甲斐山岳會に提出して點檢を受くる義務がある。以下登山者の記入欄となる。(厚さ大)

二つの案内手帖を比較して見るに、その發行者の立場に相違がある爲に内容にも若干の變化と特徴が認められる。登山者の記入欄は甲斐山岳會發行のものがよく出来てゐると思ふ。

この案内料金も我國に於ては尠くとも同一地方の登山案内人の料金は統一すべきである。村によつてそれ程多く經濟状態を異にするとは考へられない。又山の性質による料金の差異にも賛成し難い様と思ふ。

この案内手帖の出現を機として、將來は北アルプス、中央アルプス及び南アルプスに於ては組合の組織を更に充實し、互に聯絡をとり、その監督官廳の指示をあはいで、一日も早く總て

の山案内者がこの手帖を携行されん事を希望して止まない。

(角田吉夫)

五萬分一「上高地」圖幅

從來の「燒ヶ岳」圖幅が「上高地」と改まつて假製版が出版せられた。「燒ヶ岳」圖幅の誤謬は昭和五年に出版せられた「槍ヶ岳及乗鞍岳近傍」圖に於て可成修正せられた事は已でに筆者が北アルプス地形圖發行の題下に第二十五年第二號に報じた通りであるが、穂高岳方面にはまだ充分な修正が示されなかつたのは、未だ修正測量が完了して居なかつたが爲である。

今回の修正は昭和五年に行はれ、寫眞測量も併用されて居るので略々我々の期待して居た成果を擧げ得たものと信ずる。

奥穂高岳の標高は山日記には正確なものではないとの斷り書があつて北岳と同高の三一九二米になつて居るが、今回の發表に依れば三一九〇米で、奥穂高岳はこれで内地で第三の高峯になつたわけだ。尙、常念岳の標高も從來の誤記より一〇〇米高く二八五七米と示された。その他徳木峠は從來より三米高く二一三五米となり、安房峠はずつと違つて一八一二米となつた。

今回の修正で注目すべきは前穂高岳を中心とし特にその東

面の奥又白谷、下又白谷等の邊りが正確に表はされた事で、從來實地や寫眞と地形圖とがどうも巧く一致しないで、一體事實はどうなつて居るのかさつぱり分らなかつたが、今度の修正で略々合點が行く様になつた。尤も縮尺が五萬分一なので細部に亘る表現は不可能であるのは止むを得ない。將來二萬五千分一、欲を言へば一萬分一位の詳細なる部分圖を發行せられたならば吾々登山者には如何ばかり便宜であらう。

横尾谷落口から一ノ俣、二ノ俣邊りに掛けても可成修正されたり大瀧山から徳木峠を経て霞澤岳、六百山に掛けても大分異つて來た。穂高連峯の飛驒側にも著しい改變が示されて居る。笠ヶ岳の穴毛谷の邊りも大分從來とは模樣が變つて來たし、中崎尾根の二四三九・五米の峯には新たに奥丸山の名が附せられてある。その他の小さい地名の増補や溪流の流域の變化等に就ては此處には述べない。

(渡邊 漸)

峠と高原

田部 重治氏 著

(四六版二五〇頁・定價一圓五十錢・大村書店發行)

最近に出版された山の本の多くが、餘りにも粗雑なので、批評の筆を採るにも些か困惑を感ぜずにはあらなかつた。今、

田部氏の近著を手して、暫く待ち望んでゐたものに漸く遭遇し得た様な感がある。

著者の山に對する態度なり、山を通じて自らに反省して得た諸々の思索なりが、しつかと表現されてゐるのが何より嬉しい。何を云はうとしてゐるのか、何を考へてゐるのか、殆ど見當もつかない様な山の本の多い中で、かうした本を手にするのが出来たのは、日本山岳界の爲めに喜ばしい事だと思ふ。

この一冊は、一つの纏つた秩序立てられた著作ではない。著者が、時にふれ折に應じて書かれた山に關する隨筆を集められたのである。併し十分に最近の著者の山に對する思索を、此處から汲み取ることが出来る。たゞ難を云へば、この中から切り捨て、もいゝ幾つかの隨筆があることである。併しそれとても著者として見れば、中々に捨て難いものであつたらうと察せられる。

著者の前著「山と溪谷」を讀まれた人には、この「峠と高原」は當然の歸結として受取られることであらう。

其處には少しの疑ふべき變轉もない。滑らかに靜かに、著者の山への思索は此處へ進み來つてゐる。此處には、日本に於ける登山思想の發達史が、極く自然に表現されてゐる。

著者の言葉を引いて見やう。「山頂のみ迫ふ人間が、毎も

山のみでは満足が得られなくなり、人間に、自然の間にすむ人間に、感興を見出し始める時に、峠が好きになつて來る。絶頂ばかりを喜び、峻嶮な山あるきのみ讚美する心持も、やがて歴史や人文に嗜好を感じる時節が來ると、人間と人間とを結ぶ動脈となつてゐる峠に、興味を感じるに至るのは當然のことであらう。」(二一九頁より)

この一節に、著者の山に對する態度の推移が、十分に寫し出されてゐる。そしてこの思想の進展の上に、私達は少しの不自然さも感じさせられない。これは日本の登山史が、その搖籃の時代からその中に育んで來た明かな面なのであるから。雜誌「山岳」の初期のものを讀むならば、此處へ至るべき十分なる素質がその所々にあることを看取し得られるやう。著者が、この一節の終りを「當然のことであらう」と結んでゐるのは、恐らくその一面を指してゐるのだと思ふが、若しさうでなくして、これが登山史一般に當て嵌まるものとするならば、私はこの言葉に疑ひなきを得ない。

暫く日本の登山史を離れて、歐洲のそれを考へて見やう。十九世紀の始め、歐洲登山史がその黄金時代建設の爲めに、孜孜として作り上げつゝあつたものは、何であつたらうか。それは登山をスポーツとする事の、この言葉がいけなければ登山を純

化することの、努力ではなかつたらうか。恐怖の對象であつた山へ先づわけ入つた者は、山を越えてその彼方の國へ旅をした旅行者であり、自然の神秘を探らんとした自然科学者であつた。さもなければ、獲物を追ふ勇敢なる山麓の獵師であつたに過ぎなかつた。

この狭い世界から山を取り出して、廣い世界へ、登山といふ新しいスポーツの舞臺へ、山を置き直したが、歐洲登山史に於ける黄金時代の一大功績だと私は思つてゐる。氷河研究の爲めでもなければ、植物採集の爲めでもない、登山の爲めの登山が見出された時、私達は、山をより朗かな、より崇高なる對象として今一度見直したのではなかつたらうか。この登山の純化が、何處まで進んでゆくものか、今私達は未だ答ふべき時期には達してゐない。ヒマラーヤへ、エヴェレストへ、幾多の努力が續けられてゐるのも、この力強い流れが先へ先へと押し進んでゐる姿として眺められやう。ヤングハズバンドの名著「エヴェレスト物語」を讀むならば、其處にはこの歴史の動きゆく力が高い調子で書き著はされてゐるのを知らう。

今一度日本の登山史へ飯つて來やう。大島君が「峠」を書いた頃、大正の終り頃から、一つの新しい形式が、日本の登山史の上に起つて來た。それは、一つには多くの人々が登山を始め

る様になると共に、都會の附近の小さな山々へ、盛んに登る様になつた事と、今一つは山の脊から脊へと渡つてゆく、所謂縦走の旅からの轉回を求めた事によつたものであつたらう。アルプスの登山は、決して衰へはしなかつたが、それと共に、多くの地方の數々の山々が登られた。これは外形的的の變化であるが、内部的には、山の見方が、マテカー式な、旅行案内式な事細かな觀察を主とする様になつて來た。最近出る山の本の多くが、そして又山の紀行文の大部分が、かゝる形式の中に箴め込まれてゐるのは、注目すべき事だと思ふ。

私はこれが、日本登山史の行くべき方向だとも思はなければ、又これが主流をなしてゐるものだとも思はない。先に引用した田部氏の文章が、そしてその結びの言葉である「當然のことであらう」と云はれたのが、かゝる風潮を指示されてゐるのでなければ、幸であると思ふ。

又他の場所で著者は、「是等の人々の都會附近の山に對する研究は、微に入り細を究め、一つの岩にも樹にも、自然美の體現を認め、傳説をもきゝもらすことなく、さうすることにより彼等は、大自然の動きを認め人間の足跡をとらへるやうに努力してゐる。私はその意味に於て、彼等の眞剣さを認め、或點に於て彼等に追從せんことを欲してゐる。」と云つてゐる。

山を知るが爲めに、植物を採り、地質を學び、歴史を究めるのは、その人の趣味として私は床しいこと、思つてゐる。併し逆に登山の要素としてこれ等の事が數へ擧げられる時、私には本來の登山の行くべき方向が、此處に押し止められてゐる様に考へられる。一切のこれ等のものを振り捨て、登山を登山として味はふ所に、山を山として知る所に、流れゆく登山の歴史の方向が向つてゐるのだと解してゐる。歴史家としての史的研究を行ひつゝ、山岳人として登山を味ふといふ、これ等の二つの事が同時に行はれてゐても決して差支へはない。併しその人の山岳人としての評價は、その人が如何に登山を味はひつゝあるかにあるのであつて、その人の歴史的研究に存するのではないと思ふ。

山に對する態度を表明する爲めに、なまなかの唯物史觀を振り回すのが笑止である様に、又山の研究にいゝ加減の物理學を持ち出して科學的研究と稱するのが無價値に等しいのと同じ様に、唯事績を細く書き連られ、地名を詳しく記す事は、私達の山への知識を豊にするものではないと思ふ。若し山に就て史實を採るならば、その結果は、歴史家として評價さるべきであつて、山岳人として評價するべきではない。山の紀行文なるが故に、間に合はせの研究でも發表して、かまはないといふべ

きではない。誰も彼もが素人歴史家となつて、山の紀行文を書くとしたらどうであらうか。私は山岳人は、山の中で忙しく手帖に物を書きつける暇に、もつともつと山を見る方がいゝと思ふ。今の日本の登山界には素人が、ペダントリーが、あまりにも幅を利かし過ぎてゐる。著者のこの言葉は、注意して解さなければなるまい。

この「峠と高原」の中にある著者の紀行文は、その意味で私は優れたものだと思つてゐる。煩瑣な物指で計つた様な道案内も書いてなければ、名所案内の様な地名の羅列もない。併し其處には、泌みとほる様な山の味はひが、著者の心を通して描き出されてゐる。此處には愛賞すべき幾つかの小鯨がある。

この様な山に對する態度に於てこそ、私達の行くべき道が暗示されてゐる様に覺える。又登山動機に關しては、著者は山的美觀を求めるところにありとしてゐる(二四二頁)。私はこれに言葉を足して、山の持つ崇高であるとし度い。最近の登山の傾向は、これを以てしなければ説明し得られないのではないかと思はれる。田部氏は、高山と低山とを比較して論ぜられる時、この山的美觀を求むる所に登山の動機があるとして、その編を進められてゐる。然る限りに於ては、確かに高山と低山とその何れが登山の本來の對象たるべきかに就て確とした區別を付け

得られない。併し、登山の動機の中で最も大切なものである、高さを憧れる心、或ひは山の崇高を求め心動きを考慮に入れるならばこの問題は問題となる事がなからう。そして又事實、高山低山といふもそれは比較の問題であつて、何を高山といふかは、その人に依つて甚しく異つて来る所のものである。私自身に照らして見て次の事だけは云へると思ふ。假令その複雑さに於てその面目さに於て、その難しさに於て、非常に優れてゐようと結局低い山では尙未だ満足されない何かゞ残つてゐることを何時も感ずることである。

僅かの時間を見て手近の山々を歩き、又は峠や高原を旅することに依つて、嘗つての山を想ひ、更に又山への思を深める事は、如何にも山岳人らしい嬉しい事であると思ふが、強いてこれを取り出して、これに理論を付けて、大きな力で動きつゝある登山の本流と併行させようとする迄のことはないと思はれる。強いて理窟を付けず、ありのままの感興を物された方が遙かに床しかつたらうと思はれる。

今この批評の筆を擱くに當つて、考へつゝ、味はひつゝ、頁を繰つてゆく事の出来た、田部氏のこの著書に、心からなる感謝を述べたい。

私は近き將來に、田部氏が私達の爲めに、一切に煩はされず、

たゞ山と氏と、この二者の間に湧き起る感興を十分に語り聞かされる様な著書をおくられる事を望んで止まない。

何か私には、この著書より受けた印象は、田部氏が、煩はされるものが、色々と多かつた様と思はれてならなかつた。

(浦松佐美太郎)



會報

會務報告

六月四日定例理事會

出席 高頭、木暮、榎、角田、藤島、渡邊、冠、松方、浦松。

一、五月七日大阪に開かれたる關西小集會、本年度の山日記刊行及びその印税、山岳第二十六年二號の編輯、山小屋建設候補地に關し夫々擔當せる理事より報告する所ありたり。

二、本會に於て登山用具の檢定をなしては如何との提案ありたるも他の運動具と異り實施極めて困難なり。用具製作所に於て製品につき全責任を持ち、使用成績良好なるものに推薦狀を與ふる程度に留るべしといふに一致せり。

六月二十五日臨時理事會

出席 小島、高野、高頭、冠、松本、浦松、角田、島山、渡邊、榎、藤島。

一、登山又は山岳に關係ある官廳團體の理事者を本會主催にて招待し、意見の交換を爲さんと提案ありたるが、登山期前に開くには時期切迫し余日なきを以て十月中旬開催のこ

とに決定せり。

二、東京製綱會社に於て製作せる登山綱は科學的試驗の結果頗る良好なるより「日本山岳會にて試験中」なる文字を製品に附記するを許すことに決定したり。

三、「山岳」編輯、圖書室當番に關し報告あり。

九月十日定例理事會

出席 高野、榎、冠、渡邊、角田、浦松、松本、松方、藤島、島山。

一、山岳關係團體招待會開催日十月十五日と決定せり。

二、山小屋建設候補地、冷ノ池及び潤澤につき冠、浦松兩理事より報告あり。潤澤に建設のことは松本營林署長にその希望ある模様なれば内意をきくこととし、一方冷ノ池も従前通りの方針を繼續するに決定。

三、山岳圖書展覽會開催の提案ありたるも書誌作製早急の間に合はず一先づ延期。

四、山岳第二十六年三號に付き渡邊理事より報告あり。

五、本會々員の登山經歷表を蒐集する件可決せられ、形式の原案浦松理事擔當に決定。

六、本年刊行を延期せる「ガイドブック」は更に考究をなすに決定。

七、全國登山團體の調査をなす件可決、角田理事擔當。

八、會報印刷補助費五十圓増額の件可決。

九、會員武田氏著「富士山」の刷本五十部を發行書肆改造社より購入し、裝釘を改めて各國山岳會へ、本會二十五週年紀念の意味も含めて贈與することに決定せり。

十、山日記を年末に刊行しては如何との案ありたるも否決、編輯主任等は追つて決定す。

十一、法人組織促進の件。

十二、本年末の理事改造に關する件。

役員總會（九月二十九日於赤坂三會堂）

出席 小島、高野、武田、高頭、三枝、田部、島山、松本、横、松方、

浦松、角田、渡邊、藤島。

委任 山崎、岩永、冠。

欠席 近藤、中村、山川、木暮、榎谷、田中、別宮、藤田。

一、本年度終了と共に退任すべき理事、東京に於ては冠、別宮、岩永、藤田の四氏と決定し、關西に於ては一理事退任の筈なるも三理事共辭退を申出でられたるを以て、今一度關西三氏間の談合を俟つこととせり。理事候補者として東京に於ては茨木猪之吉、神谷恭、田中菅雄、伊藤秀五郎の四氏を推薦し夫々各氏の承諾を求むることとす。關西は退任者決定後に候補者を推薦することとす。

二、本會基本金略壹萬圓に達したるより財團法人認可申請を促進することに決す。

三、富山營林署より山小屋に關する回答あり、冷ノ池附近は既に山小屋建設許可内定せる事判明し、本會所有山小屋建設候補地としては放棄するの外なく、穂高、横尾或は涸澤附近を候補地として選り松本營林署の意向をきくことに決したり。

四、十一月下旬又は十二月上旬に三日間位、本會主催の「山岳圖書展覽會」を開催するに決定。都合により會期中會務報告の爲め會員大會を開くべし。

十月理事會報告（二十二日）

出席 小島、高野、横、島山、藤島、松方、角田。

一、役員會推薦の理事候補者東京側の茨木、神谷、田中、伊藤の四氏いづれも承諾されたる旨報告ありたり。關西側は現三理事共退任せらるることとなり、後任候補者尙ほ決定せず。

二、涸澤へ山小屋建設のこと、松本營林署より回答未着、暫く成行を觀ることとす。

三、山岳圖書展覽會は諸方に交渉せるも會場の都合つかず本年度は延期することとす。

四、日本地理大系別冊「富士山」の刷本五十部を購入し、別裝を施し各國山岳會に贈る外、殘部を會員の希望者に頒つ件承

認。

五、十一月三十日三合堂に於て小集會を開催するに決定。

六、東京製綱會社の登山綱は科學的試験の結果良好にして實際使用の結果も良好なるを以て推薦狀を與ふるに決定せり。

七、法人設立申請に關し議する所ありたり。

八、十月十五日の本會主催招待會は豫期以上の効果を擧げた旨報告あり(別項參照)。

九、退任せる役員は今後會員名簿に附記すること、す。

十、理事選舉終了後十二月中旬會員大會を開催すべし。

十一、明年度「山日記」編輯主任角田理事。

十二、關西小集會に關する報告あり。

第五十二回小集會記事

昭和六年十月六日(火)午後六時半より、赤坂溜池三會堂に於て、榎理事司會の下に開催。今回は、本會の古き會員たるマレー・ウォルトン氏の「臺灣の山旅」なる講演があつた。即ち、この昭和五年五月初旬より六月中旬に亘る山旅中、前半の次高山と南湖大山に就き幻燈を示して語られた。

今その経路の大略を示せば、五月九日、グロス氏及

び臺灣山岳會の沼井鐵太郎氏同行、臺北發、羅東、土場、

ビヤナン、ビヤナン鞍部を経て、臺中州東勢即ち蕃地

シカヤウ駐在所に到り、これを登山出發點として、警察

官、蕃人と共に次高山に登り、大霸尖山に縦走せんと

し、山稜を北行したが、山稜險惡、蕃人地理不案内、日程

食糧の關係その他の事情で、大霸尖山に到るを得ず、

蕃稱ハバノラウ山(一二二五〇尺)に初登頂して、桃山

稜線の分岐點附近より溪に下り、山腹を上下して次高

東尾根をからんでキャワン溪に下り、次いでビヤナン

鞍部に出で、ビヤナン駐在所に到つた(野營四夜)。

(詳細は山岳第二十五年第二號一七〇頁の沼井氏の

會員登山報、並に同第三號ウォルトン氏の英文記事參

照の事)

次いで、臺灣山岳會の井上一男氏同行、ビヤナン社

の蕃人を連れて、エキヂユウ溪を溯り、普通の登路を

經て、南湖大山に登頂、南澳側より迎へに來たる、ビ

ヤハウ社の蕃人を連れて、ビヤハウ社に下り、花宜道

路に出で、研海より中央尖山に登るべくタロコに向

はれた。

氏は終始多少の諧謔交りの口調にて、これ等の山旅の思出を、印象的に語られた。異國語なる日本語を自由に操る、氏の流暢さには全く頭を下げた。

私一個人に就て云へば、氏の同地蕃人等に關しての觀察には可なりの認識不足が認められた。然し之も、初めての臺灣を語るには當然の事であらう。聽者はよろしく一異邦人の印象記として、御聞き捨て願ひたい。私は氏が態々日本語を以て話された勞を謝し、且ほがらかな一夕を過し得たのを歡ぶものである。(鹿野)

在演會員有志晚餐會

(昭和六年七月四日於橫濱市)

古い「山岳」を繰り返すと高野氏その他の御盡力で當地に於て二三回有志晚餐會の催された事がある。その後大震災で會員の移動があり一席に會して親しく山談に耽る機がないのを遺憾に思つて居た。

所が昨年二月頃から晚餐會開催の件が二三會員中の話題となつたものゝなか／＼實現に至らず遂に一年有餘も經過してしまつた。その中東京に於ては昨年十一月に創立第二十五年記念晚餐會が催され、次で本年四

月に有志晚餐會が復活したためでもなかつたが愈々機運が熟して七月四日に開く事にし場所は最も適合した當地第一の高臺で萬綠の中に圍まれ一望よく伊豆、丹澤、秩父の諸連峯の眺を擅にし、而も下界の騒音から離脱した野毛茶寮に決定して在演會員及び山岳同好者に案内狀を差出した。

當日は本會員、霧の旅會員及び橫濱山岳會員等の來會者十二名、定刻に近い頃には既に參集せられ回舊談、持寄り資料等の展觀で話題は八方の山や溪に及んだ。

一同着席してから當番の挨拶があり順次に自己紹介に加へて種々の感想を述べた。特に小島氏は「日本山岳會と橫濱」との關係に就てウエストン氏の事、日本山岳會發祥の事、或ひは所謂日本アルプス命名の濫觴を談された。又高野氏は所藏保管せられて居た山岳資料を靈感により震災數日前に越後に送附せられたことや白馬岳より祖母谷温泉に降る路での遭難談等は他の機會に伺ふ事の出来ない珍らしい話であつた。

後に會員別宮貞俊氏撮影の「黒部の秋」及び橫濱山岳會編輯の「春の丹澤山」「富士雪中登山」等優秀な映

畫で益々興を添へた。談は盡きず、歡を盡して記念撮影の後散會したのが十一時頃であつた。袂を分つても未だ耳底に響くものは松籟ではなくして山談である。

快中の快、樂しかつた一夕の清談であつた。

特に當地に縁故深い小島、高野兩先輩の御出席を得た事はこの會合の意義を益々深からしめた。

なほ當夜の出席者(順序不同)は

小島久太、高野鷹藏、神谷恭、佐野八郎、田松安太郎、町田善太郎、佐藤野里路、椎野末男、伊藤秀五郎、加山龍之助、北澤基幸、岩永信雄。

當番 北澤基幸、岩永信雄。

第二回會員有志晚餐會

(昭和六年十月九日)

この春に品川の「くまあづま」で復活第一回の會員有志晚餐會で、うまい酒にうまい料理に、そして大先輩の虹のやうな大氣焰を膝を交へて拜聴したので、自分の如き後輩も思はずメートルを上げて、頻りに嬉しくなつて誰彼となく喋つてしまつたらしい。それで

到頭今度の世話役を指名されてしまつたといふわけだ。

會報に勧誘通知を載せて返事を待つたが、前回より多く二十八名。大祭の縁日も賑かな芝は琴平の晩翠軒階上の日本間で十月九日の午後六時半から開かれた。

先づ藤島氏の紹介によつて會員塚本閣治氏の山岳映畫「水」が始められた。塚本氏の九ミリ半は既に國內國外に定評のある逸品で、編輯の巧さ畫面の鮮鋭さ、實に驚嘆の他ない。續いて「雪稜を行く」(五月の後立山山脈)の一卷。實に素晴らしい出來榮えだ。

思ひ／＼に席をとつた後、設けの卓に着き、運ばれた北京料理を口にしながら芳醇な白鷹一獻。たはいない歡聲が向ふの隅からどつと上るのをきつけに、あつちでもこつちでも、濛々とした笑ひの渦が舞ひ上る。

宴中ばに吉田竹志氏は、自己紹介を提案されたので、老も若きも新しきも古きも、夫々に名のりを擧げ、「聞えません」と茶目られて易々諾々繰返すのも、山人の無邪氣さを語る一面である。

次に同氏から次回の世話役として、木村鱗吉、松本

善二、大熊保夫の三氏を指名されて満場一致大喝采でこれを迎へた。

大きな鯉が例の通り満艦飾を施して大きな皿に載つて現れた頃は、流石によく談じよく啖ふ山人達も聊か癖易の體である。

食事がすむとあちこちで先輩を圍み、膝を交へて歡談する。日本間のよいところはここにあるのだ。實に愉快な會合である。

近來日本山岳會の會員の漸々増加するに従ひ、稍ともすると會員相互の親しさといふものが缺けて來はせぬかと疑はれるとき、このやうな會合が行はれそして續けられて行くといふことは、確かに有意義のことだと深く信ずる。今後この會の長く續けて行かれんとを切望する。尙役員の方々は出來得る限り全員の出席を希望する次第である。

閉會までになほ時間の餘裕もあつたので、再び塚本氏を煩はして映寫をして戴く。『春の谷川岳』、『蝦夷地小品』の二卷。

十二分に歡をつくして散會したのは九時半。當夜の

出席者は左の通りである(松井幹雄)。

小島久太、高野鷹藏、高頭仁兵衛、木村鑛吉、冠松次郎、田部重治、茨木猪之吉、岡野徳之助、横有恒、磯貝藤太郎、松本善二、飯塚篤之助、松井幹雄、藤島敏男、山崎金次郎、伊藤朝太郎、大熊保夫、田中菅雄、吉田竹志、大賀智、山田多市、角田吉夫、伊藤秀五郎、名古屋常治、加藤保二、塚本閉治、村瀬久保、小竹弘の二十八氏。

第二回關西小集會

十月十四日大阪南區大野南會館で開催。この日は長谷川傳次郎氏のヒマラーヤ山地旅行談を中心に、一同はヒマラーヤの雰圍氣に浸り切ることが出來た。會場には同氏製作のヒマラーヤ大地圖二面を掲げ、同氏撮影の寫眞數百葉にGTS地圖數十葉を出して展覽の用に供し、七時前から榎谷幹事の司會によつて、終始座談の形式でプログラムが進められた。先づ同幹事の挨拶、長谷川氏の紹介、ヒマラーヤの概念の畧述があつて、愈々長谷川氏の講話になつた。一九二七年五月、カ

ルカッタの北百哩、サンティニケタンの寓居を立つて遠く西藏に入り、カイラス(二二、〇二八呎)を左から一

巡して歸られる迄が約一時間。更に一九二八年五月、

同じ寓居を出立して、カシュミールからその東北山稜の

裾を縫ひ、ナンガバルバット(二六、六二〇呎)の大全

容に直面して歸られる迄が一時間半。引き續き七十五

枚のスライドによつて詳細の説明を試みられた。この

スライドはカイラスが一枚丈けで、他は全部カシュミ

ール山地旅行のものばかりであつた。講話の大意は

「山岳」二十六年一號に横氏が書いて居られる通りだ

が、あれ以外特に感銘の深かつたのは西藏高原の荒涼

とした風光が、満目すべて清く澄み切つた色彩に染め

出されてゐることで、空、雲、石、斷崖、山岳、氷雪

一つとして特殊な麗はしさを現はさないものはない。

それにマナサロワール(湖面一四、九〇〇呎)の水色

の美しさ、深さ、他に比べるものさへもない。又國境

のリップ・レック・ラを向ふへ越した所から真正面に高

く仰ぐグラマンダータ(二五、三二五呎)の絶大な

偉容は、大伽藍の屋根を幾つも、高低様々に積み重ね

た感じであり、カイラスの孤聳した全容も、光闇の持

つ壯嚴と豪快との氣分を表現してゐる。

カシュミール方面では、ヒマラーヤ主軸の勢力が著

しく衰へてゐる邊りでも、その主稜には、他に見られ

ない特有な力と美との魅惑があり、シヨントールの氷

河を溯られた際には、スマイスなどが頻りに説いてゐ

るヒマラーヤ特有の氷にビッケルを揮ひ、従來の技術

では不可能と思へる程の困難なセラックスのトラヴァー

スを試み、優れた技術を要求せられる程の氷壁を攀ぢ

て、GTS圖にある二〇、七三〇呎の大ピラミッドから

引いた氷稜へやつと這ひ登り、日本人としての登高レ

コードを作られたが、そこから脚下六千呎ばかり深裂

したルツパル氷河の對岸に、一萬二千呎の素晴らしい

岩壁を突つ立てたナンガバルバットの全容に直面され

た時は、山の眞體が餘りにも大きく、視野と焦點との

階調が、エーリアル、パースペクティヴの關係から、

會て經驗したこともない程の度外れたものであつたが

爲に、全く自身の肉眼を疑はれた位、恍惚の至境へ惹

らしい山肌は、爛熟した董紅色の不可思議なフルイン
 テンシティーに匂ひ、ラキオットピック寄りの邊りに、
 ざつと八千呎以上はあらうと思はれる大きいガリーが
 眞直に五六本力強く喰ひ込んで、そこに瑩徹した氷が
 びつたり封ぢ込められてゐた。この邊りが講話のクラ
 イマックスで、一同は息もつかずに聴き入るのであつ
 た。閉會したのは十一時前であつた。來會者は

藤木 九三 榎谷 徹藏 西岡 一雄 住澤梅次郎
 山本 金一 朝輝記太留 政友 巖三 前澤 利成
 阿江 正造 三木 高岑 山口秀次郎 山崎 彦磨
 松岡 靖一 影山 寅造 加納 一郎 三好 毅一
 米澤 牛歩 三谷 慶三 水野祥太郎 中村 勝郎
 宇野 光一 安井喜之助 新井久之助
 外に會員外三十三名 (榎谷)

者は

高久甚之助氏 (ツーリスト・ビューロー)
 新井堯 爾氏 (國際觀光局)
 岩原 拓氏 (文部省體育課)
 園部 蔭氏 (陸地測量部)
 寺國 經 吉氏 (東京營林局)
 田村 剛氏 (大日本山林會)

後藤隆之助氏 (大日本聯合青年團)

なほ本會より、角田吉夫、高頭仁兵衛、小島久太、
 渡邊漸、松本善二、松方三郎、高野鷹藏、楨有恒、鳥
 山悌成の九名出席す。

當日の主なる話題は左の通りである。

- 一、將來の登山地圖刊行に對する希望
- 一、列車時間乗合自動車の取締監督、列車内の清潔
 等に關する問題

登山關係官廳團體招待會

十月十五日午後六時より日比谷山水樓にて本會の名
 に於いて登山關係官廳及び團體より左の各位を招待
 し、登山關係事項について意見の交換をなした。出席

一、山小屋、山案内の取締監督の方針並に希望

一、營林署所有小屋の公開に對する希望

一、山小屋、道路の新設に關する報導方法に關する

問題

一、動植物保護の徹底

一、登山講習會の成績、今後の計畫

一、國立公園の候補地並に將來の施設風致保存に關する伴

全く非公式の會合なりしたため、相互に腹藏なき希望、説明等の應答をなすことを得、本會としても得る所頗る多く、又、從來かゝる聯絡の機會のなかつた各機關相互間の全體的聯絡への端緒を拓き得た事は、全く、愉快に耐えざる所であつた。 (松方)

故岡部・波多野兩氏記念書架

さきに故板倉勝宣記念書架を板倉家の御好意によつて、わが圖書室にをさめることを得たことは、當時山岳誌上に報告した通りであるが、我々は今回また、岡部長量(一九〇一—一九二九)波多野正信(一九〇三—一九三〇)兩氏の記念のため書架一基を、わが圖書室にをさめることを得るの喜びを持つ。

書架は全く岡部・波多野兩家の御好意によつて、本會へ寄贈せられたものであり、特に板倉記念書架とその型、體裁を同じうして造られた。兩家に對し本會の眞に感謝おく能はざる所である。

新着圖書目錄

一新舊刊和書

(出版書店より寄贈の分に對しては定價を()内に書添へたり、單位圓)

納富 重雄	山の鍵	古今書院(、八〇)	井田清外六名	北海道の山岳	晴林堂(二、五〇)
富田、丸山	山のスケッチ	朋文堂(、六〇)	別所梅之助	石を積む	警醒社(一、八〇)
河出、高畑	東京附近の山々	同 (一、〇〇)	菅沼達太郎	東京近郊の山と溪	大村書店(一、五〇)
平賀 文男	南アルプスと其溪谷	同 (一、〇〇)	松尾 秀一	武蔵アルプス	隣人之友社(、五〇)
河田、高畑	奥秩父と其附近	同 (一、〇〇)	井田 清	詩集 山	山と雪の會(一、五〇)
池田 博	山へ溪谷へ	健文社(二、二〇)	京都近郊圖		陸地測量部(、四五)
太田 行藏	憧れのキャンピング	同 (一、五〇)	東京西部近郊圖		同 (、三二)
田部 重治	峠と高原	大村書店(一、五〇)	小島 烏水	浮世繪と風景畫	
山梨縣山林會	南アルプスと奥秩父	山梨縣山林會(二、〇〇)	武田 久吉	高山植物の話	
陸地測量部	櫻庭野稔線測量報告		北大スキー部	スキー階梯	
櫻井 史郎	山の遭難防遏法	山岳書院(、二五)	松川二郎	山の民謠・海の民謠	
角山 吉夫	上越國境	大村書店(二、二〇)			
藤木 九三	詩集雲表	黒百合社(一、二〇)			

梅村甚太郎 富士山植物誌

大臺ヶ原教會 大ヶ臺原山

志村 寛 高山植物採集及培養法

山とスキー會 山とスキー(一揃)

二 新着定期刊行物(和書)

樹 氷 第四號、昭・六 山人俱樂部

飛驒史壇 第十卷第九、十號、昭・六・九、昭・六・一〇

山 嶺 一〇年八號、昭・六・八 東京野歩路會

アルカウ越味 第一八年第九一―一二號、昭・六・七

山行案内 第六年七號―一〇號、昭・六・七―昭・六・一〇

關西學生山岳聯盟報告 第二號、昭・六・八

セルパン 山岳號、昭・六・七 第一書房

山岳寫真大觀 野球界増刊

關東山岳會々報 第八年六號―七號、昭六・七―昭六・一〇

關東山岳會 第六五號―第六七號、昭・六・八―昭・六・一〇

三角點 第八輯、昭・六・六

フアガスクラブ

地 震 第三卷七―九號、昭六・七―昭六・九

地 震 學 會

山 彦 第四年八號―一〇號、昭六・八―昭六・一〇

東京山彦山岳會

山 旅 第三號、昭・六・八 山旅クラブ

旅 第一一年八―九號、昭・六・八―九

東京アルカウ會

ベテスツリヤン 第一三三―一三四號 神戸徒步會

臺灣山岳彙報 第三號三―五號、昭・六・五―昭・六・一〇

臺灣山岳會

尾根づたひ 第三輯、昭・六・七 青山學院山岳部

山 幸 第五、六、昭・六 坂神山岳會

旅 と 人 昭・六・七月號 旅 と 人社

山と溪谷 第七―一〇號、昭・六・六―昭・六・一

山と溪谷社

立教大學山岳部々報 第三、昭・六・七

ツーリスト 第一九年八號―一二號、昭・六・八―昭・六・一

ジバン・ツーリスト・ピュロー

旅行 第六五號―第六七號、昭・六・八―昭・六・一〇

東京旅行クラブ

踏 跡 第一號—第二號、昭・六・七—昭・六・九

東京登山旅行會

日本登高會々報 第四號、昭・六・九

日本登高會

管見錄 第六九—七〇號

大阪管見社

岳友 第八〇—八一號、昭・六・八—九

日本岳友會

アルペニズム 第四—五號、昭・六・七—九

アルペニズム社

霧の旅 第十三年三七號、昭・六・九

霧の旅會

山岳資料 第九輯、昭・六・七

關東山岳會

山と雪 第八號、昭・六・九

山と雪の會

白樺旅行會々報 第七年六號

パンフレット 第五輯

リックサック俱樂部

山と旅 第一〇五號

J・C・C社

山行 小林義夫追悼號

山行會

三 新舊刊洋書

Mumm, A. L.: The Alpine Club Register 3 Vols. 1857—

1890

Dent, C. T.: Above the Snow line: Mountaineering

會 報 新着圖書目錄

Sketches between 1870 and 1890

Whymper, E. D.: Travels amongst the Great Andes of the

Equator. John Murray, London 1892

do.: Supplementary appendix. John Murray, London 1891.

Alpines Handbuch. Band I. II. F. A. Brockhaus Leipzig

1931

Inaka Vol XIII. XIV. XV. XVI. XVII. XVIII.

The Autobiography of John Ruskin. 3 Vols.

故中村邦之助氏遺贈

Ratgeber für Bergsteiger II.

會員 八代準氏寄贈

Pinnacle Club Journal 1. 2. 3.

リチャーズ夫人寄贈

四 新着定期刊行物 (洋書)

Bulletin (The Prairie Club) No. 208 Sept. 1931.

Bulleti del Excursionista de Catalunya (Club Alpi Catala)

Any XLI. Num. 432—Any XLI. Num. 435 MAIZ DE

1931—AGOST DE 1931.

DIE ALPEN (S. A. C.) Vol. VII. No 6—Vol. VII. No 9

June 1931—Sept. 1931.

112

Bulletin (Sierra Club) Vol. XVI No. 3—Vol. XVI, No. 4

June 1931—Aug. 1931

Trail and Timberline (The Colorado Mountain Club)

No. 154—No. 155, Aug. 1931—Sept. 1931.

Rivister Mensile (C. A. I.) No. 4.—No. 8 Aprile 1931—

Agosto 1931

The Geographical Journal (R. G. S.) Vol. LXXXVII 6—Vol.

LXXXVIII 3, June 1931—Sept. 1931

Bulletin (Appalachian Mountain Club) Vol. XXIV No. 11

—Vol. XXV No.1 June 1931—Oct. 1931

The Mountaineer Vol. XXIII No. 6—Vol. XXIII, No. 10,

May 1931—Sept. 1931

The Canadian Alpine Journal Vol. XIX 1930

La Montagne (C. A. F.) No. 233 Mai-Juin 1931—Juillet-

Août 1931

Mededeelingen der Nederlandsche Alpen-Vereeniging,

(N. A. V.) 1931

Revue Alpine (Section Lyonnaise de C. A. F.) Vol 32

No. 2 2e trimestre 1931

Natural History (American Museum of Natural History)

Vol. XXXI, No. 4 July-August 1931

「山岳」投稿規定

- 一、投稿は何人も自由とす。
 - 一、原稿の採否は理事會に於て決定す。
 - 一、原稿は返却せざるものとす。
 - 一、別刷所要の向はその旨原稿に朱記せられたし、その費用は筆者の負擔とす。
 - 一、原稿にはその梗概を付せられたし。
 - 一、紀行には概念圖を添付せられたし。
 - 一、寫眞は光澤印畫紙に焼付けられ度、裏面或ひは別紙に説明記入を乞ふ。
 - 一、校正は編輯者に一任せられたし。
 - 一、地名及び外國語は特に明確に書かれ度、地名には振假名を附せられ度し。
- 原稿蒐集所
 東京市芝區琴平町一、不二屋ビル、三〇七號室
 日本山岳會編輯所
 原稿用紙所要の向は本會事務所或ひは編輯所宛て申込
 みあり度し。

日本山岳會々則

- 第一條 本會ヲ日本山岳會 (Japanese Alpine Club) ト
名ツク
- 第二條 本會ハ山岳ニ關スル科學、文學、藝術其他一切
ヲ研究シ以テ健全ナル登山氣風ノ振興ヲ期シ且
ツ會員相互ノ連絡親睦ヲ圖ルヲ目的トス
- 第三條 本會ハ前條ニ掲ケタル目的ヲ達スルタメ左ノ事
業ヲ爲ス
(1) 機關雜誌「山岳」ノ發行、又時宜ニ依リ臨時
又ハ定時ノ出版物刊行
(2) 其他登山者ノ爲メ適宜ノ事業
- 第四條 本會ハ毎年大會及小集會ヲ開ク
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長一名、副會長若干名、評議員十五名以内、理
事十五名、監事二名以内
- 第六條 會長ハ本會ヲ代表ス 但シ會長ニ事故アル場合
ハ副會長之ニ代ル
- 第七條 會長及副會長ハ役員總會ニ於テ役員ノ内ヨリ之
ヲ推薦ス、會長及副會長ノ任期ハ三ヶ年トス但
シ役員トシテ任期滿了シタル場合ハ會長、副會長
トシテノ任期滿了前ト雖モ交替スル事アルヘシ
- 第八條 評議員ハ本會ノ重要會務ヲ審議ス
- 第九條 評議員ハ本會發起人ノ總テト元役員タリシ會員
中ヨリ評議員會ノ推薦セル者ヲ以テ之ニ任ス
發起人以外ノ評議員ノ任期ハ三年トス但重任ヲ
妨ケス
- 第十條 評議員ハ互選ヲ以テ常任評議員若干名ヲ選任ス
- 第十一條 常任評議員ハ評議員會ヲ代表シテ會務ニ參與ス
其任期ハ三年トス
- 第十二條 理事ハ別ニ定ムル細則ニ依リ候補者中ヨリ會員
ノ投票ヲ以テ之ヲ選任ス其任期ハ三年トシ、理事
定員數ノ三分ノ一ヲ毎年改選スルモノトス
但シ引續キ重任スルコトヲ得ス
- 第十三條 監事ハ評議員會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ推薦ス其
任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス
- 第十四條 役員總會ハ評議員、理事ヲ以テ組織ス
- 第十五條 役員總會、評議員會及理事會ノ議長ハ會長之ニ當
ル但會長ニ差支アルトキハ副會長之ニ代ル

第十六條 役員ハ任期滿了後ト雖モ後任者ノ就任スル迄ハ

其任務ヲ行フモノトス

役員ニ缺員ヲ生シタルトキハ前各條ニ依リ夫々之ヲ補充ス補缺役員ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス

前項ノ場合ニ於テ特ニ補缺ヲ必要トセサルトキハ次ノ改選期迄之ヲ行ハサルコトヲ得

第十七條 役員總會、評議員會及理事會ハ會長之ヲ招集ス

第十八條 役員總會ハ役員二分ノ一以上評議員會ハ評議員二分ノ一以上理事會ハ理事二分ノ一以上出席ス

ルニ非レハ議決ヲナスコトヲ得ス

第十九條 役員總會、評議員會及理事會ノ議決ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ定ム可否同數ナルトキハ議長ノ

決スル所ニ依ル

第二十條 役員ハ總テ無報酬トス但其職務ノタメ必要ナル

實費及旅費ヲ給與スルコトアル可シ

第二十一條 本會ハ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、通常會員 會費年額六圓ヲ納ムル者

二、終身會員 一時金百圓以上ヲ納メタル者

三、名譽會員 役員會ニ於テ推薦シタル者

右ノ二、三ニ該當スル會員ハ爾後會員籍ヲ有ス

ル間ハ會費納付ノ義務ナキモノトス

第二十二條 本會々員タラントスル者ハ會員二名及役員一名

ノ紹介ヲ以テ申込ムモノトス、入會許可ノ通知アリタルトキハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込ムモノトス 入會許可ノ通知アリタル後一ヶ月以内ニ右ノ手續キナササル者ハ入會ノ許可ヲ取消ス可シ

第二十三條 入會ノ許否ハ理事會ノ決議ニ依ルモノトス

第二十四條 本會會則ノ變更ハ役員總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第二十五條 前條ノ決議ハ役員三分ノ二以上出席シ其出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第二十六條 本會ハ適當ト認ムル地方ニ支部ヲ設クルコトヲ

得支部規則ハ役員總會ニ於テ之ヲ定ム

細 則

一、會費其ノ他ニ關スルモノ

(イ) 會費ハ毎年二月末日迄ニ納付スヘキモノトス

(ロ) 毎年十一月末日以後ノ入會ニ對シテハ其年度ノ會費

ヲ免除ス

(ハ) 本會ハ會員ニ會員章ヲ交付ス會員章ヲ紛失シタルモ

ノハ實費ヲ以テ再交付ヲ受クルコトヲ得

- (ニ) 本會ハ機關雜誌「山岳」ヲ毎年發行シ每號一部ヲ本會會員ニ頒布ス但毎年十一月末日以後ノ入會者ニハ頒布セズ

- (ホ) 毎年十一月末日以後ノ入會者カ其年度ノ雜誌「山岳」ノ頒布ヲ希望スルトキハ更ニ一ケ年分ノ雜誌代ヲ納ムコトヲ要ス

- (ハ) 本會會員ハ別ニ定ムル所ニ依リ本會所藏ノ圖書ヲ閲覧スルコトヲ得

- (ト) 會員ニシテ退會ヲ欲スルトキハ其旨事務所ニ必ス書面ヲ以テ申出ツヘシ

- (チ) 會員ニシテ本會ノ體面ヲ毀損シ又ハ會費納付ノ義務ヲ怠リタル者ハ理事會ノ決議ニ依リ除名ス

- (リ) 本會ハ既納ノ金品ヲ一切返付セス

- (ヌ) 團體加入者ノ代表者交代シタル場合ニハ新舊兩代表者ノ連署ヲ以テ代表者變更届ヲ提出スヘシ

- (ル) 本會集會室及圖書室ヲ東京市芝區琴平町一番地不二屋ビル三階三〇七號室ニ置ク

- (ナ) 海外旅行其他ノ理由ニヨリ十二ヶ月以上、三十六ヶ月以下ノ間不在トナル場合ハ、會員ハ其ノ理由、不在期間等ヲ詳記シ、取扱手数料金貳圓ヲ添ヘ事務所ニ届出ツル

事ニヨリテ、不在會員ノ取扱ヲ受クル事ヲ得、此場合ニハ不在期間ハ會員章ヲ返納スルニ及ハス、會費納付ノ義務ナキモ本會ノ出版物ノ頒布ヲ受クル事ヲ得ス

二、理事選舉ニ關スルモノ

- (イ) 理事定員十五名ノ内三名ハ之ヲ關西在住ノ會員中ヨリ選任ス

- (ロ) 役員總會ハ理事改選又ハ缺員補充ノ際ニ會員中ヨリ候補者ヲ推薦スヘキモノトス

- (ハ) 會員中十名以上ノ推薦ニヨリ會員中ヨリ一名ノ候補者ヲ舉クルコトヲ得 但一候補者ヲ推薦シタルモノハ他ノ候補者ヲ推薦スルコトヲ得ス

- (ニ) 理事候補者タルヘキモノハ入會後滿三ケ年ヲ經タルコトヲ要ス

- (ホ) 團體ノ代表者タル資格ニ於テ會員タルモノハ候補者タルコトヲ得ス

- (ヘ) 候補者ノ氏名ハ豫メ本會ヨリ全會員ニ通知シ投票ヲ求ムルモノトス

- (ト) 候補者ノ數カ改選又ハ補充セラルヘキ定員ノ數ヲ超過セサルトキハ投票ヲ要セサルモノトス

- (チ) 改選ノ際五名ノ内一名ハ關西在住ノ理事トス

- (リ) 投票ハ記名連記投票トス

前 號 補

頁
目録
三

同 元	元	同	同	三	三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	三	六	七	三			
一	三	一	一四	一三	九	一五	一三	一一	同	一〇	一三	同	同	同	同	同	一	一〇	一	三	七	一	五
振つて	出合ふ	撓亂	乗り切ると	左	野面	現蕃	事務所	この地方	檜の皮	丸太小屋	カラシシミ	南東眠山	北東眠山	挿入圖	椼岡	土場	澤地	語つて	椼岡	カラボト	工業	工業	誤

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一	三	一	一四	一三	九	一五	一三	一一	同	一〇	一三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
擴つて	出合ふ	撓亂	登り切ると	右	斜面	現在	事務所	この蕃地	竹	蕃小屋	カラシシミ	南東眠山	北東眠山	椼岡	土場	沃地	歌つて	椼岡	カラボト	工業	工業	正	

正

頁

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三	四	二	七	同	五	六	一三	六	五	七	一七	四	五	四	一五	一四	二	八	一	一四	一	二	三
雪を泳ぐ	具へる	雨の空	る	大甲溪にし、 落居	ガレ斜面	「否かを…… 出来ない。」を 除き「？」を加ふ	圍ひ	五十月	頂上	知れない	今まで	此處より、	合瓣花	特別	兩所	こゝで	陽炎	蕃線	左往	深生	數十間	略、 十間	誤
大氣を泳ぐ	感ぜざる	西の空	る	大甲溪に落して居	ガレの斜面		圍ひ	五六ヶ月	頂上	知れない	今まで	此處では、	花弁	特産	兩州	こゝで	陽光	蕃稱	左往	濕性	略、 十間	略、 十間	正

一〇	道には	遂には
一一	一夜	昨夜
二	このハブ	ハブ
六	八海山の	八海山への
101	井上澤	井上澤
同	同	同
同	挿入圖説	同
104	(左)と(右)とを入れ換へる	清水峠
112	水峠	前日來
113	失日前	「Linard に依つて」削除す
114	下七・八	Skier
同	下八	Linard
同	下一〇	Linard
對 115	圖版説明	工樂
117	各計	合計
118	上三 經歷	經歷
同	下七 熱筆	執筆
119	問答	回答
120	上 四五・五三	四五三
同	上四 氣學	氣象
123	上九 ヒヨルンリ	ヒヨルンリ
同	上二一 ストレンヂー	ストレンヂヤー
同	上一五 ヒヨルンリ	ヒヨルンリ
同	下二 印度の	ヒマラーヤは印度
124	上 呼ばる	呼ばる

124	上九 少人數	少人數で、
同	上七 高山	岩山
同	下九 可丈	万丈
同	同 玉峯	王峯
同	同 フイツツ	フィツツ
125	下一四 ウイリマム	ウイリアム
同	上一一 登山史の	登山史上の
126	上一八 ついて	ついて
127	下九 南北東	南北米
128	下七 馴駁	馴致
129	下一 立場	出版
130	下二 せらるゝ	せらるゝものたる
131	上八 四十名	四十二名
同	同 五十三日	五十四日
132	上三 模	模

編輯後記

本號の締切期日たる九月三十日までには原稿の集りが少く、大いに失望したが、それから約半月ばかりの間に多くの貴重なる寄稿が續々と集まつて、その收拾選擇に迷はざるを得なくなつた。これは甚だ喜ぶべき事柄で、次號の原稿に關する限りに於ては自分達は餘りに心配せずともよいといふ状態にある。そして原稿の集まりが多ければ多い程、「山岳」の内容をもそれだけ高め得る餘裕が生じて来るわけである。

佐々保雄氏の「登山者のための地質學」はその執筆を編輯者がせき立てたので、同氏としては随分物足らなく思はれる點が多々あり、圖版の出來榮えやその配列に意に充たぬものが多し等であるし、會員諸氏も讀み辛く思はれる點があらうと思はれるが、これは偏へに編輯者の無能の致す處であつて、その責は編輯者の一人たる自分の負ふべき處である。從來から活潑なる科學的の論文は「山岳」誌上に掲載せられた事がなかつただけに、一般會員諸氏がこの記事をどう思はれるかは執筆者及び編輯者の共に大いに聽かんとする處である。

卷頭には小島鳥水氏の秘藏に係る錦繪を載せる事を得、且つその解説として「木曾街道の錦繪」なる一文を特に寄せて頂いた事は喜ばしい次第であつた。

小川登喜男氏の二つの記事に於ては岩壁懸崖等の地形的稱呼及び岩登りに使はれる技術的用語等は可及的萬人に理解の出来る日本語に改め、「ルンゼ」「リンネ」等少數のもののみを原文の儘に止めた。この原語の改訂の爲に上述の二つの記事の理解を困難ならしめ、或ひは原文の趣きを毀損したとすればその責任は自分一人に係るものなる事を述べて、執筆者にその獨斷の罪を謝したいと思ふ。然し斯る岩登りの記事は直接それに興味を持ち或ひは實際にそれを行ふ人達のみが讀むのだから一々かゝるテクニカル、タームを邦語に改めなくともいふと言ふのは自分は採らない處で、會員の大多數に常識として理解のゆく一定の標準を保つて行き度いと思ふ。これは獨り斯る登攀記録のみならず科學的記載に於ても當てはまる事で、徒らに一般人の理解の出来ない學名やその他の羅列に偏する事は「山岳」の立場としてどうかと思はれる。

兎に角本號掲載の記事は紀行のみに片寄らず、これに加ふるに科學的記事、考證的記載、或ひは近代的登山形式に依る登攀記録等多方面に互れる事は執筆諸氏に對し感謝づく能はざる處である。

編輯者

冠 松次郎
渡邊 漸

次號原稿メ切 昭和七年一月末日

昭和六年十二月廿五日印刷
昭和六年十二月三十日發行

【定價金貳圓】

編輯兼發行者
新潟縣三島郡深才村深澤
高頭仁兵衛

發行者
東京市芝區高輪南町三十番地
日本山岳會

振替口座東京四八二九番

印刷者
東京市神田區表猿樂町二番地
中村修二

印刷所
東京市神田區表猿樂町二番地
株式會社 開明堂東京支店

東京市神田區表神保町

發賣所

東京 開明堂





★ 山と溪谷社刊行山岳圖書 ★



★ 山に憩ふ—河田 植著

〔昭和6年東京市立及大橋図書館推薦〕
46判布装函入・300頁・精巧寫真版10葉
2色刷地圖9葉・定價1圓80錢（送料12錢）

★ アルプス 処女峰登攀史—藤田 信道譯

菊版布美装・約300頁・精巧寫真版8葉
地圖1葉・定價2圓（送料18錢）

★ 山の素描—黒田正夫・黒田初子共著

46判フランス装幀・300頁・口繪コロタイプ
12葉・定價1圓50錢（送料10錢）

★ アルペン・カレンダー—1932年度版

菊版上製・用紙特澁上質紙・54枚
最高級の技術に依るコロタイプ版寫眞80面
臺紙及金具附・定價1圓20錢（送料6錢）

★ 山と溪谷—本邦最高の山岳専門雜誌

隔月發行(2號より11號迄在庫)定價1部50錢
(送料各6錢)年極6冊3圓(送料共)



東京市芝區
愛宕町2-108

山 と 溪 谷 社

電話芝(43)681番
振替東京28516番

〔山と溪谷社レポート御申込次第毎號進呈〕

